

What it means
to create in Tokyo
— question, think and verbalize —

エッセイ集

東京プロジェクトスタディ1

「東京でつくる」 ということ

前提を問う、
ことばにする、
自分の芯に気づく

東京プロジェクトスタディ1

「東京でつくる」ということ

エッセイ集

東京プロジェクトスタディ1

「東京でつくる」 ということ

前提を問う、
ことばにする、
自分の芯に気づく

Contents

巻頭エッセイ〔東京ステイ日記〕	
東京といつまで他人でいられるのか問題／石神夏希	P02
東京プロジェクトスタディ	P04
エッセイ抜粋集（選び手：石神夏希）	P06
スタディ1「東京でつくる」ということ 開催概要	P16
スタディ1「東京でつくる」ということ エッセイ集	P17



東京ステイ日記

東京といつまで他人でいられるのか問題 — 石神夏希 2018.6.22

東京で暮らすことを考えている。ほんの数ヶ月前までは関西に引越す準備をしていたのだけど、いろいろあって関東に留まることになった。なった、といってもまだ引越しが決まっていないから、今のところ仮の話だ。

神奈川で育ったので東京にある学校や職場に1～2時間かけて通うのはあたりまえで、わざわざ東京に住む必要を感じたことはなかった。二度ほど住んでみたことはあるが、最後には耐えられなくなって逃げ出すように都外に引越した（何が耐えられなかったのかはもう少し検証が必要）。

東京に連敗続きの自分にとって、この選択が果たして正しいのかどうか。迷いつつ、もし自分の人生で東京に住むことがあるとしたら今このタイミングで見届けるべきなんじゃないか、とも思う。その先の景色を見る覚悟があるのか、また逃げ出す先を用意することに

なるんじゃないか、という漠然とした不安もあるのだけれど。

東京生まれと書けない問題

私は東京で生まれた。3歳で物心つく前に神奈川に引越したから、東京で暮らしていた頃の記憶はあまりない。妹とふたりきりで留守番をしていた居間の薄暗さ。姉の勉強机から落ちて角で恥骨をしたたか打った痛み。一番鮮明なのは引越しの日の記憶だ。ピアノを運び出す運送屋さんを部屋の窓から見下ろしていたこと。走り去る車の後ろの窓から振り返ると、社宅の友だちが見送っていたこと。その次はもう神奈川の新居で「幼稚園に入園する」と親に告げられた記憶になっている。

仕事柄たまにプロフィールを出す必要に迫られる。特に関東以外の別の地域や海外で、そ

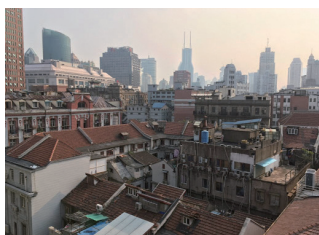


の土地や都市に関わるプロジェクトをやる時には「〇〇生まれ」「〇〇出身」などと出身地を書いたほうがいいのだろうな、と感じる場合もある。

そんなとき、「東京生まれ」と書くことがいつもできない。東京で生まれたという事実があっても、アイデンティティがない。一昨年、生まれたまちと産院を訪れてみたが、なんの懐かしさも感じなかった。私の生まれた東京は、知らないまちだった。

千葉や神奈川は東京じゃない問題

先日、海外で、東京生まれ育ちの日本人の方と話しているとき出身地を聞かれた。ここまで書いたようなことを伝えたと「じゃあ（海外で出身を訊かれた場合に）東京と言えますね」と返ってきて、びっくりした。



私は東京にアイデンティティがないのに「東京出身」とか「東京生まれ」と書くことに抵抗があるから、書いていない。だがその人の言い方には「東京出身と答えられること」が良いこと、一種のステータス、というニュアンスがあった。東京ディズニーランドや成田空港みたいに、東京の文化圏に入っていれば東京を名乗っても構わない、という傲慢な許可。

そんなふうに思っている人は、いまは多くはないだろう。でもかつては珍しくない価値観だったのかもしれない、とも思う。

失われた30年が失われたら どうなるのか問題

「失われた20年」とも「失われた30年」とも呼ばれる時代とともに育った。小学生の時には昭和の終わり、成人とともに世紀末を、そしてもうじき平成の終わりを見届ける。私の見てきた日本の社会はそれ以前の価値観が機能不全に陥った、その機能不全自体が個性のような時代だった。でも、それもまた同じ価値観のanother sideにすぎない。「〇〇でない」という否定形は「〇〇」を強化する存在に留まる。たぶん前述の「東京出身と言えますね」発言は、その「〇〇」の妖怪みたいなものだ。

つまり、失うってなんだ、ということ。6月が終わって7月がやってくる。それは6月が失われているのか、それとも7月なのか？

その「〇〇」を正確な言葉で突き刺すことにはもう興味が無いので、ここでは投げやりな「〇〇」のままにしておく。そして「〇〇」の否定形として延命してきた東京は、あと数年のあいだにひとつのピークを迎えるのかもしれない。



そのあと東京というまちにハッピーな展開が起きるとしたら、それは「〇〇」または「非〇〇」—私の生まれ育った時代の価値観から、三次元マトリックスで斜め右奥（左手前でもいいけど）に向かって脱却するような“ワープ”を必要とするだろう。私の知っている「東京」とは全然違うまちに変容していくことが、前提条件のような気がしている。

東京を「 」のまま保留する

「〇〇」を脱却した東京—それを「 」と、これまた空白のまま留保してみる。けれどこっちは投げやりではなくて、何かそこに夜明け前の、まだ色も差さないまっさらな光のような余白を残しておきたい気がする。希望というにはまだ早い。だけど希望を注ぎ入れる余地はある透明なコップをひとつ、テーブルの上にそっと置くような気持ちで。

朝ぼらけ 有明の月とみるまでに
吉野の里に ふれる白雪

という百人一首の歌が好きなのだけど、そんなふうに新しい一日が始まることをまだ願ってしまう。それが、東京で生まれて「東京生まれ」と名乗りたくない自分が、今また東京に住んでみようかと思っている一番の理由かもしれない。

東京いつまで他人でいるつもりなのか

「東京ステイ」プロジェクト*を始めてからずっと、自分にとっていつまで経っても「東京」という場所が他人事であることに後ろめたさを感じてきた。一方でそれは、ことさら世間に向かって表明することでもないと思っていた。

だって誰も、東京のことなんて真剣に考えてないでしょ？ 東京と自分とは切っても切り離せないなんて感じてないでしょ？ 理由なく、不条理な愛憎に突き動かされて勝ち目のない賭けに出たりはしないでしょ？ 死んだ

らここに骨を埋めに帰ってきたい、なんて思っていないでしょ？ いつだって、逃げ出す心づもりは出来てるんでしょ？

そんなふうに思っているのは、他でもない私だ。だけでもしこれから1~2年あるいは数年間、東京に腰を据えて留まるとしたら、こんな態度では自分が耐えられそうにない。



私にとってそこにいる必然性のある東京あるいは「 」をさがす。他人でない関係が家族なのか、友だちなのか、恋人なのか愛人なのかベットなのか、それはわからない。わからないけれども、なんらか肉体的な関係をもつ必要があるのではないか、という気がしている。つまり「心はいつも一緒にいるよ」ではなくて、フィジカルに東京とともにいること。

試しに東京ステイは「 ステイ」と名乗ってみてもいいかもしれない。東京、という名前に疲れてしまったように見えるこの都市を、その重さから少し解放してあげたい気がする。たとえば異国でその名前を告げても、ほとんど知られていないまち。誰も行ったことも、聞いたこともないまち。そんな東京を想像してみると、もちろん寂しさも感じるけれど、ほんの少し軽やかな、愉快的気持ちにもなる。

—どこから来たんですか？
—とうきょうです。
—Tokyo？ 初めて聞きました。それは何処にある、どんなまちなんですか？

そのとき、私はなんと答えるのだろう。東京が忘れ去られたとき、私の生まれた「とうきょう」は一体どんなまちになっているのだろう。

*1 2016年度から2018年度にかけて、筆者が代表を務めるNPO法人場所と物語が東京都およびアーツカウンシル東京と共に「東京アートポイント計画」の一環として実施したアートプロジェクト。

東京プロジェクトスタディ

スタディ1：「東京でつくる」ということ 前提を問う、 ことばにする、 自分の芯に気づく

2018 年、Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」で開講された「東京プロジェクトスタディ」。5つあるスタディのうち、スタディ1として始まったのが“「東京でつくる」ということ”でした。

東京で何かを「つくる」としたら——

物事に向き合うときや他者と出会うときの、
自分の思考の「軸」や「態度」を捉え直す思考実験の場を立ち上げます。
東京でつくる必然性とは何か。「東京でつくること」を入口に、
参加者それぞれが抱えている課題や関心を軸に徹底的に対話し、
議論を生み出す方法を身体化していく試みです。
芸術文化に携わるなかで、大事だと分かっている、
なかなか日常的に話せない「前提を問う」こと。
一心に考え、聴き、言葉にすることを繰り返し、他者と共有していくことは、
ともすれば日々のタスクに追われておざなりになりがちです。
いま一度、「つくること」を捉え直したい。
さまざまな背景を持つ参加者と共に、それぞれの考えの違いに戸惑い、
思考のゆらぎを感じながら、繰り返し議論を進めることで
「つくる姿勢」の体幹を鍛えます。

——スタディ1 参加者募集のメッセージより

Tokyo Project

ナビゲーターからのメッセージ

Navigator 石神夏希

劇作家／ペピン結構設計／NPO 法人場所と物語 理事長／
The CAVE 取締役

屏風の虎をふんじばる

「東京でつくる」に戸惑っています。そんな私の戸惑いをケーススタディとして、参加者の皆さんと共に「東京でつくる」ことの必然性や、一体何をどうつくればいいのか、ということを考えるプログラムです。

企画にあたって、スタディマネージャーの嘉原妙さんと話しているとき「東京ってフィクションなのかもしれない」という言葉が出ました。それはさほど新しい発見ではないと思いますが、私は演劇をやっている人間なので、フィクションを身体化することに関心があります。そして身体化されたフィクションつまり「上演」には、制度を相対化する力があります。

いま、東京で芸術文化に関わろうとすると、このことについてよくよく考える必要があるのではないかと思います。「いま」は何時で「東京」は何処のことなのか。そんな「屏風の虎」みたいなフィクショナルな何かをふんじばろうとする格闘と、メンバーそれぞれの身体から発したごく個人的な実感とのあいだを行き来しながら、その過程を言葉にしていくことに挑戦したいです。ゲストとして私がこれまで、あるいは現在進行形で一緒に「つくる」をやってきた人々にも議論に参加してもらいます。彼らはいま、どこで、何をつくっているのか。「東京でつくる」ことをどう思っ

ているのか。ありていに言えば「スタディ」を口実に信頼するつくり手であり友人でもある彼らにこの戸惑いを吐露し、参加者の皆さんの知恵もお借りして、なんとか手がかりを見つけない、という目論見です。

そう、つまり切実です。切実なだけ、ケーススタディとしては惜しみなく素材をさらけ出します。参加する皆さんにとっても実践的な思考の場になることを、そしてここでの議論が何年か経って、それぞれが迷った時に立ち戻れる道標となることを目指します。

Study Manager 嘉原妙

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー

石神さんの戸惑いは、他者の人生（物語）の一端に触れながら演劇に取り組んできたからこそ感じる戸惑いのように思います。日々の営みの延長に積層された時間や風景、何気ないいつもの所作が、「場所と物語」として立ち上がり演劇になる。その可能性を模索し続けている彼女が、いま、東京に腰を据えてつくることに向き合おうとして迷っています。私は、この戸惑いを無視しない態度こそ、物事に取り組むときに必要な姿勢ではないかと思っています。それは、アーティストのみならずアートに携わる人にとって必要なものです。なぜ、ここで、つくるのか。その必然性を問い、具体的にどうアクションしていくのか。一人の劇作家の切実な想いを取り組みをケーススタディに、逡巡しながらも言葉にすることを諦めず、思考の姿勢を切磋することに挑戦したいと思います。

スタディ1がやってきたこと

◆ 東京でつくる、を考え抜く／語りつくす

毎月1回、メンバーが集まってテーマに沿ってディスカッションを行いました。テーマの芯はもちろん「東京」。あふれる思考、さまざまな問い…それらを自分の言葉で語り、他人の言葉に耳を傾けることを大切にしてきました。

◆ 必ず、エッセイを書く

各回のディスカッションのあとに必ずエッセイ1本を提出してもらいました。自身の考えや問いを整理し、思考の変遷の記録として残すことを目的としています。今回は、1本ずつ書きためたエッセイをこの冊子の後半にまとめています。

◆ ときどき、街へ出る

ゲストを招いたワークショップ形式でのディスカッションや、「東京」という街でのフィールドワークを通して、新しい気づきや表現することの面白さと難しさを感じ、東京に深く触れる機会になりました。

【開催概要】

開催日程：2018年9月～
2019年2月(2月24日 報告会)

主な場所：ROOM302
(東京都千代田区外神田 6-11-14-302
〔3331 Arts Chiyoda 3F〕)

参加メンバー：阿部健一／五十嵐春香
石井美加／大間知賢哉／木村佳菜子
小林大悟／RuS／新堀学
斉島明／高須賀真之／中田森也
前田安紀 敬称略 五十音順

Photo:Hajime Kato

Study

「東京でつくる」への戸惑い

—— 東京との距離感

メンバー全員がお互いにインタビューする形で「自分と東京との距離感」を話すところからスタディが始まりました。都心で生まれ育った、都内 23 区外の出身である、郊外から東京に通っている、地方に故郷がある、といった物理的な距離にかかわらず多くの人が「東京からの疎外感」を滲ませていたのが印象的でした。

都市としてあること
だけが東京の性格で
はない (P 56)

東京というシステムは、控えめにいつてもわたしの半分を作ってきたと思う。わたしは東京の恩恵に預かって生きてきたし、今もそう。東京に暮らしている人はほとんどそう。どれだけオリンピックを批判しても政治を批判しても経済界を批判しても、もれなくみんな東京というシステムに首をくくられて生きている。(P 18)

「見捨てるほどの＜故郷＞」を失ってしまっている宙ぶらりんの状態—その空白こそが、「東京」を形づくっているのではないかと考えてみる。その空白にいろいろなものが入り込み集まることで「東京」が形づくられていく。その空白に入るのは人だけではなくて、たとえば夢だったり、憧れだったり、逆に絶望や挫折だったり、あるいはお金だったり権力だったりするかもしれない。そういったものが入り込む隙や空白がある街。無数の断層のある街。雑多のようにみえて、「東京」は実は無色の街なのかもしれない。(P72)

小学生の時に社会の授業で自分の住んでいる地域について歴史や地理などを学習するが、私は東京について学んでおらず、本当に何市がどこにあって、どのような特徴があって、ということに疎いのだ。(P61)

あの子の目で世界をみたら、自分がいるココとは全く違うドコカがみえるのではないだろうか。気がつけば物心つく頃からそんなことを考えていた。関心事は常にそこにあつた訳で、そこにしかなかった訳で、私の行動の全ては詰まるところそこに帰属していたといつても過言ではない。自分が自分でしかないことがただ恐ろしかった。(P 24)

よく考えてみれば、東京のコードに合わせられないからといって、なぜ私が出ていかなくはないの？ 私だって東京の一員だ。自分と東京とで折り合いをつけて、東京を少々描きなおすのだって大いに「あり」なはずだ。東京と、出会い直したい。(P 46)

「東京でつくる」ってことは「東京をこわす」と何か密接に関わってる気がする。でもなんか、我々の内側に眠っているこじらせた「リトル東京」を壊すことが、「東京でつくる」ことにつながる気がする。(P80)

いわゆる職住分離のライフスタイルが血肉となっている。行きて帰りし循環が、健全なリズムを刻んでいる。(P40)

もうすぐオリンピック。グローバル都市として躍進したい「TOKYO」は危なっかしい少年のよう。生活者として環境に振り回されず自立して暮らしたいなら、地方に移住するのが賢い選択だ。そんな場に私が何らかの期待を抱くのは、不透明な世のあり様や困惑をそのまま映し出す都市の姿に自分を重ねているからだ。(P 33)

普段の生活で東京を意識することはあまりなかったように思う。生活圏は神奈川県寄り、都内には疎遠な環境だった。首都圏以外の人からすれば、十把一絡げで東京扱いをしてくれたが、それに対して遠慮があった気がする。(P61)

長く過ごした目白台で、私は自分をつくり始めた。クリスマスは関口カテドラル、大晦日は護国寺、友達とは鬼子母神のお祭り、お墓参りは谷中、買い物は池袋のデパート、たまに銀座。徒歩圏の女子校に進み、徒歩圏の大学で勉強、と張り切ったが開放的な校風に驚き、のまれた。卒業前にバブルが崩壊、就職活動を始めると世の中が男性で動いていることに改めて気づかされた。西洋美術史の修士課程にいた時、新宿高層ビル街、表参道スパイラル、品川原美術館、銀座ザアートスペース、佐賀町エギジプトスペースに通い現代アートに触れた。既成概念、手段、物質にしばられず問いを投げかける作家たちに静かに熱狂した。(P32)

「歴史を剥ぎ取られた更地」に生まれ「母語を持たない」自分が、そのありようを強く認識したのは、東京の大学へ通うようになって日本各地からきた同級生と日常話するようになってからであった。(P65)

ミラノでは、ファッションデザイナーや建築家と過ごした時間が長く、イタリアデザイン史の歴史とプライドを見せつけられた。「ミラノでつくる」ため様々な国からパッションを持つデザイナーが集まり徒弟制度で切磋琢磨する。老いも若きも毎晩陽気に遊び、その合間にジャンルを越えたディスカッションが繰り広げられるカルチャーは刺激的だった。ファッションウィークやSaloneでは都市全体が大舞台となって湧いた。(P32)

「答えを出すことが大切ではない」と言われても、疑問を出し合える場がみつからない。疑問の「答え」や「正解」を教えて欲しいのではなくて、疑問を共有して疑問から出発できる人たちに会いたいのかもしれない。(P53)

私にとっての東京はおそらく「みやこ」のイメージだ。幕府があった江戸、手続きのために上り電車に向かう都心、観光客が集まる東京、日本の首都としての東京など、そのような類のイメージだ。そして、自分は離れてそれを見ていて、大体「みやこ」の中にはいない。心の距離は相当ある。用事で行く、観光で行くなど、いつも外から「みやこ」に通い、生活の場ではない。今のところ、それが私にとっての東京だ。(P61)

肉体を持たない言葉は透明で、匿名性とも違う。あの人自身よりも、あの人の文章の方が好きということもよくあって…肉体を持った言葉よりも、透明な文章だけで判断したらいいのと思う。(P87)

幼少期、電車とその沿線の駅名を覚えることが一つの楽しみであった。電話帳のメモを何枚もゼロハンテープでつなぎ合わせながら作ったお手製の路線図。記憶の限り、おそらく父が作ってくれたもので、玩具箱に大切にしまっておいて、遊ぶときには忍術伝書のごとく、特別なアイテムを手にしたような高揚感があった。「赤羽→東十条→王子→上中里→田端→西日暮里 …。」順繰りに口に出しては、ちゃんと覚えているか答え合わせをするのが日課だった。(P40)

「どこまでが東京なのか」という問いが立ち上がった。「東京都」という形は確かにあるものの、それと東京とは微妙に違うという感覚は、不思議と共有されているのだった。(P46)

都内へ向かう時、JR高崎線の車窓から見える浦和駅～赤羽駅間にある荒川橋梁を越えると、東京に入ったな、と思う。外を眺めている時でさえ、橋梁上の線路を走っていく電車の揺れが、それに気付かせることもある。この橋の下を流れる荒川は、埼玉県川口市と東京都北区を隔てているから、たしかにここが埼玉と東京の境目なんだと言えるが、その地理的な事実以上に、私は「橋を渡って、行く。橋を渡って、帰る」ということに、東京と埼玉の往来を身体的に、感覚的に自覚している。(P40)

中心にあるものが曖昧なイメージであっても、それが中心にあることはできる。私たちが車座の中心に置いた「東京」の周りになにかをつくることのできるのかは、今はまだわからないけれど。(P56)

東京には会いたい人がたくさんいる。すでに会った人も、これから会いたい人も。その“会いたさ”が、自分を東京に「帰ら」せる一番の要因になっている気がする。それは逆に言えば東京に人が集中してしまっているということでもあるかもしれない。けれどもそれは、なにかと出会うこと／出会ってしまうことをみなが求めているからではないだろうか。人とかもしれないし、出来事とかもしれないし、歴史や文化とかもしれない。もしかしたら幽霊とかもしれない。なにかしらの出会いを求める人たちの街。その“会いたさ”こそが「東京」の正体なのではないか。(P73)

物質社会の限界が見え、何が底辺なのか、弱きもの儚きもの本質的なものの存在が伝わりにくい世の中だけれど、ホッとできる「芝」があり、「芝居」に参加し自分の役割を演じて発見できる機会が増えれば、つかみどころのない都市「東京」が誰にでも開かれた居心地のいい「TOKYO/トウキョー」になるのではないか。(P 34)

堀切菖蒲園の近くのたいやき屋、阿佐ヶ谷駅前の街灯の灯る商店街、多摩丘陵に生える団地群、そこにポツカリと浮かぶ空き部屋、東京湾周辺の巨大なコンテナ群、さみしげな埠頭、埠頭沿いの大通りと大通りに並ぶトラック、レインボーブリッジの遊歩道、八王子の山奥に捨てられた石仏と乾いた瞳、中川と荒川の間の上を通る首都高、休日の誰もいないオフィス街と乱反射するビルの光、多摩モノレールから眺めるベッドタウンの夜景。(P 81)

そこ(皇居)に「もの」を建ててしまえばそれは単なる「空虚の消去」となり、その<なりたち>の中心は消えてしまうことが予見された。とても魅力的な可能性を秘めた空虚であることは理解されたが、であるからこそその可能性の消費に陥ってはいけない。そもそも「空虚」の心的構成はいつ確立されたのか。(P 67)

何度も遠方にでては東京に戻ってくる自分は、このまま日本はおろか東京からも完全にでていく可能性はないのだろうか。(P 54)

オウム、信じる、洗脳、依存、投影、儀式、現象、現実。95年。東京から離れて。(P 89)

ある日、忘れもしない、レンタルビデオ屋に父親と出かけた車内でのこと。私はいつもの調子で話を始めた。その時、何の話をしていたか、具体的には全く思い出せないのだが、話の結びに「うっそー!(笑)」と言うと、父はすごい剣幕で「嘘なら言うな!!!」と私を一喝した。(P 41)

けれど、その怖さを身の回りから排除してしまってもよいのだろうか。わからないものに対する恐怖が備えている社会的な役割というものもあるだろう・・・などということを、家でキーボードを打っているときはスラスラと書いてしまう。けれど書いているのはあの日何もできなかった私だ。わからなさを含めた社会をと口にする私は、実際のところ、ひとりの人間としてその恐怖とどう向き合っていたのかかわらないでいる。(P 19)

田んぼの檻という現実からの逃避ができる場所といったら、画面の中、本の中、頭の中のようなバーチャルにだけ許されていたのだから。そうやって今になっても「東京」で長い現実逃避をしているのかもしれないと、気づいたりしてしまった。(P 26)

「つくる」ことは未来に開かれている、と思いたい。(P 42)

特に大きな物語のない現代においては、「分かる人には分かる」式だけだと頭打ちになることが結構あるんじゃないかと思う。私は、この世界で「普通に」生活している「みんな」に、自分のしていることや言葉が通じなくなること、「違う世界の人」と思われてしまうことが怖い。(P 48)

失敗してもいいからやってみる、を実行するのは簡単ではない。だから物事に無邪気な期待もできない。信じられないのは他人以上に、自分自身のことなんじゃないか。(P 19)

『アウトロー俳句』にはそういった「見えない」ものを可視化するようなところがあつて、それは先ほどの不謹慎という話にも繋がりますが、ひとが簡単に見過ごしてしまったり、見たくない／見ようとしたくないものを美化したり隠したりするのではなく、歪なものは歪なもののまま、おもしろがろうとする態度から来ることなのだと思う。そしてそれは、「歌舞伎町」というある種の「ローカリティ」を屍派が持っているからできることだろう。(P 74)

「わかりやすい、だれにでも」わかる「物語」が求められる、というのには、けっきょく、わからないものを遠ざけたい、排除したいということ、表裏一体だと思ふ。オウムの元幹部たちがこのタイミングで一斉に死刑執行されたのも、「オウム真理教」という「物語」が「だれでもわかる」文脈から逸してしまつたから——もつといえ、95年〜2000年代にかけて「物語」として消費され尽くされてしまつた、あるいは、「物語」としての賞味期限が過ぎてしまつたから——ではないか。そして、それはけっきょくのところ、見えるものしか見たくない、ということなのだと思う。その態度は、いま東京全体を覆っている再開発化(スクラップ&ビルド)ともどこかで繋がっているのかもしれない。(P 74)

Selected Essey 02

日本から離れてつくる

—— 見えないもの、おそれ、
フィクション

ゲストはベルリン在住の俳優・井上知子さん。

故郷である東京に拠点を戻す直前の彼女と

ビデオ通話をつなぎ、1995年の地下鉄サリン事件

(当時はまだ生まれていないメンバーも)や

井上さんがイタコを演じた儀式的なパフォーマンスを

参照しながら、「見えないものへのおそれ」と

「東京でつくる」を巡って対話しました。

私たちはいつだって
今この時の生き証人である。(P 47)

心理学に「コントロール感」という概念がある。自身の意思決定が対象に影響を及ぼすことができると感じるかどうかが、という類の意味だ。少なくともスタデイに参加している人の多くは、私を含めて東京に対するコントロール感が弱いといえる。(P 57)

世界のどこにも、永遠に絶対に安全な場所なんてないから、どこでも生きて行けるようになりたい、とベルリンに移住を決めたときにそう思った。だからこそ今、東京に戻らなければいけないんだという気がしている。私は一度東京から逃げたのだから、東京を攻略しなければ、どこでも生きていける私にはなれない。(井上知子)

殺人犯は「悪」、未来のよくわからないけど何かが起こりそうな地点Pは「2020」、そうやって振り分けたものは、わからないから、他に適当な枠がないからこそ、いつだって「1」として捉えようとする。けれども、境界は得てして曖昧なはずではなかったか。括弧される「1」は、ほんとうには存在しないのではないのか。(P 25)

日本人の勤勉さは執着と紙一重で、おかしい方向に進んでいることもあると感じる。オレオレ詐欺の進化だとか、いつまでたっても腐らないコンビニのおにぎりや、いつまでも匂いの消えない柔軟剤の開発だとか、過剰な数の24時間営業だって、そこまでする必要があるのか、と思うことが多々ある。(P 62)

オウム真理教一連の事件は、とてもショッキングであり日本社会が抱えるトラウマになっている。だが、結局のところ、私はその時代を経験的に知らない。後に語られることは、何もかもが虚実入り混じっている。(P 42)

矛先が海の外から東京の外にかわっただけで、稀有な遠方滞在を繰り返す中で逃避願望を満たそうとしていたのではないか。(P 54)

A: つくるとき「見えないもの」とどう関わるか
B: 自分が東京、または日本を出ていく可能性
C: “おそれ” (怖れ / 恐れ / 畏れ)

B < A < C = ぐちゃぐちゃ。まぜる。(P 88)

東京に対して、好きでも嫌いでもない。これが自分の東京に対する素直な気持ちだ。「東京でつくる」ということは、自分にとっては特別な感情を抱いていないものを題材になにかを作ることもかもしれない。だとしたら、どうしたらいいだろう。(P 81)

テレビ電話はいつだって、埋められない物理的距離を顕在化させるのだ。接続を切ってしばらくの間、私は東京の実在すら疑っていた。(井上知子)

人工の世の中に完璧なんてない。江戸の大火災を経たスラップ&ビルドな街並を逆手に取り「二度とない今」、演者と観客が一体化した「自分／自分たちの世界」での生活実験を共有する「トーキョースモールサーカス」のようなコンセプトを膨らませたいと思った。(P 34)

家族と家のことを書く。(P20)

だれもが知識やイメージとして見知っている<首都=都市>としての東京でもなく、個人の閉じられた時間や生活の中の東京でもなく、知らないけれども自分の体感・感性としては「知っている」という距離感としての東京を、描き出せないか。(P75)

日和のせい、旅のせい、Eも私も甚だはいやでいた。たいした出先ではないはずであった。なにゆえか、この電車が多摩川を越えていくという事実だけが、私たちをそうさせるような気がした。(P27)

物語はいつだって個人的なものだ。個人的でしかあり得ない。(イシワタマリ)

前置きが長くなりましたが、提案があります。

3/3(日) @ 新百合ヶ丘で演劇を披露する (P89)

敢えて、震災から7年半後の「東京」の「日常」を「被災」状況と考えること、そこから「復興」を指摘してみること。そこに、可能性があるかもしれない。すなわち、震災から「日常」を取り返す、改めて「つく」る「こと」を行うように、東京の「日常」を指摘してみることである。(P68)

おそらくこのとき僕は、東京に宛名や「雑」が存在しないわけではなく、表向きそれが現前しないように糊塗されているだけなのだ、という意味の弁護をしたかった。それは宛名や「雑」に親しんできた人をはじき出すためではなく、誰に対しても最低限同じインフラや環境を提供できるようにするため、またそれを提供するのが誰であっていいようにするために本来隠されているのだと、東京にはそのようであってほしいという期待もこめて言いたかった。だって、そのような都市としての側面にはもうずいぶん親しんできたし、その点を気に入っているのだ。(P58)

夜。祖父は何度もトイレに行ったのでその杖の音やラジオが常に聞こえていたが、入院したことでそれらの音はなくなった。堪え難い無音だった。人が生活するとは音がするということだった。遺品は残る、生活の痕跡もあちこちに残るだろう。しかし音は残らない。音は永久に消え去る。不在だけが残り、想像することしかできない。(P20)

さて、埼玉都民の私は東京に何を
持ち込み、どんなフィクションを仕
掛けることができるだろうか。(P43)

学生の頃、東京出身の人たちからよく聞いたことがあって、それは「つくばは星が超見える!」というものだった。だけど、僕の生まれ故郷は、山、とまではいわないまでも、標高のやや高いところだ。つくばよりも星がよくみえたので、ころのなかで「いやいやいや」と思っていた。だけど、つい先日夜遅くまで東京で用事があって、深夜につくばに戻ったとき、ふと空を仰ぐと星がとても綺麗だった。「うわ、めっちゃ星みえるやん!」と思ってしまった。(P76)

Selected Essey 03

ここで作る

——— ここではないどこかで作る

ゲストは城崎国際アートセンター(兵庫県豊岡市) プログラムディレクターの吉田雄一郎さんと山山アートセンター(京都府福知山市)のイシワタマリさん。

生活と創作を行き来しながら「アートセンター」という場を営むおふたりとの対話を通じて、ごく個人的で共有できない「東京でつくる理由」の可能性が垣間見えました。

最近、情報へのささやかな反抗を思いついた。それは毎晩寝る前に絵本を1冊読むこと。(P54)

時代は巡る。サンシャインシティは今年オープン40周年だそう
だ。キャッチコピーは「なんか面白いこと、ある」。私は再び
開館当時の広告色いっぱいの輝きを思い出す。10歳の私には、
そこが東京プリズンの跡地であることは知らされていなかった。
大人たちはどう思っていたのだろう。(P35)

状況整理と 稽古日誌 (P48)

「安全に」を意識しなければ、感覚を懐疑する経験は容易く作り出すことが出来るような気もしている。冷水に腕を浸けるとか、アイマスクを付けて路上に出るとか、天井を視線だけで歩くとか、鏡に話しかけるとか、生死を彷徨って戻ってくるとか、とか。しかし、主観としてどれも「あやうい」行為のように感じる。感覚を懐疑することは、自分自身を懐疑することと同じなのだと思う。自らを疑ってなお、常軌を保っているという保証はないとすると、これを安全に経験することは案外難しいのではないだろうか。その点芸術鑑賞には制約が付き物で、だからこそ、この意味での安全性を担保する役割を図らずも担っている。(P27)

自分も自身がAI化することに、それでいいんじゃないかぐらいに思って、必死に適用させようとしていたことがある。だけどAI化を飲み込もう、肯定しようとしていたけど、どこかでキューが解けてしまい、AIになり損ねてしまった。(P82)

ここにおいて「東京でつくる」ことは、その「近代人」的な生き方の強制の双方において「東京をつくる」ことへと転換してしまう。そのフレームを意識せずに行われる「つくる」行為は、それがどういう意図で誰に向けられたものであるにせよ、「東京」という状態の強化、持続へ加担することになる。(P68)

ただ、パーソナルで心理的なことを起点に設定し、それを全体として行ってしまうと、「東京」と「つくる」の色々なことが個人事に回収されるというか、全くの「それぞれ論」になるというか、そんなことをちょっと危ぶんでしまう。(P49)

脈絡もなく突飛な案だが、一人ひとりがとっておきの東京にまつわるなどなぞを、用意してきて、披露し合う、だとか。(P43)

しかし、年末の大掃除でわたしはそのままになっていた祖父のシャンプーや、湯飲みや、6月で止まったカレンダーを処分した。祖父があれこれぶらさげるのに家中につけていたフックを剥がして捨てた。そして新年。祖父の部屋にある仏壇にお供えをし、線香をあげた。(P20)

東京は第3者の的な感じかな、と思った。対象となる人の特徴や地方の特性を考へることなしに、思う存分自分の主張をできる場所なのではないか、と。利害関係なく発信者と誰かを結びつける第3者。東京でつくるということ、少し腑に落ちた。(P63)

〃 ($\geq \nabla \leq$) 0 $\rightarrow$ ($\cdot _ \cdot$) (P81)

懐かしいサンシャインシティ!この施設ができた時、私は10歳くらい。家の近くにとても高い建物が建った!早速家族で展望台に登った。買い物、食事、ホテル、水族館、プラネタリウム、スポーツジム、エステなど、何でも揃っていて日常的に利用した。(P34)

東京をサバイブするために、わたしたちはつくっている。暮らしを、東京を。東京も、もとをたぐれば誰かの生活に行き着く気がしてならない。だとすると。東京を客体化して扱うことはできるのだろうか？あまり自信がない。(P22)

東京の地から、いつか、どこかへ離れていってしまった誰かと、ダイアローグをしたい。(P44)

「仮説」と「つくる」と「生きる」は重なっているのではと思いは始めている。(P29)

言葉は暗示。もらったメールの1文字1文字だって、目に入ってしまったら、自分の人生を左右してく出来事になりかねないから、そうっと読む。人の文章や本が、ざっとしか、読めなくなってしまうのは、その反動。文字を体内に入れるタイミングは、選びたい。(P90)

場所に対する言葉がない。エッセイのタイトルが付けられない理由だ。今回のタイトルも、ほんとに無理矢理つけた。(P91)

「自分の意思で価値あるものを創作している」という傲慢さにブレーキをかけ、創作は「思わずうまれてしまう」という初心にワークショップの参加者を通して立ち返る。その繰り返しで自分にとっての「バランスのとれた状態」なのかもしれない。(P55)

私だったら何をどんな風に撮っていたのだろう？さよならという気持ちになれずに苦労したかもしれない。(P36)

最終的に俳優たちは、誰でもあった。誰でもなかった。それは、虚構の東京をつくりだすのに、むしろ相応しかったといえる。匿名の、多数の会議たちをフラットに提示するためには、俳優は、いわば正体不明な人たちの器として機能すること求められたのである。(P43)

仮に、自分も「東京」を担いで、くるくると回していたなら、「東京」をおおなりにしてはいけないように思える。少しでも担いだなら、その責任があるように思える。グロテスクな「東京」から目を瞑り、「東京をこわす」とか言うのは、「東京」に対してすごく失礼なことだ。(P84)

東京にふれる

Selected Essey 04

あの人の目に映る「東京」

NPO法人記録と表現とメディアのための組織の久保田テツさんをお招きした映像ワークショップ。

普段はエッセイや議論など言葉に特化してアプローチしている「東京」に対し、非言語的な手法を通してそれぞれの「東京」をあぶり出す試みでした。各自が街に出て「さよなら東京」というテーマで短い動画を撮影しました。

話を聞かせてくれた男性は、そもそもの先祖様はどうしてあんなところに住み始めたんだろうなと問うた。(P 21)

自分の力で人と金を工面できる人だけが田舎で暮らすことができ、そうでない場合は、集積地＝地理的な東京に逃れ出るしかない、のかもしれない。皮肉なことに。誰もがソトコトのような暮らしはできない。ソトコトにならない人は東京に住む。そういう構造の中に東京はあり、東京とはわたしたちである。(P21)

少なくともいまの自分にとって「東京」は〈帰るべき場所〉ではない(そういう意味において自分の〈居場所〉ではない)けれど、その一方で〈戻るべき場所〉(＝活動すべき場所)ではある。(P77)

覚束ない足取りで通りを行ったり来たりしている若者がいた。外国人労働者が楽しそうに工事現場で働いていた。夕陽の洗濯物が風に揺れていた。秋葉原駅前は花・飲み物が供えられていた。(P 44)

最近、ふと陸軍と「東京」が似ているなと思ってしまった。(P83)

前々回あたりから、自分の「東京に関する肌感覚」が信頼できなくなってきた。東京がどうこう以前に、数多の人間の中でたまたま、私という一個体が傷つきやすく「生き下手」だった、それだけなのではないかと思ったのだ。(P50)

脳科学においては、見本を見せたり、イメージトレーニングをすること、実際に自分がそうしたときと同じような脳の部位が働くということがわかっている。映像がコミュニケーションを活性化するということには、見た人の脳が同じように働くことで、共感しやすかったり、より広く経験や情報を共有する側面があるのではないかと思う。(P 63)

私はクリエイティブでアーティスティックな人たちに対し、十数年にわたって憧れとコンプレックスを抱いていた。それは才能やセンスというより、継続できないこと、結局自分はそこまで創作を好いていないのではないかということ、に関するコンプレックスだった。(P51)

東京を共有するためには、その情報量をどのように減らしてみるのがよいか。個人的には「うまくやるに向かいすぎない」ことに興味がある。どのようにすることが東京で「うまくやるに向かいすぎない」ことになるのかまだわからないけれど、個人的な感覚やプライベートなつながりを頼っていくことにそのヒントがあるのではないかと思う。(P59)

もしかすると自分がワークショップを通じて触れたいの、見出された価値の方ではなく、その根底にある無意味さや無責任さの方ではないだろうか。触れたいというよりも、その「なんてことなさ」を暴きたいという方が近いかもしれない。(P 55)

なぜ作るのか？ 本当に作らなければならぬのか？ しかも地域社会に入って？ (P 21)

2012年から4年半ほど、気仙沼市のある地域で仲間たちと防災集団移転の支援を行っていた。防災集団移転とは、いわゆる高台移転、津波災害前に水産業などの仕事と共に海岸側で営まれてきた、集落生活を、今後の予想津波水位より上の土地へと移すことだ。(P 69)

東京で生きる

——暮らしと「つくる」の関係性

ケーススタディとして、スタディメンバーのひとり阿部健一さんの練馬区のご自宅を訪問。

阿部さんの育ったまちを歩き、ご家族と「家」の来歴、地域で展開している演劇のこと等をインタビュー。「東京村の長男坊」というキーワードが飛び出し、「東京で生きる」と「東京でつくる」との関係性、必然性を考えさせられました。

決して、個々の東京の【集積】・【集合】が「東京」を浮かび上がらせるわけではなく、一人の考える東京そのものが、それぞれ「東京」として存在しているということ。(P30)

東京都羽村市に住んでいたとき僕はまだ一年生くらいの子供だったのだけれど、あの家から初めて出した手紙に書いた自宅の郵便番号が 205 から始まっていたことを覚えている（電話番号も 042 から始まっていた。）。「PAIN」を初めて聞いたのはそのだいぶ後のことだけれど、この歌詞の示すところを知ったとき、東京でない東京、という類のイメージを僕が初めて持ったときだったのではないかと思う。(P60)

都市に対する愛着が生まれ、それが育まれるのは、実に個人的で些細なことであつたりするし、何かの因果か出会つてしまつたり、関わりを持つてしまった時点でそれはもう始まつていゝ。そこからの距離を縮めるも離れるも、あとはそれぞれの感情に寄るところが大きい。関わることに必然性を過度に求めることはないと思う。(P45)

ボードレールは近代都市をあてもなく散歩する生活者を、親しみを込め Flaneur（フラヌール、遊歩者）と呼んだ。表現者に期待する批評家の存在、サロンでの知の交流、メディアの台頭、生活者あるいは群衆、これらが揃わずしてパリの文化的隆盛はありえなかつたろう。(P38)

これを書き上げてから、Eに会いに行こうと思つてゐる。(P29)

今日の午後から、高知県室戸市羽根町で行われる、高知林業大学校短期研修過程「土佐備長炭編」を受講するため、室戸市移住体験住宅の布団の中で、眠れずにこれを書いている。20 日の締め切りまでカウントダウンしながら、前回 2018 年 10 月 13 日まで 14 年もの間、なぜ両親の故郷高知を訪れられなかったのか? を書いてくことにする。(P93)

文化資本の格差が、ひとりの人間の一生を決定的に変えてしまうということはある。(P78)

私は初対面で相手の個人情報聞き出すことを許されている仕事をしている。そこから得たものは情報として治療プログラムに反映され、本人・家族に還元される。客観的な事柄と主観的な事柄を拾い上げて、情報をつなぎ合わせて解釈し、仮説をいくつも準備しておく。治療しながら仮説を検証し、目標にたどり着ける最善を探る。パーソナルな情報が少なければ少ないほど、治療の目標が設定しにくい。(P64)

「東京」とはだれに必要とされていて、そしてそのひとのためになにが必要なのか。(P77)

高校から中央線に乗るようになって、立川から新宿まで、家並みがずっと途切れず続いていくのを満員電車から（窓に近いところへ陣取れたときは）眺めていた。中央線はおおむね高架の上を走っていくから、遠くまで屋根の連なっているのがよく見えるのだ。あのどれもが誰かの家なのだ、と考えていたことをよく覚えている。車窓から見える家並みに次第にビルが混じり、壁ばかりになって遠くを見通せなくなると新宿に着く。(P60)

東京へのつかみようのない違和感に抗うのは同じ勢いで即答するのではなく、2020 年を区切りとしない、ゆっくりと歩む姿勢をとることが必要なのではないかと思いはじめた。(P55)

普通の暮らしをしたいなら演劇をしないほうがいい。ただ、演劇のある生活は、ない生活より何かより豊かな感じがして、だから今のところ続けている。(P23)

これから東京がどうなっていくのか正直わからないし、楽観なんてできないけれど、それでも東京にはたくさんのもの（文化やコミュニティや居場所となり得る場所）があるのは事実で（その事実を「どうせ東京なんて」というよくわからないネガティブな発想や先入観で振り曲げるべきではない）、それらを早い者勝ちで所有するのではなく、共有し、必要としているひとに譲渡していくこと。なかったことにするのではなく、記憶を残していく（あるいは掘り下げていく）ということ。そのように考えていけば、東京にできることはまだまだあるように思う。(P77)

今の世の中は色々なことがものすごい速さで変化しているが、その変化をポジティブに捉えることは少ない気がする。長い歴史で見ればこれまでもいろいろな変化があったのに、今ネガティブに捉えられる理由は何なのか。(P64)

僕はたぶん、どんなかたちであれ自分がやりたいと思うことをやりつづけることはできるし、つくりつづけることもできる、ということを、身をもって証明したいのだと思う。(P78)

消えてしまったものたちの記憶も含めて、なにかを共有する地点として、東京を立ち上げることはできるんじゃないか。(P77)

ドキュメンタリー映像ってなんで、日付を入れるのだろう。それしか事実がないから？(P93)

ふと、東京に「惚れこんでいる人」がどれだけいるのだろうか、と思った。(P38)

いくら思い返しても、かつての感情が復活することはない。感情の伴わないノスタルジーがあるばかりだ。ただ自分が映像に気を向ける理由は、そこかもしれない。感情は枯れ果てるが、映像は残り続けるのだ。(P85)

自ら書いた「地元への関わりなさ」という字面を見て、ふと思いついた。「東京でつくる」って「東京を居場所にしていく」ことなのではないか…？(P51)

ここに居ない時点においてその相手の存在自体が、比喩や思考実験ではなく「確率的」にしか認識できないということが、むしろ現在の東京のリアルではないか。(P70)

頭に浮かんでくるのは、武蔵村山の工場跡地だったり、空になった団地の一室だったり、「東京」から遠く離れた「東京の果て」と言える場所だ(P86)

「東京でつくる」ということ

前提を問う、ことばにする、自分の芯に気づく



Photo:Hajime Kato

第一回：「東京でつくる」への戸惑い

2018年9月22日(土) 於：ROOM302

東京との距離感について、参加者同士で2人1組になってインタビューを行った。

第二回：日本から離れてつくる

2018年10月26日(金) 於：ROOM302

ゲスト：井上知子(俳優)

東京出身でベルリンに移住した俳優と東京や日本がどう見えるのか、東京でつくるとしたら、いま何をするか議論を行った。

※現在、井上知子は帰国し東京でつくるの実践をはじめている。

第三回：ここで作る／ここではないどこかでつくる

2018年11月16日(金) 於：ROOM302

ゲスト：吉田雄一郎(城崎国際アートセンター プログラムディレクター)、
イシワタマリ(山山アートセンター主宰・美術家)

かつて東京近郊で表現活動を行い、現在は地方に活動拠点を置き制作に取り組まれている2組のゲストの活動もケーススタディに、「どこで作るか」について対話を重ねた。

第四回：東京にふれる

2018年12月15日(土) 於：ROOM302

ゲスト：久保田テツ(NPO法人記録と表現とメディアのための組織)

映像手法を用いたワークショップを実施。各自が撮影した動画を見ながら「非言語的な表現を経由」して出合い思考した東京について対話を行った。



第五回：東京で生きる

2019年1月19日(土) 於：阿部健一宅

生まれ育った土地で演劇活動を展開している参加者の一人の自宅に伺い、「東京でつくる」の現在進行形の現場のフィールドワークを行いながら、改めて「東京でつくる」ことの現在地を確認した。

第六回：「東京でつくる」にまつわる 問いと答えの共有 (YES・NO)

2019年2月8日(金) 於：ROOM302

これまでの振り返りとして、8つの質問にYES・NOで答えながら、答えの隙間からこぼれ落ちるまなざしを共有し、投げかけられた問いそのものを問い直すような対話を行った。



Photo:Hajime Kato

阿部 健一

Kenichi Abe

生まれ育った練馬区で、それも自分の家の近所で演劇活動を展開している阿部さん。時々「こんなとき阿部さんはどう考えて、どう行動するのだろうか？」と考えます。私は、阿部さんの「違和感」を信頼しているのです。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

「光の街の暮らしについて」

この街で暮らしていると大事なこともすぐに忘れてしまうので、今日は忘れないうちにわたしのこれまでと今について書きたいと思う。

わたしは東京都練馬区の東の端、板橋区や豊島区との境のあたりに住んでいる。祖父が55年前に建てたおんぼろ木造住宅で生まれ育ち、一度も引っ越すことなく今も住んでいる。小学校は東京メトロ（当時は営団地下鉄）の駅の上にあり、家から徒歩5分。最寄りの都心は池袋で電車で6分。自転車だと15分。中学生のときにはすっかり行動圏内だった。高校は高田馬場にあり毎日すしづめの電車に乗って通った。

いま思うと、こうしてわたしは少しずつ遠くにいけるようになっていき、都市の使い方を身につけていったのだと思う。からだを東京にゆだねる方法を。ことさらそのことを考える必要もないほどに。

2017年の夏、わたしは現地の青年たちとの演劇づくりの事業でフィリピンとインドネシアに三週間ほど滞在する機会に恵まれた。すべてのプログラムが終わり日本にもどる機内、羽田空港に着陸するために高度を落とし始めた飛行機の窓から無数の光の明滅する夜の東京が見えてきた。その巨大さと緻密さと刹那さに、目が眩んだ。これは人の手に負えるものなのか？ けれど私はそこに住んでいる。東南アジアの環境に順応しつつあった体が強烈な違和感を覚えていた。足元がおぼつかないまま帰国手続きを済ませ、大きな荷物を抱えて電車に乗り込む。行き交う人の群れに身をゆだね、練馬の家にたどりついたときにはまだ頭の中は混乱していた。が、すぐ元どおりになった。からだはふたたび東京に順応し、生活に支障はなかった。

まったく関係ない場面で、東京の得体の知れなさを思い出すことがあった。最近、長いこと使ってきた外付けHDDをPCが認識しなくなった。いろいろ調べても手に負えず業者にデータ復旧をお願いしたのだが、そのときに自分はHDDがどうやって動いているのか分らないということに気がついた。単に無知だから分らないというより、おそらくこのプロダクトは使用者が仕組みを理解するということをあまり想定していない。高度に構築されたそれは高速で大量のデータ処理を可能にするが、高性能化と同時に使用者にとってのブラックボックス化ももたらしているのだと思う。壊れたHDDの向こうに、あのとき空から見た光の街が重なるような気がしてくる。巨大で緻密で刹那の東京というシス

テムの恩恵に、ここに暮らす人はもれなくあずかっている。それはもう恩恵を意識することすらないほどに。はじめてからそこにあったもののよう。しかし東京というシステムが壊れたとき、修理するのは誰だろう。

東京というシステムは、控えめにいってもわたしの半分を作ってきたと思う。わたしは東京の恩恵に預かって生きてきたし、今もそう。東京に暮らしている人はほとんどそうだ。どれだけオリンピックを批判しても政治を批判しても経済界を批判しても、もれなくみんな東京というシステムに首をくくられて生きている。

けれど、わたしはここ5年ほど東京で、東京というシステム（大文字のTOKYOと呼んでみている）に背を向け石を投げるような創作活動をしている。主催する演劇活性化団体uniという団体で東京のローカル=生活の場（小文字のtokyoと呼んでみている）としての東京を扱い演劇をつくるプロジェクトを展開している。日本中の人の夢を寄せ集めて作られ、いま再び2020に向けてイメージの再生産に熱心なニッポン博覧会としてのTOKYOではなく、人間が生まれて暮らす場所としてのまちにフォーカスを当てている。そうして地域の方から聞いた記憶をもとにした演劇を非劇場空間で上演したりしている。

そう、ここには自己矛盾がある。東京に生かされながらも東京に逆らっているわたしの投げる石はどこに向かっているのか？ しかもその石は光の前では蒸発してしまいそうなほど小さくさやかだ。今のままコミュニティベースの活動を続けるのならそれが大きくなっていくこともないだろう。

そもそも石を投げる必要はあるのだろうか。この街は快適で、便利で、それでいいじゃないか。都市の機能とは古来からそういうものだ。地域で拾ったユニークな小石はきれいに磨いて気の合う人たちで愛でていればいいじゃないか。「TOKYO」と「tokyo」をすばっと分けて考える、そういう考え方もあるのかもしれない。けれどわたしのもう半分が生活の場としての東京でできていることも事実だ。練馬の端っこでの衣食住や人づきあいは、そこ、歩いて回れるこの町で起きている。

以上のことから行き当たる、ふたつの問い。物事が光速でやりとりされるこの街で暮らしていると、問いをよく忘れてしまう。きっと忘れてしまったほうが楽だから、からだが勝手にそうしてしまうんだろう。だから思い出せるように書いておこう。忘れてしまったとき、問うていたわたしに戻ってこられるように。

問）抱きかかえてしまった二つの東京を、わたしはどうしていくのだろうか？

問）そもそもわたしは何を、なぜ問いたいのだろうか？

第二回 「日本から離れてつくる」

「自衛する社会」

その日、わたしは東武東上線の川越市方面行きの電車に立って乗っていた。平日の帰宅ラッシュの時間帯だったので、車内は混雑していた。和光市駅で多くの人に乗ってくる。わたしは出入り口付近から奥、座席前のスペースに詰めた。と、右隣から40代くらいの男性が悪態をつくのが聞こえてきた。男性は同じように立っていて、ことばは聞き取れないものの明らかにさらに隣の女性に対して発されている。それは思わず口に出た文句ではなく「おどし」の類に感じられた。車内は満員であるにも関わらず男性は女性を至近距離でにらみつけていた。すると、男性は自然を装いながら、しかしどう見ても故意に女性にぶつかり始めた。女性は顔を伏せ、気づいていないふりを続けていた。

どうにかしなければ、と直感的に感じた。事情はわからないがこれが暴力だということはわかる。しかし同時にさまざまな可能性が頭をよぎった。止めに入った後、自分が先に電車を降りた場合、さらにひどいことがこの女性になされるのではないか？あるいは逆上して襲いかかってくる可能性もあるんじゃないか？また、どうにかするといっても具体的にどうするのが良いのか。引き剥がす？声を掛ける？ではどういう言葉を選んだらいいのか？「おっさんやめとけよ」？おっさん？おじさん？あなた？敬語がいいのか、そうでないのか？結局、行動できないうちに男性は悪態をつくのもぶつかるのも止めた。そうしているうちにわたしは目的の駅に着いてしまった。

「おそれ」と聞いたとき、すぐに頭に浮かんだのはこの不甲斐ないエピソードだった。いま振り返るとああすればよかった、こうもできたということが思い浮かぶ。けれど、いざ他人の“わからなさ”（このときは自分が行動した場合のその後の男性の反応）と対峙したとき、冷静な対応ができなくなってしまうということがあるように思う。目先の損失に過剰に敏感になり、結果として守りのポーズをとってしまう。冷静なときの自分はそれではいけないと考える。しかし女性の目から見たら、わたしは暴力に対して無関係を決め込んでいる多くの乗客の一人だった。

他人のことはわからない、ということはどの時代においても変わらないはずだ。しかし今日、わからないものがわからないままそこにあることが許されない社会ができあがっているように思えてならない。わからないことは安定・安全・安心を脅かすものであり、確かに怖いと感じることもある。けれど、その怖さを身の回りから排除してしまつてよいのだろうか。わからないものに対する恐怖が備えている社会的な役割というものもあるだろう・・・などということを、家でキーボードを打っているときはスラスラと書いてしまう。けれど書いてるのはあの日何もできなかった私だ。わからなさを包摂した社会をを口にする私は、実際のところ、ひとりの人間としてその恐怖とどう向き合ったらいいのかわからないでいる。

なぜ、わからないものに対して過剰に敏感な社会になつてしま

ったのだろう。そのことを考えるのに広井良典氏の『コミュニティを問い直す つながり・都市・日本社会の未来』という本は補助線を引いてくれるかもしれない。数年前にヒットした新書なので読んでいる方も少なくないと思う。この本の中には、生まれた土地の地域コミュニティを捨て東京に大勢の人がやってきた戦後の経済成長の時代に、コミュニティの軸足が「地域」から「会社」「家庭」に移ると同時に、より大きな枠組みとして経済成長という共通目標をもった「株式会社日本」とでもいうようなコミュニティが形成されたと述べられていた、と記憶している。その構造においては、会社への貢献は株式会社日本を発展・成長させることでもあり、その分の報酬は家庭に返ってきたという。しかしそれはパイの拡大が続く時代にのみ成立していたものであり、会社というコミュニティには当時ほどの求心力はない。かといって地域コミュニティに戻ることもできない都市に暮らす人々は、ほとんどコミュニティを失った、あるいはコミュニティが限りなく縮小した状態で暮らしているということになる。（このあたり、コミュニティなどの用語の定義や具体的な対象によって相当議論の余地があると思うが、ひとつの考え方として参照している）

他人といっても、コミュニティの内側の他人と外側の他人がいるのだろう。たとえコミュニティの内側にいたとしても他人は他人であり、実際はよくわからない。けどその人の過去の行動を知っていたり、共通の規範にのっとって行動するだろうという予測がたつ場合は、普段の生活で恐怖はそこまで顕在化しない。けれどコミュニティ外の他人はそういうわけにはいかない。広井氏の枠組みを借りて考えるなら、今日東京の街で出会う人は99.9%コミュニティの外側の人=ストレンジャーということになる。それはしがらみがなく自由だということと同時に、頼るべき規範もないという不安定さを意味している。マレビトに囲まれたような生活。その寄る辺なさとかわからないものへの消極的な態度は、どこかつながっているように感じられる。

…と、ここまで書いたところでまた、この先どういう文章を書いたらいいのかわからなくなってしまった。想像の装置としての芸術への期待や、人間がものごとを物語として理解することの功罪などを書きながら考えることもよぎったが、いまは言葉を連ねても空論に感じられてならない。演劇に携わっているものとしては演劇に期待したいところだが、今の状況ではそう無邪気ではいられないだろうと冷めた目で見える自分もいる。「成果主義」。第2回のスタディのときに取っていたノートに自分はそう書き、太い線で囲っていた。成果が出るもののみ価値があり、成果の出ないものは無価値である、ということと理解している。物事の成果が問われるのは今に始まったことではないし、芸術も成果の有無を問われるべきだと思うが、成果が重視されるからこそ成果を出せる自信のないものは出さないでおくという構造もあるように思う。失敗してもいいからやってみる、を実行するのは簡単ではない。だから物事に無邪気な期待もできない。信じられないのは他人以上に、自分自身のことなんじゃないか。

今思うと、東上線にのっていたわたしは、私自身のことが信じられなかったのだと思う。信じることは相当に勇気のいることで、危険なことだ。けれどこうして自分の恥ずかしい部分を言葉にしてみたことで、信じた結果失うものより、信じないことで失って

いるもののほうが大きいんじゃないかということに気がつくことができた。そういえば、井上知子さんがドイツでの社会変革の運動の話をされていた中で、未来が実際に暗いかどうかではなく、未来を見ないようにしつつある私たちがいるんじゃないかということ考えたことも思い出した。日本・東京はすっかりダメだという気持ちが、日々の暮らしの中で心の中に沈殿している。けど、そこでえいやと、自分を、未来を信じることであれば、何か変えることができるのかもしれない。東京では、きっとまたすぐ暴力の現場に遭遇する。その時の自分に向けて、このエッセイを残す。

第三回 「ここで作る／ここではないどこかで作る」

「わが家のこと」

家族と家のことを書く。

家族について書くことがわたしの前提を書くことと同義であることに気が付いたのは、第3回の集合から一ヶ月以上経ち、エッセイを手元にあたためたまま迎えた年末年始だった。第3回にイシワタマリさんにアジテーションされたことで漠然と今回は私的なことを書く気分にはなっていたが、不思議なことに（石神さんのお話を聞いていたにも関わらず）それが家族と結びつくのには時間がかかった。

わたしはこれまでわたしの家族を創作の主題や着想元にしたたり、否応がなく、そうしなければどうにかになってしまうような状況で思考をめぐらしたことがあまりなかったように思う。それはきっと愛情に包まれて自由に育ったということであり、率直に幸福なことだ。けれどいまわたしは家族のことを書かなければと何かに急かされているように感じる。それは勇気のいることで、なぜ勇気がいるのかということこれまで書いてこなかったからだと思う。ではなぜ急かされているように感じるのか。人間の生命に関わりも、そこに留まっていてはくれないからだ。かたちあるものが消えてしまうことは恐ろしいが、書いてかたちを残すことも恐ろしい。それでもわたしは前提を問うてみたい、まずは前提「序論」の気持ちで。その際、何を書くかと同等かそれ以上に、何を書かないかを考えながら、手を動かしてみる。

昨年6月に祖父が倒れた。暑い日にお昼のパンを買いに近所のコンビニに行った帰りに倒れ、近くの人が救急車を呼び救急病院に搬送された。

わたしが生まれた時から27年間同居していた祖父で、倒れた時点で89才、現在は90才になった。天然ボケでいつも周囲の人々の神経を順にも逆にもなでていたが認知症の気配はなく（しかし自分に都合の悪いことはよくわからないふりをする）、89才でも買い物やお出かけや風呂など、身の回りのことは自分で済ませていた。彼が70才の時に電話口で当時のガールフレンドにあと50年は生きますよと言っていて家族の笑い話となったが、80才、85才と年を重ねるにつれ、本当に生きるかもしれないと思

わせる程度にはたくましい星の元に生まれた、とぼけた人だった。

本格的な検査が入るとさまざまな問題が見つかる。骨、肺、その他臓器の問題を指摘され、ただちに病院の管理のもと治療が始まった。搬送翌日は孫である自分に入院の記念写真を撮らせる程度に元気だったが、高熱を出すたびに衰弱し、12月には発話ができなくなった。

人が目の前で衰弱していくときに周りの人間ができることは少ない。定期的に顔を出して声をかける他は、ただ沈黙していることしかできない。だから今もこの件について何かを述べることはできない。それはとても恐ろしいことと感じる、事実を記述することしかできない。しかし、年末の大掃除でわたしはそのままになっていた祖父のシャンプーや、湯飲みや、6月で止まったカレンダーを処分した。祖父があれこれぶらさげるのに家中につけていたフックを剥がして捨てた。そして新年。祖父の部屋にある仏壇にお供えをし、線香をあげた。

仏壇に置かれた4つの位牌の人物をわたしはひとりも知らない。祖父の両親ときょうだいと妻（＝わたしの祖母）だと母に聞いたが、誰一人生前を知らず、大きく戒名の刻まれたそれらは具体的な人物というより漠然と「ご先祖様」という印象を幼い頃から持っていた。

この家は祖父が30代の時に建てたと聞く。なので築40～50年ほど経つということになる。祖母との結婚を機に土地を借りて建て、こどもが生まれたときに増築したらしい。なので家の中には年代感の違う柱が混在している。この家を建てる以前には祖父はその親と4～5人のきょうだいと共にこの近くに住んでいたそうだが、戦時中に土地収用令で買い上げられたそう。その場所はいま駐車場になっている。この家には40～50年のあいだ、はじめに祖父とその親世代が、次にこどもたち（わたしの母とその姉）、さらにその子どもたち（わたしと弟）と、4世代が順繰りに住んだことになる。いまはわたしとわたしのパートナーが最後の住民になろうとしている。

けっして歴史的な古民家のような家ではない。常にその時々々の生活の用に敵うよう手入れが繰り返されてきたので、土壁はクロスになり、ちゃぶ台はテーブルに、昭和のデザインの窓ガラスや台所は今風のものに代わった。2011年の震度5強も経験したおんぼろ我が家はあちこち建て付けが悪く、冬になると隙間風が部屋を凍えさせる。

夜。祖父は何度もトイレに行ったのでその杖の音やラジオが常に聞こえていたが、入院したことでそれらの音はなくなった。堪え難い無音だった。人が生活するとは音がするということがあった。遺品は残る、生活の痕跡もあちこちに残るだろう。しかし音は残らない。音は永久に消え去る。不在だけが残り、想像することしかできない。

一体何人の人がこの家に住んだのだろう。祖父の入院からしばらく経ち、はじめは無音によって正常な聴覚を失った耳が、五感が、暗闇に目を慣らすように、ようやくかすかな痕跡を手がかりに、今ここにいない人たちの生活に耳を澄ませるようになってきた気がする。年末年始に古い写真を何枚か見た。そこにはリフォーム前の家の前で写る亡き祖母、幼い頃の母と叔母、そして赤ん坊の自分がいた。会ったことのない先祖、今は遠くにいてしま

った人たち、それぞれの世界の中で家は何かのかたちで位置づいているのだと思う。家がそれらをつないできたと安直には言えない。今の自分と昔の自分は同じく自分ではあるものの全く同じものではないように、家もまた変化し続けてきたように思う。けれど、この空間は、ここに多くの人の生活が折り重なってきたことをわたしに想起するよう迫るのだ。

いま書けるのはここまで。家について書いたのは、人のことを書く勇気がまだなかったからかもしれない。この先をどう考えていくか、いつ、どのように言葉にするのか、しないのか。時間をおいて、しかし時間がいないことも忘れずに、ふたたび考えることと思う。

第四回 「東京にふれる」

「暮らすこととつくること」

映像ワークショップが開催された第4回の集合のとき、わたしは群馬県の北のほうにいた。大学院の研究室の関係で関わることになった農学部での遊び場づくりの基礎調査のため、数日間集落に滞在して地域のお年寄りや現役のこどもを訪ね、こどもの頃の遊びについてインタビューをしていた。その中の一人が話したことで、印象的だった話がある。集落といっても調査対象地の辺りはある程度観光地化されているのだが、その男性はもっとずっと山の奥の集落から仕事のためにそこに通っていた。深い山と湖に囲まれたその集落は、熾烈な人口減少に直面しているとその男性は言った。そして男性は家の近くに住む友人の話をしてくれた。その友人は結婚して家族と東京に住んでいたが、50代前半で仕事をやめて家族と別居し、生まれ育った山間の集落に一人戻ってきて、以来10年以上、生まれた家で暮らしているそうだ。街路灯もない山の中である。冬は雪が積もり、放っておくと玄関からも出られない。そういう場所に高齢者が一人、生まれた家に住んでいるそうだ。助け合える近隣住民はみな高齢か、そもそもいない。彼は生まれた家と、集落とともに人生を終えるのだろうか。同時にそれは、彼が亡くなると家や集落の命も尽きるということかもしれない。

話を聞かせてくれた男性は、そもそもご先祖様はどうしてあんなところに住み始めたんだろうと問うた。農耕に適したわけでもない山の中。平野の集落で人口が増えたときに、次男坊や三男坊が家族と一緒に集落を離れてどんどん奥へと入り、順繰りに集落を作っていったんじゃないかというのがその人の見立てだった。きっと全国の限界集落に、同じような村じまいの波が押し寄せている。

東京で生まれ東京で育ったわたしが東京を意識するのは、東京を出たときだったりする。村が人の手を離れ自然に還されつつある場所から新幹線で2時間、東京に帰ってくる。いつも通り、そこには大量の人・モノ・金・情報がうごめいていた。ふと、この人たちはどこからやってきたのだろうかと考える。そして群馬の

限界集落にかつていた人たち、彼らもどこへ行ってしまったのか。もちろん、少子高齢化によって徐々にやせ細っていったという事実はある。しかし同時に、東京は、明らかに東京ではない場所から人を吸い上げることで、東京のかたちを維持している。東京を作っているといってもいいかもしれない。だとすると、東京は地理であると同時に、人なのではないかという考えがよぎる。場所性を失った人々がある場所に集積している状態、それが現在東京と呼ばれているものの正体かもしれない。そうだとすると、東京は、わたしたちそのものということになる。

わたしたちそのものという言葉も、二つに分けて考えることができるように思う。マクロな視点でいうと、上述の数の集積、集まりということだろう。都市に人が集積するのは古来から都市の宿命だった。むしろ集積こそが都市を都市たらしめてきたし、集積をどうさばいていくかという中で、近代都市計画や住宅のありかたが展開してきた。インナーシティ問題のように集積が問題の原因となることはあっても、集積そのものを悪とみなして防ぐことは困難だ。

もう一つはミクロな視点、すなわち一人一人が実行している生活様式としての東京というものがあるように思う。極端な例として、amazonが家に届く生活を東京と呼んでみる。どこにいてもamazonが届く生活は、場所性を乗り越えた生活だ。フィジカルにいる場所に関わらず同じモノを受け取れる。近代は場所性をいかに乗り越えるかという格闘の時代だったということも言えるかもしれない。モビリティの向上（電車に1時間ゆられて職場に通う郊外という場所が体现している）、情報技術の発達などにより、今日生活様式としての東京は東京にいなくとも可能だ。むしろ、ひょっとしたら、生活様式としての東京は東京という場所性からも切り離されることで成立している。本来地理的な範囲を表す言葉で、非場所性があらわされる矛盾。だけどその矛盾はとても東京らしいと感じる。

モノ、情報は乗り越えた。残るは、人と金。場所性を乗り越えたといっても結局、この二つが欠けている空間では、人が満足に暮らすことは難しいのかもしれないと、群馬と東京を往復していると感じる。自分の力で人と金を工面できる人だけが田舎で暮らすことができ、そうでない場合は、集積地=地理的な東京に逃れ出るしかない、のかもしれない。皮肉なことに。誰もがソトコトのような暮らしはできない。ソトコトにならない人は東京に住む。そういう構造の中に東京はあり、東京とはわたしたちである。

だけど実はきっと、その逃れ出た先の集積地は東京でなくともいい。東京が永遠に中心地である理由なんてどこにもない。そういえば平城京、平安京の時代は為政者の代替わりごとに都が移動した。ひょっとしたら、都の運命は村以上にはかない。

もう一つ、「つくる」について考えたい。わたしは演劇を作ってきた人だが、実は最近あまり作っていない。時間をかけて作りたいという前向きな（同時に煙に巻くような）理由もあるが、なぜ作らないのか？ 本当に作らなければならないのか？ しかも地域社会に入って？ という疑問に対して明確な態度を持ってなくなりつつあった。これまでは、それまで「つくる」を信じて手を動かしていた。しかし今年度試しにその手を止めてみた。驚いたことに、まだ生きている。間抜けな話だが、たぶん作り続けなければ

ならないという先入観のようなものが私にはあった。しかし今回、作らないという選択肢もあるということに気が付いた。

そうしたエアポケットのような時間を過ごす中で、わたしの中で「暮らし」というテーマが前景化してきた。どうして「暮らし」が気になったのかはまた詳しく考えないといけないと思うが、「暮らし」を考えながらプレ創作をしたりいろんな人と話す中で、徐々にその言葉の輪郭が溶けていき、つくと暮らすの境界が曖昧になっていくような感覚があった。それは、わたしが思っていたほど「暮らし」ははっきりとした輪郭をもった自明のものではなかったということで、結局つくることでしか暮らしにアプローチができないという、振り出しに戻ることになった。ただこの堂々巡りを経て、「つくる」を暮らしのレベルまでブレイクダウンしていくことができたのは一つの収穫だったと思う。

そのことを踏まえて、試しに「東京でつくる」を「東京で生きる」と読んだときに何が見えてくるだろう。まだ霧がかっているかんじもするが、東京で生きることは、東京でつくることなのかもしれない、と思う。東京で生きる、住む、暮らすために、わたしたちは日々なにかを作っている。満員電車の乗り方かもしれないし、趣味のツイートで埋まるツイッターのタイムラインかもしれない。東京をサバイブするために、わたしたちはつくっている。暮らしを、東京を。東京も、もとをたぐれば誰かの生活に行き着く気がしてならない。だとすると、東京を客体化して扱うことはできるのだろうか？ あまり自信がない。

第1回のエッセイの末尾で、わたしは二つの問いかけを残した。その一つ目は「問」抱きかかえてしまった二つの東京を、わたしはどうしていくのだろうか？」というもので、ローカルとしてのtokyoと都市としてのTOKYOを抱えた私はこれからどうしていくのか、というようなことを自分に問うた。

異なる東京を切り分けて選択するようなことではなく、アンビバレントな状態のわたし（生きているわたし／つくっているわたし）を観察し、記述するところからのみ、何かが始められるのじゃないだろうか。このエッセイもそういうものだったのかもしれない。その先で、ようやく少し息ができるような気がする。半年前の自分に、少しは応答できつつあるだろうか。きっとエッセイを書いてきていなければ、今考えたことをまるで前から考えていたような錯覚に陥ってたかもしれない。仮に結果は同じでも、問いが抜け落ちてしまう。書き続けることの意味は、素朴にここにあるんじゃないだろうか。

さて、しかし、アンビバレントさを記述といったときに、演劇という方法はどう接続できるのだろう。それはまたよく考えないといけない。考えていきたい。

東京ははかない。けれど、東京を離れたとしてももう、わたしは東京と無縁ではいられない。遠くに行けば、東京に宛てた手紙が書けるだろうか。

弔辞を書くにはまだ早い。

第五回 「東京で生きる」(阿部健一さんのご自宅にて)

「家からのながめ」

1月19日の第5回のスタディは、「東京で生きる」と題したケーススタディとして、東京都練馬区の我が家で行われた。集合時間、最寄り駅に続々とみなさんが集まってくる。家に行く前にこの辺りを歩こうということで、ちょうど校庭解放の時間だった母校の小学校をぐるっと回ったり、少し遠回りをしながら、15人くらいの大所帯は小さな我が家に着いた。

二階の部屋に車座になり、わたしはケーススタディ対象者としていろいろな話をしたが、話すことにエネルギーを割くと、聞くことがおろそかになる。あの日のディスカッションは、他の回に比べて、うまく関わるができなかったという思いがある。わたしにとってディスカッション以上に印象的だったのは、休憩時間に他の参加者のみなさんが我が家のあちこちを眺めて回った時間だった。

二階の部屋、一階のリビング、台所、トイレ、祖父の部屋。この家に人が集まって何か話したり、食べたり、飲んだりということはよくあった。少人数で稽古をしたときもある。だけどそのときこの家は単に会場で、意識的に眺める対象ではなかったように思う。だが今回ケーススタディとして、大勢がしげしげと家中を見て、発見をシェアしたり、何か話したりする中で、わたしの暮らしがどこか遠い、過去のもののように感じた。まるで文化財指定の古民家を見学するような。もちろん我が家は古民家じゃないけど、「観察する」という意味ではほとんど同じ行為のようにも思え、そのような対象に我が家とわたしがなっているということは、これまで経験したことのない感覚だった。観察する側は、観察される側よりもすこし未来からこちらを見ているという感覚もあった。

この経験が、わたしを家からぐっと遠いところに連れて行った、あるいは距離をあいまいにしていたものに対して、これだけの距離があるよということに気づかせたように思う。わたしは、そこで生まれ育ち、家族五人で住んでいたときの延長線上で今も住んでいた。もちろん延長線であることは間違いないのだが、長い時間の中ゆるやかに生じてきた変化を明確に自覚はせず、けれど感じてはいるという中で、あの家に人を招くようになったのかもしれない。家族と一緒に暮らさなくなりできた空白を埋めるかのように（こう書くとセンシティブに思えるが実際はそうではなく、空いたスペースの利活用で前向きなことだった）。それはグラデーションというか、シームレスなものだった。けれどあの日のあの時間、わたしと家とのあいだに一本、線が引かれた。わかちがたいと思って疑うことのなかったものが客体化されることとなった。

そうして、少し自由な気持ちになった。この家を今までやったことのない用途で使ってみたり、誰か別の人に住んでもらってもいいかもしれない。そうしたらまた、わたしのものを見る視点や考え方は変わっていくのかもしれない。変わらないかもしれない。ただ今は少しそのことに興味がある。親離れではなく、家離れ。わたしを自由にすることは、家を自由にすることでもある。自由

になった家がどう変化していくのか、何が起きるのか。

思えば、演劇活動もまた、家を起点としたものだったのかもしれない。ここ数年、わたしは地域に入っていくような演劇活動が続けてきた。それは地域の住民にインタビューをしてその土地で昔あったことや今の暮らしをリサーチして、そこから作った演劇を地域の景観の中で上演するような取り組みで、地域史のアーカイブ化や演劇による仮設の場づくりなど、創作と同時に社会目的を掲げたものとして行なってきた。だけど、多分わたしは帰る家があるという前提で、それらのプロジェクトを行ってきた。作品を作る対象地が独立してそこにあるのではなく、常に我が家との距離の中でその土地と向き合ってきたように思う。対象地といっても、はじめに手がけたのは家から徒歩圏内にある江古田で、現在進めているのも通える範囲にある練馬区内の別の地域だ。そもそもからして、家から近い。もちろん社会的なミッションのために動くということ、作品を仕上げるということ、集団を動かすということ、それらも全て本当にある。だけど、わたしは、わたしの生活の解像度を上げたかった、生活圏の知らないことを知りたかった、そういうことが活動の根底のモチベーションだったのかもしれない。先日、石神さんに別の機会で、阿部さんは軸足を演劇に置いているのか、地域なのか、または他のものなのかということを尋ねられた。今それに答えようとする、軸足はわたし自身の生活と空間にあった、ということになるかもしれない。地域との関係にしても、地域住民とアーティストという関係だけでなく、私も生活者としての当事者性をそこに持ち込んでいたのかもしれない。4回目のエッセイで書いた「暮らしとつくるが溶けていく感覚」「東京でつくるを東京で生きると読み替えてみる」と、そう思った背景にはこの「(対象地に)行って(家に)帰って」という動き方があったんじゃないだろうか。帰ること、帰る場所、戻るべき暮らしを前提に、わたしは行っていた。

そのことを自覚して、さて、これからどうしていこう。上述のように、わたしの中には普通の暮らしに対する執着というかそれを手放すことの想像できなさがあるにも関わらず、演劇が続いている。普通の暮らしをしたいなら演劇をしないほうがいい。だけど、演劇のある生活は、ない生活より何かより豊かなような感じがしていて、だから今のところ続けている。それは危ういバランスの上であって、時には「誰に見せたくて演劇をしているのか」と問われることもある。ずっと、その問いにどうやって答えていけばいいのかわからないでいた。けど、それは「行って」の部分だけで考え答えようとしてきたからかもしれない。「帰る」を含めて再考したとき、もう少し納得の行く回答を見つかることができるような気がしている。

今まで「行って(演劇)」と「帰って(家・暮らし)」は別々のものとして存在していた。例えばそれを重ねることで、何か始められないだろうか。あの日、参加者のみなさんがしげしげと眺めたように、客体として家を扱うこと。今まで我が家が演劇的なことをするのは、思いついたことはあっても本気で実行しようとしたことはなかった。だけど今ここにはないものを扱うのは、演劇

が得意とすることのはずだ。公演のかたちでなくとも、何かできるような気がする。

極めて私的な営みとしての我が家演劇(しかしこれは私演劇とも違う気がする)から出発して、そこからもう一度まちへ出て行く。まちを活性化するとか、賑わいを生み出すとか、見えない課題や魅力を発掘するなんて大仰なことはやらないし、できない。そこにあったもの、こと、人を想像する装置のようなものとして、個人と劇場の中間領域での活動を続けていけたらいい。その時わたしがどこにいるのか、暮らしは成り立っているのかは、わからない。

Profile

阿部健一(あべ・けんいち)

1991年、練馬区生まれ。中学の時に演劇と出会う。2010年に演劇活性化団体uniを立ち上げ、同団体での脚本・演出を中心に演劇に携わり続ける。2014年頃からは地域に根ざした創作を練馬ではじめ、劇場外での活動が多くなる。その過程でまちやコミュニティを専門とする人々と出会い、その境界線を言語化したいと思い、現在は千葉大学大学院芸術学研究科に博士過程として在籍している。

<http://www.uni-theatre.com/>

五十嵐 春香

Haruka Ikarashi

「仮説」をめぐる「E」に宛てて書き綴られる、まるで私小説のようなエッセイ。言葉にする時に削ぎ落とされてしまう「感じ」を伝えるのは、内容ではなく「文体」なんだと教えてもらいました。書き続けてください。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

Eに宛てて 一〇〇の為の習作

KさんがEに言った。

「で、Eは仮説考えたの？」

仕事に行けなくなった私の今後の進退について、いや心体について一通り話し合われた後の、不意の一言であった。同い年でありながら年中ぶらぶらしているEは、そんなでも一応院生として大学に通っている。その本分であるところの卒業論文。テクノロジーとかなんとか、私にはよくわからない分野のよくわからないことを学んでいる訳で、その肝となる「仮説」についてを言っている。

Eはその問いに対し「年始までには…」とか、何か歯切れ悪く返したようなことをぼんやり思い出す。

去年の冬のこと、外はもう暗かった。

当の私は白とも黒ともいえない曖昧な色の中であた、仮説…仮説か……と、おもった。

生きてゆく上で、誰もがそれぞれの仮説を胸に秘めているのではないだろうか考える。

仮説。つまり「〇〇は□□なのではないだろうか」という仮の説であり、『岩波 哲学・思想事典』にはこうある。「それ自体の真偽は確かめられていないが、色々な現象を説明したり、法則を導き出したりするために役立つものとして、仮に推論の前提に置かれる命題」。様々辞書を調べると、「科学的研究において」という枕詞が付く場合が多いのだが、科学という一面に留まらない広義において解釈できるのではないかと考えている。例えば、「私は自分が無知だという事実以外は何も知らないのではないだろうか」とか「芸術は爆発なのではないだろうか」とか「あの子は僕のことが好きなのではないだろうか」だったり。内容次第でそれらを「使命」や「正義」とか「考え」と呼んだり、会社という枠組みにおいては「理念」と言ったり、よほど大それた何かのようにすり替わっていることが常のようにも感じるが、その真は皆、一仮説なのではないだろうか。

仮説は証明を追い求めていくものなのかもしれない。仮説が人を動かし、仮説が人を前進させていく。生きることとは自ら立てた仮説を自分なりの方法で検証していく行為とも言い換えられるのでは、などと考える。

誰もが大小もいくつもの仮説を検証し乗り越え、また新たな仮

説を導くことで日々を過ごしているようにみえる。そういう中において私は、きっとこの先も結論を出すことができないであろう仮説をずっと抱えている。

「すべての人が個々それぞれ、みている世界が違うのではないだろうか」という仮説。物理的に見えているものというよりは、クオリアに近い、それぞれが外部から受け取っている感覚そのものに関しての推論である。私は唯々、他者の頭の中をみたい。もう少し近づけていうと、他者の頭の中から世界がみたい。

あの子で世界をみたら、自分がいるココとは全く違うドコカがみえるのではないだろうか。気がつけば物心つく頃からそんなことを考えていた。関心事は常にそこにあった訳で、そこにしかなかった訳で、私の行動の全ては詰まるところそこに帰属していたといっても過言ではない。自分が自分でしかないことがただ恐ろしかった。そうして誰の為にもならない仮説の為に、ただ感覚的な欲求を満たすかたちで学び、見聞し、考察し、忘れるということの繰り返しは、これまで特段誰に共有するでもなく宙ぶらりんのまま頭の中に垂れ流され、そのまま鎮座している。占拠していると言ってもいいのかもしれない。これらから目を逸らした故に、私の頭はたったの一年で窒息したのだ。その結果が、体調を崩して仕事をやめるというこの事態だった。どうにかしないといけないらしい。

形をもたないこの中身を、この場を借りて、言葉という安易な枠を借りて、まずは自分の中から引きずり出していきたいと思う。整理し、言語化したその先に、表現があるのだろうか。こんなに茫漠たることを誰かに伝える術が見つかるだろうか。不安だから、不安ごとでこの場に辿り着いた。これは、この先に起こるなにか（表現なのか作品なのかプロジェクトなのか、全くの未知である）の為の習作である。

参加について、まだEには話していない。

ここそこのあいだ

今いる地点から、足元から改めて見つめ直す。「東京でつくる」を軸に個々の関心事と前提を問うということは、そういう試みであると受け入れている。第1回は、それぞれの中にある「東京」を伺いながら、それぞれが今いる現地点までのルーツの一旦を垣間見る回であったように思う。これまでの個々の人生が、いくつもの仮説がそこにあり、乗り越えまた新たな仮説を持って今ここにいるということ。11名の問いと返答が一周まわる間に私は、「境界線」というひとつのキーワードについて考え始めていた。

ものものの境というのは、ひどく曖昧であるような気がする。境界「線」と言えるような明瞭な何かはそこに存在し得ないので

はないか。接している箇所は互いに複雑に絡み合った状態でそこにあり、境目はいつもグラデーションだ。今日と明日の境、空と海の境、あなたと私の境だって、実はよくわからない。それは一体どこからどこまでのなか。

ただ、何かを語るに際し、線を引くという行為が必要になってくるのだろう。言葉にする為に、他者に伝える為に。ここからここまでが（たぶん）明日。ここからこっちは（たぶん）海。それが（たぶん）あなた、これは（たぶん）私。「だから明日は、一緒に海に行こうよ」なんて、そういう想いを伝えられるように。

或いはつくること・表現することそれ自体が、線を引く行為にあたるのかもしれない。今もこうして“どこか”に何らかの境界を導き、「東京」と読んでみようとしている。きっと芸術みたいなものは、そうやってつくられるのだろうと思う。そうであるならば、線を引かないまま届けることはできないのだろうか。表現になる前のただそのまますを誰かに伝えるという、他方の可能性はないのだろうか。カーテンからはみだしてきた朝の光とか、ドロップを舌で転がした甘さ、秋の金木犀、愛しい人の頬を撫でる柔らかさ、「おはよう」の声、そういうなんでもない“感じ”を私は他者に伝えることができない。これは私だけの感覚質だ。私が私の器官をもって受け取った刺激でしかない。誰かが同じそれから受け取るものはきっと私のそれとは違う。その「違い」は絶望ではないという思惟も携えている。「違い」は驚異である。差異を持ちながら、しかしある時ふと同じものと同じように「美しい」と感じたりするなんて。これ以上に不可思議でおもしろいことはないと思っている。

だからこそ、そのまますを他者に引き渡す方法はないのだろうか。引き受ける方法はないのだろうか。ほんとうにもう、そんなことばかりよく思う。言葉にするとあまりにも机上論である。しかし私の仮説がここに帰属しているのだから仕方がない。回を重ね、対話を経ることで徐々に具体的に落としていくことを課題として、次回に繋ごうと思う。

—

こんな話の一端を、私たちは予てからしていたのではなかったか。そういうものが日常だった。私の心地よい毎日だった。その後Eの仮説がどうなったのかを私はまだ知らない。次に会うときには、きっとその話をしよう。

第二回 「日本から離れてつくる」

Eに宛てて —〇〇の為の習作

「おばけ」が怖くなくなったのは、いつのころだったろうか。本当のところ、今でも恐怖を感じないわけではないのだけれど、いつからかその事象に対処できるようになってきたということのような気がしている。

おばけ（便宜上、幽霊、化物、妖怪、悪魔をはじめ、心霊現象、怪奇現象、未確認生物などなど、それらを総称する概念として記載する）の話をし始めると、まずその存在を信じるか否か、みたいな序章を経なければならない面倒臭さが付き纏う。それはとても億劫な作業としてのコミュニケーションで、所謂オカルト的な事象に関して他者へ踏み込むことを避けてきた要因である。結局はうまく説明するに至ったことがないというだけのこと、なのだけれど。ただ前提が、きつと違うのであった。存在それ自体を信じるかどうかではない。今持ち合わせている概念、つまり理解に足る定義・言語に収まらない超自然的なものに出会ったとき、人は「おばけ」という類に—先ずカテゴライズすることで、受け入れようとしているのだろうと思う。もしくは、受け入れまいとしているのだろうと思う。

私の仮説としては人それぞれみているものが違うのだから、差異がちらりと伺えたというそれだけのことで、それが“なに”であったのかはどこまでいってもわかるはずがない。わからないから、こわかった。それがいつの頃からか、わからないから「おもしろい」という感覚も持ち合わせるようになった。抑も、あるものはみえるということが個人の思い込みなのではないか。ないものはみえないということも思い込みに過ぎないような気がしてならない。そういう小さな仮説も抱えてみる。哲学で語られるところの観念論みたいなことなのだろうけれども。もっとこう、現代の自分たちの身体として、いま目にみえているものだけで、思弁によってできえこの仮説を楽しみたいと常日頃思っているのだった。ソースは科学的根拠や偉人の見解、調査結果のような集積だけではなくて、私たち個々がたど感じたもの一つにだってあるのではないだろうか。

そう思いながらも、息をするような無意識で、物事を一括りにして考えがちな自分がいた。物事を理解する為に一度線を引かなければならないものとして。東京を知る為には、東京に住む人々を一言にできる共通項を探すことが合理的でわかりやすい順路であるという見解を、当然のように導き出している。しかし、この場はそういうことではないのだと改めて教えられる機会であった。線を引かずに個々を個々として捉えていくこと。その中から滲み浮かび上がってくる「東京」を掬い上げていくという果てしない創作であるとするのならば、これ以上にわくわくすることはない。それは、わからないものが持っているおもしろさに似ている。

曖昧なまま捉えていく

わからないものをわからないものとして享受することを、いったいどのくらいできているだろうか。理解しようと理を詰めることで、わからないに對する“おそれ”の部分が拭えていくとするのならば、わからないものはどこかの枠組みに嵌めて仕舞えばいい。理解した気になっていればいい。そうやって、どのくらいの“おもしろい”部分ごと手放してきたことだろう。殺人犯は【悪】、未来のよくわからないけど何かが起こりそうな地点Pは【2020】、そうやって振り分けたものは、わからないから、他に適当な枠がないからこそ、いつだって【 】として捉えようとする。けれども、境界は得てして曖昧なはずではなかったか。括られる【 】は、ほんとうには存在しないのではないのか。

悪だって、ただ【悪】のみとしてあることはない。のではないだろうか。

第2回で提示された地下鉄サリン事件を例として挙げるとするならば、ただひとつの信じた仮説の先に、サリンがぶら下がっていたのだ。未だ、“未曾有の”と語られるこの事件が、人々の心をこれほどまでに騒がせた所以たるものは、個々が自身の中に片鱗として持っている「悪に足らない何か」を垣間見るに至ったからではないかと思っている。麻原をはじめとする信者たちは、かつて自分たちとなんら変わらない、同じように社会の一員として機能していた存在であった。教団としてメディアへも露出し認知された上で、個々は日常として“普通に”生活をして。だからこそ“普通に”生活している自分だって、一歩間違えばまさかという衝撃があったのではないだろうか。同じように、肩を寄せて歩く最愛の人が、毎朝挨拶を交わす隣人が、【悪】とされる欠片を持たないと言い切れない。いま正しいと信じてやまない個々の考えが、発言が、行動が、つまり仮説が、もしかしたら麻原が目指す地点へと繋がっていないという保証はどこにもなくなった。そんな保証なんて、抑もどこにもなかったことに気付かされた事件だったのでは、と。

知識や経験に関係なく“誰もが”教団の手足となる可能性が大いにあった。彼らだってただ、それぞれの仮説をひたすらに信じていただけなのだから。だからこそ、自分自身の延長線で隣人を疑い、社会みたいなものを疑ってみたりしている。そうして解をもたぬ「わからない者」を【悪】という概念に当て嵌め、“わかりやすく”取り除きが行われている。彼らが起こしたことに對しての擁護では決してない。ただ、彼らと私の境界線はいつも曖昧なのだ。白か黒かの線引きは恐らく、“おそれ”から始まって、その後ひとつの文脈として今尚そこかしこに根付いているような気がしてならない。

【悪】とされるまで、それは彼らの仮説でしかなかった。しかし、どんな仮説であれ“それだけ”しか信じられなくなってしまったなら、人を脅かすものになるのだろうかと思う。もはや「仮」ではなくなってしまうのだから。

逃げ続けること

この所論とは別のところで、実感としてあったのは「東京ね、」という“感じ”である。大変だ！とんでもない！大事件勃発！と騒ぎ立てる四角い枠は、アニメやドラマ・映画となんら変わらない、至ってバーチャルなものでしかなかった。当時若干5歳の私が事件について知るのはもう少し後になってからで、リアルタイムに出会っていないことも大きな所以である。「東京」では、今日も人が電車で飛び込んでいるらしい。その横でスーパースター来日のお祭り騒ぎもやっている。それらの全ては私に影響してくることはない。「東京」は仮想なのだから。私がいるのは現実なのだからと、そんなわけはないのに。自分が腰を据えているこの地続きに東京という街があるなんて、どうしても想像ができなかった。「東京」は私の頭上高くにふわふわと浮かんでいるそれだった。

拠点となっている今でも、「東京」をバーチャルとして捉えている節がある。と、思うに至る。生活圏である田んぼの外が、日常

から逃れる先が、他でもなく「東京」であった理由はそこにあるのではないか。田んぼの檻という現実からの逃避ができる場所といたら、画面の中、本の中、頭の中のようなバーチャルにだけ許されていたのだから。そうやって今になっても「東京」で長い現実逃避をしているのかもしれないと、気づいたりしてしまった。ゲームにログインする感覚にすこぶる似ている。私はまだ逃げているのだった。まだどうしてもこの仮想の浮遊から出たくはない。そのために、“HP”が無くならぬようにと日々レベルアップを図り、前触れなく現れる中ボスを退けながら邁進していた。

——

とうに日も暮れたあとの、春秋の涼しい風の中だった。私たちは目的を持たずにゆるりと、しかし長い距離を自転車で走らせ、小さな公園にたどり着いた。道々でEは自分の位置を把握するように、要所要所なんとなく口にしながら、しかしそれらに縛られずに鼻歌交じりだった。私の方は、どこからきてどのように帰るのかなんて、もはやわからなくなっていたものだから考えてもしかなかったがなかった。空っぽのままで、気分良く鼻歌に加わった。

並んでぶらんこに身を預け、ほどけた東京タワーの根元から天辺まで、上へ上へと空を仰ぐ。

ゆら、ゆら、ゆら。トンガリの隣で、大きな月がこちらを向いていた。

ゆら、ゆら、ゆら。勢いを増す振子からすらりと伸びたEの足先は、もうすぐで東京タワーに届きそうだった。

帰路はEが丁寧に教えてくれて、私たちはそこでわかれてそれぞれの家へと帰った。

Eはきっと、わかっていたってわからなくなたって楽しめるのだろう。私は心底羨ましくなって、一人の帰り道にも鼻歌を歌い続けた。

第三回 「ここでつくる／ここではないどこかでつくる」

Eに宛てて —〇〇の為の習作

陽気な秋の日、太陽は朝から橙を帯びて輝いていた。私がまだ仕事を辞める以前、Eが乗った電車に後から私が乗り合わせる形で落ち合い、ふたりしてどこかへ行こうとしている。「二号車に乗った」という言葉を律儀に乗り込んだものの姿がない。みつからない。私たちは各停する駅毎に一度ホームへ出て、互いの存在をきょろきょろと窺っては、発車までに車両を換えてまた乗り込むという行為を何度も繰り返した。途中でグリーン車のある長い列車だった。宝探しでもするように、扉から扉へ行き来してEを探す。

「はははは！」「はるいた！」「わたしもいた！」
いくつめの駅だったろうか。私のことを「はる」と呼ぶ彼女から、連続してメッセージが届く。ついで私はEを捉えられず、私はE

にみつかった。日和のせい、旅のせい、Eも私も甚だしいでいた。たいした出先ではないはずであった。なにゆえか、この電車が多摩川を越えていくという事実だけが、私たちをそうさせるような気がした。

差異の触れかた①

他者の頭の中から世界をみることがかなわないとき、そこに近づく為を考えることとなる。私とは対象的に感覚の差異が解りやすく感じられる事象、及び差異が一部可視化している事象。これらに触れたいという欲求は私に対し大きく二つの道を示すこととなる。エッセイ1で述べた仮説、「すべての人が個々それぞれ、みている世界が違うのではないだろうか」を幹として枝葉のようにその他の仮説を湛えている。

芸術（中でもとりわけ現代美術に位置付けられるもの）は、作家の思考の塊であるとして需要している。作品は、作家である個人が感心事に対して只管に感じ・考えた過程または結果を身体から外部へ引っぱり出し、線を引いて表した産物というように捉えて観るとするならば、それは他者の頭の中を垣間みていることと“同義”…には足りないとしても、疑似体験としては非常に興味深い。いろんな小難しいことは一旦横に置いておいて、ただそういう軸で芸術はおもしろい！と思う。などといった、深層としての感情を言葉にできるようになったのは其の実最近のことで、以前から惹かれるままに堪能していると言ってしまえば、それだけのことだったりする。

数多の鑑賞に際して、「わからない」という声が聞こえてくる、私も隣で「わからない」と思う。わからないのだ。それはそう、他人の頭の中なのだから。「わかる」は、きっと気のせいだろう。対して、「共通すると感じられる箇所がある」ということは起きる、こともあるとは思ふ。作家の思考の一端を自分の感覚質と重ね合わせて、共通すると“感じられる”箇所がある作品に出会える可能性はしばしば、けれども、「わからない」の方がきっと鑑賞の初・定位置で、そこは自分ではない他者の回路の中である。と、思っていたい。それもまた自分自身の感覚でしかないわけだけれど。私の感覚でしかないからこそ、共通する箇所より異なる箇所に目を向けたい。理解することが目的になった途端になんともつまらないものになってしまうことか、と思う。

ただただ「わからない」。だからおもしろいと感じる。きらいだとかすきだとかを感じる。鑑賞とは、他者の感覚質に触れることで自らの感覚質に気付き向き合う為のツールとして、大きな役割を持ち得るのではないだろうか。これに関しては教育分野においても芸術鑑賞の可能性を思うところがあったりなかったり、ただそれはまた別の仮説として。

鑑賞によって懷疑する

作品を巡る内、新たな意味をもって私の仮説に触れる作品と対峙する。2014年の終わり、銀座メゾンエルメスにて開催された「逆転移」リギオン展での《善悪の知恵の木》（2001）である。展覧会としての位置付けはさておき、この一作品にのみ言及する。

入口がぼかんとあいたひとつの空間があり、鑑賞者は1名ずつ入ることができる。2・3人が並ぶ列の後方で順番を待っていたと思う。誘われたという理由で観に来た展示でぼんやりしていたものだから、事前情報をまるで持たずに丸腰であった。番がきて躊躇なく空間に足を踏み入れ、すすんでみる。3歩。と、そこから、ただの1歩も動けなくなった。白い、ひたすらに白い。白いということ以外に受容できないことがない。空間がどこまであるのか捕らえられない、ばかりか自分がここに立っているということさえこんなにも疑わしい。床はここに、足の下のあるはずなのだが。あるはずだけれど…。硬いのか柔らかいのかもわからなくなって、むしろ「あなたの身体は宙に浮いている」と言われた方がどれだけ安心できるかと思った。上とはどちらでどこが下なのか、私は今ほんとうに目を開けているのだろうか。音だっとなにも聴こえてこない。取りようのないバランスを保とうとする意識が、両の腕をゆらゆらさせていた。全感覚が散り散りに去っていき、私は終始あやふやだった。

以下、『「逆転移」リギオン展 ブックレット』※より抜粋。

「2000年代の初めから半ばにかけて、リギオンの作品における光には、見えるものをそのまま信じる人間の認識体系にたいしての、根本的な懷疑がこめられていた。つまり、視覚にどっぷりと依存しているわたしたちの認識に、疑いをかけるような作品だった。これはある意味、目で見るということによって確固とした主体を形成してきた人間への批判であると同時に、目を通してすべてをマスタリングしようとする人間の傲慢への警告でもある。作家は、光を中心とする空間インスタレーションによって、認識論の問題を視覚とはべつの枠組みから考えさせようとしている。」

人は慣れるのだろう。思考が、私が散らかった頃に、私の目がそこに順応しようとしていた。床と壁の境は角として存在せず、なだらかなUの字で繋がっている。そこへ意識を集め直して初めて、それだけが唯一視覚できる程度の慣れ。そして、一度捉えたUを手離してしまったら、もう決して認めることができないのはいかという臆病が起きる。視線は留まり続け、もはや逸らす勇氣を持たなかった。初めての感覚に後ろ髪を引かれつつ、Uの字を頼りにすることで《善悪の知恵の木》から難く脱け出したのだった。

結果的に「認識」を頼るほか術がなかったということ、林檎を食べてしまった彼らのように、以来長く恥じている。

芸術作品は「他者の頭の中を垣間みることに近い経験をもたらしのではないか」という仮説に加え、「自身の感覚を懷疑する経験を、限りなく安全にもたらしのではないか」という新たな仮説をもつことになる。

“安全に”を意識しなければ、感覚を懷疑する経験は容易く作り出すことができるような気もしている。冷水に腕を浸けるとか、アイマスクを付けて路上に出るとか、天井を視線だけで歩くとか、鏡に話しかけるとか、生死を彷徨って戻ってくるとか、とか。しかし、主観としてどれも“あやうい”行為のように感じる。感覚を懷疑することは、自分自身を懷疑することと同じなのだと思う。自らを疑ってなお、常軌を保っていられるという保証はないとす

ると、これを安全に経験することは案外難しいのではないだろうか。その点芸術鑑賞には制約が付き物で、だからこそ、この意味での安全性を担保する役割を図らずしも担っている。という面で捉えてみる。

他者との差異を見出すとき、比較対象は否応無く自身の感覚となる。“感じ”に対し純粋でありたいと願うならば、正面から向き合うことはまた別のベクトルとして、自分のそれが裏返ってようやく気づくことも多いはずだ。容赦なくひっくり返してもいいが為に、暇をみつけては作品を辿っていた。

振り返ればこれまで、こんな些細な仮説に関する「共通語」を持っている①ばかりを転々としてきたように思う。居心地の良い海だったのだ。陸へあがり、足裏に砂が張付くのを感じて今、そこはあたたかかったと思ってしまう。②は陸地にあるものだから、今必死になって②に通ずる「共通語」を探している。言語の擦り合わせは、必ず経なければならぬ道なのだろうか、どうだろうか。次回は②について書き留める。

あわよくば穏やかな①の波にゆられ続けてリズムが重なるように、気が付いたら、「あらまあ」といった感じに他者の目に拘り替わっていたかった。なんて頭をよぎっては、余儀を探して前へ進もうとしているところなのだ。

※ リギオン展「逆転移」(2014) : <http://www.maisonhermes.jp/ginza/le-forum/archives/5824/>

第四回 「東京にふれる」

Eに宛てて —〇〇〇の為の習作

差異の触れた②

あの子と私が出会ったのは、小学2年生になったときである。引越して転入した私の新しいクラスには、重度知的障害を持つ女の子がいた。身体障害も伴っていた彼女は、長距離移動には車椅子を用い、歩く際には専属の先生に支えられながら時間をかけてといった様子。他者との意思疎通に困難があり、生活全般において介助を受ける必要のある子だった。彼女を含め、特別支援級に通う生徒たちは普通級にも席を置くこととなっており、普段の授業は別々だが、集会や遠足などの行事と、週に何度かの給食はクラスメイトとして同じ空間を共にした。しばらくの間、私は彼女にこれといてなんの感情も抱くことなく過ごす。関わりの距離としてはそんなに遠くなかったはずだけれど、彼女自身と向き合っ

てコミュニケーションをとる機会はなかったように思う。4年生くらいになった頃から、彼女の方のクラスに出入りすることが増えた。給食のお迎え係に行った際、先生の都合で少し待たされたとか、そんなことがきっかけだった。支援級には遊具やおもちゃの類がたくさんあり、待ち時間に遊ぶことを許可された私たちは歓喜していた。学校に居ながらおもちゃで遊べるという事態は小学生にとって大事件だった。味をしめた4人くらいのグル

ープで、休み時間にまでコソコソと赴いて教室の解放を求めるようになる。私たちしか知らない校内の「秘密基地」のような、特別な場所に感じていたのだった。その場所にいる彼女もまた、特別の一部のように意識し始めたと思う。それは潜在的なもので、今になってみるとこの過程がそもそも、彼女の印象をポジティブなものとして根付かせていったのだと感じる。当時の私はとにかくトランポリンがしたいだけだったけれど。

ふとある時、宙を見上げる彼女の視線が気になった。いつものように何を見るでもなく目を泳がせているのだと思ったが、その時の彼女は焦点のあった目で“なにか”を追っているように見えた。私にとっては「なにもない」一点を捉え、その「なにもない」に向けてえへへと照れるように微笑んだのだった。少し間があってから私は、「ああ、なにかがそこにいたのだな」と認識した。私にはみえないなにかが。

私は彼女を羨ましいと思った。彼女の目で世界をみたい。仮説のもとでごく自然にそう思う。加えて、“私にない”差異がこれまで出会った他者よりも圧倒的に感じられ、それは魅力として強かった。彼女から支援級の生徒に対しても同じように感じていった。全校集会で静まり返った体育館で声を上げることも、移動の最中で突如座り込むことも、身勝手な善意を受け取らないことも、すべて彼女たちにとっての日常であるのに、私にはなかったのだから。

それまで“疑い”に近い感覚としてもっていた仮説に対し、私に信憑性を与えてくれたのが彼女たちだった。

当時、仮説は決して口にはしていけなかった。「後ろめたさ」に通ずるような、説明の難しいその感情は自然に湧いて、気が付いたら飲み込まれていた。ひた隠しにしなければならないのだという脅迫的な意識。仮説に対するそういういったもやもやしたものが、彼女と彼女たちに深入りをしないよう、私を押しこめていった。その後も、距離を取るでも詰めるでもなく何事もなかったように、これまで通りにすることを心がけた。過剰に意識しないよう、仮説が決して露呈しないよう。そうして日常に身を任せ、気が付いたら小学2年生から中学3年生までの8年間、ずっと彼女とは同じクラスだった。行事のグループ分けだっていつも同じ枠に名前があった。それでもひたすらに、特段の意識をしないようにしていた。中学校卒業という際になって、雑談の中不意に「私の配置は意図されていた」ということを知る。教員側の意向であり、「おまえだったら大丈夫だと思っていたから」と、さも得意げに先生が言った。いったい何が「大丈夫」だったのか。思い返しても彼女に過度な接触はしていないはずだった。私は返答に困って、どう返したのかを思い出せない。

この時の疑問を思い返しては今尚考えているのだが、ひっきりすら掴めずにつるんと滑って落っこちたままである。彼女たちから気持ちや遠ざける程に膨れ上がっていく羨望は、落ちた場所から全貌が見えないくらい肥大していた。「私とは対象的に感覚の差異が解りやすく感じられる事象、及び差異が一部可視化している事象」として。社会に出る頃には、その理想が私の半分(芸術のもう一方)を占めることとなる。

誰もが仮説をもつ者として

休職中に半分の方に初めて目を向けた。そして、児童発達支援センターの放課後等デイサービス^{※1}で子どもたちと一緒に過ごす日々を選んでから、一年が経った。放課後や長期休暇を過ごす、所謂「学童保育」の発達支援^{※2}に特化したものという理解で相違はない。施設ごとに理念や方針は様々だが、私の勤め先は主として「余暇活動の充実」を図ろうとしている。

「余暇活動」つまり「遊ぶ」ということはとても難しい。施設を利用する子どもたちはコミュニケーションの取り方も身体の使い方もそれはそれは様々で、私はいつだって異端である。共通する興味があれば「遊び」はどうしたって成り立たない。一緒に遊ぶには、彼らの仮説を探していくことが必要だと思っている。興味はきっと仮説に結びついているのだから。

彼らもそれぞれに仮説を持っているのだろう。仮説に基づいた行為として、他の何を差し置いてもそれをしていなければならない。もしくはそれをしてはいけない、と。一体どんな説なのかを必死に想像する。私もその目で世界がみたい。それをそのままみたい。あの子に感じたままの気持ちで少しも成長せずに、いつだってそんなことばかり思っている。そうして①をみてきた。だからこそ、彼らにはもっと「つくる」をしてもらいたいと願う。表情でもダンスでも工作でも写真でも言葉でも良い。彼らの仮説、興味的一端を、私にもみえる形で、私にもみえるように。そのためになら私は、何だってしよう。そうして一緒に遊ぼう。そうして、考えたい。

彼らが仮説を検証する為に、やりたいことの為に、彼ら自身はその他のところで何をしていくべきなのか。検証の為に時間を、場所を、他者を、それは意思を持って何とかしなければならない。例えば、猛スピードで自転し続けたいのならば、自由な時間にそれなりに広い場所を見つけ、周囲に人がいないかどうかを確認する必要がある、というようなこと。また、方法が自分を傷つけてしまう場合・他人を困らせてしまう場合。その他のやり方か、仮説の更新が必要である。そういったことを彼らがそれぞれ納得して行えるように。検証を「何とかする」為に、人はみんなそうやって必死なのだ。生きることに必死なのだ。それは彼らだってよくわかっている。

「簡単にできることではない」という重要な大前提を持って、一人一人に考え続けたいと思う。

その上で、思い切り仮説を試みてほしい。そして更新していったほしいと思う。多くの経験をして様々なものに触れ、他者と関わることで、時間をかけて仮説は更新されていくと思いたい。彼らの仮説は、想像の外側からいろんなものを連れてきてくれる。どうか私のように一つの仮説に縛られずにいてほしいのだ。

発達支援に関わる様々なものに対して、いくつもの仮説が出てきては考えているが、上記のことが私の前提としてある。これから私に何ができるだろうか…。「誰かの為」という言葉を、私は他者に対して使えずにいる。あなたの目でみることが叶わないのだから、何が必要かなんてほんとうにはわからない。まずは、全感覚で彼らの仮説を楽しもう。そう思うことは、やはりどうしたって自分勝手なのだろうけれど。

Eに話したら、「もっとシンプルでいいのに」なんて言うのだろう。自分だって全然、合理的な方でなくせに、煙草吹かしていつだって「考え過ぎだ」と言う。そんなことが一番よくわかっている。考えずにいられたらどんなにいいことか。言い訳せずにいられたら。

つらつらと言葉を当てはめては重ねながら、煙草の煙がやけに恋しい。

—

「仮説」と「つくる」と「生きる」は重なっているのではと思い始めている。書いていて自分の中でごちゃごちゃだ。「仮説を持つことで、人は生きられる。仮説によって、人はつくる」。つまるところ「生きる=つくる」なのか…そういうこととしていいのだろうか…？ どこかで聞いたことのあるような説だが、私が持つ仮説なんて既に誰かによって検証された使い古しばかりである。

※1 児童福祉法に基づく福祉サービス。基本的な役割として、学校（幼稚園及び大学を除く。以下同じ。）に就学している障害児に、授業の終了後又は休業日に、生活能力の向上のために必要な訓練、社会との交流の促進その他の便宜を供与することとされている。

（厚生労働省 障害児支援施策「放課後等デイサービスガイドライン」（2019））

※2 障害のある子どもに対し、児童発達支援センター等において、日常生活における基本的な動作の指導、知識技能の付与、集団生活への適応訓練その他の便宜を提供するもの。

（厚生労働省 障害児支援施策「児童発達支援ガイドライン」（2019））

第五回 「東京で生きる」（阿部健一さんのご自宅にて）

Eに宛てて —〇〇の為の習作

これを書き上げてから、Eに会いに行こうと思っている。

「東京でつくる」のタイトルとして「前提を問う、ことばにする、自分の芯に気づく」という言葉が並列にあること。初めから、この2つが並んでいることに良い意味でひっかかっていた。これが既に解なのではないだろうか。ということにして、今やっとなにに落ちた。「東京でつくる」とは？の問いかけに私なりの仮説をもつとするならば、個々が「前提を問う、ことばにする、自分の芯に気づく」こと。きっとそういうことで。私のひっかかりは最後まで変わらずに、回を重ねるにつれてようやく言葉と繋がっていった。気がつくとなんなこと、みんなは前提としてとっくに前に進んでいる。

【東京】として捉えようと、漠然とした東京をいくつもいくつも考えてきたが、どれも実感の伴わないどこかで聞いたようなコトバの羅列になるばかりで納得がいかなかった。結局私が考えられる事といったら、東京に暮らしている「人」、通過した「人」、一人一人の東京を伺うこと。東京をどんな場所だと思い、何を求めるのか。それが「東京」と呼ばれるそのものになっていくのだろう、と。それを問うことは自ずとその人の「芯」を問うことに等しい。決して、個々の東京の【集積】・【集合】が「東京」を

浮かび上がらせるわけではなく、一人の考える東京そのものが、それぞれ「東京」として存在しているということ。

「東京はおわりだ」という言葉は、たしかにそこら辺から湧き出たように聞こえてくる。今までのような元気はなくなっていくのだらうと、そういう空気感はすれ違う人から俄かに感じる。しかしそれは、「東京のおわり」なんてドラマチックなものではなく、「東京」という都市として歳を重ねたことによる落ち着きであるとは考えられないだろうか。おもしろいとかつまらないでは括れない、発展とも違った方向の、子どもの成長過程に近いような。2歳くらいの元気いっぱい将来に希望しかないようなハッピーな子どもが、少し大人になったというだけのように思う。成長と共に悩みも増えていく。ちょっと踏み外すようなことだって起きうる。今がただ、そういう時期なのだ。「可愛げがなくなった」と言われてしまうかもしれないけれど、成長はとめられるものではない。いつかはお爺ちゃんお婆ちゃんのように、どっしりと構えた東京に成っているのだろうか。人が、ただの一人もいなくなる限りまちは死なない。だから時間をかけて。私は童顔の東京も好きだったが、少し背が伸びたこれからの東京にこそ期待しているところが大きい。

私のはそういう、【 】にできないまち「東京」。だから、「東京でつくる」には、「自分自身と東京」の関係に加えて、“それに巻き込まれてくれる人と東京”との関係性をよくみていかなければならないように感じた。「つくる」には、意思を持って「生み出すもの」と、無意識のうちに「生み出しているもの」の2種類があるのではないだろうか。エッセイ4の文末の露は、このあたりに基づいているような気がする。「つくる」の前提は未だ曖昧なままで、これからも思考が巡る。

ただ一人のみている東京が「東京」であるならば、一人一人が東京と楽しむ方法を見つけるだけだ。一緒に東京と歳を経ることを、楽しめたら良いだけだ。そんな風にして私はゆるやかに「東京」と過ごしていきたい。

【 】の世界へ

「頭の中の整理・言語化」という個人的な目的を持ち、対話と共に半年間をかけてこれらのエッセイを書いた。思考の転換や革命のような変化を求める場ではないことも承知した上で、変化が、たしかにあった。静かに流れるようにという感じで、大きな変化が。石神さんによるスタディの在り方が、東京で過ごしている現在の日々（バーチャル）と、過去（現実）と、頭の中（仮説）を、当たり前のように【私】として定義してくれる時間であったのだと思う。境界線はいつも曖昧でグラデーションだった。“当たり前のような”自分への【 】が、私にとってはこの上なく重要だったのだ。

そうして、私はようやく仮説を更新することができた。

“抜け出せた”。変化を、そう感じている。「すべての人が個々それぞれ、みている世界が違うのではないだろうか」という仮説。私の中でこれは前提となり、その上で「個々が抱える仮説こそが、他者のみている世界を知ることなのではないか」という新仮説を

持つに至る。小さな進歩。「他者に成り代りたい」という旧仮説は決して叶わぬ願望でしかなかったが、そこからの「他者を知りたい」という進歩である。この僅かな歩みは、「他者を考えながらも【私】でいる」という、これまで不健全に欠如していたものが健全になったという点で、大きな更新なのだと思います。

これまで自分自身さえ規定できずに、あやふやなままだったのだ。他者との差異を見つけてはわくわくしつつも、その集積が自分と他者との距離を遠ざけていた。そうやって時間をかけて少しずつ、「差」そのものを憧れとして積み重ね、劣等の自分を無とする。他者の目でみたいという思いは、私が私の目でみない為の逃避でしかないのだった。

そんな簡単なことに気づくまで、随分と時間を使ってしまったと絶望する。それでも、新しい仮説がまた私を前に進めてくれるという希望を持ちたい。旧仮説によって視野が窮屈に狭められてきた部分は大いにあるが、その仮説によってしか生きてこれなかったということもまた、事実としてある。これからは、周囲の人が、子どもたちが、どんな仮説を携えて何をみているのかが知りたい。あなたの仮説を片鱗でもみせてほしい。この気持ちはこれから私を生かしてくれるだろうか。

語りを求める上で

私はやっとやっとで今、「東京でつくる」を考える為の前提を言葉にただけだ。ここからようやく、また思考を始めたい。対話を試みたい。私には境界線の言葉や【 】の括りがもう少し必要なのだ。他者をもっと伺えるようにになりたいのだから、伝える為の手段として、受け取る為の手段として、意思を持って用いなければならない。そうして私は、「人が人に仮説を伝える機会」をもっとつくっていくことができないだろうか。それは飲み会の“宴も酺”頃に時折自然発生する、誰も受け取らない「語り」に似たような。呂律の回らないそのように、あなたがあなたの拙い手段で、あなた自身に向けた「他者に伝える機会」として。そうやって対話と往復し、個として自分を省みるときには、言葉や【 】を外した状態の「そのまま」で物事をみることを忘れずにいたい。どうやっても伝わらない私だけの感覚質だとしても、それ「そのまま」に敏感である身体をいつだってもったままに。これについては今後、大丈夫だろう。日々私を囲む子どもたちが、そのことに頼る長けているのだから。

—

数年前のこと、知人の頼みで、ある作品集の記事を書くことになった私は頭を抱えていた。雑誌の端っこに載る300字程度の小さなものだったからだろう、「思ったことでいいからね」と優しい声で素っ気なく電話は切られ、断る隙を逃してしまったのだった。記事にするのは苦手なのだ。その本には思い入れがあるから尚のこと、言葉に置き換えることが億劫だった。

Eにふとそんな話をすると、珍しくちょっと考えてから「自分の為に書いてみれば？」なんて、いつもの調子で応えた。私は意味を掴みきれないまま何かに安堵して、その晩のうちに書き上げたのだった。

伝わるように並べた言葉ではなかった。その書き物が依頼者と読

者にどう受け取られたのかはわからない。そして自分の為に書くこのエッセイもまた、公開していくことに躊躇がないわけではない。私が救ったのは、私だけだ。それ以外の何一つだって変化してはいないわけで、一つ一つ自分で何とかしていかなければならないことにこれっぽっちも変わりはない。ただ、「人の仮説語りを聞きたい」なんて言うには、「まず自分から」なのであろう。

発売日になって、Eは律儀に電話をくれた。記事に触れるでもなくいつものようにあいさつ代わりの恋愛事情なんかを一通り並べ、ややあってから僅かに低い声で「はるは、もっと書くべきだよ」と言った。書き続けるべきだ、と。

Profile

五十嵐春香（いからし・はるか）

1990年新潟県生まれ。写真芸術を学んだ後に撮影アシスタントを経て、美術書籍店NADiff a/p/a/r/t（2013-2017）に勤務。傍で、ART FAIR TOKYO（2014）、THE TOKYO ART BOOK FAIR（2015, 2016）等のアートイベントや芸術祭の運営に携わる。株式会社301（2017）の後に一時休職。2018年より分野を横断し、発達障害児に関わる社会福祉法人に転職。

石井 美加

Mika Ishii

都心で生まれ育ち、京都や海外での生活を経て、今も都心で働き暮らす。その華やかさと感性が弾けるようなエッセイ。「地元」として描かれる東京も新鮮でした。ここで生まれた素敵なアイデアが実現しますように！（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

東京との関係1969-2019：「東京でつくること」に関するあれこれ

東京で半世紀。私は比較的中心部で暮らしや価値観の移り変わりとその良し悪しを感じてきた。住まいは新宿区、文京区、渋谷区と移り、15年前から大田区。勤務する化粧品会社のオフィスは中央区にある。

人生前半の東京の記憶、現代アートとの出会い

親が運転する車の助手席や後部座席の窓から眺める目白通り、山手通り、明治通りの景色が印象強い。いつもどこかで商業施設を壊しては作っている。夜な夜な大掛かりな道路工事をしている。終わらないまちづくり。細い抜け道や首都高を使って拠点から拠点へ移動する。車に人と荷物を詰め込んで降ろし、渋滞に巻き込まれ予定が少しずつ狂っていく。狭い車内での親や姉妹、友達との時間。ラジオやテープから流れる流行りの曲。両親揃って洋物好きだったので、それにしがった価値観をベースに育った。次はどんな新しいものができるんだろう、ちょっと見に行ってみようか。そんな外出も多かった。

長く過ごした目白台で、私は自分をつくり始めた。クリスマスは関口カテドラル、大晦日は護国寺、友達とは鬼子母神のお祭り、お墓参りは谷中、買い物は池袋のデパート、たまに銀座。徒歩圏の女子校に進み、徒歩圏の大学で勉強、と張り切ったが開放的な校風に驚き、のまれた。卒業前にバブルが崩壊、就職活動を始めると世の中が男性で動いていることに改めて気づかされた。西洋美術史の修士課程にいた時、新宿高層ビル街、表参道スパイラル、品川原美術館、銀座ザアートスペース、佐賀町エギジビットスペースに通い現代アートに触れた。既成概念、手段、物質にしばられず問いを投げかける作家たちに静かに熱狂した。

京都ー東京ーミラノーロンドン

人生の節目に東京を離れて暮らしたことが2度ある。1度目は就職した年、京都の販売拠点に1年駐在した。2回目は30歳の時、ミラノ、ロンドンに合わせて1年と少し滞在した。

京都へは緊張して赴いたが、さすがが美を扱う会社。上司同僚は仕事以外にも様々な体験を惜しみなく与えてくれた。京都弁の独特の言い回しや作法。お茶屋さんと上司との良い感じの掛け合い。

祇園祭の熱気。先斗町の川床。美味しい珈琲。営業車で立ち寄った天橋立、それをスケッチしプレゼントしてくれた先輩。日本海側の松とゴロゴロした岩の海岸での海水浴などだ。

1年で自分を「京女」につくりかえることはできなかったが、「隣の芝は青い」という考えを持たず、自身のプライドと他者へのリスペクトを両立させることが「自立した大人」になることなのだと教えてもらった。京都には古都に挑んでくる新しさを面白がる懐の深さがあり、「女性的」「母性的」なエネルギーを感じた。老舗茶筒屋さんの話では影のボスは女将。旦那衆を立てて一身を引き実は全てを仕切っているようだ。

一方、「東京」は「東の都」。1200年の歴史を持つ京都に対し首都歴125年の少年で、人と物事が忙しく動き夢が大きい！「東京で“化粧品”をつくる」仕事を始め周りが見え始めた頃、「グローバル（Global +Local=Glocal）」という造語に興味を持った。グローカリゼーションは、端的に言えば「世界規模で物事を考え、地域で活動する」と言い表される。その実現方法にはさまざまなあり方がある。（出典：新語時事用語辞典）。当たり前に住んでいた地元「東京」を意識したのはこの時だ。

世の中を観察し生活者のインサイトをつくる商品コンセプトを考え、中身、外装、PRを企画設計するマーケッターの仕事は、英語の「Design」に相当する活動。しかしながら日本語の「デザイン」は具体的な形のデザインを示し、テキスト、パッケージ、グラフィック、空間と専門分野に分業される。ミラノ、ロンドンで小規模のデザイン会社に研修生として身を置きDesign Managementの現場を体験しながら「Glocalに物事を表現する方法」を見聞きした。

ミラノでは、ファッションデザイナーや建築家と過ごした時間が長く、イタリアデザインの歴史とプライドを見せつけられた。「ミラノでつくる」ため様々な国からパッションを持つデザイナーが集まり徒弟制度で切磋琢磨する。老いも若きも毎晩陽気に遊び、その合間にジャンルを越えたディスカッションが繰り広げられるカルチャーは刺激的だった。ファッションウィークやSaloneでは都市全体が大舞台となって湧いた。

ロンドンでは、グラフィックデザイン事務所の仕事ぶり、1つのオーダーに対する何百ものプロトタイプに圧倒された。彼らは英語文化の本拠地としてフォントへの深い知識があり、さらなる「本物をつくる」ための努力を厭わない。本気でビジネスするなら英語が“通じる”レベルではだめなんだろうな。京都で感じた

都市の成長と成熟に加え、階級社会とアート／デザインの関係についても考えさせられた。行政がデザイン戦略に積極的で、美術館や博物館など文化施設の指針が素晴らしく、入館無料という環境に感動した。フォトグラファーの友人と頻繁に会い、時空間を超えた「見える／見えない美」と向き合うひたむきな制作活動の一端に触れたことは、大きい。

「TOKYOでつくる」—アートの力の活かし時

成田空港で日本語を聞いて「東京」に戻った、とホッとした。Global! グローバル! というけれど、私は現在母国語で話し考える自由と面白さを感じている。

もうすぐオリンピック。グローバル都市として躍進したい「TOKYO」は危なっかしい少年のよう。生活者として環境に振り回されず自立して暮らしたいなら、地方に移住するのが賢い選択だ。そんな場に私が何らかの期待を抱くのは、不透明な世のあり様や困惑をそのまま映し出す都市の姿に自分を重ねているからだ。

新しさの象徴として東京はつくられた。チームメンバーの東京感を聞き、大きなリビングラボとしての都市の姿を思い浮かべた。前身の江戸、西の京都、世界の都市に学び、100年200年先を見据え様々な価値観がリアル&バーチャルで語られる「境界のないTOKYO」。すでにこのチームの幾人かが活動している点を手掛かりにデザインしたら面白そう。

最近読んだ逢坂恵理子氏の記事にこうあった。「…（海外では）根本的にアートやアーティストに対するリスペクトが日本と全然違います。日本だと一般的にアーティストって変な人だと思われたりしますが、海外だと、アーティストは、今の時代の先を読む力がある人で、自分とは違う角度から物事を見る、多様な視点を与えてくれる人たちだという明確な位置付けがされています。」

奇しくもプライドの高い少年「TOKYO」の、私が慣れ親しんだ鬼子母神エリアでは、行政がアーティストやアートの力をリスペクトし、石神さんがアートプロジェクトをナビゲートしている。「東京でつくる」とは、混沌を受け止め夢を持って次のあり様を描く生活実験をすること。情報はもはや（都市でなくとも）どこでも受け取れる時代になったからこそ、追求すべきは「見せる場所」ではなく「つくるプラットフォーム／メディア」としての機能や魅力なのだな、とここまで書いて、石神さんの作品を実際に見たことがない私が当スタディに参加していることが恥ずかしい。実験現場を体験しチームの思考に追いつくよう励みます！

第二回 「日本から離れてつくる」

2018秋：京都と東京で想う

“自分”の世界 “自分たち”の世界

東京・大田区、自宅にて

中学生の娘が学校から持ち帰った配布物に掲載されていた、映画監督西川美和さんのエッセイ『みつけたともだち』。カトリック教育を受けた中学時代の西川さんは、聖書の中でも悪魔に取り憑かれ全世界から嫌われるユダの裏切りシーンを**自分**ごとのように捉え震えるそうだ。ユダの最期が悲しくてならず、現在に至っても「どうにもならないことのばかり探っている気がする」「誰もいないあの土地で首に輪をかけようとするユダに、声をかければ間に合うのじゃないか、と愚かにも信じているのかもしれない」と結ぶ。私は信者でないので、こうした心の動きは客観的にみざるを得ない。難解な文章を共に味わい人の生死や日々の営みについて深い思考を繰り返し促すカトリック教育が、感受性豊かな子供に決して容赦しないところに、正直驚く。長年語り継がれた物語には重要な「意味」があることは確かだろう。生徒は**自分**の短い人生の記憶をつぎ込んで想像力を膨らませ、登場人物の内面を探ろうとする。「初めに、ことばがあった」。言葉で考えるとき、物語の「意味」は必ずしも筆者や話し手と一致しない。言葉と「意味」は元の物語の時空間を離れ、人々に新解釈され、小説、舞台、絵画、建築、彫刻、音楽、映像等のクリエーション＝新たな物語＝実世界を生きる人々の**自分／自分たち**の物語として、世の中に視覚化され、共有され、蓄積される。西川さんのように。カトリックの教えの根底にある、**自分／自分たち**には「どうにもならないこと」に対する＜怖れ／恐れ／畏れ＞。エッセイを準備するに当たり石神さんが投げかけた3つのテーマからまっさきに思い起こしたのは、そのように感じる心のありようだった。

東京・中央区、仕事の合間に

77ギャラリーのご主人が川野美華さんの作品を紹介してくださった。人の肌を思わせるつやつやでなまめかしいピンク色と宗教や民話を超え聖人妖怪花植物奇怪なキャラクターが湿度の高いキャンパス上で出会い、心の闇とはてしないエネルギーを花火のようにドーンとキラキラ軽やか〜に炸裂させている。ユーモアたっぷり。聖アグネスも聖アウグスチスもろくろ首もきのこも、川野さんの「ともだち」だ。写真でみる川野さんご本人は、作品の世界とはかけ離れた世界に住んでいそうな落ち着いた雰囲気。普段は礼儀正しいお嬢さんだそう。

自分の「分」は、本来備わっている性質を意味する「本分」の「分」で、自らの力量をさす語であったが、古くから「私自身」を意味する言葉としても用いられた。（語源由来辞典）

自分の世界ってなんだろう。多くの人は**自分の世界を自分たち**の世界に拡張したい欲望にかられる。川野さんはどう折り合いつけているのだろう。

京都にて

先週は、京都でお寺の副住職と神社の権宮司の話をうかがう機会に恵まれた。賢人達は笑いながら実はカトリック高校の出身だとおっしゃる。若い頃はわからなかったが今は経験してよかったと思っている、と。文化の流れを紐解けば、日本は終着点にあり日本より先がない。八百万の神を信仰する日本は様々な価値を迎え

入れ<和>となすことが得意なのだという。仏教はインド発祥だが、禅は日本にしかない。インドのカレーと日本のカレーが違うのは当たり前。オリジナルのコンセプトを土地に合わせて進化させることを面白がるのが日本文化の特徴だという。神道の竜宮城を模した本殿は作りも色彩も実に華やか。権宮司の三代前の明治までは、神社でなく神仏習合のお寺だったそう。国連に役職を得た権宮司から、国の方針で神道が間違った使い方をされ戦争を招いたとさりと説明があった。本殿内に施されている4つの巴紋（水の流れを表す）の彫刻は、3つが左巴（左回りの渦）1つだけ右巴。社殿を完成させてしまうとあとは朽ちるのを待つことになるため、あえて未完成（間違い）の箇所を造ることで社殿が未完成であり益々の発展を遂げる、という願いと縁起が込められているそうだ。神道が守るべきは「清い、正しい、明るい、直い」精神、と断言された。京都のイノベーターはアーティストも宗教家も老舗の若旦那も、それぞれの立場で謙虚に使命に邁進していて、かっこいいなあ！歴史ある街で次の100年、200年の文化を担う彼らの「行動力」「結束力」そしてく怖れ／恐れ／畏れ>を忘れない姿に成熟した人間性をみた。

東京・豊島区、

APAFアートキャンブプレゼンテーションを聞きながら

東京に戻り、さてどうしよう。グローバル都市として飛躍を目指す成長期の少年「TOKYO」の未来には、たくさんの可能性が待っている。日本各地から世界から人と知が集う。誘惑いっぱいのでどんな物語を紡いでいくべきなのか。京都人からみた東京は、やはり、広すぎる。ある人は渋谷、銀座、新宿、中野、高円寺、豊洲といった街で捉えることが多いといていた。それぞれの街の活動が東京の血となり肉となり循環&拡張していく。長生きを目指しあえて所どころ未完を良しとする。東京人の暮らしには街間の移動が伴うため、都市ならではのネットワークの進化は「結束力」の発展に繋がる。ただ心得としてく怖れ／恐れ／畏れ>を忘れてはならないし、先輩京都をはじめ世界の都市に学ぶことを怠ってはならない。

人形浄瑠璃人形遣いの勘緑さんが、日本語の「芝居」とは底辺の人のドラマを意味するとSNSで発信し、私はちょうどTARLに参加しているせいか、ことさらに心に響いた。勘緑さんが目指す芝居は、古今東西の芸能、国籍性別言葉を越えたスペクタクルだ。この夏越後妻有の棚田&イリアカバコフの作品をバックに現代サーカスと共演した演目では、夢のような作品体験をさせてもらったが、10月にはシリア難民の俳優と浄瑠璃人形で反戦をテーマした舞台を上演、これこそ彼が最も皆に知らしめたい想いを表現した作品だという。会場は大小厭わず多くの人に触れてもらいたい、東京でも大学や企業に協力してもらいたい、と行動するその熱意が痛いほど伝わってきた。ところが、私といえば、仕事や家庭の都合で観に行くことも協力もできずとても恥ずかしかった。フェスティバルトウキョーの『NASSIM』はこれまでの演劇のスタイルを覆す演目だったと聞く。諸般の理由でこれまた観逃してしまった。

物質社会の限界が見え、何が底辺なのか、弱きもの儚きもの本質

的なものの存在が伝わりにくい世の中だけれど、ホッとできる「芝」があり、「芝居」に参加し自分の役割を演じて発見できる機会が増えれば、つかみどころのない都市「東京」が誰にでも開かれた居心地のいい「TOKYO/トウキョー」になるのではない。人工の世の中に完璧なんてない。江戸の大火災を経たスクラップ&ビルドな街並を逆手に取り「二度とない今」、演者と観客が一体化した「自分／自分たちの世界」での生活実験を共有する「トーキョースモールサーカス」のようなコンセプトを膨らませたいと思った。課題先進国と言われる日本の複雑な物語を人から人へライブに紡ぐ装置として。多様多彩なアーティストと協力して。アーカイブのあり方ふくめて。自分の力量から始められることはなんなのか。東京で生まれ育ちこんなストレスフルな現状に慣れていて、今もこれからもここで多少なりとも江戸っ子に倣って粋な暮らし方を見出そうと実験を繰り返す自分を想像できるからこそ、TARLの場で丁寧に企画を進めたい。

第三回 「ここでつくる／ここではないどこかでつくる」

東京から逃げ出すのが1番

「命売ります」脚本・演出：ノゾエ征爾、原作：三島由紀夫、於：サンシャイン劇場

知り合いの推薦で久しぶりの観劇。先月に続き夕方の東池袋駅に降り立つ。地下道に並ぶクリスマスの衣装を着せられた梟の置物たちを横目に、ショッピングモールにしては天井が低く昭和の香り漂うサンシャインシティに到着した。懐かしいサンシャインシティ！この施設ができた時、私は10歳くらい。家の近くにとても高い建物が建った！早速家族で展望台に登った。買い物、食事、ホテル、水族館、プラネタリウム、スポーツジム、エステなど、何でも揃っていて日常的に利用した。

サンシャイン劇場のある上層階へエレベータで上がるとき、施設の一角にある「古代オリエント博物館」のサインを見つけた。開館当時はなんでここに？と思っていたが、いまや商業施設としての魅了がすっかり薄れてしまっている館内で、当時と変わらぬ「博物館」の落ち着いた佇まいを確認しホッとした。何と言っても扱っているものがトレンドではなくて古代である。結局は古びない価値の勝利なのかも。

いよいよ芝居がスタート。自殺に失敗した21歳の主人公 羽仁男は、勤め先の広告代理店トウキョウ・アドを辞め自分の命を売出す。その命の売り方は元コピーライターらしく三流新聞の求職欄に前代未聞の告知を出し自宅のドアにサインを掲げるというもの。中年男、図書館の司書、高校生、、、怪しい注文主が現れるたび羽仁男は捨て身で要求に応える。しかしながら絶体絶命の場面と思わぬ運びとなり、彼が望んでいた命を落とす結果には至らない。さてどうしたものか。なんども危険な注文を受けていくうち、彼は人に命を預けたはずの自分が、生きたいという本能＝「死の恐怖」から究極的には逃れられないことに気づき絶望する。

終盤、死から逃走し始めた羽仁男が「東京から逃げ出さねば」と静かに叫んだ時、そのセリフは、主人公と同じく「トウキョウ・アド」に代表される情報都市のライフスタイルや思考から逃れられない人々を揶揄するもの、つまり観客である私たちに突きつけられたものに感じられ、ぞっとした。

三島は、高度成長期に男性向け情報誌「週刊プレイボーイ」の連載小説として、ブラックユーモア溢れる警告とも取れる本作品を書いた。帰宅後に原作を読み返した。

（注文主との面会前）

一人きりになった羽仁男は、室内を見まわす他に、時間のつぶし方がなかった。

いつも自分はこうやって、何かが起るのを待っている。それはまるで「生きること」に似ているではないか。トウキョウ・アドにいたころ、ばかにモダンにしつらえた明るすぎるオフィスで、みんな最新型の背広を着て、手の汚れない仕事をしていた毎日のほうが、はるかに死んでいたではないか。今、死ぬと決めた人間が、たとえ死そのものをにせよ、未来に期待してブランデーをちびちびやっている姿は、何かおかしな矛盾を犯してはいないだろうか。（後略）

（知らない人間からの手紙）

「お前はどんな男かは知らないが、『命売ります』という広告を読み、まさか冗談かとは思うが、見過ごすわけには行かぬので、この手紙を書く。

身体髪膚これを父母に享く。敢て毀傷せざるは孝の始めなり。という古人の言をお前は知らないのか。知るまいな。こんな広告を出す人間は、よほど無教養な人間にちがいない。

一体、お前は自分の命を粗末にして、どうするつもりだ。仮にも戦前には、『おおみたから』と呼ばれた光栄ある日本臣民として、国に捧げるべき命であったものを、お前はいかに経済主義の世の中とはいえ、卑しい金銭に代えようとするのか。

金権万能の世の中に憤ってきた俺だが、お前のような人間の屑がいるからこそ、金権がわがもの顔になるのもムリはない。まさに唾棄すべき広告であって、道徳の退廃ここに極まれりと言うの他はない、、、、、」

（警察でのやり取り）

「何とでも言いなさい。こんな田舎の警察に何がわかるものか。警視庁に連れて行きなさい。そこでちゃんとした人にきいてもらうから」

「ほう下っぱがお相手に悪かったな、しかし、下っぱのカンのほうが、これでもお偉方よりもモノを言うことが多いもんだ。田舎の警察とは何だ。住所不定のくせに、偉そうに」

「まともな人間というのはな、みんな家庭を持ち、せい一杯女房子を養っているもんだ。（後略）」

「はあ、命をね。そりゃご苦労様なこった。しかし命を売るのは君の勝手だよ。別に刑法で禁じてはいないからね。犯人になるのは、命を買って悪用しようとした人間のほうだ。命を売る奴は、犯人なんかじゃない。ただの人間の屑だ。それだけだよ」

本作にはイソップ寓話「田舎の鼠と都会の鼠」が引用されている。田舎に対する三島のイメージは安全で素朴な生活だったのだろう。奇しくも羽仁男が逃れた先は西武池袋線飯能駅近く（埼玉県）。ここで、広告をきっかけに自らに降りかかった一連の出来事には黒幕があり、羽仁男はとある秘密組織から「警察の情報員」と誤解を受けていたことを知る。都会的機転のよさで修羅道を切り抜くことはできたが、その後行き先もなくさまよった果てに駆け込んだのが、青梅市（現・東京都）の交番というところが非常に切ない。私が改めて興味深く感じたのは、物語中に登場する男性たちがやたら戦略的だったり理屈を押し付けて来るのに対し、女性たちはおしなべて孤独で無力だけれど情熱的に描かれているところだ。男尊女卑の世の中で何らかの傷を負った彼女たちが、他者のために命がけで行動する羽仁男と出会い、彼を心から命がけで愛するようになるころは「プレイボーイ」というより少女漫画っぽく女性にも好かれる筋書きだと思った。

時代は巡る。サンシャインシティは今年オープン40周年だそう。キャッチコピーは「なんか面白いこと、ある」。私は再び開館当時の広告色いっぱいの輝きを思い出す。10歳の私には、そこが東京プリズンの跡地であることは知らされていなかった。大人たちはどう思っていたのだろう。そして、羽仁男の「何かが起るのを待っている」生き方、青海の警察から追い出されたあとに見上げた素晴らしい星空の星々が涙目に複数に重なり合ってしまう光景の先に彼が切り開いたであろう人生に対し、今の東京人のライフスタイルは少しは進化しているだろうか、と考えた。少なくともノゾエ版「命売ります」のプロデューサーが、かつて西武系列のバルコに所属する私と同世代の女性であることは、明るい進化の兆しと言えるのではないか。この日この芝居をこの劇場で観ることによって遭遇した物事を、自分のこれからに向けどう消化したらいいのか。首都高速下の大通りを渡り、JR池袋駅に続く繁華街を、大学時代一緒に三島原作の芝居を観た親友と感想を述べ合いながら歩いた。目先にはネオンサイン、頭上はビルがひしめき、夜空を見渡すことはできない。いくつもの課題を持ち帰ったように感じた日曜の晩であった。

第四回 「東京にふれる」

見えないものを見る、見えるものを見ない

アート作品を見ると、私はまず作家が提示したものをぼんやり眺め、綺麗と思うかどうか自問するように思う。その後グッと力を入れてそこに見えないものを見ようとしたり、見えているものをあえて見ないように努めたりしている。写真でも絵でも書でも家具でも人の見た目でも言葉でも、なんでも接しているうちに個人的だったり普遍的な発見があったりすると、自分の「美」の概念が広がったり深まったり変化するのが感じられて面白い。

米田知子写真集「We shall meet in the place where there is no darkness」

米田知子さんはロンドンとヘルシンキを拠点に活動する写真家だ。ご自身の表現は、「作家の主観を排し観客の心に浮かぶイメージを狙っている」とインタビューで答えている。ダイナミックかつ繊細な表現で着々と創出される彼女の作品は、目の前にすると大きな余白のような静かで深い時空間が広がる。私にとっては、家に飾りたいとか所有したいという作品ではなく、相応しい空間へ必要な時に赴き世界に浸り、自分の芯を探ろうと繰り返し眺めたり見たり考えたりするために向き合う作品だ。まさに彼女の言葉通り！

初めてお会いしたのは連作「Between visible and invisible」の展覧会場だった。知子さんは歴史上の知識人が実際に使用していた眼鏡や文献を、彼らの心のありようを見出すように作品化した。フロイトの眼鏡と彼を批判するユングのテキスト、谷崎潤一郎の眼鏡と松子夫人への手紙、というように、レンズとテキストを組み合わせた緻密な構成が、主人公の苦悩を近くに感じ取れるような不思議な体験へと観客を誘った。知子さんにはその後縁あってロンドンで半年お世話になった。内に秘めた使命を持って旅するアーティストで、戦争や大災害に見舞われた地を選んで足を運び、場所によつた詳細なリサーチを元に、美しさだけでは完結しない光景を発表し続けた。私にとってのハイライトは、ハンガリーのドゥナウーイヴァーロシュ（スターリン・シティと呼ばれた町）の屋内プールでキスする恋人（2004）。中国から北朝鮮を望む国境の川を下るウェディング（2007）。かつての韓国情報機関の建造物の窓に降ろされた真っ白なブラインドが伝える閉塞感が印象的な「Kimisa 2」（2009）。日本人が行かないところへ行きたい、と他のインタビューで語っていた。

東日本大震災後、知子さんは東京にしばらく滞在した。久しぶりに会った日は靖国神社での撮影帰りで晴れやかな表情だった。そして後日私は、その見事な成果に感銘を受けた。三輪の白菊が地球外生物のような神々しきで迫ってくる「菊」（2011）。止めることが難しい世の中の大きな流れに対する米田さんの憂いなのか、希望なのか、慈愛なのか。

2013年東京都写真美術館での展覧会タイトルは「暗なきところで逢えれば」。知子さんは、序文でジョージ・オーウェル「1984」を引用*していた。文章をたくさん読んでいる方なので、言葉選びもシンプルで真髓をつく。

暗なきところで逢えれば

時は我々が何もなくても流れていく。
ただじっとしていても、鼓動と血脈があるよう
ただ生きている。

空をみて、雲は早くも遅くも常に
形を変えて彼方へと消えていく。

何一つ、誰一人、同じ場所（ところ）で、同じ思いであるということとは不可能だろう。

我々は目の前に映し出された像を見ては
（無垢なき）観念—を見いだす。

それは外から染められた
しかし内に秘めた
姿なき像である。

それは見えているのだが、
見えていないということと
同じかもしれない。

見えないということは見えているということに等しいかもしれない。

永遠ということは悲観的概念であり、
すべては永遠ではない—ことで
永遠を渴望する。

それに気づくのか、気づかないか。

“過去を支配するものは
未来をも支配し
今を支配するものは
過去をも支配する”*

全ては断面的なことではなく
相反しながらも、継続的なことである。

12/15久保田テツさんの動画ワークショップ（欠席したため記録映像でキャッチアップ）

視覚優位な世の中で動画が重宝されている昨今、あえて編集を加えないシンプルな方法でイメージを記録しメンバーで共有するワークショップ。練習作品の共有では、撮影した本人が認識していなかったものを他のメンバーが発見したり、作者の説明を聞くことで初見では注目できなかったものが見えたり、作者に聞かないと撮影意図がわからないこともあり、この記録方法の特色を理解するのに役立った。後半、テーマを設けて撮影した「さよなら東京」は、短い尺ながら対象の選び方や時間制限による偶然性も功を奏し、作者の東京感／神田感が何となく伝わってきた。私だったら何をどんな風に撮っていたのだろう？さよならという気持ちになれずに苦勞したかもしれない。

「Bird Box」Netflix 2018年制作

Kimisaのブラインドは外界を遮断していたが、好奇心旺盛な私たち現代人たちは皆、過度な情報摂取が招く弊害について考える局面に立たされている。

映画「Bird Box」のアメリカを舞台とした未来都市では、「視

覚情報溢れる豊かな外界」のイメージは消滅し「見てはいけない敵との戦い」が起きている。人々は安全を求め屋内の小さなコミュニティでの生活を余儀なくされる。偶然見てしまったでは済まされないため、急な訪問者、初対面の人物は十分に警戒しないとしない。外出時は目隠しをし「災いの種を見てしまう」ことで命を落とす危険から身を守っている。その時の目隠し越しの映像は、私にKimisaを思い出させた。しかし、主人公たちが安住の地を求め緻密な計画を立ていよいよ旅立つ場面で象徴的なことがおきる。同行する5歳の女の子が厳格な主人公を怖がるのだ。主人公は初めて子供の自由を受容する寛容さに欠いていた自分に気づき救済者としての成長を遂げる。

茶寮「ここのつ」

偶然性を是とする表現を、写真や映像作品は可能にした。自分でコントロールできないことへの寛容な態度と一方で不確かさへの対応として緻密性を尊ぶ両方の風潮が、暮らし全般に広がっているように感じる。人との和を大切に物語と五感体験を提供する場として、昨年暮に訪問した茶寮での体験を書き添えたい。

主人の溝口さんは台東区に店を構え、彼女の祖母の時代の日本に当たり前にあった光景を伝えようと、1日2回5名ずつ計10名にお茶と菓子のコースメニューを2時間かけて振る舞っている。木造店舗の引き戸から入るとすぐに大きな長方形のテーブルがある。3方に5人分かれて座る。一つの長辺は溝口さんが立ち、客間と同じくらいの広さのキッチンとの間を行き来する。キッチンと客間は溝口さんの胸くらいの高さのカウンターで仕切られており、客は常に店主が手際よく動く姿を追うことができる。

17時の開始後20分くらいは、キッチン以外は明かりのない状態で過ごした。まず少量の砂糖が入った白湯をいただいた。その後暗闇で茶葉を手の平に取り嗅いだり噛んだり、沸き立つお湯の音や湯気や雫を感じたり急須の中の蒸れた茶葉の香りを味わった。店主の自分語りを聴きながら、見えないものを見る。見えるものをあえて見ない。振り返っても未だ緊張するひと時。思い通りに物事が運ばない不自由をよしとすることで、自分が拡張したような気分になる贅沢な時間だった。明るさに慣らされなんでもよく見えないと気持ちが悪い普段の自分たちがおかしく思えた。ものの形、触り心地、歯ざわり、香りに集中すると、食する行為がこんなに豊かなのか、と驚いた。

うす明かりが灯され、溝口さんのお母様の活花が見えた。様々なお茶と合わせて、器に堂々と盛られたなます、茹で大豆、田作り、金柑、人参と栗のスープ、最中、みたらし団子、苺と寒天などを五感をフル稼働させ、ゆっくりといただく。どれもその日手に入った季節の食材を使って、お祖母様から習った味をベースに「溝口さん個人のセンス」で仕上げていくという語りに耳をすます。エピソードはどれも興味深かったが、「12月といえばクリスマスではなくおせちだ。祖母と一緒にリストを作った。」「最中を全否定していたが、ある日お客様に最中の皮を作る職人さんがいらして、一緒に理想の最中を開発することになった。（今では看板メニューの一つ）」にとりわけ好感を持った。

緻密に計算された参加型シアターのような茶会は、私にとって懐かしい幼少期のおまごことが理想の形として今に現れたような、夢のような体験だった。彼女になぜ東京でこのプロジェクトを続けているのかを尋ねると、「東京は何と言っても人が集まる場所ですから。紆余曲折がありました。あと5年は続けるつもりです」。

永遠を目指し、緻密な行程を重ねずにはいられない表現者たちへの私の期待は、ますます高まる。

第五回 「東京で生きる」(阿部健一さんのご自宅にて)

丁寧な、少しずつ

新しい画の立場について（「塔影」1937年9月号）

ここに吾々はずっと考えなければならない問題がある。それは日本精神を持たない西洋の精神を持つ異国の作家によって作られた作品、それが吾々に非常な感銘を與えることが屢々ある。之は何によって来るものであろうか、ここに絵画的に洋の東西時の古今を超越した何物かがあるのではないだろうか。要するに日本人として生きて行くには日本の特殊性を理解すべきことは勿論であるが、特に絵画の場合始めてこれを考えるよりも、既に日本人として立派な意識を持つ以上、それが膠画であっても油画であっても結局吾々は感情感激の質と同時にその量の方をこそ再吟味して見る必要があるのではないか。

—日本画家 杉山寧（1909-1993東京・浅草生まれ）

実家は30年近く2世帯住宅で、私と姉弟は明治生まれの祖父の画室に居ることが多かった。祖父と芸術について話したことはなかった。エジプト、ギリシャ、中国の遺跡、生成期の文字、日本の縄文、古墳時代の造形物に関心を寄せ、繰り返しスケッチしていた祖父の姿、実験的な小作品や習作、ゆっくりと仕上がっていく大作、それらのために集められた膨大な資料に触れた体験、画材店、剥製店、画廊、美術館、博物館で過ごした月日は忘れがたく、考えや好みをなんとなく理解していると思いこんでいたのかもしれない。何度か聞いた「純粹絵画」という言葉には、感情感激の質と量が吟味され超越した表現、永遠性や普遍性が込められているように感じ取れる。

1/22 THE EUGENE Studio 漆黒能「鶴」東京・六本木 国立新美術館

“暗闇の原始的な空間から、新しい世界へ”

「目に見えるものと見えないもの」、「テクノロジーと自然」を巡る、この二つの連続した体験から、人間の根源的な豊かさや、まだ感じたことのない未知の感覚を共有し、私たちと自然の希望

的な未来の行く末の一片をみなさまと共有できることを願っています。

スポーツアパレルメーカーのゴールドウィンが「根源的な人間らしさ」を考える契機として、アーティストチームTHE EUGENE Studioによる漆黒能「鶴」と映像「Alter」の2作品を上演した。ここでは特に漆黒能について記したい。THE EUGENE Studioは2年前、マレーヴィチ「白の上の白」の現代版解釈と言えそうな作品「White Painting」を発表した。今度の試みは「黒の正方形」のライブバージョンの様にも思えた。

美術館閉館後の20:00、招待客が集まる。最初が漆黒能。ホール入り口から能舞台への暗がりや、客が縦一列に並び、前の人の肩に手をあてゆっくり席に向かう。事前情報がなかったのでも不安になった。ほとんど何も見えない会場で開演を待つ。観客（90人だったそう）が能舞台らしきものの周りに着席し終わると、演者の足音が聞こえ演目が始まった。私は演目すら知らされていなかったの、ここは割り切り、演者の気配、所作と足音、謡を頼りに、舞台で何が起きているのかを立体的にイメージすることにした。そしてこれが楽しかった。シテが登場すると会場はいよいよ真暗闇に。動作と声と楽器の音が響きあう中、瞬間的に自分へ向かってくる音や気配に興奮した。人目を気にする必要のない空間で、私はリズムをとっていた。大勢でいるのにプライベートな感覚。目の見えない人はこんな風に世の中の出来事を把握しているのかな。能楽堂に行くとき眠っている様な観客がいるが意図的なものかもしれない。闇による没入感は、夢の世界に似ているのかな。

関係者の挨拶の中で、スキーヤーの佐々木明さんが、自然と本気で深く付き合うために心身を整え五感を研ぎ澄ますよう心掛けられていると語られていたのが、心に残った。企業とアートとそれを取り巻く健全な人間関係が清々しかった。

杉浦日向子『うつくしく、やさしく、おろかなりー私の惚れた「江戸」』

TARLのディスカッションで、ローカルな東京とグローバル都市TOKYOのズレが話題になった。ふと、東京に「惚れこんでいる人」がどれだけいるのだろうか、と思った。石神さんが紹介してくださいったジェーン・スーさんのエッセイを読んだ後、私は杉浦日向子さんの著書を手にとった。東京は小さな漁村から江戸時代に大きく発展した街。杉浦さんは現代の読者に向け、まるでそこで暮らしていたかのように当時の街の様子と「江戸っ子」の精神性をありったけの熱量で解説している。杉浦さんによれば、庶民の暮らしは高人口密度で長屋暮らし、ものは持たない。女性は結婚しても自分のために働くのが普通。子供は街ぐるみで育てた。個々の家で料理はせず、江戸前の立ち食い文化が発展した。粹で色を好み、出世を望まず身軽に生きる。お金がなくとも句会や花見を開き、季節の移り変わりを楽しんでいた。生まれた時から「余生」を送る感覚で、あっけらかんとゆったり構える。まさに理想ではないか！そんな誇るべき先人に倣い、東京は粹に遊び暮らす生き様を未来永劫追求していくべき場所になってはどうか、

と考えた。

私が学生時代に関心を持った19世紀フランスの詩人ボードレールは、ドラクロワ、マネら、意欲的な表現に挑む同時代の画家の活動に惚れ込んだ。詩人による数々の賛辞は、彼らの絵画作品に匹敵する熱量で、私を驚かせた。また、ボードレールは近代都市をあてもなく散歩する生活者を、親しみを込めFlaneur（フラヌール、遊歩者）と呼んだ。表現者に期待する批評家の存在、サロンでの知の交流、メディアの台頭、生活者あるいは群衆、これらが揃わずしてパリの文化的隆盛はありえなかっただろう。フランスの老舗ブランドエルメスの数年前の広告のテーマは、Flaneurへのオマージュだった。現代パリにもFlaneurの存在が不可欠なのだ。

260年の平和が続いた江戸は成熟した大人の街、大人な文化が発展した。少年東京からグローバル都市TOKYOへの成熟には、深く広い歴史の解釈が大切だ。そして「江戸っ子気質」も。経済的成功も失敗も十分に経験した都市の未来を左右するのは、この場所に関わる人がどれだけの熱量で「つくる」こと、表現すること、暮らすことに興味を持っているのかによると思う。また、私は表現とは自由で緻密で純粋で尊い行為だと信じている。だからこそ、一つの活動が他を作用する可能性に責任を持ち、そのためのあらゆる考察を怠ってはいけないと思う。

1/18 資生堂ギャラリー ASSEMBLE Granby Workshop「アートが日常を変える 福原信三の美学」

1/23 森下唯 演奏空間体験

2/4 建築討論 馬場正尊インタビュー「工作的都市へ」

この主客合一の飽和力の強さ弱さが、心境の深さ浅さとなり、それが作品となって表現される時には、その内容の豊かさ貧しさとなるのである。美の創作、それは自然に従順なものの見方即ち主客合一境からのみ生まれるものである。

一資生堂初代社長 日本写真会設立者 福原信三（1883-1948東京・銀座生まれ）

イギリスの建築家集団ASSEMBLEの陶芸ワークショップに参加した。東京・銀座8丁目のビル地下一階の、窓もないひそやかなスペースで、益子の土を使いグラスゴーからきた職人／アーティストと我々化粧品メーカー社員が小1時間おしゃべりしながら器を成型する工程に、気を奪わない居心地の良いTOKYOを感じた。

同じく東京・銀座8丁目のヤマハホールで開かれた、森下唯さんの控えめで温かで情熱的な人間性を感じるピアノ演奏会は、技術もさることながら、人生の紆余曲折を表したアルカンとシューベルトという選曲が素晴らしかった。森下さんを熱烈に応援する先輩デザイナーご夫婦が丁寧にしつらえた演奏空間は、表現者と招待客両方へのTOKYOらしいギフトであった。

建築業界では「20世紀型計画的都市から21世紀は工作的都市

へ」という動きが語られている。「工作的」が素敵そうなのは、一部の知識人による東京再生計画ではなく、「江戸っ子気質」を備えた東京人が街に関わる余地を残してくれていそうなところ。点的活動に意味を与え、人と人との信頼関係の上に成り立つモデル、と察するからだ。TOKYOで語られるテーマは、人が生き暮らす上での普遍的なもの、過去から未来に繋がるものであって欲しい。私にとってどの職業よりも身近な存在であるアーティストと一緒に、是非とも探索の旅に出かけたい。

Profile

石井美加（いしい・みか）

東京生まれ東京育ち。一女の母。大学でフランス文学、修士課程で西洋美術史を専攻後、化粧品会社に就職。京都で販売企画、東京で商品開発、パッケージ・宣伝制作、生活者価値観・トレンド分析を担当。2000年ミラノ・ロンドン・パリでデザインマネジメントを自主研修。2015年、2016年、東京・銀座でサイエンス、アートをデザインで結ぶ試み「LINK OF LIFE」展を企画開催。2017年よりクリエイティブ本部プロデューサー。

大間知 賢哉

Kenya Omachi

ガタンゴトン、荒川を越え「埼玉都民」と「フィクション」を往還する思考の旅。パフォーマーでもある大間知さんの描く幼少期の記憶が瑞々しくて、いい子供時代を過ごしたんだらうなあ、と。物語る人。
(石神夏希)

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

埼玉都民のDNA

幼少期、電車とその沿線の駅名を覚えることが一つの楽しみであった。電話帳のメモを何枚もセロハンテープでつなぎ合わせながら作ったお手製の路線図。記憶の限り、おそらく父が作ってくれたもので、玩具箱に大切にしまっておいて、遊ぶときには忍術伝書のごとく、特別なアイテムを手にしたような高揚感があった。「赤羽→東十条→王子→上中里→田端→西日暮里....」順繰りに口に出しては、ちゃんと覚えているか答え合わせをするのが日課だった。駅名を覚えていくことで、東京を掌握する、といっている言い過ぎかもしれないが、分かったような、知った気になっていたことを覚えている。千葉の船橋、埼玉の北本で育った私は、頭の中に鉄道を思い描くことで、まだ実際には降り立ったことのない、イメージだけの虚構の東京にアクセスしていた。青いプラスチック製のレールを部屋に広げて、電池駆動の鉄道玩具を走らせながら、京浜東北線・山手線を再現していたのである。

先日、食卓で母と父にインタビューをしてみた。母は福島県喜多方市出身。高校を卒業し、就職のタイミングで上京。練馬の1LDKに叔母と2人暮らしを始めた。田舎の生活から、賑わいのある東京を求めたようだ。80年代。今よりももっと東京には活気があったような気がする、友人と六本木のディスコに出掛けたことを懐かしんでいた。

父方の祖母の家が富山にあるから、すっかり父は富山の人だと思い込んでいた。ところが聞いてみると、幼稚園、小学校は目黒に住んでいて、中学になって富山に引っ越した時には、周りから東京から来た子だと言われていたのだという。大学進学を機に目黒へ下宿。玄関や水場が共同の初期アパートメントが増えだした時期に久我山へ移り、就職で駒込暮らしになる。

この日の夜は、父に勧められた甲斐バンドの「東京の一夜」を聴いた。昭和～平成、いつでも、東京を歌う人たちがいる。東京に何を見て、どんな想いを歌に託しているのだろうか。別の機会に、探ってみたい。

小学生の頃の休日。家族揃っての買い物先は池袋。まだ湘南・新宿ラインが開通する前のJR高崎線は通常上野行なのだが、1時間に1本くらいの頻度で池袋着の電車が運行していた。「終点、池

袋。池袋。」のアナウンスが車内に流れ、車窓から眺め見るあの瞬間、東京まで連れて来てもらったんだなあという特別な想いだった。

どこから、が東京なのか。

東京に通うようになって、10年ほどになる。都内へ向かう時、JR高崎線の車窓から見える浦和駅～赤羽駅間にある荒川橋梁を越えると、東京に入ったな、と思う。外を眺めていない時でさえ、橋梁上の線路を走っていく電車の揺れが、それに気付かせることもある。この橋の下を流れる荒川は、埼玉県川口市と東京都北区を隔てているから、たしかにここが埼玉と東京の境目なんだと言えるが、その地理的事実以上に、私は「橋を渡って、行く。橋を渡って、帰る」ということに、東京と埼玉の往来を身体的に、感覚的に自覚している。暮らしのあるこちら側と、職場・遊び場があるあちら側。テーマパークのアトラクションの始まりを今か今かと待ちわびるような、または厳かな儀礼に臨むような。その時々で、感じ方は様々だけれど、いずれにしてもこの移動自体が、今の私の日常と非日常のスイッチになっていて、この一連が習慣化しているためか、一か所に定住し、腰を据えているような自分が想像できない。いわゆる職住分離のライフスタイルが血肉となっている。行きて帰りが循環が、健全なリズムを刻んでいる。

新宿区に一人暮らしをしていた時期もある。その時はまるで毎日がハレの世界に居たような気分で、常にスイッチONの、交感神経が優位な状態が続いていた。当時はこれはこれで刺激的で、とても充実していた2年間だったが、もし3年以上続いていたとしたら、バランスを崩していたのかもしれない。

先日の、東京に抱いている印象についてのディスカッションで東京に居るのは耐え難い、不調をきたしてしまうといった話があった。元凶が何なのかは特定しきれないのだが、東京には我々を疲弊させてしまう病的な徴があるようだ。こないだ、一昨年から定期的に共に活動が続けてきた一人の男が、東京を去る、と私に言った。彼もどうやら身体の調子が優れないとのこと。そして、別に東京でなくてもいいかもね、とも言った。かねてから旅に関心があった彼の口から、東京を離れるという話が出たのは特段に驚くことではなかった。しかし、その時、むしろ私は、自分自身がまだ東京に関わっていたい、何か東京に対してポジティブなものを抱えていることを意識した。それは、一体何なのか。そこに必然性はあるのか。その答えが、ネガティブな発見に行き着く可能性だってあるのだが。

栄町は今後どう生まれる？

石牟礼道子の『樺の海の記』には昭和初期の水俣のまちや営みが描かれているのだが、著者が暮らしていた家があった栄通りのへりには、たくさんの店が並んでいた。酒屋、豆腐屋、石屋、女郎屋、タドン屋、米屋、染屋、髪結いさん。朝には花売りの声がする。箒を掃く音がする。人力車が通る。会社ゆきの人が通る。

「祖父の作りかけた道はいのちをあたえられ、そこを往来するひとたちの暮らしと共に生きはじめていた。」（第3章 往還道より）

栄町（さかえちょう、さかえまち）という名前の地名は、日本全国に数多く存在する。繁栄するように、という願いが込められてつけられたのか、大賑わいのまちをそのように呼ぶようになったのか。灌漑水路工事や鉄道・地下鉄、道路の整備にあわせて人やモノが行き交い、その土地が盛えていくことでまちが形成されていった。今ではかつての勢いを失ってしまったまちもある。

東京は、これからも盛り場たりうるのか。人口減少の日本だが、東京はまだ増加傾向にあるようだ。また今日も東京に誰かがやって来たに違いない。埼玉都民歴10年目の私ですが、「東京でつくる」の案とヒントは、そんな東京歴1年目の誰かさんとの対話の中から生まれるのかもしれない。

第二回 「日本から離れてつくる」

私的“おそれ”の断片集

(1)

水に対する恐怖心。父とまだ一緒にお風呂に入っていた頃、風呂場ですら身体をこわばらせていた。顔に水がかからないようにシャンプーハットをつけてもらって、頭を洗い流してもらっていたが、ちょっとでも目や耳に水が入ることも嫌がった。こんな具合だから、プールや海水浴などは、全く楽しめることはなかった。家族で遊びに行った猪苗代湖の水上ボートも断固として乗ろうとしなかった。仕方がないので、母と祖父だけが足漕ぎの白鳥に乗り込み、岸を離れる。曇りがかった湖の先へぐんぐん進んでいくボートに「戻っておいでー！あんまり行っちゃうと危ないよー！」と叫んだ。寄り添って一緒にいてくれた祖母は「大丈夫、大丈夫」というように平然と笑っていた。

「まんだら遊苑」。それは、立山に伝わる立山曼荼羅の世界を再現・デザインした体感型テーマパークで、幼い私は両親に連れられていった。立山の地獄と見立てた、地獄（罪により墮ち、様々な苦しみを受ける世界、すなわち地獄の世界をイメージしたもの）エリアには赤褐色の針山が立ち並び、積み上げられた岩の隙間から餓鬼たちの声が聞こえてくる。岩に囲まれた安武陀と尼刹

陀の二つの地獄が、血の池をイメージさせる。地に潜む「水泡鬼」の憤怒が、大小の気泡となって不気味にブクブクと噴きあがっている。スチールの板を岸から岸へ渡しただけの橋を渡る。濁った水の中には鬼がいるのだという。この時初めて、ここではない、どこか別の世界があるのかもしれないことを知った。

小学生の頃、私の話をとても面白がって聞いてくれる友達がいた。聞き上手の上に、笑い上戸だった彼の様子に気分をよくした私は、いつからか話をでっち上げるようになった。今で言うところの「盛る」である。有りもしないことをさんざん話した後で「うっそー！（笑）」とオチをつけて、笑いを誘った。

ある日、忘れもしない、レンタルビデオ屋に父親と出かけた車内でのこと。私はいつもの調子で話を始めた。その時、何の話をしていたか、具体的には全く思い出せないのだが、話の結びに「うっそー！（笑）」と言うと、父はすごい剣幕で「嘘なら言うな！！」と私を一喝した。楽しんでもらえると思い込んでいた期待は大きくはずれた。父は、たしかに誠実な性格とはいえ、冗談がわからない人ではない。今から思えば、その時はちょっと気が立っていただけなのかもしれない。おそらくは少し気分を害してしまったのだろう。人間気分によるところが大きいのは、十分承知のことである。とはいえ、あの時の思いもよらぬ、しっぺ返しは私の中に、驚きとともに、作り事がもたらす影響への関心を芽生えさせた。

(2)

おそれは、「未知」の事象に起因する。どういうことなのか理解できない、どのように対処したらよいかわからない状況を怖いと感じる。科学が証明してくれるようになるまでは、台風や地震といった自然現象は神の怒りであると信じられ、流行病も悪魔の仕業だと語られた。

理解の範疇を超えた世界や存在を合理化する手段として、おそれにまつわる事象は言語・記号化、ひいては解釈され、意味づけられ、物語化され、語り継がれてきた。神話や伝承は、何者か（whoが、何のために（why）、何かをする（what）といった、物語の形式を通して、人間にふりかかる不可解な災厄を認識し、克服してきた。予（預）言者の語りにも"おそれ"なるものが見て取れる。

突拍子もない、にわかには信じ難い物語でも、時代や場所によっては真になる。誰かの思い付きの言葉が、現実になっていくことだってある。歴史だって、偉い人にとって都合のいい物語であったりもする。

戦後日本が共有してきた「生活や社会はますます良くなっていくんだ」という明るい未来展望を昭和的な物語と呼んでみるならば、それに比して平成は翳りが見え隠れする、揺らぎのある不安定な物語であった。この明→暗の物語の経過には、経済状況の進退がひとつ大きな要素になっている。バブル景気からの崩壊、就職氷

河期、終身雇用制度への問題提起、リーマンショック、失業・派遣切り。かつては「おいしい生活」と謳われたモノ消費文化の豊かさは勢いを失った。社会を変えようとする若者たちの権力への闘争や、思想・革命運動がうまくいかなかったことを知っている、そんなシラケた世相の中、表面化せずにぐつぐつと煮えていた、鬱屈したものたちが、スピリチュアル・オカルトブーム、ノストラダムスの大予言といった終末論的な思想にどこか共鳴していったのかもしれない。

オウム真理教一連の事件は、とてもショッキングであり日本社会が抱えるトラウマになっている。だが、結局のところ、私はその時代を経験的に知らない。後に語られることは、何もかもが虚実入り混じっている。

演劇をやっていると、フィクションと向き合うことは必然である。たくさんの言葉にふれ、様々な物語と出会う。言葉の力を信じている反面、そのこわさも自覚している。現代の言ったもん勝ち、やったもん勝ちな風潮は本当に危険だ。

“つくる”ことは未来に開かれている、と思いたい。だからこそ、それは作品であれ、日常生活におけることであっても、どんな場面においても大なり小なり、物事を扱ったり、人と関わっていくことになる。その時の姿勢・態度は大いに問われるべきだ。

第三回 「ここで作る／ここではないどこかで作る」

東京で、会いましょう。 つくりましょう。

渋谷ハチ公前で、“Free Hugs”という手作り看板を掲げる6人の若者がいた。20代前半、男が5人、女が1人。JR渋谷駅の改札を目指して歩いていた私は、スクランブル交差点を渡った先で彼らに出くわし、その足を止めた。彼らは、なんだか落ち着かない様子で、そわそわしていた。お互いに見ず知らずの人といきなりハグをするというのは、やはり隠し切れない抵抗、恐怖があるのだ。“Free Hugs”のメッセージはこちらに向けられているものの、彼らはあくまで受け身の姿勢で、ティッシュ配りのアルバイトさんやキャンペーンの人達のように進んであちらからやって来て、ハグをしてくる様子ではなかった。

私は少しその場を離れて、遠巻きに彼らの様子を眺めていた。すると、「Hey!!」と明るいつ外国人がFree Hugsメンバーに歩み寄り、一人ずつ代わる代わるハグをする。一通りのやり取りを終えると、外国人はいなくなった。若者たちにちょっとした満足感のようなものが見える。その後も、スクランブル交差点の信号が赤から青に変わる毎に、道玄坂・センター街・神南方面から駅に向かってやってくる歩行者とハグをしている。5秒にも満たない、ごく短い刹那的なコミュニケーションが繰り返される。そ

こには、何ともいえない虚しさがあった。これはいったいなんなんだ。フリーハグを通じて、何が交わされているのだろうか。

あとになって調べて分かったことだが、この「Free Hugs」それ自体の元を辿れば、一人のアメリカ人が始めた個人的な活動で、きっかけは、亡くなった母親の、生前の他者に対する愛情の深さ、思いやりのある行動にあった。

私がどうも気になったのは、渋谷の若者たちが交わすフリーハグの実態である。その内実は、道行く人に与える、施すといったものでも、豊かなコミュニケーションでもなかった。建前の交換、ノリの虚しさが際立つばかりで、サッカーW杯後のハイタッチ現象やハロウィン現象に通ずるものを感じた。周囲の者たちの反応も「なんかやってるよー」と、私のそばを通り過ぎていく者たちの冷ややかさ。「入口が女の子はないよねー」と、若い男たちに下心を見るまなざしもある。罰ゲームで、チキンレースのごとくハグをしに行く者、それをスマホで録画しながら笑っている者。見世物化したバラエティ的一幕のようであった。

いたたまれない気持ちが募るも、私は彼らの動機が気になった。彼らは何を求めているのだろうか。一人の男に話しかけてみた。「暇だから。みんなちょっと時間がある時にやってる。やりたきゃやるし、やらなくてもいい」である。それから、「知り合いができる」と続ける。

彼らは他者とのつながりを、意識している。“Free Hugs”そのものの本質であるdedication（献身？奉仕？どう訳すべきか）にはあまり関知しないで、このアクティビティをある意味でツールとして、誰かと出会おうとしている。こうして、ここにひとつ、コミュニティなるものが形成される。この例の実のところは、不器用な若者たちの群れに過ぎないかもしれないが。これはあくまで一事象であって、日々どこかでグループが作られ、イベントが立ち上げられ、共鳴したものの同士が集まっては、また離散を繰り返す。SNSによく見られる現象だ。

各個人が何を消費するか、を動機として集まっていることが多いのではないだろうか。欲望の交換だ。だから、条件が合わなければ簡単にさようならできるし、つまり貨幣と同じで代替可能だということだ、人との関係も。

「東京でつくる」について、結論は急がないまでも、3回のスタディを終えた現時点で触れておこう。

人と人とが会う、ことに関心がある私にとっての“つくる”ということは、“出会いを組織する”、ことであったり、“他者との対話の場を用意する”といった類のことだと言えそう。ひいては、「コミュニティをつくる」ことが一つの課題なのかもしれない。

コミュニティと場所との関係は重要である。コミュニティが形成される上で、地域固有の歴史風土、そこに住む人たち、集まる人

たちの暮らしが密接であることは必要条件のように思える。城崎国際アートセンターはまさにその好例で、住む / 暮らす / つくるがそこにあって、文化が育まれている。断絶のない時間と関係性からの創作が可能な豊かな環境である。

その一方で、東京はどうだろう。東京の営みには十分なゆとりがない。情報過多で処理作業の往来に、てんやわんや。キャパシティ / 空き容量がない。そんな状態だから無駄は省きたい。プロセスよりも結果志向。効率の良し悪しが判断基準。このようなシステムは、仕事に限ったものではなく、プライベートにまでも影響していると見ている。一時的・契約的である場合が多い。この都市はヒューマニティーを失い、ますます自動機械的で均質な時空間へと変容し、われわれの振る舞いを強張らせている。

「東京にいらなくても、東京でつくるを考えられるのでは？」というヒントがあった。スタディのイントロダクションにあった「東京ってフィクションなのかもしれない」を積極的に肯定し、新たなコミュニティのかたちが見出せるかもしれない。コミュニティのないところに文化は生まれない？という私の中によぎった疑問に回答できるかもしれない。イシワタマリさんの山山アート。福知山エリアにアートセンターを設ける、地理的区分を超えた、兵庫・京都を股にかけて。無いところにbuildすること。地名ではなくて、“山”、普通名詞をアートセンターの名前に冠したところ。フィクショナルな枠組みを構想して、新しいコミュニティをつくるという上で、とても参考になりそうだ。住む、滞在する、とは異なったつくり方。通う（行き来する）、遠景から眺めてみる…。さて、埼玉都民の私は東京に何を持ち込み、どんなフィクションを仕掛けることができるだろうか。

現状とはちょっとズレたところで、批評が文脈をつくってしまうことがある、みたいな話がスタディの中であった。行政が東京を国際都市として国内外にアピールするために、〇〇文化と先立って銘打つといったブランディング志向型な言説で文化を規定することとは異なったベクトルで、みんなが持ち寄ったもので、つくりたい。協同して立ち上げたい。

脈絡もなく突飛な案だが、一人ひとりがつっておきの東京にまつわるなぞなどを用意してきて、披露し合う、だとか。東京に長く住んでいる人のあなたしか知らない秘密が聞けるかもしれない。東京への憧れが込められた若者の瑞々しい未来を共有できるかもしれない。異国からの訪ね人がTOKYOに新しい像を結んでくれるかもしれない。お偉いさんの語る東京よりも、観光用にデザインされ、☆マークで価値付けられた東京よりも、個人の頭の中でこしらえられた東京に、わくわくしながら飛び込んでみたい。

第四回 「東京にふれる」

東京に触れようと、手を伸ばして

東京に、どのようにアプローチすることができるだろうか。

2017年2月に出演者として参加した作品、ttu『会議体』を振り返ってみる。というのも、これを機に、私は東京について踏み込んで考えるようになったからであるし、『東京でつくる』を実際に経験した当時の事を、経過した今になって参照してみたいと思った。

当作品は、劇作家・岸井大輔さん執筆の戯曲『会議体』（2009年～2012年 東京アートポイント計画×一般社団法人PLAYWORKSによる『東京の条件』というプロジェクトから生まれたテキスト。概要はそちらを参照いただきたい）を上演する企画であった。

「東京に人はいっぱいいるけど、コミュニティないじゃん、とか言われる。」という一文から始まるこの戯曲には、東京のいたるところで、世代も職種も異なる人たちが、日々会っては話をし、あらゆる話が同時平行で進行していて、そんな会議体の集合が東京を動かしていると、書かれている。

俯瞰で描かれているこの東京を、演出の山田真実さんは、上演場所であった横浜のアートギャラリー（かつては住居であった）にインストールしようと試みた。

事前に山田さんは、都内の喫茶店やカフェに行き、周囲で交わされる様々な会話をメモに書き留めて記録していた。そのように採集したいくつもの会議を再現することとなった。

俳優は3人。登場人物は、会議の数だけ出てくるので、複数の人物を引き受けるかたちとなり、目指したところは無数の人たちの会話から“東京”を立ち上げること。

私は、実際に記録された会話自体を音声で聞いていないし、彼らの姿も見えていない。ただ書き起こされた文字情報（性別・年齢、そして演出からの多少の補足もあった）から、そのやり取りを想像して演じるよりほかなかった。だから、演技する側の主体性は曖昧な状態だった。つまり、上演中の俳優たちは誰なのか、ということである。われわれは当時「演技体」と呼んでいたが、どういう認識で、どのように演じるのか、演出と俳優との間で何度も議論したことを覚えている。最終的に俳優たちは、誰でもあって、誰でもなかった。それは、虚構の東京をつくりだすのに、むしろ相応しかったといえる。匿名の、多数の会議たちをフラットに提示するためには、俳優は、いわば正体不明な人たちの器として機能することを求められたのである。

喫茶店で繰り広げられる会話を、ボイスレコーダーに録ったり、

動画撮影し、展示することもできたが、それではあまりに生っぽい、つまり彼らの固有性が強く出てしまうので、一度俳優たちの身体を介在させたと山田さんは話していたと記憶している。

この上演を観て頂いた洪革まろんさんの批評を改めて見返してみた。その中で、ttu『会議体』は、正体不明な人々から成る都市のリアリティに光をあてたと指摘していた。「散りばめられたリアリティの寄せ集めから、星々のあいだに星座が発見されるように」という文章を読んで、久保田テツさんの手法と通ずるような何かを感じた。

東京をキャプチャーする

ノコノコスコープで面白いと思ったのは、上映の際に音声をOFFにすることだ。ほんの数秒の間ではなく、1分間まるまる無音状態。その理由について、頂戴したハンドブックの前半説明部には、撮影者のお話をみんなが聞えるようにするため、とあった。無音を撮影条件にしたことで、モニターに照射される沈黙した東京は、普段外を歩いている時とは、全く違う光景を見せた。正確に言うと、対象が変わったのではなく、受け手に大きな変化があったということ。あまりにノイズに覆われてしまうと、繊細なものは、かき消されてしまって、およそキャッチできなくなることがある。インパクトのあるものに反射的に意識が引っ張られてしまうのだ。つまり、一種の感覚チャンネルのレベルを落とすこと、ここでは聴覚レベルを落として、視覚に集中できるようにすることで、見えていなかったもの（見落としてしまっていたもの）が見えてきた。

特に鑑賞・振り返りの場が、本当に豊かだなあと驚いた。まるでお茶の間で、ホームビデオを見るかのような居心地のよい感覚。誰でもできる簡単な行為で、自分だけの一つの作品が生まれる。それぞれが持ち寄って、こだわりやエピソードを話す。みんなてんでばらばらなのを、面白がれる。たくさん発見があり、中には共感も生まれる。キーになっているのは、技術を問わない、シンプルな条件・ルール設定にある。心理的ハードルを取っ払う、集団で“つくる”の場を創造するヒントを得ることができた。

映像は、東京にアプローチするための格好のツールであると思った。

1つには、視覚的フレームを与えることで、互いに想定する東京を了解できること。「どこからどこまでが東京なのか」という境界の認識があまりに多様だからこそ、範囲（スコープ）を限定することで、明確に抽出できる。

2つには、絶え間なく変化を続ける東京の様子・風景を記録しておくことができるからである。東京は、他国の都市と比較しても稀にみる速度でのスクラップ&ビルド、消失と再生を繰り返している都市。ヨーロッパのように遺していく文化とは違っている。かたちに残らないのが宿命であるならば、映像の中に風景も人の営みも刻印しておくのがいいはずだ。

グッドバイ / 東京からのお便り

「さよなら東京」。思い思いの場所で撮影してきた風景群は、まるで宛先のない書簡集のようだった。駅へと向かって歩く人たちは、東京を後にするようであり、ガラス張りのビルが反射して見せる景色は、取り残されるうつろな東京を思わせた。

すべての映像を観終わって気付いた。私は、東京を偲ぶ（慕ぶ）ように眺めている。東京と何かしらの結びつきをもつ（もった）人たちのことを思っている。覚束ない足取りで通りを行ったり来たりしている若者がいた。外国人労働者が楽しそうに工事現場で働いていた。夕陽の洗濯物が風に揺れていた。秋葉原駅前では花・飲み物が供えられていた。

しばらく疎遠になっていた場所に久しぶりに訪れると、以前の姿が思い出せないほどに景色が変わってしまっていて、それはもうよくあることで、またか、という具合。もうここは自分の知っているところではないのだなあ。東京、ほんとにつれないやつだなあ。

寺山修司は亡くなる4ヶ月前に谷川俊太郎と映像書簡を、免疫学の権威である多田富雄は闘病しながら、水俣にいる石牟礼道子と往復書簡を交わしている。

東京の地から、いつか、どこかへ離れていってしまった誰かと、ダイアログをしたい。

その記録を残すのは、「言葉」なのか「映像」なのか。時間軸を超えて、未来の東京観測者が、独特の手付きでこれらを布置することを思う。

第五回 「東京で生きる」(阿部健一さんのご自宅にて)

東京の見方

最後のエッセイは、2018年11月12日に出席したAPAFアートキャンプ最終プレゼンテーションを振り返るところから始めてみる。

1年先のAPAFで企画実現を想定したプログラムで、フィールドワーク・リサーチ・ディスカッションを経て、わずか1週間という短い期間で構想を練り上げるというもの。この熱量には大変刺激を受けた。参加者同士のコミュニケーションも密度が高く、クリエイティブな時間を過ごされたであろうことが窺い知れた。

アートキャンプ参加者一人一人のアイデアは、その内容においても、とてもユニークだった。その詳細をここで述べることはしないが、瞠目したのは、「つくる」以前のフェーズにおける彼らの姿勢や態度である。ここでの作業はまさしく各々が「問いを立てる」ということだった。私は、彼らの問いの立て方に、3つの「視」を見出した。

1つめは「視点」。「お弁当難民になりました。お昼にみんなでお弁当広げて食べようとしたら、その場所からすぐその距離に、そんなスペースは市内には全然なくて！」と、隙間・余白のない過剰な都市デザインに違和感を覚えたと話す白神ももこさん。

2つめは「視野」。「最も都市的な要素を持ち合わせる、その最小単位が電車なのではないか」と敷地理さんは、東京のスコープを絞る。

3つめは「視座」。「都市：クアラルンプールと都市：東京のインフラやモビリティ」について、自国の社会的背景を真摯に受け止め、切実な問題意識を持って、比較検討していたシャフィック・シャジムさん。

よく「見る」ことができるのは、対象との距離の取り方を心得ているということだと思う。

再・埼玉都民のDNA

このスタディは「東京と私との距離」を測るところから始まった。子供時代、埼玉で生活していた私にとっての東京は、情報を通してなんとなく知ってはいたものの、実際にはほとんど足を踏み入れたことのない場所だった。

高校を卒業し、大学進学、就職という自分の未来像の中で、いつかは都内に出て行くことを、なにも疑うことなくイメージしていたから、東京は少年時代から心理的に射程圏内にあった。交通の便からいっても、東京は私にとって目と鼻の先という感じだった。それを自覚したタイミングは定かではないが、ゆるやかに私と東京との間を結ぶ線は既に薄く引かれていて、人生の節目ごとに私はその線をたしかになぞるようにして辿っていった。

通勤・通学・遊び、なんにせよ次第に、自由に東京へアクセスできるようになっていく中で、私の東京への愛着は増していった。

その一方で、ふとした疑問が頭をもたげるようになった。「私の足元から東京へと延びる線を辿ってやってきたその先端には、なにがあったか?」。もっと言うところ「私は、東京に何を求めている（いた）のか」。

それがなにかと具体的に明言できないが、ただそのなにか＝somethingを求めているのは確か。人、モノ、出来事。過去、未来、現在。いつだって、東京にまつわるsomethingに引き寄せられてしまう。嗚呼、東京にリードでつながれた従順な自分。目一杯その恩恵を受けて不都合なく生きてきたのだ、この埼玉都民は。

東京への憧れを持ってやって来た地方出身者の熱量には、及ばない。東京生まれ・東京育ちの人が抱えるコンプレックスだったり、それに対する反抗心といった切実な感じもない。

近いんだが、遠いんだか。距離感が掴めなくなっている。10年

近く東京に通っているのに。。。奇妙だ。近景・遠景を巧みに使い分けられた書き割りパネルたちが設えられた舞台上に立たされている役者の気分だ。本当に東京は、虚構の世界に思えてくる。東京をルーツに持つ人にとっては、東京はリアルで、実生活の場所だということ。そこに、他所からやってきた者がなにかを打ち立てようとするのは、そうか、土足でずかずかと上がり込んでいるようなものなのか。忍びない思いがしてくる。はたまた、賑やかにやって来ては、好き勝手やって帰っていく、地に足が着いていない浮ついたパレードの一員と見られてしまうのかと。

私 — 東京がほどこけて。

「われわれは、どのようにして、まちや都市に愛着を持つのだろうか」。2016年さいたまトリエンナーレ演劇作品『Saitama Frontage』の最初の稽古で、演出家のユン・ハンソルさんは、クリエイションメンバーにこんな問いを投げかけた。

埼玉のダサさを語ったり、オリジナルな地図を作ったり、沼にまつわる竜の民話やさいたま市の吸収合併について、宿場町としての歴史などを調べたり、大宮のかしら屋さんに食事に行ったり、そんな時間の中で、稽古序盤で見取れた、埼玉に所縁のないクリエイションメンバーの戸惑いが、どんどんなくなっていくのを興味深く見ていた。それもやはり私は、出身地のアドバンテージというか、みんなよりも埼玉に元から親しんでいるし、ちょっと知っているという立場にあってこそ、外の人たちがまちに愛着を持っていくところを敏感に拾っていたのだと思う。

都市に対する愛着が生まれ、それが育まれるのは、実に個人的で些細なことであったりするし、何かの因果か出会ってしまった、関わりを持ってしまった時点でそれはもう始まっている。そこからの距離を縮めるも離れるも、あとはそれぞれの感情に寄るところが大きい。関わることに必然性を過度に求めることはないと思う。

私にとっての本スタディは、東京と改めて関係を結んでいくプロセスだった。いや、まだ結び直すための準備段階なのかもしれない。きつと、つくる、にはまだ早い。APAFディレクター多田淳之介さんの「問い続けてほしい」というイベントのクロージングメッセージを反芻している。東京を取り巻く現象や言説はたくさんあって、もううんざりだって人もいると思うが、私はいまだに尽きるばかりか、興味が募っている。目まぐるしく変化し続ける、多層な都市の姿を問い続けていく中で、どうも見過ごせないことが私事として立ち現れてきた時には、「東京でつくる」その手が動いていることだろう。

Profile

大間知 賢哉（おおまち・けんや）

1990年（平成2年）生まれ。埼玉県出身、俳優。埼玉と東京を行き来する埼玉都民歴10年。人と人が出会い、他者の物語が交差する場、集団（チーム・コミュニティ・コレクティブ）が共有する時間とそこで蓄積されていく経験的知に関心がある。2018年には座・高円寺企画『みんなのリトル高円寺 2018』プログラムデザインを担当。

木村 佳菜子

Kanako Kimura

最年少ながら大人びていた木村さん。自分の生い立ちを深く振り返り、スタディ中に都内でシェアハウス暮らしを始めるなど、体当たりな実践と思考の行き来を重ねていった軌跡。勇敢です。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

別れるにはまだ早い、東京

東京で暮らし始めて18年目になる。

その間、自分が東京で暮らしていることやこれからそうであろうことを、真剣に問うたことはなかった。昨年までは。

昨年私は、「働く」をめぐる病のようなものを機に、世界と自分の「当たり前」がバラバラになる、ということを経験した。その最中では、身体が頭の言うことを聞かなくなったり普通の人ができることができなくなったりした。例えば、駅の人混みや満員電車で身体がNOと言うせいで、出先から帰れなくなることがあった。街にあふれる広告や本屋のビジネス書コーナー、ワイドショーを見ていて、くらくらすることもあった。どこに行っても落ち着かなくて、たびたび街中で立ち尽くした。

その流れで、東京で生きていくことも見直さなければならなかったのだが、不思議と東京から出ていく気にならなかった。（それどころか旅行ですら減多に食指が動かない。）それに、もう少し粘って滞在し、東京に何か働きかけたいような気がする。どうしたものか。そんな折に東京プロジェクトスタディのことを知り、申し込んだのだった。

スタディ初回を終えて少し分かったことは、どうやら私は、物理的な場所としての東京とは別に、概念やコードのような「東京」の存在を感じている、ということだ。また、その「東京」のほんの一部だけを見てファイティングポーズを取っていたことも自覚した。東京が戦う場所だなんて一体どこで覚えてしまったのか。私はこれまで、東京というものをちゃんと見てこなかったのかもしれない。

スタディ内のインタビューで「東京の中で好きな場所は？」と尋ねられ、「シモキタとか高円寺とか〇〇銀座のようなところが好き」と答えた。けれど、あとから思った。嘘をついてしまった。いや、確かに「好き」ではあるのだ。しかしそれを言ったら、夜の虎ノ門もハーモニカ横丁も、「好き」だ。いかにも、混沌とした商店街だとか未来のディストピア、風情ある飲み屋街っぽいじゃないか、と言いたくなる。私は街を、全面ではないにしても、自己表現のためのブランドや絵的に鑑賞する対象として見ている側面はなかったか？

それと、私がそれらの街で陥っていたことがもう一つ。それは、「お客様」以上の誰かになれていないということだ。触れるのも触れられるのも怖くて、その場にいる正当な理由がほしくて、「お客様」になる。「常連さん」にもなったことがない。そのうえ「お客様」の枠に収まってもなお、怖気づく始末だ。

そういうのではない、好きな場所とは何なのだろう。そしてそれは東京のどこだろう。



ディスカッションでは、「どこまでが東京なのか」という問いが立ち上がった。「東京都」という形は確かにあるものの、それと東京とは微妙に違うという感覚は、不思議と共有されているのだった。東京にはあらゆるものが集まり、東京からあらゆるものが広がっていく。その「あらゆるもの」をより細かく見ていくと、東京が層の重なりに見えてきた。

人々が働きに向かう場所としての東京は、実際は23区の一部に集中している。遊びに行き消費する場所としての東京は、それとは別のエリアになる（ディズニーランドは千葉県にあって「東京ディズニーランド」だ）。文化に触れられる場所をたどってみれば、また別のエリアに。エリアは人の属性や時代によっても変わってくるだろう。こうした東京たちが幾層にも重なって、東京という大きな系、あるいは生き物になっているのかもしれない。



東京について考えることがこんなに面白いとは思わなかった。私と東京の関係はまだまだここからという段階だったのに、もう東京を出るか出ないか考えていたとは少々飛躍していた。よく考えてみれば、東京のコードに合わせられないからといって、なぜ私が出ていかなくてはならないのだろう？私だって東京の一員だ。自分と東京とで折り合いをつけて、東京を少々描きなおすのだって大いに「あり」なはずだ。

東京と、出会い直したい。自分と東京の一对一だけでは、いつかしんどくなってしまうかもしれないけれど、皆でぐっと踏み込めば、重くなりすぎず、それでいて豊かな過程になるだろう。だから待っていてほしい、東京に。これから解いていくから。別れるにはまだ早いのだ。

第二回 「日本から離れてつくる」

世界を記録する、 境界人として「つくる」

「頭の中の言語」。これをつからないと思ったのはたぶん、初めてではない。

私は、頭の中で言語を使っている。家から最寄り駅まで歩いている時も、湯に浸かっている時も、布団の中で目を瞑っている時も、私の言語は休まない。けれど、言語「で」考えていると思ったことがなかった。

私にとって頭の中の言語は、Enterキーのようなものだ。とりあえず文字を入力してみて確定させる、あの感覚に似ている。何を確定させているのかと言うと、絵でもイメージでもない。頭の中にある「気配」だ。絶対にそうだという確信はなく、気のせいかもしれないと思う。けれど私は「気配」の時点ですでに考えている気がしてならない。「気配」の中から思考が吸い出される過程と、言語化の動きとを、とても近くに感じている。

その際に、吸い出されやすいノリというのがある。頭の中で文末までちゃんと聞こえるのは文語の「だ・である」調だが、文字入力や発言といった形で「気配」から直接出していく時は違うノリが良いらしい。私のSNSや日記を振り返って見れば、語りかけるような「です・ます」調や煽りような口語の疑問文、エセ関西弁やべらんめえ口調まで、きつとめちやくちゃだろう。「気配」から吸い出しているのは同じなのに、「頭の中の言語」と実際に文字や声にするのでは違う言葉が出てくるのだから不思議だ。

「頭の中の言語」でもう一つ、思い出したことがある。

私は小学生のころ、国語の記述問題が苦手だった。苦手な理由として、「変なことを答えてしまったらどうしよう、塾の先生に答案を見られたくない」というのがあった。けれど、それだけではない。当時の記憶はもうあやふやなのだが、そのころ起きていたことの一部は、「頭の中に漂うものの輪郭が浮かび上がらない」という現象だった気がしている。

そういう状態は、多少の進歩はあれど二十歳ごろまで続いたと思う。何もかもそうだったわけではないが、自分が何を感じているのかが時々分からなかった。

私は、幼少期を外国で過ごした。家では日本語を話していたが、教育面では途中から現地の幼稚園・学校に行くようになった。つまり、当時の私は2つの言語を同程度使っていた。そのことがかつての自分の鈍さにどう関係するのか、科学的な根拠はよく知らない。ずっと日本にいても同じだったかもしれない

し、そもそも属してきた輪の中で相対的に鈍っただけで、実は人並みだったのかもしれない。「鈍い」という表現も本当は良くなくて、ずっと前の日本では「自分」を言語化しなくても人々はずうまくやっていたのかもしれない。

それでも、大学受験生の時に塾の先生から聞いた、「幼少期から複数言語にさらされると、脳内言語が安定せず、思考できない子になる」という話を、私は今も持て余している。



私はこの世に生まれ出たのは、オウム真理教事件とちょうど入れ違いだった。

けれど、私が実際にオウムの話を耳にするようになったのはずいぶん後のことだった。そのころには一連の事件と現在とをつなぐ線は、ほとんど見えなくなっていた。

小田嶋隆さんのコラムを読んだ。まず初めに思ったのは、私たちはいつだって今この時の生き証人であるということだった。私たちがうかうかしているあいだに、今この時は流れ去っていく。そして私たちはやがて、この時を忘れる。後から記憶を書き換えたりもする。なんとなく、最近その速度が増しているように思う。

「今のこの東京の空気も、形にして残しておかなければ忘れるんだろうなあ…」

そんな言葉が頭に浮かび、上空に消えていった。どこか他人事のような響きになってしまうのは、なぜだろうか。

以前、詩業家の上田假奈代さんが「自分の考えなんてしょうもないな」と思い「世界を言葉で記録したいという欲望」に駆られた、と言っているのを読んだことがある。出来たてのアイデンティティと強い自己表現欲求を抱えた私にとって、その感覚は未知のものだった。

今でもよくは分かっていないが、彼女が言ったのとは別の入口から、「世界を記録したい」「他の人の記録を見たい」という意欲がわきつつあるし、そういう表現・創作のあり方に価値を見出し始めている。

考えてみると、このスタディも東京を記録している面がある。皆で書いているエッセイも、世界を記録してつくられたものと言えなくもない。そこまで考えて、思いがけず「つくる」の壁にぶつかった。今やっているこれは「つくる」に入るのだろうか？

創作という意味での「つくる」に当たる行為と、そうでない行為とがある。

一応、ありとあらゆる行為を広義の「つくる」と呼ぶことはできて、普通に食べることも心身と日常を「つくっている」と言えるが、たぶんそういうことではない。そうまで言い出してしまったらヘリクツ臭がする。じゃあ、創作の「つくる」って何だ。…「つくる」をうっかり問うたら、前提がほどけてしまった。

同時に、これか、と思った。この「ほどけてしまう」現象が怖く

て、大多数の人は本能レベルで問うことを避けているのだ。ほどけてしまったらまた編みしかないのだけれど、時間はかかるわ終わりは見えないわ、それがつらくてやめようにも元には戻れないわで、大変である。確かに、それを安心して行えない状況にあるのなら避けるのも理解"は"できる。それでも共感"は"できないのは、うっかり問ってしまう星の下に生まれた身として、避けようと思っても避けられない人もいるんだよねあ、と言いたくなるからだ。

(…と、「残さないと忘れる」という話からずいぶん離れてしまったが、「残す」と「つくる」についてはもっと考えられそうであるし字数の問題もあるため、続きはまたいつか。)



「東京でつくる」ことには往々にして、「誰が見る（・聞く・使う…）のか」が絡む。もちろん、誰かに見てもらうためだけにつくるわけではないのだが、それについては「誰が見るのか」の「誰」に自分も含まれると考えれば、ひとまず良いのかなと思う。

あまりに文脈・コード・思考回路を共有していないものに出会った時、正直ついていけない自分がある。それは、芸術作品だったり、マニアックな学術研究だったり、ビジネスオタクの会話だったりする。ただ、気持ち的についていけないからといってすぐさま不快になるわけではない。というか、そう思わないようにしている。分からないものをすぐさま醜いと判断することは、私が入にされて酷く傷ついたことだからである。だから、「分からない」を快不快に転化させず保留にすることまでは、一応できないこともない。けれど、そこから一步進んで文脈を把握し「分かつろう」としても、うまくいかないことがある。「これ以上いったら『元の世界の人々』と繋がれなくなる」と、勝手にプレーキがかかるのだ。そしてそのあと、湧いてしまう「さすがに内にこもりすぎでしょう」という考えを、口を曲げて収めるのである。

「分かる人には分かる」表現が必要なことは理解しているし、私が日頃していることにもそういう部分がある（例えば私の、行動至上主義や心理主義に対する反抗心が、万民に通じるか怪しいものだ）。また、「分かる人には分かる」ものであることで集まる人が淘汰され、結果的にシェルターとして機能することもある。私自身、「分かる人には分かる」ものの恩恵として安心を得た経験は数知れない。

ただ、その一方で限界も感じている。特に大きな物語のない現代においては、「分かる人には分かる」式だけだと頭打ちになることが結構あるんじゃないかと思う。私は、この世界で「普通に」生活している「みんな」に、自分のしていることや言葉が通じなくなること、「違う世界の人」と思われてしまうことが怖い。これは、私がスタディ応募時に挙げた東京にこだわる理由の一つ、「東京を出てしまったら私の考えが

ことが『みんな』にとって『感慨も痛みも伴わない他人事』になってしまうようで怖い」、にもよく似ている。この「みんな」が誰を指しているのか自分でもよく分からない。けれどこのあたりに、私の「東京で何かを『つくる』としたら」のヒントが眠っているのは間違いない。

第三回 「ここでつくる／ここではないどこかでつくる」

状況整理と稽古日誌

スタディの半ばが差し迫るこのタイミングで、「スタディと私の付き合い方」を確かめておきたいと思った。

今、私はどう付き合っているだろうか。まず、定例ディスカッション会に参加する。見聞きしたことをメモしつつ、思いつきをノートの端っこに書く。全体での議論の時は、あまり発言していない気がする。多分それは、感じた何かを自覚するまで、あるいは思いつきに納得感が伴うまでに若干のタイムラグがあるのと、人の発言を聞いて咀嚼したり「場」を捉えようと試みたりするうちに時間が経つとがあるからだと思う。

じゃあ、その場では出なかった感情や考えはどこへ行くのかというと、エッセイである。（正確にはエッセイ用のメモ。エッセイを書くうちに話題の多くがカットになり、そのまま放置されている。）今書いているこれもそうだ。けれど、自分のことながらそれについていいのかなとも思う。その場で投げなかった問いや感覚をエッセイに書いたとしても、次回以降どうなるわけでもない。ふとした時の会話に登場することはあるが、スタディ全体への貢献にはあまりなっていない気がする。

突然「貢献」と書いたが、私の中に「貢献したい気持ち」があったということを今回発見した。その割には中途半端なことしかできていないのだけれど。

何に貢献するかというと、たぶん単発の場ではなく、時間的に連続なもの、アソシエーションかコミュニティだ。実際そういう趣旨の場なのかはさておき、私はどこかでそう思っていたということだ。

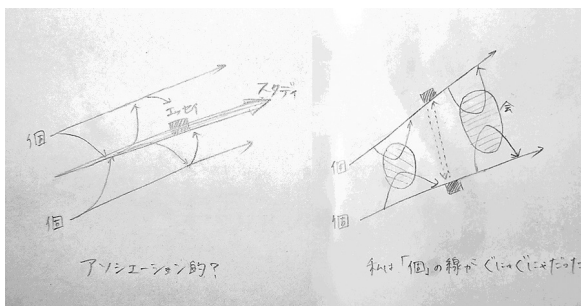
それはエッセイの書き方にも出ている。もちろん自分のため、思考の変遷を記録するために書いているし、書くたびに新たに考えてはいるけれど、それにしては説明的だし「伝えたさ」がわりと前面に出てきてしまっている。「ことばにする」だからこれで良いのかとも思いつつ、

- ・どこに向けて何のために書いているの？
- ・自分の中でちゃんと積みあがっているの？
- ・自分のつくりたいものについて掘り下げないの？

…というのは自分でもツッコミどころである。もしかしてこれが、

「体幹がしっかりしていない」というやつなのだろうか。

なぜアソシエーションやコミュニティのように思っていたのか、



自分でも思い当たることがある。こう見えて(?)仲間欲しさが結構強いのだ。

というのも、私はまだ何もやっていない。実際何一つやっていないかと言えばそんなことはないはずなのだが、「まだやっていない」という自己認識・コンプレックスに付きまとわれている。思想(being)はあるのに何かを仕掛け(do)られない、人を巻き込めない、という自己否定感も、一番ひどい時と比べれば軽くなったが、ある。

この臆病な印象とは裏腹に、大胆に即決した事柄も複数あるが、どれも自分とせいぜい家族にしか影響のないことだったように思う。(それを、他者への尊重姿勢、責任を取れる範囲のこととしかしない誠実さ、とポジティブに言うことも一応はできる。)

こうした背景から、「仲間がいればあの時やこの時みたいに色々実行できるはず」という願望以上信念未満の考えが出てきたわけだ。どれほど筋が通った話なのか怪しいが、とにかく自分の中ではそういう認知になっている。

もしこの考えを「責任を環境に転嫁することで自分の意気地のなさを免責しようとしている」と言われたら否定しきれない。けれど、「つべこべ言っていないでさっさとやってみろ」と言われるのはどうしても嫌だ。

それはさておき、この「仲間欲しさ」は私が何かつくる場面で埋める、あるいは乗り越えるべきものであって、スタディはそれとは別種の集い・仲間なのだと思う。ということを自分の中で整理できた。

もう少し、自分の「つくる」を中心に据えていよう。そして具体的なこと、実際的なことにも触れていこう。

とはいえ、まだ気になること、自分の中でぐらつくことはある。例えば、問題意識や方向性、キーワードなど、何がどの程度スタディ内で共有される/されないのか、だ。

今回、家族やその過去のことには話が及んだ時、正直私は「核心に迫った」ようには感じなかった。(そもそも私が、最初の石神さんのエッセイの時点でスタディについて腑に落ちていた、というのもある。また、単に私が今回の話題を受け取るアンテナと感じる回路を持っていなかったかもしれない。)

たしかに、人の言動の根っこに家族があるということは少なくないし、自分にだって色々あると思う。けれど、そっちの東京なの?というか、このスタディに関しては「そういうことではない」のでは…?と思ってしまった。「そうでない(=根っこは家族のことじゃない)」という意味でなく。うまく説明できないけれど。

私にも家族に関することでツボみたいな点、「これを話すのは結構な自己開示だぞ」という事柄はある。それはきょうだいのことなのだが、きょうだいのことと「東京でつくる」が関係しているかと言われると、関係なくはないものの、別の線上にあると感じる。

試しに、きょうだいのことが場所性をはらんでいるとして考えてみたのだが、これについてはむしろ東京の恩恵を私は受けているのではないかと思った。スルースキルが高く、関わるかは別として多種多様な人がいることには慣れており、迷信めいた古い差別意識を大人が大っぴらにする場面もあまりない。私の生きてきた環境がたまたまそうだったかもしれないが、東京のそういうところに実は守られていたんじゃないかと気がついた。

いずれにせよ、家族のことで東京をどうこうとは今はあまり考えていない。もっと関心を持って掘っていけば「東京でつくる」に関する何かが出てくる可能性もあるが、私が当初このスタディで取り組もうと思い今回まで考えてきた「東京でつくる」とは別のトピックが、新たに立つ形になると思う。

私の場合はそのような感じだが、このタイミングで家族をはじめとするパーソナルな事柄を掘り下げたほうがよい人もいるかもしれない。「『東京でつくること』」を入口に、参加者それぞれが抱えている課題や関心を軸に徹底的に対話する場であることだし。ただ、パーソナルで心理的なことを起点に設定し、それを全体として行ってしまうと、「東京」と「つくる」の色んなことが個人事に回収されるというか、全くの「それぞれ論」になるというか、そんなことをちょっと危ぶんでしまう。

思考の経由点や潜った先の点でパーソナルなことに遭遇するのはこれまでもあったことだけれど、それを起点・入口にしてみたらどうなるのか。想像がつかないので逆に一回やってみたい(労力が要りそうだけれど)。それか、パーソナルなことと「つくる」がバチッと結びついている先達のお話を聞いてみれば、イメージが湧くかもしれない。

とはいえやはり、共通の軸や方角があるからこそその面白みもあるだろうし、これまでのスタディで出てきた集合知の欠片をそのままにしておくのも勿体ない気がする。皆が皆、東京に対して似た意識や感覚を持っているとは限らないし難しいのかなとか、前提を問う場に方向性という概念は合わないかなと思いつつ、でも、

なんとなく思う。以前、「都市のコードを探る旅」というテーマのイベントに参加した時も、海外都市を旅した登壇者らに対し、「『東京のコード』は何だと思いますか?」という質問が多数寄せられていた。東京に何らかの行き詰まり感をおぼえている人は少なからずいるらしい、しかも複数の界限に。

東京に問題があるのか。それとも別のところに原因があるのか。それが明らかでなくても、東京で暮らす少なくない人が心的に満たされないのなら、「公共性のある、東京の課題」と言ってもよいのではないか。東京にそんな重荷を負わせるのは少々、可哀想かもしれないけれど。



今回、remoscopeという映像を撮るワークショップに参加した。やっているうちにじわじわと冒険心が湧き出てくるようで、新鮮だった。今までSNS含め映像というものを撮ってこなかったのだが、今回「なるほど、映像という手もあるのか」と、自分の持ちうる表現の蛇口として、映像というものが身近になった。ワークの後、「民主的な創造の場」と「個人で作ることと共同で作ることのバランス」の話が出た。これを聞いて、私のクリエイティビティ・コンプレックスの一端が少しほぐれたような気がする。

私はクリエイティブでアーティスティックな人たちに対し、十数年にわたって憧れとコンプレックスを抱いていた。それは才能やセンスというより、継続できないこと、結局自分はそこまで創作を好いていないのではないかとということ、に関するコンプレックスだった。サークル活動をしていた頃は大道具や役のことを毎日でも考えられたのに、一人になった途端「創作」にあたる営みをしなくなった。人の作品の鑑賞についても同様で、誰かと一緒に行くだとか、そういうきっかけがないとほとんど行わないことが判明した。そういうこともあって、だんだん「自分はそっちの人間ではないのだな」と思うようになった。諦めというより受容という感じで、コンプレックスもあまり顔を出さなくなった。

今でも、職業という意味でアーティストや表現者を主軸に据える可能性はしばらくは低いかなと思っている（年を取ったら&文については分からない、というか一年先には気が変わっているかもしれない）。そういう腕を磨いてきていないし、どちらかという社会の基盤や場づくりのほうに呼び寄せられているからだ。しかし、それだけではもったいないし、自分のバランスが取れなさそうだった。基盤や場をつくる側と、場の中で表現する側、どちらもやってしまえばよいのだ。

TPSのエッセイや今回のワークのように、共同でならアウトプットまでちゃんと辿り着けた。個人での創作も、誰かに見せる機会をつくる等して状況を変えれば、続けられるかもしれない。自分のまだ見ぬクリエイティビティを、もう少し信じてみようと思った。

第五回 「東京で生きる」(阿部健一さんのご自宅にて)

つくることで居場所になる?／次なる打ち手

「東京村の長男坊」というお話を伺った。自分の住む東京村が食い荒らされたような心地がすると聞き、そうだなあと頷いた。同時に、「なるほど、そういう感覚なのか」という"発見"感もあった。そう思ったということは、自分の中にはその感覚がなかったのかもしれない。自分の東京歴を考えると不思議だけれど、これは幼少期の転勤族生活が効いているのか、地元への関わらなさのためなのか…。

自ら書いた「地元への関わらなさ」という字面を見て、ふと思いついた。「東京でつくる」って「東京を居場所にしていこう」ことなのではないか…?

いや、一旦冷静になって考えてみよう。全ての「つくる」がそうだとはいえない。現に、文章や個人サイト、Webサービスまわりのあれこれを作っても居場所感は増大しなかったじゃないか。サークルでの作品・モノづくり、部室やシェアハウスの手入れ…はどうか。東京での、まではいかなくても、その場での居場所感は生成されていったのではないか。

何が違うのか。身体がそこにあるかどうか?ほかの人と、物・空間・時間…を共有しているかどうか?そう考えれば、私が昔から「ネットの中が居場所だった」的な証言・描写にピンとこなかったことと、一応つじつまが合うけれど…。どうなんだろう。あと、卒業研究・論文はどうだ。ただ自分の考えを文にするよりは「作っている感」があったように思うけれど、それは単純に楽しかったからなのか、独自性・新規性の強いものだったからなのか、理系研究だからなのか…。居場所感の増大に関しても不明だ。うーむ。

まあとりあえず、今の私にとっては、一人で文を紡ぐだけでは「つくる」として物足りないのは確かだ。ほかの人もそうなのかは知らないけれど。



渋谷ハロウィンの話が登場して、「やっぱあれ、東京っぽさあるよな〜」と思った。ワールドカップや年越しも含め、勝手に人が集まってしまう感じ。私が知らないだけで、ほかの都市でも起きているのかもしれないけれど（大阪の道頓堀とかもそう?）。でも、あれは祭りじゃない。どこに「当事者」がいるのか分らない感じ。御会式とかはもっと、皆でつくって維持している様子だった。見た目や方法が違うとかでなく、果たしている機能が違うのだと思う。でも渋谷のも、一時的には集合的沸騰になっているんだろうなあ。分からん。参加者のインタビューとかどこかにないんだろうか?

問題の多い現象だけれど、「主催者のいる公式のイベントでもないのに大勢が集まる」こと自体は興味深いと思っている。あの渋谷の引力は一体何なのか気になる。なぜ渋谷なのか、どう始まったのかはよく知らない。けれどなんとなく、「騒ぎに繰り出したら、自分の日常を変えてしまう何かに出会えるんじゃないか」…そういう期待を彼らは抱いているんじゃないかと思った。彼らが幸せだったら申し訳ないけれど、本当にほしいものをほしがれなくて「逸らし行為」をしているようにも時々見える。もしそうなら東京はうってつけだ。期待させるネタ、享楽のネタが豊富だから。…こう思うのは、宇多田ヒカルの東京NIGHTSに感化されているからだろうか？



最後のエッセイらしく、「『東京でつくる』に関する自分の変化」について考えてみる。正直なところ、この半年は色々なことがありすぎて、何がどのように自分の考えに影響したのかがよく分からない。けれど、少なくとも、

- ・東京に関する情報をチェックしたり考えたりする機会が増えた
- ・東京に対してどんな気持ちを持つべきか、慎重になった
- ・長い文章を書けるようになった

という変化はスタディによるものだと思う。

個人的な裏テーマ（と言いつつ全然裏じゃない）として、「『つくる』と仕事」というのがあった。けれど、働くことや仕事の中の人間たち、何か始めること…に対する漠然とした恐れはあまり変わらなかった。（利益・賃金の発生有無を問わず、自分をいかし人の中で働くことでしか得られない被承認感、充足感があるのだろうなと分かってはいるのだけれど…）

ここ最近では、自分に合う労働・給与形態の模索とリハビリとを兼ねて、在宅アルバイトを試しているところだ。

過去の経験からも色々分析してきた。本来「働き者」気質なのに、人と働くのが怖くなってしまったことがすごく悔しいから。良い意味で「お互いさま」感をおぼえる仲間が存在が肝だろうか、私がその場に存在することを脅かさない上司だろうか、提供しているものへの自信もだろうか…。間違っただけならさそう分析結果が、目の前に並んでいる。まあでも、そろそろ新しいことをしないとこれ以上の学びは望み薄かな、という感じだ。

応募時から変わっていないのは、「人の居場所」への関心もだ。住まいへの期待も、つい先日までは変わらなかった。ただ、シェアハウスでいびられを経験し、今後、住居という切り口で研究していった方がいいのか信じられなくなっている。

時々、居場所なんてものはないのだろうかと思ってしまうけれど、居場所だと思える場、関係、瞬間は人生の中で確かに通過してきたのだ。私は今、もう少し居場所がほしいし、他の人にももう少しあるといいんじゃないかと思う。やっぱり今も、「この都市

（東京？）に居場所となりうるものを散りばめたい」的なことは考えているわけだ。これだけ読むと「変わらぬ信念」のようだけれど、一向に具体性が増さないし、進歩していないのかもしれない。

最終回なのに歯切れが悪い。ぐるぐるをただ露呈しただけになってしまった。「ディスカッション→エッセイ」「実生活→エッセイ」はあったけれど、なんだかんだ実生活は別の地平にあったな。

いいかげん、ここ2年くらいの「飛び込む環境に対して私が無意識に期待していること」を解明して、あえてそれとは違う打ち手、実践をすることが必要なのかもしれない。こう思えるようになったのも、このスタディでだいぶ考えたからだろう。

そういう打ち手になるかは分からないけれど、生活用品をDIYしたり、個人的に残したい建物の図鑑を作ったりしてみようかな、とぼんやり思っている。

Profile

木村佳葉子（きむら・かなこ）

1995年生まれ、大学4年。5歳から東京暮らし、13歳から電車登校。大学では地球科学を専攻。サークルでは舞台をやっていた。大学休学中に労働で苦しくなって以降、社会の前提にモヤモヤして仕方がない。来年度からは社会学に専攻を変え、人の心身の居場所について研究する予定。「働くこと」に絶賛悩み中。何かを「つくる」社会活動をしていきたいと思っはいるが、どうにも決め手に欠け、充実感のある実践はまだできていない。

小林 大悟

Daigo Kobayashi

小林さんの個展で買うか悩んだ絵のことを時々思い出します。お餅が頭蓋骨のようなものの上にトナカイが寝そべっている絵。翌日、別の人に買われてしまったんですね。エッセイの紹介じゃなくてごめんね。いい絵でした。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

「前提を問う」こと。

当たり前だと思っていたものの「前提を問う」ことは表現の世界においてとても大事なことだと思う。この場合の“表現”という言葉の中には、いわゆるクリエイティヴなアートの世界に限らず、世の中のあらゆる職業ないし個人個人の生きる様という意味も内包している。

大層な書き出しから初めてしまったけれども、第1回のレクチャーを通じて「前提を問う」ことについて改めて考えさせられた。正確には自然と考えられる場にいることができた。どちらかというと「東京でやっていくにはどうしたら良いのだろうか？」という実生活に直結する悩みを解消したいという、邪な思いが強かったのだから集まった方々の濃いお話の中には一緒に考えていきたい疑問・違和感のフックばかりだったのだ。

誤解を恐れずにあえて正直な事を書くと、世の大半が甘んじて受け入れている「あれやこれやの前提」に、遠回りして突っかかっている暇があれば、自分の抱える「お仕事」に本腰を入れてそちらを全うすべきだなとも思う。

とはいえ「余計な事を考えるな」と言われ、「はいわかりました」と従順になれるのなら苦労はしない。浮かんてしまうものは浮かぶ。どこにそんな時間が有り余っていたのだという学生時代は、喧々諤々気の合う同士で堂々巡りな話を延々と続けられたけれども、日々のスピードの中では、頭の中にとどまる一方。言葉を出す相手や場がないと、次第に抱え込んだまま過ごしてしまい、その無自覚な鬱憤は別の形で発散してなんとなく日々を乗り越えられてしまう。

「答えを出すことが大切ではない」と言われても、疑問を出し合える場が見つからない。疑問の「答え」や「正解」を教えて欲しいのではなくて、疑問を共有して疑問から出発できる人たちに会いたいかもしれない。その結果、新たな疑問が出てくる構わない。疑問に対して、その道の専門家でないもの同士が、自分たちの用いる専門性や知識経験を掛け合わせてあれこれとコミュニケーションしたいのだ。

そんな一番簡単に、対して手間もお金もかからないことをするのが難しいのは、みんな余裕＝時間がないからなのだろうか。

「余裕がない」という言葉からパッと浮かぶのは都心への過密集中、すし詰めぎゅーぎゅー満員電車の思い出だ。とすると「前提を問う」の前提、今まで前提を問えなかったのはなぜか？という問いは「東京でつくる」という問いにも関わるのかもしれない。

ともあれ表面的には無駄な遠回りでも、まわりまわって自分の糧になると信じて、これからのレクチャーが楽しみである。.....などと死屍累々と化した作りかけの作品を横目に、今この文章を打っている自分は、「このプロジェクトがいずれ自分の糧になる＝創作活動につながる」という根拠のない前提は決して疑わず「そもそも作りかけとは」「締め切りとは」といった余計な方向の前提を問うふりをしながら、東京での日々を過ごしているのであった。

第二回 「日本から離れてつくる」

「逃避願望」

前回のスタディの中には興味深い話題がたくさん散りばめられていたが、井上知子さんの東京を出たきっかけと戻ろうとおもったきっかけの話が心に引っかかったので自分自身を振り返ってみようと思う。

自分は海外への留学経験はないものの、大学在学中のある時期に短期留学を検討したことがある。大学にフィンランドへの短期交換留学制度があったので、一時期情報を調べたり、関係する授業を履修していた。結局、経済的な理由で断念してしまったものの、今となっては振り返ると経済的な理由は断念にいたる大きな要因ではなかったと思う。あの時の自分には漠然と「外国へいくことで自分自身がうまれ変わるのでは」という期待、逃避願望以上の目的意識は全くなかったのだ。断念したのではなく、明確な意志をもてなかったといった方が近いのかもしれない。

あの時自分の抱えていた逃避願望は、日常生活においての漠然とした鬱着感に対してだった。一方でまわりには「こんな国から脱出しよう！」といった意気込みで海外を意識する人もいた。ちょうど東日本大震災直後だったこともある。2、3年経つ頃まではそんな人にも時々会った。震災の危機感が年月とともに東京の日常から薄まっていくのとリンクして、あの時意気込んだ人々は国から出るどころか、東京で粛々と日常生活を営んでいる。

（大変失礼ながら）自分の抱いていた逃避願望とそうかわらない動機ですいすいと留学できてしまうような恵まれた環境の人もまわりにいた。心底羨ましいなと思いつつ、その多くは中身はそうかわらずに日本に戻ってきた。中には留学経験が悪い意味での自尊心につながっているような人もいて、間違いなく自分もあなっていただろうなと思いながら眺めていた。

自分はというと、依然海外に対しては逃避願望以上の理由がもてないまま今も日本の東京で暮らしている。いまやあの頃の逃避願望のようなものもなく、さりとて出ていきたい理由もない。良いのやら悪いのやらの現状維持が続いている。

海外にはいかないが東京を出る機会は多くなった。目的を持って旅行することももちろんあるが、それ以上に作品制作や発表の機会を通じて縁もゆかりもなかった土地に足を運ぶことが増えた。留学を考えていた時は一切なかったけれども、諦めた翌年から少しづつ機会が増えていった。とはいえ大きなイベントや人の多く集まるような観光地は多くない。むしろ、昨今のアートイベントなどとは良くも悪くも距離を置いた土地との縁が多かった。冬は氷点下20度の土地、人口40人の小さな島、かつて日本一人口が少なかった町。仕事とも旅行ともつかない立場でそれらの地に出きもてなされる経験は、東京と埼玉以外に親族のいない自分にとっては異国体験に近かった。極端に環境の違う土地というものは魅力的にうつるため、初めて訪れた際はつい安易に「いつかここに住んでみたい」とまで思ってしまうものの、何度も足を運ぶにつれ時々来るから刺激的なのだなと気がつかされる。

ここまで書いてふと、かつての逃避願望は本当に消えてしまったのだろうかと思った。もしかしてずっと抱いたままだったのではないだろうか。矛先が海の外から東京の外にかわっただけで、稀有な遠方滞在を繰り返す中で逃避願望を満たそうとしていたのではないか。

疑問は募る。何度も遠方にでは東京に戻ってくる自分は、このまま日本はおろか東京からも完全にでていく可能性はないのだろうか。定期的に東京をでることで自分は一体どうなろうとしているのか（東京にある、あるいは自分自身のもつ「何」から逃れようとしているのか）。東京や日本をでる（あるいはでない）という明確な意志をもつためには何を考えていくべきなのだろうか。今まで浮かんだことのないこれらの疑問には、個人的な要因と社会的な要因とが混ざりあっていて、すぐに整理がつかない。

「東京でつくる」というテーマを考えていく上での鍵になりそうなので、今後少しづつ切り込んでいけたらなと思っている。

第三回 「ここで作る／ここではないどこかで作る」

あふれる情報とそれらへの反抗

第3回のスタディの内容にはいつも以上に心にひっかかる“フック”がたくさんあり、書いては手がとまり、また新たに書き始めてはとまりの繰り返しになってしまった。結果ただいま12月下旬。来年に持ち越したくはないので、特に引っかかった「東京の情報量」にしぼりいい加減書く。

イシワタマリさんの仰っていた「東京は情報量が多すぎる」ということばが、スタディのあとからなんどもなんども頭をめぐった。「情報量の多さ」について今まで考えたこともなかった、というよりも皮膚感覚ではなんとなくわかっていたのに、頭の中で無意識にこぼれていた（＝考えないようにしていた？ 無理矢理に受け入れようとしていた？）ことをずばり指摘された衝撃。よりによって、こんなに簡単なことばがするどくささるとは。

情報量の多さを頭が受け入れなかったのはなぜだろうか。もしかすると多すぎる情報の処理に追われ「余計なことを考える」回路を絶ってしまったのかもしれない。そうだとしたらイシワタさんの言う「東京の人はAIに近づいている」原因の一つではないのだろうか。そうだとしたらもっと余計なことを、無駄なことをして、エラーを起こしながら「人間らしさ」を取り戻さねばいけない。すなわち無意味や無駄を肯定してよいのだなと思うと、少しだけホッとしたり。

それにしても情報に溺れて身動きがとれなくなるというのおかしな話である。多すぎる情報たちが路線図のように複雑にめぐりあって、絡み合う。東京はあたり一面情報の山。ただでさえ東京にいらなくてもインターネットやSNS上に玉石混交の情報がかけまわっているのに、さらに身の回りの情報の山。実は人類史に類をみない情報の濁流に飲み込まれて過ごしているのかもしれない。

情報と一括りにしてしまったものの、情報には重い・軽い、大きい・小さい、濃い・薄い、熱い・冷たい、さまざまな性質がある気がしている。ごちゃごちゃした東京の中にも蛍火のようにひそやかに情報を発しているものもたくさんある。だけに拡声器でなりふりかまわずふりまかれる中央（って正確にはどこだろう？）の「情報合戦」が過激すぎるあまり「ああうるさい」と思いながらも、情報の怒声にひきずられ個人の発する情報量も無意識に大きくなってしまっている気がする。なんて思うのも具体的な5Wが浮かぶわけでもなくて、日々の暮らしで無意識に浴びつづけている実感なのだと思う。

最近、情報へのささやかな反抗を思いついた。それは毎晩寝る前に絵本を1冊読むこと。よい絵本は、最小限につづられたことばと描かれた絵、それからページをめくるリズムとが組み合わさって日常にはない情報（物語）の世界へ誘ってくれる。短編集や本のエッセイより手軽に入り込めて、寝落ちすることなく最後の場面までたどり着く。声に出してよむと自身も絵本の編成に混ざるようでおよし。こうして日々浴びすぎた情報を洗い流しながら、目に見えない東京に抗っている。

第四回 「東京にふれる」

「つくる」においてのバランス

第4回のスタディで映像ワークショップが終わったあとに、講師の久保田テツさんが仰っていたワークショップを実施することで自分の中のバランスをとっているという言葉。これがじわじわと自分の中に残った。自分自身のこれまでの活動動機にも通じるキーワードでもありと感じて、とてもよい言葉に出会えたなと勝手に感謝をしている。

さまざまな表現の根っこにはその表現者の個人的な「こだわり」がある。その「こだわり」には本人以外の多くの他者にとって（あるいは本人にとっても）無意味さや無責任さが内包されていて、そこに後から当の本人または他者が勝手に意味や理屈を見出していき、価値が生まれていくのだと思う。

もしかすると自分がワークショップを通じて触れたいのは、見出された価値の方ではなく、その根底にある無意味さや無責任さの方ではないだろうか。触れたいというよりも、その「なんてことなさ」を暴きたいという方が近いかもしれない。

たまたま年明けに横浜でワークショップの企画を実施する予定があり、その準備中も先の「バランスをとる」というセリフを反芻していた。ワークショップは内容と参加者が違うものを2日間実施した。詳しい内容は省略するが、どちらの内容もざっくりいうと大きな紙の上に参加者同士で絵を描いてもらう内容だ。参加者は小学生以上としたが、ほとんどが20代以上の大人。自分もそうだがすぐ理屈や意味を見出そうとしてしまうであろう参加者を（あまり使いたくない言葉だけれど）いかに童心にかえらせ好き勝手に絵を描かせるかに注視した。言ってしまうえば幼稚園児の絵の具遊びとなんらかわらないことをそうと悟られないようにそれらしい設定で覆い、また参加者間で比べ合い恥じらいを持たないよう安心できる場になるよう流れを組んだ。

ワークショップ本番。準備した導線は功を奏し、参加者たちは夢中になって筆を動かし紙の上でのびのびと暴れてくれた。実施した2回ともに想定していたよりもはるかにうまく場が回り、気を配ってわざわざ口挟まずとも参加者同士の自然なコミュニケーションによって、心地よい空間がうまれていた。ハードルを極限まで下げ、参加者それぞれが自身の無責任な「こだわり」と向きあえた結果「無理に絵にしないでよいですよ」と注意しておいたにもかかわらず、紙の上には「魅力的」という価値を見いださざるをえない作品が「うまれてしまった」。ワークのあと、参加者1人1人の表情に子どものような達成感がみられ、真のテーマである創作の「なんてことなさ」に触れてもらえたようだと思安堵した。

「自分の意思で価値あるものを創作している」という傲慢さにブレーキをかけ、創作は「思わずうまれてしまう」という初心にワークショップの参加者を通して立ち返る。その繰り返しで自分に

とっての「バランスのとれた状態」なのかもしれない。建前上は作家・先生であるものの、参加者と結ばれているのは師弟関係ではなく共犯関係なのである。準備も大変な上、現状金銭的な儲けは全くできていないのだが、精神衛生上大切な試みだと改めて感じた。

スタディテーマ「東京でつくる」の「つくる」方に重点を置いて考え実践した、そんな1ヶ月だった。

第五回 「東京で生きる」（阿部健一さんのご自宅にて）

「歩幅で抗う」

第5回スタディに参加できなかったため、記録写真と音声聴いた上でのエッセイ。

皆さんの話を伺っていて、各々が括っていた「東京」の形がスタディを通じて大きく変容していることを改めて感じた。正直なところ、自分自身も回を重ねるごとに東京の捉え方がぐにやぐにやとかわってしまい、エッセイに不自由さを感じていた。書くことがないのではなく、つづらねばならない領域がぐいぐいと広がっていき収拾がつかなくなってしまったり、これまでのエッセイと辻褄があわなくなってしまったことが原因だ。エッセイに起こす時には多くを切り捨てまとめるわけだけれど、時間をおいてエッセイを振り返った時に取捨選択の捨の方に萌芽の可能性を感じることもある。予感が的中しているかどうかは実際に時間が経ってみないとわからないけれど。

いよいよ来年はオリンピックイヤーとなる。東京にとって（日本全国にとっても）2020年は1つの節目になるだろう。少しずつオリンピックに付随したイベントや都市開発が立ち上がりは始めている。東京でつくることを問うこのスタディは明確な答えを出さないとしても、この忙しい東京を包む変貌にどこかひきずられてしまう。少なくとも自分はそうだった。けれども果たして現在の東京に流れる変化のスピードに併走しながら思考しなければいけないのだろうか。なんだか焦らされている、勝手に焦っているような気がしえられない。東京へのつかみようのない違和感に抗うのは同じ勢いで即答するのではなく、2020年を区切りとしない、ゆっくりと歩む姿勢をとることが必要なのではないかしらと思いはじめた。スタディが終わったあとも何かしらの形で繋がりを残したいと感じるのも、スタディの終了を思考の区切りにしたくない表れなのかもしれない。

Profile

小林大悟（こばやし・だいご）

1990年生まれ 2014年多摩美術大学日本画専攻卒業。美術作家。絵画作品を中心に制作・発表。

斉島 明

Akira Saito

他のメンバーの発言に誰よりも耳を傾け、丁寧に打ち返していたのは斉島さんだったような気がします。そしてエッセイから自分と「東京」との分かち難さ、あえていえば「東京への共感」が誰よりもにじみ出ていたのも。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

東京の距離感／集う中心

「東京」のイメージは「大人」や「世間」のそれにすこし似ている。

一見すると等しく了解された共有認識のようだけれど、細部をつぶさに確かめていくと驚くほどのばらつきがあり、さまざまな要素が不整合なまま重なりあっている。そのようなつかみどころのないイメージを、けれど（それを語る主体にとって）ちょうどいい距離から眺めることで細部がにじみ、輪郭のある東京として見えてくる。だから東京の姿はきつと、それを語る主体の視力によって異なっている（視力という言葉はここでは、なにかの能力の良し悪しを指してではなく、東京の輪郭をどこに見いだすかは主体ごとに異なってくるということを指すことを意図して用いている）。東京はさまざまな姿を見せるし、そのそれぞれが真の姿だ。けれど「東京」そのもののイメージを捉えることはできるのだろうか。

東京プロジェクトスタディ1の第一回は 9月22日に行われた。出席してまず気になったのはそこへ集まった（自身を含む）メンバー間の距離感についてで、スタディの進行に伴ってそれがダイナミックに変化していくさまはとても興味深かった。

到着順に着席していったら男女できれいに分かれたこと、それが早速くじ引きでランダムに並べ替えられたこと、インタビューが半分済んだところで休憩を入れたらインタビューが終わったメンバー間では会話が生まれ、そのあとにインタビューを控えたメンバー間では会話が生まれていなかったこと。懇親会に移行してからの節度のある饒舌さ。

はじめ、このような距離感のありかたと変化はとても東京的だと考えていて、それについて書こうと思っていたのだけれど、考えを進めるうちに特段そんなことはないように思えてきた。

東京は面積に対して人口が過大な都市なので、空気を読むだとか、儀礼的無関心と呼ぶべき振るまいだとかが多く見られるし、そのような振るまいかたを身につけやすい場所だ。おそらく私は先に挙げた距離感とその変化から空気を読むことや儀礼的無関心を連想し、そのままだ都市から東京へイメージを短絡してしまったのだと思う。実際にそこにあったのは都市的で慎重で丁寧な（しかもよく準備をして頂いた）出会いしかたで、これのみをもって東

京的と呼ぶのはすこし難しい。都市としてあることだけが東京の性格ではないからだ。

インタビューで印象に残ったのは、東京と自分との距離を感じているメンバーが多いこと、東京に対して明確なイメージを持ったメンバーはあまりいないこと、東京へ愛着を持っているメンバーも少ないこと、他方で東京へ肯定的なイメージを持っているメンバーもいること、そして「東京でつくる」以外のテーマに惹かれてスタディへ参加したメンバーが思っていたより多いことだ。私にとっても「前提を問う」は重要だと感じているテーマなので楽しみだ。

私たちは大きなテーブルを囲んで話をした。車座をつくるとその中心には空間が生まれる。ロラン・バルトは東京の中心には皇居があり、けれどその場所は（市民にとって）禁域で、誰からも見られることがない空虚な場所だという意味のことを書いたのだという。「東京」そのもののイメージもまた、集った私たちの中心にあるがまだ誰も掴んでいない、誰からも見られたことがないイメージだ。

ところで東京には環状道路の計画というものがあって、それを作りをはじめから百年くらい経つただけけれど、その一部の道路はまったく完成する気配がない。空虚といわれた皇居の周りを通る内堀通り、外堀通りに始まり、皇居を中心にいびつな同心円を重ねて外側へ、環八まで八つの道路がある。東京オリンピックが決まって以降は工事が活発になってきていて、その様子を興味深く思っている。

中心にあるものが曖昧なイメージであっても、それが中心にあることで、その周辺に道をつくることはできる。私たちが車座の中心に置いた「東京」の周りになにかをつくることができるのかは、今はまだわからないけれど。

第二回 「日本から離れてつくる」

東京が住みにくいからと越す国は

(1)

スタディが終わりに差ししかかった頃に日本の雰囲気の話になり、夏目漱石『草枕』の冒頭を思い起こすこととなった。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」

という有名な一文について、けれど情に棹さして流されたひとが言及するのを聞いたことはあまりないような気がしていて、たいがい智に働いたり意地を通そうとしたりしてしまったひとが戒めとして引いているように思う。

とはいえ考えてみれば、情に流された話など大っぴらにひとにするものでもない。情に流されたときというのは（少なくともその瞬間において）本当に大事なことが起こっているときだろうし、だから、それはそのことと関係のない他人の目の前では起こらない（岸井大輔『本当に大事なことはあなたの目の前では起こらない』より連想した。^{*1)}）。

情も信仰も、それに関わる本当に大事なことは他人から見えないところで行われる。だからもしも他人の情や信仰が、東京という都市で特別に見えづらいたするのなら、一つには他人が多すぎるものがその理由かもしれない。人が東京へ集まれば集まるほど、自分から見えないことは見えることに比べて増えてしまう。

(2)

先ほど引いた『草枕』の一文には次のような続きがある。

「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。」

東京における他人を「向う三軒両隣りにちらちらするただの人」だと考えたことはあまりないような気がする。もちろんただの人だろうとは思いますが、ただしそれはきっと私の知らない人で「見えないもの」だ。スタディで「『東京を変える』という意識を持ったことはない」「東京のイメージを積極的に持ったことはなく、あるとしても『みんなが思っているイメージ』を受け入れているにすぎない」という話も出たことを覚えている。東京というものはこちらから影響を与えることのできないものとして捉えられているのではないか、という話をしていたのだった。

心理学に「コントロール感」という概念がある。自身の意思決定が対象に影響を及ぼすことができると感じるかどうか、という類の意味だ。少なくともスタディに参加している人の多くは、私を含めて東京に対するコントロール感が弱いといえる。

見えないものごとが多いこととコントロール感が弱いこととの間には重要な関係があるような気がする。見えないことはコントロールできない。けれど見えないなものかがそこにあることをわかってさえいれば、そこへ触れる（＝コントロール感を強める）ための手段を試しながら積み上げていくことはできる。科学が自然に対してそうしてきたように、東京の見えないものごとを少しずつ紐解いていくことが。その東京を（部分的にでも）明らかにしようとする作業は、結果的に東京に関する（少なくともある種の）作品をつくる作業になってしまうのかもしれない。

(3)

『草枕』はさらに次のように続く。

「ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。」

「人の世」からはどこまで行っても逃れられぬ、というのと、居を移してさえしまえば別の「人の世」や「国」へ移ることができる、というのとは、どちらも否定しがたい見解だと感じる。アメリカへ向かう中米からの移民の映像を最近テレビで見かけた。それはホンジュラスから出発した移民キャラバンで、彼らは仕事と安全を求めてアメリカへ行くのだ。またスタディでは井上さんが「ロンドンから帰国したら日本的なそれとは異なるふるまいが身についていた」という話をしていた。どこへ行っても「人の世」なのに違いはないが、違う国や都市には当然異なる「人の世」やふるまいもあって、それを期待して移住する人さえいるのだ。

ところで現在ニューヨークを拠点としている文筆家の岡田育は下記のような投稿を Twitter へしている。

「（前略）私はアメリカの他地域に居を移したことはないけど、『東京という都会に生まれ育った私が思想信条的に無理なく住めるところ、地球上を見渡しても本当に少ないんだなあ』と実感する毎日ですよ。でも、だから人口過密するんじゃないかな。カネの流れ以外に、マインドの流れとしても。」^{*2}

海外へ移住すること自体への抵抗感はない（言語や生活習慣、書類などの問題は想定されるにせよ。けれどももしかしたら、真剣に考えたことがないからそう感じているだけなのかもしれない。）。異なる環境で生活してみたいという気持ちもある。けれど私が無理なく住めるところはもしかしたら彼女と同様に本当に少なく、結果的に都市になってしまうのかもしれない。なぜそうなるのか、いまはまだうまく言語化できないけれど。

もちろん東京は住みよばかりの都市ではない。けれど見えないうひとがつくった見えないものだらけの東京が住みにくいからといって越す国は果たしてあるだろうか、またはつきりとは見当がつかないままである。

^{*1} 岸井大輔「戯曲」本当に大事なことはあなたの目の前では起こらない

<https://www.kishiidaisuke.com/daiji>

^{*2} 岡田育 twitter

<https://twitter.com/okadaic/status/1049083190034518023>

MADE FOR YOU／南の島

(1)

宛名のない仕事、顔のわかる誰かのためではなくそれを必要とする知らない誰かのための仕事東京には多い。誰が乗るかわからない電車を走らせること、誰が通るかわからない道路を敷くこと、誰の手に渡るかわからない商品を作ること、誰が来るかわからない店の店頭に立つこと。いつそれを必要とするかわからない知らない誰かのために、様々なインフラが環境として用意されている。

スタディで「地方の『雑』さ」について言及がなされたとき、これは東京という都市について考えるうえで大きなヒントになるかもしれないと思った。

なにがなにに対して「雑」なのか。この発言は「地方にあるとある（演劇の）稽古場の運用は、東京の稽古場における一般的なそれよりもいい意味で『雑』である。なぜなら東京式の一見AI的とまで思えるルールが、けれどその地域では効力を弱められているからだ」という文脈で発せられた。

ここで言われている「雑」とは、東京式のルールに対して「雑」だということで、運用の適切さの度合いを評価する言葉ではない。なぜならこの「雑」さは環境、もしくは地域ごとのやりかた、に適応した結果生じた差異にすぎず、だから運用の適切さや良し悪しを直接評価する尺度としては採用することができないためだ。運用のルールのありようはひとり東京式だけではない。

それでは例えば環境はどのように異なっているのか。ほとんど稠密に詰まった中身を半自動的に流動させる仕組みができあがっていて、けれどそのせいで人が流れから逃れづらい東京。ところどころインフラ的な隙間や断絶があるために、（もちろん東京とは異なる種類の逃れづらい柵はあるものの）人が自発的に流れる必要があり、またそれが可能な地方。という対比はあまりにも極端だけれど、たとえばそのような環境の違いを見いだそうとすることもできる。しかし正直に言えば、そんなことよりも、このとき僕は単にすこし悲しかったのだ。「雑」さを許容しづらい都市として、そのような都市から離れていった物語の舞台としての東京の話を書くことが、東京（の外れの）出身者として。

おそらくこのとき僕は、東京に宛名や「雑」が存在しないわけではなく、表向きそれが現前しないように糊塗されているだけなのだ、という意味の弁護をしたかった。それは宛名や「雑」に親しんできた人をはじき出すためではなく、誰に対しても最低限同じインフラや環境を提供できるようにするため、またそれを提供するのが誰であってもしよいようにするために本来隠されているのだと、東京にはそのようであってほしいという期待もこめて言いたかった。だって、そのような都市としての側面にはもうずいぶ

ん親しんできたし、その点を気に入ってものいるのだ。

東京で顔の見える、宛名のある仕事をするができるかできないか、という議論において想定されている距離の取りかたには、近距離と遠距離としか数えられないように感じる。それ以外の選択肢を、それがどのような様態になるかわからないけれど、たとえば中距離の関係を作ることではできるだろうか。たとえばあなたが指定したオプションに合わせて標準メニューからカスタマイズをするよ、というスターバックス的な距離感の中距離か。カスタムオーダーの増加は単に時代の流れにすぎず、都市性とは関係がないのだろうか。東京でどのように距離感や宛名感を伸び縮みさせることができるか、という事に興味が出てきている。

(2)

スタディの過程で、東京に網の目のように張り巡らされた「AI的なルール」からどのようにステップアウトするか、そのような回路を作ることができるか、という話をしていたとき、2014年に上演された演劇作品である sons wo:『キリンの親／モツォ』（*1）のことを思いだした。東京での都市生活に関する作品だ。

2本が対になっていて、「キリンの親」では、中央線の阿佐ヶ谷駅の近くに住んでいる「私」がある日、井の頭公園へ中央線に乗って出かけて阿佐ヶ谷駅に戻ってきたあと、今度はすこし離れた南阿佐ヶ谷駅から地下鉄に乗る。しかし電車はどこかの駅に着くまえに止まってしまう。仕方なくほかの乗客たちとともに線路に下りて歩いていくと、彼らはなんと南の島にたどり着く。「モツォ」では、二人の主人公が借金を抱え、マフィアに追われて逃げているうちに、地下鉄の駅のホームからやはり線路に下りてしまい、走り続けたすえに南の島へたどり着く。

親しんだ電車である中央線への「私」の信頼は「キリンの親」において何度か語られる（「電車に乗ればいいのです。」「だって中央線はいつでも走ってくれる。」）。一方同作において地下鉄の登場は唐突で、それはもちろん地下鉄が「私」の親しんでいない電車であることを示しているし、またそのことが、地下鉄のブラックボックス性をも予感させているように思う。

地下鉄は他の移動手段よりも、移動手段というものが作られたそもそもの目的＝ワープのための装置としての側面が強調されやすい乗りものだと思う（普段乗らない路線であればなおさら）。どこを経由してどのような風景を車窓から眺めるか、その過程でどのような時間を楽しむか、といった旅行的な観点はそこから捨象され、点から点へできるだけ短時間で移動する、というワープ的な観点が浮き彫りになる。点と点のあいだ＝地下鉄の線路上は、どこをどう走ってどこへ繋がっているかわからないブラックボックスであり、だから、たとえばそこへ足をつけることができたら南の島までたどり着ける可能性がある。

「東京に『AI的なルール』がある」と言うとき、人はおそらくブラックボックス的な不明さをそこに見出しているのではない

だろうか。何がどうなっているのか自分の立ち位置からは見えな
い不明確な機能が、東京にはたしかに埋め込まれている。けれど
それがブラックボックスである＝何らかの機能を持っているな
ら、たとえばそこへ普段と異なる入りかたをすることで、普段と
は異なる場所へたどり着くことができるかもしれない。たとえば
地下鉄の線路を歩いたり、知らないバスに飛び乗ったり、乗って
きた自転車をかついで長い階段を下りてみたりする。その先が、
たとえば南の島まで続いている。そうかもしれない。そこで新し
い距離の取りかたと出会うことができるかはわからないけれど。

*1 sons wo: 『キリンの親／モッツォ』

<http://kirinmozzo.tumblr.com/>

作・カゲヤマ気象台。

演劇ユニット sons wo: は 2018 年、「円盤に乗る派」に改名。

第四回 「東京にふれる」

時間をかける／うまくやらないさ

(1)

「映像がコミュニケーションの起爆剤になる」という言葉をと
ても印象深く聞いたのを覚えている。

それは AHA! Project (AHA: Archive for Human Activities) について久保田テツさんから話し頂くなかで出て
きた言葉だ。「個人によって記録された 8mm フィルムやビデオ
などを収集・公開・保存・利用するまでの一連の仕組みづくりを
推進する」AHA! Project において、個人蔵 8mm フィルムの上
映会を実際に行った際の映像を見せてもらいながらのことだった。

知らない他人の家のホームムービーに、自分が過ごしたことの
ある当時の体験との、もしくはいま自分が過ごしている現在の体
験との、共通点を見つけることができ、ためにそこに共感が生じ
る、という点については直感的に理解ができる。「あの七五三の
袋は私ももらったことがある」「今の家にはないけれど、実家にも
床の間があった」「いつの時代も子供は親の思い通りには動い
てくれない」。たとえばそのような共感が、誰かの家のホームム
ービーから喚起されるのは想像に難くない。

すぐに理解できなかったのは、「それがなぜ映像で起こりやす
く、画像では起こりづらいか」ということについてだ。たとえば
上に例として挙げた 8mm フィルムのスクリーンショットがあ
るととき、同じように七五三の袋や床の間、子供の姿が映ってい
るにも関わらず、そこに特に着目せずに「昔の家庭の写真だな」
というだけの感想を抱いてしまう。そうかもしれない。静止画か
らは必ずしも喚起されないかもしれない思い出が、映像として提
示された途端にたぐり寄せられる。その理由はなにか。

「映画の父」と呼ばれるリュミエール兄弟が列車到着の映像を

初めて上映した際、観客は「本当に列車が到着した」と思って逃
げだそうとしたのだという。だとしたらそこでは明らかに、（音
声が同時再生されていない、無声のままの）映像が VR
（Virtual Reality: 仮想現実）として機能している。VR という言
葉には「完全な」VR のイメージがあって、それは例えば岡嶋二
人『クラインの壺』や映画『マトリックス』に現れるような、リ
アルとの区別がつかないものを最終的に目指しているように思わ
れる。実際に、昨今話題となっている「Oculus」等の VR 機器
はその途上にあり、それらの製品では全方位に対する視聴覚を仮
想することが可能になった。列車到着の映像は、そのような現代
の VR よりはリアリティが低いものの、少なくとも静止画よりは
リアリティが高いように思われる。

なぜ動画のリアリティは静止画よりも高いのか。それはおそら
く再生された動画を視聴するためには（原則として）実際にその
光景を目撃するのと等しい時間をかける必要があるからではない
か。実際の生活をするにはもちろん時間がかかるから、ひとの記
憶もまたおそらく時間の流れと共にある。リアルと同じ速さで再
生される VR がそうでないものよりもひとの記憶を喚起する、と
いうのはあり得ることだ。だとしたら、リアルと同じ速さで再生
される VR である音声にも同様の効果があるのかもしれない。

テキストを読みながら街を歩くツアーをこれまで何度か主催し
ている。そこへ映像や音声を取り入れるつもりはこれまでなかっ
ただけけれど、今回そこから喚起できる共感や記憶の強さを知っ
て、取り入れることに今後挑戦したいと感じた。

(2)

一方で、映像が内包する情報量はとても多いのでそれをいかに
整理するかも重要だ、という話も面白かった。「『うまくやる』
に向かいすぎない仕組みを作る」「無声の映像を撮る」「定点か
ら撮影する」「撮影時間を一分間に設定する」といった枠組みは、
だから、いずれも情報量を減らして整理し、視聴者が受け取りや
すくする、という方向に作用するやり方だと思う。作りこむこと
ではなく、減らすことによって整理を行い、共有しやすくしてい
る。

東京を共有するためには、その情報量をどのように減らしてみ
るのがよいか。個人的には「うまくやるに向かいすぎない」こと
に興味がある。どのようにすることが東京で「うまくやるに向かい
すぎない」ことになるのかまだわからないけれど、個人的な感
覚やプライベートなつながりを頼っていくことにそのヒントがあ
るのではないかと思う。

先日、友人が近くに越してきたので、家の近所から大きい駅ま
で、半日くらい二人でずっと散歩をしてきた。どちらへ進むかそ
の場で決めながら歩くのだけれど、住んでいるエリアが少し違
うので、活動域やまちの範囲のイメージ、印象の重なりとずれなど
がその場で立ちあがってくるのが面白かったのを覚えている。

いまどの東京を共有しているか、これから共有できる東京をど

のように作っていくことができるのか、引き続き考えていきたい。

第五回 「東京で生きる」(阿部健一さんのご自宅にて)

PAIN／車窓から

(1)

阿部さんが「東京村に残った長男」「いろんな人が通り過ぎた町、いろんな人が通り過ぎた家」という語りを始めたとき、これはものすごい話がはじまってしまったと思った。それはこのときの話が、阿部さんが自ら言うように、安全な位置から人へ語れるように整えられるまえの生(なま)の語りだったからだし、同時にその表現によって、僕の出身地が「東京村」ではなく「奥東京村」とでも言うべき場所だということに気づかされたからだ。

もちろん「奥東京」などという場所はなくて、それはあえて呼ぶなら「三多摩」と呼ぶのが相応しい。三多摩というのは(細かな注釈をつける必要はあるものの)概ね東京都下、二十三区以西の東京を指す言葉なのだけれど、そのエリアを三多摩と呼んでいるのは今となってはそこに住んでいる/住んでいた人々だけであるように思う。今の立川のあたりに落ち着くまで、どうしてか僕の実家はそのエリアのなかを四年おきに転々としていた。

横原敬之の「PAIN」という歌詞の一部をここで引用したい。

「来る人帰る人が持ち寄った夢を/この場所で支えられるうちは/僕の郵便番号は1から始まる」

「PAIN」は(おそらく)地方から東京へ出てきた若者の心情を描いた歌だ。「1から始まる郵便番号」はすべて東京都に宛がわれていて、だからここでは歌詞の世界の主人公の、少なくとももう少しばくは東京に留まるといふ決意が表明されていることになる。

東京都羽村市に住んでいたとき僕はまだ一年生くらいの子供だったのだけれど、あの家から初めて出した手紙に書いた自宅の郵便番号が205から始まっていたことを覚えている(電話番号も042から始まっていた。。「PAIN」を初めて聞いたのはそのだいぶ後のことだけれど、この歌詞の示すところを知ったときが、東京でない東京、という類のイメージを僕が初めて持ったときだったのではないかと思う。

(2)

羽村から立川に越したのはたしか僕が八つのときで、それ以降実家は同じ場所にある。

高校から中央線に乗るようになって、立川から新宿まで、家並みがずっと途切れず続いていくのを満員電車から(窓に近いところへ陣取れたときは)眺めていた。中央線はおおむね高架の上を

走っていくから、遠くまで屋根の連なっているのがよく見えるのだ。あのどれもが誰かの家なのだ、と考えていたことをよく覚えている。車窓から見える家並みに次第にビルが混じり、壁ばかりになって遠くを見通せなくなると新宿に着く。

新宿で山手線に乗り換えて渋谷に出る。井の頭線を使ったほうが本当は早いんだけど、通学定期の安いのと、新宿も原宿も渋谷も下りられて便利だというのとでJRだけの定期を持っていた(実際には原宿なぞほとんど行かなかった)。新宿で遊ぶこともほとんどなく、高校からの便利がいいために遊ぶとあったらだいたいは渋谷に居た。けれど渋谷はあくまで渋谷にすぎなかった。新宿は東京の入口だった。(中央線の)新宿より先こそが東京だし、山手線より内側には都会だけがあって、住む人なんていないのだと思っていた。

実際にその内側の、かつて大久保村と呼ばれていた辺りに住むようになってもう十年あまりになる。部屋の周りにはまったく民家ばかりで、商店街がまだころうじて残ってさえる。小さい公園はこまごまあるし細い路地ばかり残っているし、低いところをうねりながら続く道はだいたい何かの跡だし、坂はひどく多いけれど自転車が便利だ。百年前から計画のある道路がついに着工して、四角い住宅地の真ん中を斜めに立ち退かせて通す四車線道路が数年中にでき上がる。都会だけがあるはずの東京の景色とはだいぶかけ離れていたけれど、これらによっても構成されているのが都会としての東京なのだろう。

もう少し様々な見方を東京に対して試したい、と思うとき、離れてみるのもその選択肢の一つだなと考えるようになった。東京について考えるために移住したり海外に出たりするなんて酔狂なことを本当にするかどうかはさておき、一時的にでも、できれば一定の期間、離れてみたいという気持ちがある。どのように離れて、どのような窓から東京を眺めることができるのかはまだわからないけれど、どう転ぶにせよ、それはすこし楽しい事になりそうな気がしてきているのだ。

Profile

齊島 明(さいとう・あきら)

1985年生まれ。東京都三多摩出身、新宿区在住。会社員。それ専用に作った本の記述に従い新宿駅を歩いてもらうツアー、新宿駅の地下道を踏破するツアー、などを個人で作っている。幼少期は実家が四年置きに引っ越していて、三鷹、福生、羽村を経て立川あたりに落ち着いた。抜け道を探すのが好き。もっとも親しみを感じる日本酒は多満自慢。

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

東京都民としての記憶を もとに考える

自己紹介でそれぞれの話を聞くまでは、東京をどのようにま
とめて表すかを考えていたように思う。東京をより客観的に、属
性や物理的な面で捉えようとする頭しかなかった。東京を概念と
捉えると、自分にとっての東京を主観的な面から、もう少しうま
く説明できる気がする。

まず、自分にとっての東京体験や7年程住んだ東京で何か感じ
たことはなかったかを思い起こしてみた。普段の生活で東京を意
識することはあまりなかったように思う。生活圏は神奈川寄り、
都内には疎遠な環境だった。首都圏以外の人からすれば、十把一
絡げで東京扱いをしてくれたが、それに対して遠慮があった気が
する。

ただ一度だけ、自分は東京都民だったんだ、と感じたことがあ
ったのを思い出した。当時は既に実家を離れていて、住民票だけ
都民だったのだが、初めてパスポートを作るとき、今のように近
くのパスポートセンターで作るような制度はなく、東京都庁に出
向かねばならなかった。東京都庁はまだ新しく、展望台が観光ス
ポットになっていたり、その時は石原都知事だったか、政治家が
いる場所でもあり、足を踏み入れるのに妙な緊張感があったのを
覚えている。東京のシンボルが東京都庁とは思っていなかったけ
れど、「THE東京」という感じのものの一つだと認識したのか
もしれない。新宿に行ったこと自体あまりなかったし、とにかく
アウェイ感が強く、落ち着かなかった。

パスポートを作る際に都民として扱われて自分が都民だったと
気付く一方で、無意識下に都庁のある都心と自分の住む東京の外
れを明確に区別していたわけだが、東京都下に仲間意識や連帯感
を持っているかといえば、それも違う。元々、東京に関するアイ
デンティティを持ち合わせておらず、他の地域のことはほとんど
わからない。小学生の時に社会の授業で自分の住んでいる地域に
ついて歴史や地理などを学習するが、私は東京について学んでお
らず、本当に何市がどこにあって、どのような特徴があって、と
いうことに疎いのだ。

私にとっての東京はおそらく「みやこ」のイメージだ。幕府が
あった江戸、手続きのために上り電車で向かう都心、観光客が集
まる東京、日本の首都としての東京など、そのような類のイメー
ジだ。そして、自分は離れてそれを見ていて、大体「みやこ」の
中にはいない。心の距離は相当ある。用事で行く、観光で行くな

ど、いつも外から「みやこ」に通い、生活の場ではない。今のと
ころ、それが私にとっての東京だ。

ただし、首都圏以外の人と関わる時、私は東京の人扱いにな
りえる。要は相手によって、私はより東京側の人間にもなりえる
し、首都圏の人と関われば、あまり東京っぽくない人間にもなり
えるのだ。そして、首都圏以外の人たちは東京か神奈川かはあま
り意識していなくて、ざっくりと捉えている印象がある。実際、
関西の友人が仕事や観光で東京に来ると言って、待ち合わせるの
が浅草や東京駅であれば、私の居るところはそこではなくて、仕
事の後に気軽に立ち寄れる場所ではないんだけどな、と思う。ち
よっと遠くて億劫さが出てくるし、あまり馴染みのないところの
案内を期待されていないといいな、と密かに思ったりもする。東
京は相対的で、意外と漠然としているもののなかしら。

気になるのは、私が知らない東京、見過ごしている東京が沢山
あるということだ。私は東京について知らないことばかりだ。何
について知りたいだろう。色々な地域を調べて旅行計画を立てて、
東京をくまなく練り歩いたら東京のイメージは変わるだろうか。
やっぱり「みやこ」は「みやこ」なのだろうか…。ビルが林立し
て空気が悪そうな都心に住みたいとは思わないけれど、住めば都
で意外と馴染んでしまうかもしれない。でも、東京に馴染んでし
まったとしても、東京の「みやこ」というイメージは変わらない
かもしれない。東京に住んでいる人達の実態や現実と、自分の中
で形作られた東京のイメージは別物のまな気もする。

第二回 「日本から離れてつくる」

海外への飢えと日本への 愛着の狭間で

日本を離れることがあるか、ということについてだが、今後、自
分が日本を離れる可能性は、ないとは言いきれない。だが、海外
に行くにしても日本を足場にするだろう。基本的に日本人である
ことは気に入っている。ただ、最近の日本には嫌いなところが沢
山出てきた。常々ニュースで報じられるように、信頼の日本企業
の不正であったり、ものづくりに長けているはずなのに設計ミス、
外国人労働者の問題など、信用をなくすレベルの話が多い。実際
はそうではなかったのかもしれないが、日本人は勤勉で、日本は
立派な先進国と思ってきたため、何だか残念な気がしてならない。
戦後復興を頑張って登り調子だったのが、一転、隠れていたボロ
がどんどん出てくる時になったということか。本当はそんなに褒

められた国ではなかったのかもしれない、という疑念が強まりつつある。

例えば、政治家は自分の名誉欲や利権のために仲間づくりをしているように見えるし、国民は置いてけぼりでも、悪びれる風もない。また、海外では国民の健康のためにファストフードの広告を制限したり、人体に有害な物質の使用を制限するルールを作ったりするが、日本ではそういう動きは一般的に遅れている。個々の国民よりも企業の利益のほうが優先されているような印象だ。真実の程はわからないけれど、「人体に有害な物質とはいえ規制されていないのに使って何が悪い」、というのが日本の企業の主張だという記事を読んだ。また、とある島のJAだか農協の看板に、「いっばいタバコを吸おう」みたいなことが書いてあったのにも苦笑いだ。日本の企業に健康経営の考えがようやく取り入れられてきたが、まだまだ実施は限られていて、他の先進国の取り組みの足元にも及ばない。国民、社員が心身ともに健康であったほうが利益が大きい、ということに見向きもしない、またはそう思っても動き出せないほうが多いのだ。日本の政治家や企業は総じて内弁慶にみえる。

個々の日本人はそれに対してどう考えているのだろうか。例えば、選挙の投票率が低いことに関しては、期待できる候補者がいない、というのがそもその問題なのかもしれないが、大きなものに対する個の力を信用していないように思える。また、どうにもならないと思ったら、何かをして損失を生むよりも、何もしないことによる安定を好むのではないか。和を大事にしていると言われるけれど、損失より安定を選択する計算が働いているような気もする。よくよく見てみると個々の中には無力感のようなものや、多くの不満や憤りが渦巻いていたりするのではなからうか。もしそうだとすると、日本人の和は見かけだけということになってしまう。個々の能力はあっても集団になるとそれらを生かせなかったり、個性のある集団をうまくまとめ上げられる人がいなかったり、実は随分もったいないことになっているのではないか。下手に集団を仕切るとそれはそれで叩かれてしまうなんてことも想定しているように思える。

日本人の勤勉さは執着と紙一重で、おかしい方向に進んでいることもあると感じる。オレオレ詐欺の進化だとか、いつまでたっても腐らないコンビニのおにぎりや、いつまでも匂いの消えない柔軟剤の開発だとか、過剰な数の24時間営業だって、そこまでする必要があるのか、と思うことが多々ある。反対の意見を言えないだとか、和を乱すのが怖いだとか、そういう背景のために別の視点や客観的な視点で議論ができないということなのだろうか。日本人はとりわけ便利さや実用性を好む習性があるが、度を過ぎてしまっているために、環境への配慮や国民の安全・健康やらに疎くなっていると思える。私の知っている範囲の海外では、日本に比べて不便と感じることもあるけれど、その辺のバランスがとれている気がする。

特に根拠もなく主観的に日本の嫌だと思うところを思いついたまま述べてきたが、そんな日本でも、理屈ではなく確かに愛着はある。生まれ育って慣れ親しんだ環境を感覚的に好んでいるのだろう。この前イタコの話があったが、私は神々を特に熱心に信じているわけではなくても、神社やお寺に行くし、手も合わせる。基本的に靈感はないと思っているが、日本でもオーストラリアで

もそれっぽいものを体験したことがあって、誰がそれから守ってくれるかと考えたら、神様仏様が真っ先に頭に浮かんだが、それよりもご先祖を信頼しているというか、適役という考えに至って、それも一番身近でどんな人かイメージができる母方の祖母なら守ってくれると勝手に確信したり、信心がないようで実はある。日本人としてのアイデンティティというよりも、日本で暮らしてきたその歴史自体が自分を日本に繋げるものなんだと感じる。

私には2年ほど留学経験があるのだが、自分にとっての学びの場は、オーストラリアのほうが完全に良かった。将来わからないことに直面した場合に何をしたらよいのかが明確になり、自分では何とか解決できるな、と自信の持てる教育をしてくれたから。そして、学びたい人には扉が開かれていて、卒業してからも手を差し伸べてくれるから。だから、学ぶなら海外で、という気持ちを持っている。気持ちは持ち続けている。が、今の職場で定年まで勤める気はないけれど、休みがとりやすいし、給料もそこそこだし、気楽だし、本業+ α のことをする余裕がある、という好条件で離れがなくなってきた、飛び出す勇気がどんどん減ってきている。厚生年金制度も長く勤めるほど足枷になっている気がする。何年勤続すればまとまった退職金がもらえる、という制度も将来を見据えて助かるけれども、縛りだとも感じる。

私は旅行に行く先々でここに住めないことはないな、と思う。しかし、そうは思っても、帰った時の「やっぱり家が一番」、という感覚は絶対にある。4LDKの平屋に憧れたり、コンパクトだけど歴史的な街でシティから20分程で空港に行けたり、そういう環境を心底うらやましいと思うけれど、日本の気候や水が豊かな風土、風呂、家の床に寝転がれることだとか、そういうものをいいと思う感性は既に自分に組み込まれている。それから、自分が面白いと思うもののニュアンスを日本語でないと説明できなかったり、日本人でないとわかってもらえなかったり、そういうこともあるから、やっぱり日本は欠かせない。そこにどっぷり浸かると抜け出す気力が出てこなくなってしまうが、海外でチャレンジしたい気持ちは思い出したように浮かんでくるとし、海外で自分の力でやり遂げたいという飢えもある。10年前より甘ったれになった私は、日本も海外も両方堪能できる方法を模索することにする。

第三回 「ここでつくる／ここではないどこかでつくる」

腑に落ちたこと

第3回でうまく説明できなかったことを整理しようともう一度書き出してみただけれど、取り留めのなさが相変わらずなので、その最後の部分だけを記そうと思う。

相手によって立ち位置や振舞いを変化させるような自分の使い方をしていると、この人に対して自分はどうしたらよいかということが先行して、自分の考えがあやふやで心許ないことがあった。そこで、「この人に対して自分はどうしたらよいか」という部分を取りあえず止めようとした。代わりに、非言語な部分で受ける印象は一旦置いておいて、ニュートラルな気持ちで相手の気持ち

ちなり考えなりを尋ねることにした。聞いても正直に話すか、考えが一致するかはともかく、相手の中にあるものを受け取ることが大切だと感じた。人の気持ちを察することは、コミュニケーションを阻害する要因ともなる。予想ではなく、ちゃんと存在するものを扱う。そして、自分の主張もできるだけ伝えるようにする。相手の反応が良いものであっても悪いものであっても、それを受け止めようと腹を決めた。

「Fun with Cancer Patients」の紹介があったが、患者は相手によって言うことを変えている。医師、看護師、リハビリなど、それぞれに対して患者が話すことが違うのは珍しいことではない。患者も相手をみているのだ。「Fun with Cancer Patients」は利害関係のない第3者が入ることに意味があると思う。自分の思いを相手に気兼ねなく主張できる場所は、ありそうでないし、そういう場を欲している人は多いのではないか。外国の人と話すとき、尋ねてくれてありがとう、と言ってくれる人がいる。気になるフレーズではあったけれど、特に考察したことはなかった。日常生活の中で会話をするのは当たり前のことだけれど、十分に話す機会、満足に聞いてもらえる機会はそれほどないのかもしれない。関心が自分に向いて、満足いくほど話を聞いてもらえるということは貴重なことだったのだな。

また、高齢者に関わる医療・介護の現場で、実際に高齢者に関わっている“中”の人と、関わりの少ない“外”の人では当然感じていることが異なる。実際に体験することで身をもってわかることは沢山あるが、中の人の苦悩は外の人にはなかなか伝わらないし、外の人が感じる現場の違和感にも一理ある。その差が埋まらないと、家族同士でも不和につながりえるが、それを互いに理解しあうのは、現実的には当事者だけではどうにもならないことも多いとみる。だから、第3者が介入することはいいアイデアだと思う。第3者の一例がアート関係者なのだろう。私は芸術には疎いが、第3回で芸術は相手がいてこそ成立するのだと認識した。自分が何かを伝えた先に相手を感じられるのは、心強いことだと思う。

東京でつくる必然性

第1回目において「東京とは」の話の中で、東京は色々試することができる場所だという意見があった。東京は人口も多いし、属性も多様、情報へのアクセスも豊富など、地方にはない特徴がある。そして、これを書いていて、東京は第3者的な感じかな、と思った。対象となる人の特徴や地方の特性を考えることなしに、思う存分自分の主張をできる場所なのではないか、と。利害関係なく発信者と誰かを結びつける第3者。東京でつくるということを、そう思い当たって、少し腑に落ちた。

第四回 「東京にふれる」

「伝える」ことに関して 映像から得られたヒント

映像にはあたかも自分の目で見ているかのように見えるものと、より客観的に見えるものがある。写真であっても自分の視界を強く意識させるものもあるが、静止画を見るよりも映像では五感を使っていると思う。写真は映像よりも想像を必要とする一方、映像は動きがあるから、自分の五感や記憶、経験も動員して、より生々しい感覚を生じるのではないか。例えば、小林さんの太陽の映像では、紫外線は出ていないのに眩しいと感じる。条件反射とも脳の錯覚ともいえるような反応が起こる。久保田さんと話した時に、今回の映像の中には無かったが、動きの全く無い映像の場合はどうか、と尋ねられた。何か些細な変化があるかもしれないが、それを期待して見ていないとわからないかもしれない、というような答えをして、「能動的にみる」ということに話が及んだ。見る側の要因によって得られる情報が変わるのが映像となるわけだが、では、動かないものを1分間撮った映像と静止画を1分間スライドショーにしたものの違いを人は区別できるのだろうか。また、見た人の心の動きは違うのであろうか。手段として映像を使う場合に違いが出てくるので、気になるところだ。脳科学においては、見本を見せたり、イメージトレーニングをすることで、実際に自分がそうしたときと同じような脳の部位が働くということがわかっている。映像がコミュニケーションを活性化することには、見た人の脳が同じように働くことで、共感しやすかったり、より広く経験や情報を共有する側面があるのではないかと思ひ当たった。もちろん映像の中から得る情報は人によって異なるが、映像は繰り返し見ることができるから便利である。

映像から伝えたい情報を拾ってもらうための補助的手段として、ワイプやテロップを使うとのことだ。言葉は物事を定義する特徴がある。ぴったりの言葉があればよいが、しっくりくる言葉が無い場合がある。小さな子供が自分の感情を説明する語彙を持たず、知っている言葉で表すことや、外国語のほうがよく当てはまるような場合があることから、そう言える。つまり話し手の要因が大きい。その点、映像は定義をせずとも、相手に示すことができる。逆に、正しく受け取ってもらえたかはより大きな幅が出てくる。映像はオープンな伝達手段であり、見る側の要因が大きくなる。普段から言葉と映像は互いに補い合っていることは明らかであるが、言語や時間的要素は左半球がつかさどり、空間や音、イメージは右半球がつかさどることからも、言葉と映像は、伝える手段としては対極にあるのではないか。

では、伝えるのに効率のよい方法は何なのか。この流れだと、映像+言葉による説明だろう。しかし、自分が実施するプレゼンテーションにおいてよく使うのはスライドと言葉による説明、または実技である。プレゼンテーションには実に多くの要素が含まれている。使用するツールである映像、写真をとっても沢山の要素が含まれているのだ。私の場合、伝えなければならない情報があり、参加者の意識改革、行動変容を促して、健康増進を図る目的がある。そして、チャンスは1回きりかもしれない。

まずは、受け取る側の興味や意識を高めることが必要だろう。これまでも、興味を持ってもらえるような内容や言葉選び、実技の入れ方など、意識はしていた。だが、今回試してみたいと思ったのは、それとは少し違って、見る側の意識を自ずと揺さぶるツ

ールを準備するということだ。そういえば、これまでに映像を使ってプレゼンテーションをしたことがなかった。

普段自分の姿は見えない。そして、自分達が映っていれば、自ずとテンションが上がる。自分が映っている映像や写真を客観的に見ると、人から見える自分はこんななのか、とか思っていた自分像とは違ったことに驚いたりする。それが面白いと感じたり、納得いかないと感じたり、それら二つの自分のギャップを自覚することは意識を揺さぶるのに役に立つだろう。社員の労働風景を写真に収めることはこれまでもあったが、映像に収めるのも面白そうだ。見せ方を工夫したら、見てもらった時の反応に変化があるかもしれない。

より多くの人を対象に、意識を変えるようなプレゼンテーションにするための落とし所はどこなのか。いまだに闇の中だが、伝えた内容を“その場”で自分の生活の中に落とし込めるような、“能動的な”参加を得られるようなものが良さそうだ。非常に難しそうだが、情報を提供すると同時に皆の脳を働かせて、考えさせる工夫をしてみたい。

第五回 「東京で生きる」(阿部健一さんのご自宅にて)

前提

以前イシワタさんが、パーソナルなことを話してほしいと言っていたが、全くその通りだと思う。ある人が形成された過程であるとか、感性や思考、振る舞いとその根底にある前提が人間関係構築の基本要素だと考えられる。私は初対面で相手の個人情報聞き出すことを許されている仕事をしている。そこから得たものは情報として治療プログラムに反映され、本人・家族に還元される。客観的な事柄と主観的な事柄を拾い上げて、情報をつなぎ合わせて解釈し、仮説をいくつも準備しておく。治療しながら仮説を検証し、目標にたどり着ける最善を探る。パーソナルな情報が少なければ少ないほど、治療の目標が設定しにくい。

職業によって独特のキャラクターがあるが、同じ現実を前にしても、注目のポイントは違うし、同じことへの向き合い方も違う、と感じさせられる。スタディに参加していてもそう思う。その一側面として、私は“Why”を重視して解釈をする傾向があるように思う。例えば石神さんは“How”にウエイトを置いていると理解した。この言葉を当てはめるのは正しくないかもしれないが、曖昧だったことを取り敢えず整理できたのは、なかなか新鮮だった。

今回のスタディでコミュニティは信用だと言った。信用は前提の共有ではないかと思う。コミュニティにおける多様な人々はバックグラウンドが違い、前提が異なる。前提が違うということは、自分の当り前が人と違うということで、許容できない場合は衝突するだろう。前提の違いを誰に合わせるか、どこまで摺合わせるか、どうしたら共有できるのかが問題となるのではないか。

地方から東京に出てきた場合は、地元での前提と東京で過ごすときの前提を使い分けており、いわゆるダブルスタンダードを持っているのだと解釈できる。地元へのUターンを失敗する例では、東京での前提が知らぬ間に強くなり、地元の人からすると違和感

が出ているのかもしれない。地方から東京に出てくる人は、大体が東京に合わせるつもりで出てきているから、これまではそこそこ何とかなったのかもしれない。これからは、外国人労働者や観光客を含め、コミュニティにける前提がより急速に多様化するだろうが、それらの人々が東京の前提に合わせるつもりでいるとは考えにくい。前提の違いにすら気が付かない可能性もある。

今の世の中は色々なことがものすごい速さで変化しているが、その変化をポジティブに捉えることは少ない気がする。長い歴史で見ればこれまでもいろんな変化があったのに、今ネガティブに捉えられる理由は何なのか。東京の前提、日本人の前提が危うく感じられているのだろうか。

阿部さんの話において、プライベートなことに対して他者が興味を持つことへの難しさが挙げられたが、前提の共有という面から個人レベル、コミュニティレベルでこれからの課題だと考える。同じような問題を抱えている他のコミュニティが存在するかもしれない。しかし、その前提は違うかもしれない、向き合い方も違うかもしれない。自分たちとの比較であれば興味を持ちやすいだろう。問題を共有することで、他のコミュニティとつながり連携することも可能だろう。プレーヤーを増やして、多くの頭で問題に取り組むことは、これからの急速な変化においては必要なことかと思う。

結局のところ、「東京でつくる」には東京の前提を自分なりに解釈しなければならないことと、自分の前提を整理しなければならないところに戻ってきた。スタディに参加して、普段と違う頭の使い方をすると、酔いそうになるのは貴重な体験だった。そして、多くの考えに触れて、新たな気づきがあったり、曖昧だったことを整理できたので、よい機会であった。

Profile

ペンネーム：RuS

医療従事者。近年、効率よく効果的に伝えることに課題を見出す。相手の意識を変えられるようなプレゼンテーションをしたいと思っている。同じタイプの頭の人が集まると、思考や感覚が似ていて楽しいけれど、異なるタイプの頭の人と話した時の霧が晴れるような、瞬時に目が覚めるような感覚、これがまた好き。

新堀 学

Manabu Synbori

皇居のプロジェクト、震災復興支援など都市に関わる豊富な経験と、建築家としての哲学的思考。「自分が／自分のつくったものが東京をつくっていく」という視点はこのスタディ全体に重要な示唆を与えてくれました。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

「東京で話す言葉、 東京について話す言葉」

第1回セッションでは、多くの人がいろいろな「疎外感」を口にしていたのが、印象的であった。そこで感じられている「疎外感」こそが、東京への距離なのだろうと思った。

眼差しを外から東京へ向ける時、そこに映される「東京」の姿は実体としての東京であるのか、「東京について」の写像なのか。そういうことを考えるときに思い出したことがある。

生まれた埼玉県の新大宮市の昭和の後半ごろの環境は、武蔵野の雑木林が宅地造成で切り開かれていった場所だった。いまなら「里山」として愛され、大切にされていったであろう、江戸開港期以降の財産として大切に育てられてきたであろう山林は当時の高度成長期にバッサバッサと切り倒され、ひな壇や区画割の直線に置き換えられていった。そしてそのことを誰も「損失」とは考えなかった時代。

そういった、新興住宅地へ移り住んで定住し始めたのは、当時「ホワイトカラー」と呼ばれた人たちであり、東京で働き、家を近郊に持つという生活スタイルの人々だった。

そこで話されていた言葉は「標準語」と呼ばれる、いわゆるNHKのアナウンサーの言葉であり、そこで育った子ども達（自分達）も、それが当然だと思って育ったのだ。流石にテレビを正座して見る時代ではなかったが、今のように大阪の芸人が出ることもなく、アナウンサーは厳しい訓練を経たコントロールされた話し方をどの局でもしていた。学校で教わる言葉も、また友達の話す言葉も同じ「標準語」である環境では、言葉＝標準語だと刷り込まれるのは当然のことだ。

（ここでいう「標準語」とは、明治中期以降に教育を通して全国へ普及させられた「国語」の言語を指し、結果としてそれが「共通語」として浸透していった経過も含め、二つを区別して考えられた概念だ。それによると「標準語」とは理念であり、「共通語」とは状態を表すとされている。）

ここに「首都圏の言語と動態にかんする研究」という興味深い結果がある。<http://pj.ninjal.ac.jp/shutoken/5-2.html>

そこには、関東周辺の移住してきた第1世代の習得した共通語で育った第2世代という考え方が示されていて、まさに自分はそれ

であり、ある意味では「母語＝方言」を持たないことがルーツであると認識された。（もっとも、現在の第3世代、それ以降になると、「新方言」という概念がうまれてきていて、それはtvなどのメディアが影響を与えて生まれたものとされている。）

そして、いわゆる地理的にいう「東京」には、「東京弁」という「母語」が存在していることも、言語学的にはほぼ確立した見解ということも分かった。

つまり、共通語というのは実態としては「東京」そのものの言葉ではない、ということである。「東京」には共通語と別に「母語」があったのだ。

「歴史を剥ぎ取られた更地」に生まれ「母語を持たない」自分が、そのありようを強く認識したのは、東京の大学へ通うようになって日本各地からきた同級生と日常話そうようになってからであった。それまでは同じ環境の同じバックグラウンドのコミュニティの中で、そのことが意識されることは、上に述べたようにほとんどなかった。

たまたま、なぜか西側の方の人たちが多く、大阪、四国や九州の彼らと話すとき、自分の母語と共通語の2つのモードがあることに気付かされたのだ。

若い時にありがちなことだが、そういった「目に見えるアイデンティティ」を「自分のかけがえのなさの拠り所」と混同する時期に、半ば嫉妬しながら彼らに尋ねてみたことがある。「お前は頭の中でどっちの言葉で考えているんだ？」

彼らにしてみたら考えたこともない、考える必要もないと思われるそんな問いかけに戸惑いつつ答えてくれたのは、「ようわからんけど、自分の（地域の）言葉ちゃうかなー」というものだったのだ。（もちろん「アホなこと考えとんない」とおまけが付いてきた。）

今考えて見ると、答えの内容は口語vs文語だったかもしれないのだが、現れ方としてはまさしく母語vs共通語だったのだ。そのことは、坪内逍遙の「言文一致」というイデオロギーが標準語／共通語に優位性を与え、その標準語／共通語に与えられた「東京の言葉」というステータスを裏から支えてきた歴史を逆に照らしだしている。

ところで、空間的な「東京」には、東京弁という「母語」があると先程書いた。

言語イメージ的な「東京」の言葉とされてきた標準語／共通語は、結果として空間的には中心の「東京」に純粹に存在することなく、むしろその周辺（南埼玉、西東京、横浜山手、千葉北部あたりか）に、特に移住群の第二世代と第三世代において身に備わったものとなっている。言い換えると「母語」としての関東方言と東京弁の隙間に、また時間的には昭和後半に展開された「事象」だ

ということができるだろう。

一方で、その言語事象圏の外側から見ると、その本来の東京弁圏を囲む「殻」のような共通語圏こそが「東京」のイメージをかたちづけているという二重の重層構造が存在していたことがわかる。

言い換えると、昭和の後半においては空間的な「東京」への距離は言語イメージ的な「東京」への距離との相関関係を持っていたが、その「東京」という空間の中心においてはむしろ言語イメージとしての「東京」が存在しないという、地軸と磁極のずれのような状況だったのだ。自分が生まれた埼玉南部から東京北部は、その「共通語」からの偏差が最も少ない、漂白された場所ということができるだろう。

しかし、上記の言語研究からは、平成以降現在はその共通語も変異し「首都圏方言」となりつつあるという。しかもそれは、メディアによる伝搬によって、日本全国において「共通語化」していく過程にあるという。もはや、空間的な「東京」への距離が、言語イメージとしての「東京」とは無関係に近い。むしろ「東京」自体はそこから逃れ出ていく。

それはすなわち時間的にも、空間的にも、外から目指されていた「東京＝共通語圏」というイメージが失われつつあることといえるのではないか。確かにSNSのコミュニケーションも、メディアでの用語も、書籍の衰退も含め、かつての言文一致というテーゼは、「口語」の優位、「文語」の消滅に向かっていているということなのだろう。

それは、明治以来140年近く続いていた「共通語」の終わりを以てそれが一つの「社会実験」であったと、「近代」同様に未来において総括される。

本題の「東京でつくること」に立ち返るならば、その「東京」のイメージを作ってきた言葉が、「首都圏方言」の中に消え去っていくとする中で今我々が使うべき言葉、すなわち「東京について」語る言葉は何かを探すということが、このワークショップの一つの目標になりうるのではないかといまは考えている。それは文体なのか、書体なのか、あるいは叙述的な何かなのか、いろいろ議論できるとおもしろいと考えている。

「東京で話す言葉」と「東京について話す言葉」の乖離がその試みの中で統合されるのか、そうでないのか。その乖離が冒頭の「疎外感」とどう結びついているのか、いないのか。そういうことをどういう手掛かりから考えていけばいいのか。

その言葉を探る道のりの中で、消えつつある共通語という手立てしかない自分の言語の原型が「母語にあたる自らの言語」を獲得することができるのかかもしれない。

第二回 「日本から離れてつくる」

「見えないものを語るための試み」

2007年にリスボン建築トリエンナーレの第一回が開催され、建築評論の五十嵐太郎氏を中心とした日本の展示チームが招聘され

た。テーマは「アーバン・ヴォイド」、「都市の空虚」というものであり、この課題に対してチームは「東京のヴォイドー大・中・小」という提案で応えることになる。大は皇居についての提案「皇居美術館」、中は空き地／パブリックスペースのリサーチ、そして小は隙間へのパラサイトというものだった。このプロジェクトにおいて、「皇居美術館」をアーティストの彦坂尚嘉氏とともに提案することになった。リスボンでの開催は5月末、プロジェクトの起動は前年の12月。インボイスほかの手続きを考えると準備期間は正味三ヶ月の短距離走のプロジェクトだった。

<http://10plus1.jp/monthly/2007/06/28185016.php>

東京の中心にありながら「空虚」とロラン・バルトに呼ばれた「皇居」は、かつての「江戸城」だ。開府まもなく消失したが、「塔」の一種として視線の焦点として仰ぎ見られていた天守が、今年150年となる天皇の「入城」によって「皇居」という名の「仮住まい」と姿を変えることで、むしろ「直接見つめない」ことによりその地位を作り出していく。その構造は、バルトが指摘したように単なる交通の不在という物理的な構造だけによるものではなく、むしろ国家や市民、近代という制度をかたちづくる「礼」や「儀」という「プロトコル」によって教化されて出来上がったものの、心的な構成にほかならない。

理念（コンセプト）としての「皇居美術館」とは、アーティスト彦坂尚嘉のオリジナル構想であり、「世界に比肩する日本の美術全てを集め、＜見せる＞」ことで美術、芸術を＜日本という国家＞の新しいOS（オペレーティングシステム）としようとする大変に野心的なものだ。彦坂は現代美術家としての活動と並行して、70年代より自主研究としての＜全ての美術、芸術を格付けする＞というこれも壮大な物差しを作ろうとし続けている。この二つの活動は＜私性＞に自閉しがちな美術、芸術を社会に開くことへの試みであり、また社会を美術、芸術から語る試みであった。その構想を下敷きにチームから自分に課せられたのは、構想に＜かたちを与えること＞。1970年代のマスターアーキテクト、ルイス・I・カーンが自ら語ったように＜フォーム・ギバー＞としての建築家の役割であった。

そのためのスタディの方針は大きく二つ。

・皇居の「空虚」の意味である、その心的構成を空間的構成として語り直すこと。

・彦坂構想を皇居の場所性と調停させ、＜なりたち＞と＜ありよう＞として一つのプロジェクトにすること。

そのことが＜皇居＞と＜美術館＞との双方に対しての自分の距離を描き直すことに他ならないと気づいたのは、スタディ自体が完成してからのことであったが。

まず、皇居自体の大きさ・サイズを空間として把握するために、世界美術館の数々をサンプリングして「皇居＝江戸城」にはめ込んで見るというスタディを行なった。（図1）すなわち「美術館を蒐集する」美術館があったとしたら、というアプローチだ。



(図1)

驚くべきことに、ルーブル美術館、大英博物館、ウフィッツイ美術館、メトロポリタン美術館、ベルリンの美術館島、パチカン美術館、そしてピラミッドまでもが全て敷地の中に収めることができることがわかったのだ。

フランスのアンドレ・マルローが1950年代に提唱していた「空想美術館」が＜空想＞として現前したことに、チームは勢いづいた。それは18世紀イタリアでピラネージが描いた空想のローマ、「カンポ・マルツィオ」を想起させる、「もう一つの皇居」が現れたのだった。

一方で、そこ（皇居）に「もの」を建ててしまえばそれは単なる「空虚の消去」となり、その＜なりたち＞の中心は消えてしまうことが予見された。とても魅力的な可能性を秘めた空虚であることは理解されたが、であるからこそその可能性の消費に陥ってはいけない。そもそも「空虚」の心的構成はいつ確立されたのか。

原武史の「皇居前広場」を引くならば皇居が実際にタブー化されていくのは、むしろ戦後のことであり、個人や経済を軸に東京の現代が作られていく過程こそが、その陰画として「皇居」についてのタブーを形作っていくことが読み取れる。しかし、2000年代においてすでにその過程は忘却されつつあり、本来社会の規範としてのタブーのなりたち、その輪郭はむしろ折り返されて、個人の中に内在するパノプティコン的な位置に移行していったと言えるだろう。誰が何を基準にタブーとするのかを共有できないまま、雰囲気としての禁忌が覆っている「皇居」という概念と実空間の乖離構造こそが「空虚」の心的構成の本質ではないだろうかという仮説にたどり着いた。その上でパノプティコンの牢獄を脱するには、監視者の視線を可視化する＝フォームとして認識できるひとつのかたちを与えることによって監視者の存在／不在をアンマスクすることが必要だとすれば、ここで要請されるのはそこにある不定形の禁忌に輪郭を与えることだろうと考えた。

人々の心的構成がそれぞれに「見えない禁忌」を感じ取るとすれば、それはある種の排斥力としての表れであろう。なんでもできる、何をやっても許される自由な空間「ではない」という心理が人々の思考や振る舞いを限定することが、その場所性をかたちづくり、結果としての「空虚」を作り出しているとすれば、各人が受けるその＜力＞ベクトルの総和は定義上どこかに中心＝重心を持つことになる。言い換えるとそれぞれが心の中に持つタブーの

中心の総和が大きな一つの排斥力の中心を作り出すイメージだ。その排斥力が中心を持つならば、力の大きさは一種の球体で表すことができるだろう。

皇居美術館がまさに＜皇居＞に存すると同時に、この「皇居」をかたちづくる斥力がアンタッチャブルな球体として可視化される、そのようなプランを発表することにした。

その球体は半径700mの円弧で地表面に「void」を描く。その円弧を一方で建築の輪郭として、一方では堀の拡張を以て、「フォーム」としてかたちづくるのが、プロジェクトの結論となった。この円弧のヴォイドは「思考停止の空間」として＜建築＞されることになる。（図2）



(図2)

「見えない」ものやことについて「語る」ことができるかどうか、そこに作用や影響という「関係」（この場合で言えば「見えない禁忌」の心理）が「ある」のであれば、それに輪郭をあたえるところから「語る」平面を作り出していくという戦略があるのではないか。語ることにより、そこに「存在」が立ち上がる、そういう空間をまずは「輪郭」として切り出してみることが可能だろう。「輪郭」とは物質、実体を与える、置くことだけではなく、「空虚」や「不在」によっても形作ることができるのではないか。＜オブジェクトの存在＞によって認識される輪郭だけではなく、＜オブジェクトの不在＞にも同様に輪郭を認識することができるのではないか。

この試みの先に、実はいまわれわれが生活し活動しているこの世界においても、「見えるものやこと」に隣り合わせで「見えないものやこと」の存在が、見いだされ、語られることを待っている、そういう可能性と共に見えるようになってきた。かたちと同時に、かたちを形作るちからのかたちにも同様に注目が可能なのだということだ。

「あいだの空間」というとても大好きなタイトルを持った本がある。今回の内容とはまったく別の内容の書籍ではあるが、この「不在の構想」を通じてまさにわれわれの想像力が「あいだの空間」へと拡張されることへの希望を持ち続けている。

第三回 「ここで作る／ここではないどこかで作る」

「震災のあとー「日常」と「非日常」

東日本大震災から7年半が経ち、少なくとも東京において「被災」「復興」というものが日常の話題の前提に必ずついてくるといふ会話は、むしろ珍しくなっている。

ほぼ日本全土が「非常時」に突入し、個人レベルでも集団レベルでもそれまでの振る舞いのコードを変える、見直す、新たに考え出すことを強迫されていた日々はさしあたり表面上は過去となったように見える。

本当にそれが過去になったのかについて問うことももちろん大事であろうが、ここではその「今」について、東京とは何かと共に考えてみたい。

震災近傍の過去を「非常時」と書いた。それは生にとってマイナスの意味で「常に非ざる時」であり、それゆえに「常態」がない、すなわち全てのことにについて多かれ少なかれ、何をどこから考えるのか、何を意識して動くことが、自分（たちの）存在を未来につなぐことになるのか、を自ら判断し、行動することを避けられない、強いられる状況だった。

「非常時」の到来によってさらに過去になった、それ以前の日々、生きられていた「日常」とは、言い換えるとそれらの自分（たち）とそれ以外の世界との境界について生存のために意識し、判断し、行動するということを強いられない、更に言い換えると「意識せずに」生きていられた状態＝無条件に信じられた明日に他ならない。

しかしながら「日常」を取り戻すことによって不要となりつつある、この自ら意識し、判断し、行動するという姿は、そもそも「近代的自己」として理想化した「人間」の姿だったのではないだろうか。自然の無意識から「自己」という意識を切り出し、それを判断と行動によって確立すること、それこそがひとを「近代人」たらしめる姿であったのではなかったか。状況が過去となり「日常」を取り戻したとき、そこでは必ずしも自己決定をする「近代人」であることが、生を持続させるためには必要ではなくなる。「自己」の生のありかの一部または大部分を「文明」が代行してくれるということに対する、自然な応答でもある。そういう生を許す「日常」の価値、かけがえのなさ、その外側である「非日常」からこそよく認識されるのだ。

ここで、無意識に生きることを許す常態としての「日常」と、たんなる日々の状態を指す＜日常＞を括弧によって区別することにする。

「日常」を、意識を向けることや判断を必ずしも要求しない無意識の生の側、「地」として考える時、変化や差異によって意識を向けさせられる「像」をかたちづくる側にあるものを「非日常」と呼ぼう。震災のような災害やオウム真理教の事件など「非常時」もその中に含んだ「非日常」はしかし必ずしもマイナスの意味ばかりということではない。生を危うくしない状況において「自己」を自立させる覚醒や想像力をもたらすもの、そういったものを「日常」に倦んだ私たちは求めることがある。それは、

「快適」と「快樂」の関係にも似ている。

「東京」というフレームでいえば、その「非日常」が選ぼうと思えば、いくらでも拾い上げられること、そういった「非日常」が＜日常＞的に転がっていること、それが東京とその他の場所との大きな違いだといえるかもしれない。それは想像通りの退屈な明日が来ないことがイメージの中の東京に期待される価値であり、そのことが東京における＜日常＞だという逆説が、「東京」のなりたちを作っている。

「つくる」ことが、世界に対して多かれ少なかれ何かを付加することであることを認めるならば、その前と後では、世界のありようは変化するということだ。そのことこそが「つくる」の目的だと言い換えてもよい。その変化が「日常」的な了解を超える場合、その変化は「非日常」として人の意識に影響を与えることになる。と同時にその「非日常」が、「東京」の＜日常＞を強化してしまうことに、私たちは気づいてしまう。

そのことの良し悪しはともかくとして、その「非日常」に囲まれた＜日常＞が人々にとって、「非常時」と同型の意識、判断、行動の「近代人」としての振る舞いを要求していく。「つくる」という行為は、そのことを前提として成り立っているとも言えるだろう。ここにおいて「東京でつくる」ことは、その＜日常＞とそこでの「近代人」的な生き方の強制の双方において「東京をつくる」ことへと転換してしまう。

そのフレームを意識せずに行われる「つくる」行為は、それがどういう意図で誰に向けられたものであるにせよ、「東京」という状態の強化、持続へ加担することになる。言い方をかえれば強制的に持続させられる「非日常」が東京の＜日常＞であるともいえる。

では、その循環から逃れて自由な創造は不可能なのだろうか。

敢えて、震災から7年半後の「東京」の＜日常＞を「被災」状況と考えてみることに、そこからの「復興」を目指してみることに。そこに、可能性があるかもしれない。すなわち、震災から「日常」を取り返す、改めて「つくる」ことを行うように、東京の「日常」を目指してみることである。

それは「文化」予算がお行儀よくつくようなものではないかもしれない。むしろサバイバルの行為としてなんでもあり、とせざるを得ない。いま自分に使えるものを、自分が使いこなすこと、目的をはっきりとさせた行動を選ぶこと。

しかし、その試みは、実はすでにいくつかがスタートしているようにも思う。

東京の中のそれぞれの場所を発見し、使ってみて、活かしていく。例えば、このアーツ千代田3331のような場所を立ち上げ、使い、持続させていく活動もその一つとして数えられるだろう。

自分が考える、こうありたい小さなカフェを作ってみることもそれかもしれない。公園を市民の手に取り戻す、楽しく使うためにきちんと管理することまで考えるなどなど。

「つくる」の立脚点を非日常的な東京の＜日常＞の中に埋没することなく、再び確かめてみることに、東日本大震災から7年半の今私たちはその日々をなかったことにすることなく、考えてみる時ではないだろうか。

第四回 「東京にふれる」

「東京でつくる／東京をつくる」

3年前に東京の東側へ事務所を移転した。

山手線の東側で生活するのは人生の中でも初めてのことであり、まだどういう方向にどういう場所があるのか、身体に浸り込んでいない感覚が残っている。

基本的に、このエリアは江戸→東京の過程で埋めたてによって拡張されたエリアであり、土地自体の記憶といっても300年ぐらいのものであることが、地割、地形そして掘割などからも感じ取れる。元々のデルタ地帯が埋め立てられ、例えば木場が木場となったのは、明暦の大火の後、18世紀の始まりである。そして、現在の街区は大正12年の関東大震災後の復興街区事業により作られたものだ。そこから数えれば、まさに90年の成り立ちということになる。

そこには自分の新参者としての意識が重ねられているのだと思うが、建て替わりつつある高層マンションを見ても、なぜか今も「仮住まい」の感がつきまとっている気がしてならないのだ。

新田開発の埋め立て→物流の要路としての水路の整備→幕末の観光、文化のアジールとしての江戸の東、深川は職人の町という都市生産の場→近隣工業地帯としての明治・大正期→震災後の都市計画→工業活動のスプロールによる住居地化と交通幹線の整備→高層マンションの建設、という流れがここに至るまでの街並みを作ってきた人々の営みだ。それらが、重なり合って、あるいは先行するものの上に被さって、今見るこの街の姿が成り立ってきた。

ではその営みはいわゆる「まちづくり」と呼べるものなのだろうか？

2012年から4年半ほど、気仙沼市のある地域で仲間たちと防災集団移転の支援を行っていた。防災集団移転とは、いわゆる高台移転、津波災害前に水産業などの仕事と共に海岸側で営まれてきた、集落生活を、今後の予想津波水位より上の土地へと移すことだ。理屈も言い方も簡単だが、この生活の場を移すことの大変さは、ほぼ新しい土地の開拓に等しい。地域を特徴付ける、水面は空間的にも、生活的にも、生産的にも、生活の場の基準、根幹であったからだ。行き来ができる距離であるとはいえ、そこから切り離された「新しい営みのかたち」をつくることこそが、防災集団移転という「事業」であるといっても良いだろう。物理的な土地や建物の移転は、それを支えるためのものなのだ。

この防災集団移転の中で、我々が三つの集落で支援したのもその生活を支える場としての土地の造成、区画計画、そして、住宅建設であった。生活の再建全体の中の一部であるが、これら生活空間の再形成は具体的であるがゆえに、成果を確認しやすく目標となりやすい。具体の力に引っ張られすぎないよう、中間支援NGOと連携しつつバランスを考えて進めた。

その防災集団移転の中で、ある時まさに「まちづくり」について検討するタイミングがあった。いくつかの先行する住宅地の事例を紹介し、またその事例を実際に皆で見に行くなどする事で、

「ルールなど不要」というメンバーも、話し合ってみようという機運が出てくることになった。具体的な内容としては、隣地や、公道に面した敷地境界周辺には空地を取ってセットバックするというものだ。そのセットバックの量、またその部分の建築以外の使い方などの具体的な内容を、集落それぞれに考えた。地形も近隣関係もそれぞれに異なる三つの集落で少しずつかたちの違う「まちづくりルール」がまとまっていった。最終的にこれをどう実施するのか、また従わない人に対しての対応はルール化するのが議論となった。その時点でも、まだ1割ぐらいの人は「自分の土地なのにそれが自由に使えないルールはいらないんじゃないのか。」と考えていたように思う。会議では、かなり意見を闘わせる状況があった。

少し専門的な話になるが、いわゆるこれらのルールを、ルールとして共有するには、地方自治体と共に条例に準ずるものとして定める「地区計画」と、地域住民が自主的に決めたものとして、後からくる人たちと取り交す契約的な約束としての「地区協定」のいずれかとするのが一般的だ。前者においてその執行は行政が行い、後者においては利害は司法が調停する形で、ルールの一線は担保される。

ここでの「まちづくりルール」のありようはどうするのがふさわしいのか、支援メンバーでも議論した。考えていたのは、この地域の人々の自立した文化の気高さであった。異論があっても、話し合いを丹念に重ねること、通常の「まちづくり」の場で成立させるために苦勞をする、対話のベースが自ずと形成されていったことは、率直にいて地域の文化レベルの高さだと考えられよう。そういった望ましい近隣関係が「たとえなくなっても」ルールが担保されるためにあるのが「地区計画」だったり「地区協定」であるのだが、そこで考えなければならないのは、大事なのはルールなのか、それともこの近隣同士の関係なのか。

それまで、3年ほどを共に過ごしてきた我々には、この地域の近隣関係こそがこの地域の価値だと思われた。

では、何も外形的な成果物がなくて良いのか。支援チームでも議論を行った。結果として提案することにしたのは「申し合わせ」という呼び名だった。

そこに含意したのは、ルールに触れることが必要ならば、少なくとも近隣、できれば集落の合意を相談すること、また、計画や協定のように、変更に時間と手間のかかるものは固定化されがちだが、これらの集落の未来において、対話のベースで見直し、修正ができるものとしておきたいと考えたことだ。

このような「申し合わせ」として、ルールは各移転協議会で承認されることになった。

この件の中で、街並みという外形の意味について、集落の人たちに問われ、支援チームも色々と考えた。「良い街並み」という価値は、誰に取ってのどういう価値なのか。まちづくりの成果とされる「よい街並み」とは、実際住まい手にとって何であるのか。職能として「まちづくり」の場に臨むことも少なくないが、いつも建築や都市計画の専門家が、そのような外形的な成果を目指すこと、答えがここにあるということを前提とすることに、抵抗があったのだ。

この気仙沼での経験では、そのことに向き合う中で、80歳のお

ばあちゃんにもその意味を伝えなければ、集落の合意とともにというこれまでの進め方が壊れてしまう。むしろ、その対立が生じた時点で「みんなで移転する」という防災集団移転の原点が壊れてしまう。

そういった根本に立ち返りつつ、進めてきたこのプロジェクトは、職能の原点を見直す時間でもあった。

結論から言えば、「ルールは、防災集団移転のメンバーが、これから仲良く暮らすためのもの。街並みはその人間的関係が良ければ、自ずとそれを表すものになる」ということに思い至ったのだ。そう考えれば、無理にハードな規約にしたり、公園のようにインスタグラムに載せたいような景色をルール化することではない、とてもフラジャイルで柔らかなものが出来たことは、むしろこの場所らしいと思った。

再び、「東京でつくる」について。

気仙沼の集落の「まちづくり」について、逆転させて考えてみる。そこに住む人の「営み方」が作り出す住まい方の「作法」、それが作り出すまちの「かたち」。当事者でない我々はその表れた「かたち」にしか立ち会えない。そしてその「まち」そのものと受け止めるのであるが、しかし「つくる」の対象、「つくられたもの」はその前の「作法」であり「営み方」の方であるということだ。震災の時に別の活動で作られた本のタイトル「つくることが生きること」（それは和辻哲郎の本歌がさらにあるのだが）を引き合いに出すまでもなく、東京で「いきること」が東京で「つくること」であり、東京＜を＞「作ること」なのだ。

人が生きていく中で、否応無しに自分の周囲の環境との相互の関係を持たざるをえないこと、それは人のふるまいそのものであり、それ自体が環境そのものを変え／つくり、環境そのものになっていく。

それが、東京でつくる・東京をつくる意味なのではないだろうか。

第五回 「東京で生きる」(阿部健一さんのご自宅にて)

「シュレディンガーの猫たちの交信」

この東京プロジェクト01において、エッセイは個人が個人自身、および自分の中の東京と向き合うことが求められる一方で、各回のセッションは基本的に「同じ場所、同じ時間、同じ体験」を共有する形式で重ねられてきた。エッセイが自省の中に「東京」との距離を考える「観察」だとすれば、セッションはお互いの「東京」への距離を「観測」することで、そこに場をつくりだすことであつたといえるだろう。これをお互いがお互いを「観測」する場でのセッションという言い方もできるかもしれない。この相互の「観測」とそれに対する「反応」が生み出す場について、それが「同じ場所、同じ時間、同じ体験」というフォーマットは、たとえばパフォーマンスの場でも実は自明なものではないのかというのが、本稿のテーマだ。

ある行為は新しい「物事の生成や状態」として観測され、そこに受容の認識がなされることでコミュニケーションが成立する。そのプロセスの同一性、体験の同一性について考えてみたい。

セッションを形作る「同じ場所、同じ時間、同じ体験」について、例えば「会議」の最中でも、近年は通信端末を手にして、その場と別のコミュニケーションを行なっているケースが日常に見られるようになっていく。それを考えると同じ場所、同じ時間、同じ出来事であってもその場所にいないが、また別のコミュニケーションの場にいる状態が「重ね合わされて」といえないだろうか。

「シュレディンガーの猫」という良く知られた思考実験がある。量子力学的なスケールにおいて、物質の状態は「観測」が行われるまで、確率的な状態の重ね合わせとしてしか記述できないということの異常さを、アレゴリカルに問題提起したものだ。

「蓋のある箱を用意し、その中に猫を入れる。箱の中には、ラジウムを一定量、ガイガーカウンターとそれにつながる青酸ガス発生装置を入れる。ラジウムがアルファ崩壊を起こすと、その時に発せられるアルファ線を感じたガイガーカウンターの作動によって、青酸ガスが発生し猫が死ぬ。一定時間後の猫の生死は、量子力学的な解釈によれば、物質の状態が波動関数として重なり合ったラジウムの崩壊確率（アルファ線が発せられる確率）によってしか、記述できない。すなわち、箱を開けて観測されるまでは、この猫の生死は確率的に＜重なり合った＞状態ということになる。」

当然、箱を開けその様子を「観測」するとき、猫の生死はいずれかに＜収束＞してしまうことになるが、その前の状態（原子の状態）はその「観測」によって変化させられてしまうため、それを持って箱を開ける前の状態とイコールとできない。

もちろん、この思考実験は量子力学が「量子力学的スケール」において、存在と状態を確率で書くこと自体への批判として組み立てられた詭弁にも近いものではあるが、我々の日常的なスケールでの物事の振る舞いと、原子的なスケールにおける物事の振る舞いの間にあるギャップはいまだ解決されていない。それは、「観測」という相互作用、コミュニケーションについて当たり前のように我々が考えてきたことの意味を改めて問い直すところへと導いていく問いなのだ。

たとえば、コミュニティ、社会集団に関することにおいても、複数の帰属をもつ人があたりまえの時代において、東京はその選択肢は恐らく日本の他の都市に比較しても多様だし、多数だ。実際の空間に縛られないネット空間の選択性や容易性と同じといえるほどに、そこに多数の参加機会がぶら下げられている。体験側から言えば、それらへの帰属のパーセンテージをブレンドしながら、自分の生活の色合いを作り、その混交比率がその人のパーソナリティとなるのだろうか？

ここに居ない時点においてその相手の存在自体が、比喩や思考実験ではなく「確率的」にしか認識できないということが、むしろ現在の東京のリアルではないか。

その電子雲のような確率的存在同士の相互作用としてのコミュニケーション。

複数の他者が空間的に場を共有しながら、相互関係としては確率的なそのありようは、何なのだろうか。

再び、東京でつくることについて。

「東京でつくる」ということを、何を手掛かりにしたらよいか分からないものを相手にしていると感じる、だから考えたいという話がセッションの中で出た。

手掛かり、手応え、思考が扱うスケールというものを仮定することで「つくる」がある対象や焦点を持つことができるということ自体を、再考するのがこのスタディのもう一つの方向だったとするならば、「今、ここ、同じ体験」が、絶対的に同一ではないということを示唆するシュレディンガーの思考実験的な認識の上では、何を「つくる」の対象語とできるのか。機械の中の歯車が噛み合うような手応えのあるダイレクトな相互作用ではなく、複数の点からの発信と受信が確率的に成立したりしなかったりする、そのような中で、「つくる」が成立するための条件とは何なのだろうか。

「東京」の手ごたえの心もとなさを相手にするということは、そういった電子雲のような個人を相手にする意識をどう持つかということにもつながるのかもしれない。

あるいは、「つくる」自体が分割され拡散して、常に小さな「つくる」が生成しては消えていくという方がイメージとしては近いのかもしれない。それらの小さなあぶくのような「つくる」が、集まることで雲のような形象として、東京の姿を描くのではないか。

場というチャンネルを相対化する、シュレディンガー的な存在は、しかし逆に場を再定義することを求める。劇場という場がどのように構成されるのか、ギャラリーという場がどのように構成されるのか、さらに言えば、例えば渋谷のスクランブル交差点をそのような場として使うためには何が必要なのか。それこそが、いま東京でつくることに求められる想像力なのではないか。

Profile

新堀 学（しんぼり・まなぶ）

建築家。1964年埼玉県生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。安藤忠雄建築研究所所員を経て、1999年より新堀アトリエ一級建築士事務所主宰。独立後、リノベーションを中心として、設計のみならず建築の保存再生から地域文化活動へと広く携わる。一般社団法人HEAD研究会理事、一般社団法人住宅遺産トラスト理事。

高須賀 真之

Masayuki Takasuka

愛媛、つくば、三鷹を歩き来しながら見つめる「東京でつくる」。読者として、最後に「問いの生まれた場所」に連れてきてもらえた気がして、深く納得しました。俳句や短歌を重ねて描く「東京」の風景も印象的です。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

「東京」はだれのもの？

「東京」とはいったいだれのものなのだろうか。

それぞれの自己紹介を聞きながら、そんなことを考えた。「東京」というイメージがひとつに固まるわけではなく、むしろ他の方の話を聞けば聞くほど「東京」というもののイメージがバラバラと断片的になっていく感じを抱く。あたかも古代の化物「鵺」（ぬえ）のような感じ。きっとさらに他の人に聞けば、また違った「東京」のイメージが生まれるんじゃないか・・・では、じゃあ、「東京」とはいったいだれのものなのだろうか？

※

＜マッチ擦るつかのま海に霧深し身捨つるほどの祖国はありや＞。若かりし寺山修司が書いた短歌。たとえばこの「祖国」ということばを「故郷」に置き換えてみる。はたして、「見捨つるほどの＜故郷＞」は、自分にあるのだろうか。

第1回のスタディのちょうど一週間前、実家に帰省していた。帰ると祖父に「すっかり東京の人の顔になったなあ」と言われた。でも、「東京の人の顔」というのがどんなものなのか、自分にはよくわからない。

実家に帰ってもやることもなく、ぶらぶらと家の周辺を散歩した。この街にはなにもない。最近市の主導で宅地開発が進んでいるけれど、まだまだ畑と田んぼが広がる風景が残っている。つまり「田舎」だ。自分が人ごみが苦手なのは、「田舎」の出身だからだろう（一度新宿でパニックになりかけて慌てて三鷹まで引き返した経験がある）。街の名前を問われても、愛媛の人でなければまずだれも知らないような、「田舎」の街。もし人から「故郷は？」と問われれば、迷わず「愛媛」と答える。答えられる。じゃあ、この街が「見捨つるほどの＜故郷＞」かと問われたら、首を縦に振るだろうか？「たぶんここには帰らないだろう」と、散歩しながら、そう考えている自分に気づく。帰省中、祖父から「こっちに帰って来い」と何度か言われた。口には出さないが、父母もおそらくそう思っている。もし両親が体調を崩したりすれば、いずれこの街に帰ってくるということもあるかもしれない。でも、少なくともいますぐにここに帰ってくるという選択肢はない。そもそも「帰る」という感覚が自分のなかで薄くなっていることに気づいている。むしろ東京に戻るときの方が「帰る」という感覚に近い。じゃあ東京は「見捨つるほどの＜故郷＞」なのだろうか？それについては間違いなく首を縦には振らないだろう。

自分にとって東京は＜故郷＞ではない。でも、自分は東京へ「帰ろう」としている。たぶん、いまの自分は、「見捨つるほどの＜故郷＞」を喪失してしまっている。

※

「見捨つるほどの＜故郷＞」を失ってしまっている宙ぶらりんの状態—その空白こそが、「東京」を形づくっているのではないかと考えてみる。その空白にいろいろなものが入り込み集まることで「東京」が形づくられていく。その空白に入るのは人だけじゃなくて、たとえば夢だったり、憧れだったり、逆に絶望や挫折だったり、あるいはお金だったり権力だったりするかもしれない。そういったものが入り込む隙や空白がある街。無数の断層のある街。雑多なようにみえて、「東京」は実は無色の街なのかもしれない。

※

先日、同じ日に港区（田町駅）と表参道でそれぞれ用事があり、用事と用事の間に時間があつたので、せっかくなので港区から表参道まで歩いてみることにした。田町駅からぶらぶら歩いていると、予期せずして東京タワーが視界に入った。東京に暮らし始めて4年が経つのに、東京タワーをこんなに間近でみるのは初めてなことに気づく。せっかくなので、Googleマップを無視して東京タワーの根元まで行ってみることにした。途中、芝公園を突っ切ってみたが、意外に丘のように小高くなっているところが多いことに気づく。中沢新一の『アースダイバー』（講談社）にこの辺一帯は古代の遺跡群だったと書かれていたが、いま歩いている足下にたくさんの死者たちが眠っていると考えると、なんだか変な気がしてくる。根元から見上げる東京タワーは（あたりまえだけど）大きくて、だけドスカイツリーに比べてどこか親しみがあるように思えた。そこから寄り道しつつ表参道まで目指したが、「関東平野」といいながら、東京にはけっこう坂が多いことに気づく。特に路地裏に抜けるような細い坂を見つけると、東京は俄然おもしろくなってくる。メインストリームは車がひっきりなしにかしましく通過し、道の両脇はビルに覆われているのに、坂を抜けたと途端にイメージしている「東京」とは異なる風景の中に突然放り出され、自分がいったいいつの時代のどこにいるのかわからなくなるような感覚に襲われる。「東京」にぽっかりと空いた穴。「東京」の底へと降っていくための通路。その入り口としての坂。六本木ヒルズを越え、しばらく進むと生い茂った緑がみえ、それに惹かれるように歩いてみると、青山霊園だった。まっすぐに伸びる緑に覆われた緩やかな坂の両翼に、たくさんの死者

たちがしずかに眠っている。

表参道では詩の講座を聴講した。詩人の川口晴美による講座で、言葉と出会うきっかけとなった漫画を複数紹介してくれたのだが、その中で、竹宮恵子「夜は沈黙のとき」（1978）という漫画にボードレールの詩が引用されていた。こんな詩だ。

蟻のように人の群れる都会、夢にみちた都会、
そこでは昼日中、幽霊が通行人の袖を引くのだ！
この力強い巨人の体内をめぐる狭い管を伝わって、
神秘的な出来事は限なく樹液のように流れている。
—ボードレール「七人の老人」より
（福永武彦訳『ボードレール詩集』河出書房）

※

「東京」を“幽霊”たちの街だと想像してみる。
“神秘的な出来事”が脈打ちながら隠されている街。

※

先に「愛媛はいま帰るところではない」と書いたけれど、なぜかといえば、（こんなことを書くと暗くなってしまうが）＜故郷＞にはもはや会いたいと思う人がいないからだ。東京には会いたい人がたくさんいる。すでに出会った人も、これから会いたい人も。その“会いたさ”が、自分を東京に「帰ら」せる一番の要因になっている気がする。それは逆に言えば東京に人が集中してしまっているということでもあるかもしれない。けれどもそれは、なにかと出会うこと／出会ってしまうことをみなが求めているからではないだろうか。人とかもしれないし、出来事とかもしれないし、歴史や文化とかもしれない。もしかしたら幽霊とかもしれない。なにかしらとの出会いを求める人たちの街。その“会いたさ”こそが「東京」の正体なのではないか。・・・でもきっと、それも「東京」のひとつの側面にすぎず、そして油断していると、「東京」という“巨人”のような街にひとり放り出されている。

＜巨大なる会いたさのことを東京と思うあたしはわたしと暮らす＞ 北山あさひ

※引用した北山あさひの短歌は、砂子屋書房のHPで毎日連載されている「一首鑑賞*日々」のクオリア」中の、2018年10月3日付・平岡直子による鑑賞文からの引用です。

引用元：https://sunagoya.com/tanka/?p=19311

第二回 「日本から離れてつくる」

「＜見えないものに触りたる＞ —獄中俳句と『アウトロー俳句』 について」

生きのびて見るや蜘蛛の屍はこぶ蟻 中川智正

石神さんから第二回エッセイについての連絡をいただいたとき、なぜか獄中俳句（囚人が獄中で書いた俳句）について調べてみたいと思い、日頃お世話になっている友人の俳人に相談したところ、『ジャム・セッション』という同人誌を紹介してもらった。

『ジャム・セッション』はオウム真理教の元幹部であり、先日麻原彰晃とともに死刑執行された中川智正と、俳人の江里昭彦とによる同人誌で、2012年から刊行された。毎回ゲストを招き、中川・江里・ゲストの俳句を掲載するほか、第二号からは中川のエッセイも収録されている（友人の俳人がオウムに関係する同人誌を紹介してくれたのはまったくの偶然）。この同人誌を読んだからといって、「中川智正」という人間のすべてを知ることはできないけれど、彼の書いた俳句やエッセイをとおして、中川の人となりや、少しは知る術にはなるのかもしれない。

（『ジャム・セッション』は購入しなくてもネットから読むことが可能なので、ご興味ある方は読んでみてください。ジャム・セッション：http://js-haiku.wixsite.com/jamsession）

獄中俳句のことが気になったのは、「悪」を犯してしまった人間のことを知る（考える）ひとつの手掛かりになるのではないか、と思ったからだ。ただ、先ほどの友人である俳人からは、いわゆる“アウトロー”というのは消費しやすい、という話も出た。つまり、俳句だけだと目立たないから（俳句は物語になりづらい）、作家が持つ「物語」を宣伝材料にする、ということ。その例として尾崎放哉や種田山頭火をあげていて（彼らは犯罪者ではないけれど）、彼らの俳句が人気なのは、もちろん彼らの句がおもしろいということもあるだろうけど、それ以上に、彼らの“アウトロー”な人生がある種センセーショナルに受け入れられている、という部分も多分にあると思う。

似たような話はいまの作家にもあって、鳥居という歌人（最近、前文部科学事務次官の前川喜平氏と対談したので、ご存知の方もいるかもしれない）が第一歌集『キリンの子』（KADOKAWA）を出版する際、彼女の生い立ちを追ったルポ本と同時出版でなければならないという条件があったらしい（詳細は『ユリイカ2016年8月号 特集・あたらしい短歌、ここにありま』中の鳥居のインタビューに記載されています）。鳥居はとても苛酷な人生を持つ作家だけど、その“波乱万丈”な「物語」をうまく利用したい、というような、出版社側の思惑が透けてみえる話で、句集や歌集が売れないのは事実だけど、「物語」が消費に荷担する姿を垣間見てしまったような気がして、なかなか複雑な気持ちになる（だから僕は『キリンの子』は読んでこ

のルポ本はいまだに読まないようにしている)。

“わかりやすい”、だれにでも“わかる”「物語」が求められる、というのは、けっきょく、わからないものを遠ざけたい、排除したいということと、表裏一体だと思う。オウムの元幹部たちがこのタイミングで一斉に死刑執行されたのも、「オウム真理教」という「物語」が“だれでもわかる”文脈から逸してしまったから—もっといえば、95年～2000年代にかけて「物語」として消費され尽くされてしまった、あるいは、「物語」としての賞味期限が過ぎてしまったから—ではないか。そして、それはけっきょくのところ、“見えるものしか見たくない”、ということなのだと思う。その態度は、いま東京全体を覆っている再開発化(スクラップ&ビルド)ともどこかで繋がっているのかもしれない。そう考えたとき、『ジャム・セッション』という同人誌が2012年という、もはやオウムがだれからも見向きもされなくなったタイミングで刊行をはじめたことは、なんだか意味のあることのように思えるし、また、中川智正の句は、“わかる”「物語」から零れ落ち、だれからも顧みられることのなくなった残骸としての淡いひかりを、孕んでいるようにも思えてくる。

流さるる螢掬えば掌に光り 中川智正

※

駐車場雪に土下座の跡残る 咲良あぼろ

新宿歌舞伎町俳句一家「屍派」—その名の通り、新宿歌舞伎町を本拠地に句会を開いたり歌舞伎町で吟行を行ったりする俳句集団がいる。その「家元」である北大路翼の編集によって、『アウトロー俳句』(河出書房新社)というアンソロジー本が2017年の年末に刊行された。

『アウトロー俳句』は、家元・北大路翼も含めた屍派に所属する人たちの句を108句(煩惱の数)選び出し、それを編んだものだけど、このアンソロジー句集は“アウトロー”であることをむしろ逆手にとっているように思う。

キャバ嬢と見てゐるライバル店の火事 北大路翼
トナカイの格好のまま舌打ちす 才守有紀
春一番次は裁判所で会はう 喪字男

北大路の句にしろ、才守の句にしろ、喪字男の句にしろ、どこか不謹慎なのだけど、その不謹慎さが、笑いであったり、句としてのおもしろさだったり、その裏にある寂しさだったりを引き出していて、それは先にあげた中川智正の句にみられるような、自己の内面を徹底的に見つめ直す、という態度とは、ちょっと違って思える。

北大路は本のあとがきでこんなことを書いている。「(…)俳句で「殺す」と詠んだら、どうなるだろうか。不満をアートに昇華して表明すれば、誰にも咎められることはないのだ。／褒められた行為ではないが、俳句は心情を吐露する道具になる。世の中の常識を疑い、違和感を表明する意思表示として、使うことができる。それが僕の持論だ。」(「おわりに」より)。

「不満をアートに昇華して表明すれば、誰にも咎められることはない」という部分は、少し留保が必要ではないか、と個人的には思うけれど、ただ、「悪」というものを、犯罪とは別の方法でかたちにするという点で、『アウトロー俳句』はなにかヒントになるものを持っているのかもしれない。少なくとも屍派に所属する人たちにとって、俳句というものがひとつの“セーフティネット”の役割を果たしている、ということはいえると思う。彼ら彼女らの“生きづらさ”から生まれた数々の句は、眉目秀麗な句とは違った、ある種の透明感を持っているようにみえる。

白木蓮散る鳥籠を捨ててに行く 中山奈々
湯たんぽの中に眠れぬ猫がある 地野獄美
自転車のサドルを全て薔薇にせよ 照子
踏切の音になりたい夏休み ふしぎ
蚊柱にぶつかりあやまつてしまふ 五十嵐箏曲

それから『アウトロー俳句』には、「見えないもの」(あるいは、ひとが普段見過ごしてしまっているもの)を描いている句が多い。たとえば最初に引用した咲良あぼろの句にしても、「土下座の跡」に気づく人自身がそもそもそんなにいないだろうし、「雪に土下座の跡残る」と詠むことによって、(実際には見えないけれど)土下座をした(させられた?)人が可視化されてくる。しかも「雪」だから、溶ければその「跡」はいつかなくなってしまうわけだけど、それを敢えて書き記しておくことで、たとえその駐車場がでっかいビルになったとしても、その「跡」や土下座をした(させられた)人がいたという事実は消えない。

『アウトロー俳句』にはそういった「見えない」ものを可視化するようなところがあって、それは先ほどの不謹慎という話にも繋がるけど、ひとが簡単に見過ごしてしまったり、見たくない／見ようとしないうものを美化したり隠したりするのではなく、歪なものは歪なもののまま、おもしろがろうとする態度から来ることなのだと思う。そしてそれは、「歌舞伎町」というある種の“ローカリティ”を屍派が持っているからできることだろう。

屍派は、新宿コマ劇場解体と街の再開発化が進むなかで活動をスタートさせたらしいけれど、スクラップ&ビルドや弱肉強食の世界のど真ん中で“生きづらさ”を抱えた人たちが集い、人が葬る街の中へと分け入りながら俳句を書く、という行為は、ある規定されたものの中に閉じ込められた「見えない」ものや「見たくない」ものや「わからない」ものを、ほどこいていく、ひらいていく、手渡していく、という行為へと繋がっているように思うし、そしてそれは逆説的ではあるけど、「東京」であるからこそできる創作行為なんじゃないか(歌舞伎町「みたいな」ところは他の都市にもあるだろうが、「新宿歌舞伎町」は唯一無二のものだ)。眠らない街の真ん中で、「見えないもの」に触れようとする人たち。それはもしかしたら、「東京」でないと触れられないものなのかもしれない。

夜長し見えないものに触りたる 布羽渡

(服部真里子の短歌についても書いてみたかったけれど、字数が

多くなってしまったので、今回のエッセイはここまで。)

第三回 「ここで作る／ここではないどこかで作る」

「つくばとかF/Tとか ＜知らない町＞とかの話」

一か月と半月ほど、仕事の都合でつくばで暮らすことになった。暮らす、といっても、会社側が勤務地のすぐ近くにウィークリーマンションを借りてくれたから、基本的にはマンションと仕事先との往復(あとは近所のスーパーへの買い出し)で用は事足りるし、週末には東京に戻っていたから、その土地に暮らしている、という感覚は特別あるわけではなかった。それでも、つい先日の土曜日に、東京で用事があったのでバスに乗って東京へ戻ったのだけれど、東京駅に着いた途端に人と情報の多さにさっそく苛立ちと気分の悪さを覚え、地下鉄の空気の薄さにビブリ、目的地に着いて地上に出てみても空気の薄さが和らぐ気配はなく、けっきょく用事をドタキャンしてそのまま三鷹に帰ってしまったので、この一か月半の間に、すっかり東京のカラダではなくなったのかもしれない。この日は体調がいまいちよくなかったということもあったかもしれないけれど、特に重要な用事でもなかったわけだし、つくばで学生の頃お世話になった会いたい人もいたから、こんなことなら日中はのんびりつくばで過ごしてから東京へ戻ればよかったと、少し後悔した。

カラダ、といえば、つくばへの勤務初日、つくばに降り立った瞬間に、学生の頃つくばにいた頃の身体感覚がむくむくと甦ってくる感覚があって、学生時代の忘れたいあれこれは正直あるけれど、カラダはしっかりとその土地のことを覚えているようだった。アルバイトでお世話になったお店のマスターに事情を説明すると自転車を出してきて、少し、大学の方まで自転車を走らせてみた。大学の敷地内にスーパーができていたのは驚いたけれど、変わったものより、変わらないものの方が多くて、つくばを離れてから4年近くは経つけれど、いまだにここに住んでいるんじゃないかという錯覚に陥りそうになった。大学の中心部まで行ってみようかとも思ったけれど、遠いし、いろいろと思い出しそうだし、ノスタルジーに浸かりたいだけな気もするし、深入りせずに手前で引き返した。マンションの近くには少し大きめの公園があって、そこには大きな時計塔がある。夜になると橙色に灯るから、マンションへ戻るときはそれが目印になるのだけれど、どうやら日付が変わる頃には消灯するらしい。次の朝が来る頃には、それが灯っていたことなんて、すっかり忘れてしまう。

橙に灯りし時計塔 いつか朝焼色に忘れゆくもの 高須賀真之

※

フェスティバル／トーキョー18の最終日に行われた、「東京」に関する二つのシンポジウムに出席した。それぞれのシンポ

ジウムで興味深い話を聞いたのだけれど、その一方で、「東京」が抱える巨大さ—経済にしろ人口にしろ施設にしろイメージにしろ—が故に、やはり話が一筋縄にはいかず、もどかしい気持ちにもなった。その中で特に興味深かったのは、一回目のシンポジウム(“生活圏／創作圏としての東京”)に登壇していた、小説家の柴崎友香さんの話だった。彼女は大阪出身なのだけれど、東京のことを考える際に＜都市⇄郊外・地方＞として考えるのではなく、(大阪という都市とは)＜別の都市＞という見方をしていると話していて、その視点はとてもおもしろいと思った。生まれ育った場所の感性・感覚はどこかよへ行っても変わるものではなく、だから東京と大阪とでは(都市での生活という意味では)生活の仕方としては大きく違わないのだという。その一方で、東京が大阪と違うのは、東京は日本(国家)の＜首都＞であるということ。そして東京は、＜首都＝都市＞としての部分とローカルな部分との境界がとても曖昧だという。ほんとうなら、「東京」には複数のレイヤーがあるはずなのに、その境目がわかりづらい。個々の暮らしの実感は無数にあるのだけれど、その次のレベルがく日本(国家)の首都＝大都市＞になってしまっていて、中間のレベルがない。そういう話をされていた。それから、都市は人との摩擦を減らすための手段を必要とするけれど、大阪と東京ではその手段が違って、大阪では喋りつづける(人に話しかける)ことで、東京ではなるべく人と関わらないようにすることで、摩擦を減らしているのではないかという話や、大阪でも東京でも都市というのはずっと工事をしているけれど、東京の場合、建物がどんどん出来ていく、というのではなく、むしろ、建物がどんどんなくなっていく、時間が未来に向かって進んでいるのではなく、ごっそりと断ち切られているような感覚がある、という話が、興味深かった。

また、二回目のシンポジウム(“「 」のなかの東京”)の登壇者である美術家の北澤潤さんは、ジャカルタをはじめとした東南アジアでのアート活動の実例を紹介しつつ、その土地の風習や市場などをそのまま日本に持ち込む、というプロジェクトを紹介していた。また、東京というのは実はグローバルなのではなく、ほんとは単にナショナリティが強いだけなのでは?という疑問を提示しつつ、“ダブルローカリティ”(二つの土地)での共通項こそが、グローバルということなのではないか、という話をしてた。たしかその文脈の中で(たしか長島確さんだったと思うけれど)、「東京の中に東京ではない場所をつくりだす」とはできないか、という話が出て、それはちょうど、前回のステディで知子さんから出た、東京にベルリンを持ち込む、という話(あるいは逆に別の場所に東京を持ち込む、別の場所で東京を考える、という話)と繋がっているところもある気がするけれど、それらの話を聞いて思うのは、では、だれもが知識やイメージとして見知っている＜首都＝都市＞としての東京でもなく、個人の閉じられた時間や生活の中の東京でもなく、しらないけれども自分の体感・感性としては「知っている」という距離感としての東京を、描き出せないか、ということだ。

※

知らない町の吹雪のなかは知っている 佐藤文香

掲出句は佐藤文香の第二句集『君に目があり見開かれ』（港の人、2014年）からの引用。個々人の痛苦は究極的にはわからないし、「知らない町の吹雪のなか」はやはりその町に実際に行ってみないと経験はできない。だけど、それを想像したり実際に経験したりするのではなく、「知っている」という距離感。あるいは、生駒大祐は佐藤文香の句について「佐藤さんの俳句の場合、感覚と言葉が歩調を合わせている。言葉と同じ速度で感覚が体に入ってくる」と指摘している（http://weekly-haiku.blogspot.com/2015/05/blog-post_24.html）けれど、その速度。「吹雪のなか」とは、極私的なパーソナルなものではなく、また、マス・メディア的なだれもが情報や知識として見知っているものでもなく、「知っている」としか言いようのない、言葉と感覚が一致してしまうような場所なのだろう。そしてここでは、実際に行ったことがあるかどうか、というのは問題にはなっていない。あくまで「知っている」という距離感であり、速度（歩調）が重要だ。

翻って東京を考えてみると、＜首都＝都市＞という文脈で語られることで覆い隠されてしまっているけれど、東京の中にも「知らない町」というのはたくさんある。そして、「吹雪のなかは知っている」という距離感であり歩調は、「知らない町」を考える上で、なにかヒントになるんじゃないか。もちろんそれは、東京に限った話ではないわけだけれど、「東京」という漠然とした、あるいは強固な既成のイメージに塗り固められた都市のなかに、そういった言葉と感覚が一致する点を見つけることは可能なんじゃないだろうか。

※

ふたたびつくばの話。

学生の頃、東京出身の人たちからよく聞いたことがあって、それは「つくばは星が超見える！」というものだった。だけど、僕の生まれ故郷は、山、とまではいわないまでも、標高のやや高いところだって、つくばよりも星がよくみえたので、こころのなかで「いいいいいい」と思っていた。だけど、つい先日夜遅くまで東京で用事があって、深夜につくばに戻ったとき、ふと空を仰ぐと星がとても綺麗だって、「うわ、めっちゃ星みえるやん！」と思ってしまった。なるほどこういうことね、と納得しつつ、いつの間にか自分は東京の空に慣れていたのだな、と思ったりして、ではいまの自分はいったい東京の人間なのか、つくばの人間なのか、愛媛の人間なのか、よくわからん、と思ったりもした。だけど、どんな景色を通過してきても、星というのはそれとは関係なくそこにあって、そのことは、心強いことのような気もするけれど、どこかちょっと、寂しいことのような気もする。

星がある 見てきた景色とは別に 佐藤文香

第四回 「東京にふれる」

「東京へは帰らない」

年末に実家へ帰省した。

11月に転職をして、いきなり1か月半ほどつくばで研修することになり、その間は会社が借りてくれたウィークリーマンションで暮らしていた（だけど週末は基本的に東京に戻る、という生活をしていた）、ということは前回のエッセイで少し書いたけれど、つくばでの研修を終え、東京に戻って以来、漫然とした辛さを抱えていた。それは単純に、東京での職場の環境が合わない、ということもあるし、つくばにいたときはちょっとした旅気分で行かれた（つまり、日常とはちょっとちがった環境で過ごせた）こともあり、その環境と東京での自分が置かれている環境とのギャップに苦しんでいるだけだったのかもしれない。あとは、つくばにいたときはどうがんばっても平日（仕事のある日）に芝居を観に行くことはできなかったけれど、東京にいればがんばったら行けるので、東京に戻ったことで「演劇」との距離が一気に縮まり、そうなるといまの仕事が「演劇」とまったく関係のないことにストレスを感じるようになった（感じるようになった、というか、いままでなんとか隠していたけれど距離が縮まったがゆえに隠しきれなくなった、という方が正しい気がするけれど）、とか。

そういう辛さを抱えていたためか、実家で過ごした時間は逆にけっこう穏やかだったような気がする。実家に帰省する当日は「めんどくせえなあ」と思っていたけれど（それは毎回そう、なにしろ愛媛はとおい）、いざ帰ってみれば、ずいぶんと落ち着いたものだった（今年は特に、ずっと天気がよくてあたたかかった、というのもあるかもしれないけれど）。「ずいぶんと落ち着いたものだった」って、じゃあ具体的にはいったいなにをしていたのだろうと思い、ここに書き出してみると、

- ・批評の原稿を書く（ずっとサボってて年末年始に書くハメに）
- ・温泉に行く（わりと近所にある）
- ・散歩する（でもなんだかんだ外は寒いのでそこまで遠出はしない）
- ・飯を食い酒を飲む（年末年始ですから）
- ・寝る（年末年始ですから）

以上。こうやって書いてみると全然大したことをしてなくてずいぶん情けないような気がするけれど、このシンプルな時間の過ごし方が逆によかったんじゃないかという気がする。たとえばこれが東京だったとしたら、「芝居を観に行く」とか「買い物に行く」とか「〇〇に行く」とか……という風に際限なく選択肢が増えていって、とっ散らかってしまったかもしれない。それはなにも東京でなくてもたとえば松山（愛媛の県庁所在地で、自分の地元の隣町）とかでもきつとおなじで、「松山城に登る」とか「伊予鉄高島屋（松山の中心にある駅前のデパート）へ新春初売りフェアに行く」とか「〇〇に行く」とか……選択肢が増えること自体はべつに悪いことではないだろうけれど、いろいろと疲弊している身としては、選択肢や情報量の多さはやはりわずらわしいと

第五回 「東京で生きる」(阿部健一さんのご自宅にて)

無題

—ふたたび書きだすために—

「東京」とはいったいどれのものなのだろうか。エッセイ①で立てた問いをあらためて立ててみる。たぶんこの問いに対してはいろんな答え方ができるのだろうけれど、その一方で、どの答えも空を掴むようなものになってしまう気もする。たしか岸井大輔さんだったと思うけれど、東京というのは江戸幕府ができたことで文化がつくられていったと思われがちだけど、ほんとうは江戸幕府ができる前からそこにはたくさんの人が住み、その土地独自の文化や風土やコミュニティがあったわけで、だからむしろ徳川家康は本来そこにあった文化や人の繋がりをぶっ壊したんだ、その壊したものの上に江戸幕府というのはできたんだ、という話をされていて、なるほど、と思ったことがある。そしてその構図はいまもまったく変わっていないように思う。なかったことにされていくたくさんひと、もの、記憶。でも、それらはほんとうにはなからなかったことにされてしまうのだろうか？

たぶん、＜「東京」とはだれのものか？＞と問うのではなく、＜「東京」とはだれのためのものなのか？＞という問いにするべきなんじゃないか。「東京」とはだれに必要とされていて、そしてそのひとのためになにが必要なのか。所有の問題にするのではなく、どうやってシェア（分配ではなく、どう共有・譲渡できるか）の問題にしなければ、力があるものが所有権を我が物にできるという、ただの「勝ち負け」の話になってしまう。そして敗れたものや力に押し潰されたものははじめからなかったかのように消されていってしまう。そうではなく、消えてしまったものたちの記憶も含めてなにかを共有する地点として、東京を立ち上げることはできるんじゃないか。これから東京がどうなっていくのか正直わからないし、樂觀なんてできないけれど、それでも東京にはたくさんさんのもの（文化やコミュニティや居場所となり得る場所）があるのは事実で（その事実を「どうせ東京なんて」というよくわからないネガティブな発想や先入観で掘り曲げるべきではない）、それらを早い者勝ちで所有するのではなく、共有し、必要としているひとに譲渡していくこと。なかったことにするのではなく、記憶を残していく（あるいは掘り下げていく）ということ。そのように考えていけば、東京にできることはまだまだあるように思う。

※

このエッセイを書き出すのに、ずいぶんと戸惑ってしまった。

第5回のスタディからさんざん言っているけれど、自分のパーソナルな部分をどう処理すればいいのかよくわからなくなってしまった。どうもエッセイをこの半年書き進めるうちに自分のコアな部分に行き当たってしまい、そこを避けて通ることがなかなか難しくなってきたようだ。そこを避けて書くこともできるのだろうけれど、自分の書いたものがぜんぶ上っ面な空虚なものよう

思ってしまうところはある。帰省している期間は5日間（うち2日は移動日だったから、実感としては3.5日くらい？だったけれど）と短かったけれど、その間だけでもしずかに過ごせたのはよかったのかもしれない（というか、その短さがよかったのだと思う）。「原稿を書く」というわりと仕事っぽいこともしていたけれど、それは逆に言えば書くための時間を確保できているということなので、環境としてはよかったのだろう。きっとシンプルさ／情報量の少なさ／アクセスのしづらさと、煩雑さ／情報量の多さ／アクセスのしやすさというのは、どっちが良い／悪いではなくて、バランスなんだろうと思う。食事とおんなじで、どちらかに偏ることなく、バランスよく摂取することが必要なのです（なか？）。

とはいえじゃあ、東京（あるいは東京近辺）を離れ、ずっと地元で暮らしたいのか？という（自分にとってはわりと本質的な）問いにふたたび戻ってくると、現時点ではNOと言うほかない、という堂々巡りに陥ってしまう。べつに地元の町のことがキライなわけではない、ということのを再認識しつつも、その一方で、ここ（地元の町）にいても自分のやりたいことはできないし、出会いたい人とは出会えない、ということも再認識したのだった。そしてそれは、いまの自分にとってはとても決定的なことだ。自分が「東京」というもの（場所）にこだわり続けるのも、その理由のひとつとして「演劇」（あるいは、広い意味での文化芸術）に関わり続けようとしているのも、自分のパーソナルな部分に起因していて、それは地元の町とも密接に関わっており、そしてそのことには自分でも気づいてはいるのだけれど、それをいまは言語化することはできない（と思うけれど、そう思い込みたくないかもしれない）。少なくともいまの自分にとって「東京」は＜帰るべき場所＞ではない（そういう意味において自分の＜居場所＞ではない）けれど、その一方で＜戻るべき場所＞（＝活動すべき場所）ではある。

東京に戻ると風がとても冷たく、東京はやはりさむいなあ、と思う。もうしばらくは、この街と付き合うことになりそうである。東京も天気がよくて星が出ていたが、三鷹といえどやはり地元と比べると星の数は少なく、三鷹でも明るいのだなあ、と思う。いづれ東京へ「帰ってくる」ことがあるのかどうか、それとも地元に戻るのか、あるいはさらに外へ外へと向かうのか、いまのところはまだわからない。

君はセカイの外へ帰省し無色の街 福田若之

（福田若之『自生地』東京四季出版、2017年より引用。なお、最初のエッセイで「東京は無色の街だ」みたいなことを書きましたが、たぶんこれは、福田若之のこの句のことが頭の片隅にあり、無意識に書いてしまったのだと思われます。福田さんごめんなさい。）

に思えてきて、どうも書き進めることができない。大きなきっかけは伊シワタマリさんのエッセイと、12月に参加したビルグリムだったけれど、それ以上に自分のことをだれかと共有したい、という気持ちもあったのかもしれない。

実はこのエッセイとは別に、第5回エッセイの原稿を書き上げていたのだけど、それはけっきょくボツにすることにした。そこには僕のパーソナルな話をかなり赤裸々に書いたのだけれど、このような形で出すべきものなのかどうか判断がつかなかった。自分の過去だったり痛みだったりを一方的に吐露することはときに暴力になり得ると思う。自分の言葉がだれかにとっての暴力になるのは避けたかった。その一方で、頑なに閉ざすことで排他的なノスタルジーに陥ってしまうことも避けたいという気持ちもある。

ひとつだけ書くとすれば、僕にとって、あるひとの死がとても大きく影響している。そのひとは僕にとってとてもとても大切なひとだった。そのひとは音楽をこよなく愛していて、作曲家を目指していたのだが、ある日突然いなくなってしまった。自殺だった。そのひとはまだ高校二年生だった。

そのひとの自殺は、芸術家は精神がどうかという話ではなく、文化資本の欠落の問題だと僕は考えている。そのひとが音楽の道にすみたいと思ったとき、そのひとのことをちゃんと理解してあげられるひとは周りにだれもいなかった。そのひとに音楽家として（あるいは音楽と関わりながら）食べていける方法を具体的に提示できるひともいなかったし、そのようなひとと出会える場もなかった。また、そのひとは高校に入ってから対人恐怖症になってなかなか学校に行くことができなくなってしまったのだけれど、そのひとが一時的にでも避難できるような場所はどこにもなかった。もちろんほかにもいろんな問題が絡み合っていたのだろうけれど、そのひとにとって自分の居場所がないということがどれだけそのひとを追い詰めたかと思うと、言葉もない。

たとえばもし、家出でも失踪でもなんでもいいからそんなところから脱け出して大阪なり東京なりどこへでも行ってしまえばどうだったろうか？あるいはそんな極端なことしなくても、たとえば高校を中退して音楽の専門学校へ進学するという選択が取れていれば？そういう選択肢をきちんと提示できるひとが周りにひとりでもいれば？あるいは音楽に関わりながらでもなんだかんだやっていけるということを、身をもって証明してくれるような存在が近くにいれば？学校へ行けなくなったひとに対してひらかれた文化施設が近所にあれば？たとえばたとえばたとえば……

僕が地元の町を離れ、東京を選んだというのは、けっきょくそういうところが大きいように思う。もちろん、東京に行けばすべての夢が叶うわけでもないし、東京にだって居場所がなくて苦しむ若者はたくさんいるだろう。東京はけっしてユートピアではない。それでも、東京にはたくさん人の選択肢が用意されているのもまた事実だと思う。そしてそのような選択肢が存在するということが知らることができないのは、ただただ不幸でしかない。文化資本の格差が、ひとりの人間の一生を決定的に変えてしまうということはある。

僕が演劇（を含めた文化芸術）に関わりつづけようとするのは、けっきょくのところ、そのひとのことを死に追いやったものたち

に対するささやかな抵抗にすぎない。僕はたぶん、どんなかたちであれ自分がやりたいと思うことをやりつづけることはできるし、つくりつづけることもできる、ということ、身をもって証明したいのだと思う。それを証明することでしか、そのひとのことを死に追いやったものたちに打ち克つことができない。理屈がとおっていないのかもしれないけれど、そのひとの死自体が理屈のとおりなことだったのだから、もはや理屈のとおりなことはいらない。

それはもしかしたら、そのひとがしんだことを口実にしたいだけなのかもしれない。そのひとの死を、自分がやりたいことをつづけることの言い訳にしたいだけなのかもしれない。なりゆきで批評を書くようになったけれども、それもけっきょく他人がやっていることにしがみつきたいだけなのかもしれない。それでもそれをいま離してしまったらどこかもう二度と引き戻せないところまで流されていってしまいそうで怖い、という気持ちがある。東京と距離を取りつつそれでも離れられないのは、いま必死にしがみついているものから引き剥がされそうで怖いからだと思う。過剰であることはひとを流しもするし堰き止めもする。東京の過剰さが僕をなんとかここに繋ぎとめてくれていることは事実だ。もちろん裏を返せば、東京以外に自分を繋ぎとめてくれる場所がみつければ、東京じゃなくてもいいのかもしれない。だけど、少なくともいま自分がやっていることをつづけるには、いまは東京にとどまるしかないとも思っている（でももしかしたら、一度手放してしまってもいいのかもしれない、という気持ちもどこかにあるのも、事実ではあるけれども）。

※

東京が居場所か？とあらためて問われると、正直よくわからない。でも、地元に戻って一生暮らしたいか、といわれれば、それはむずかしいといまは思う。とにかくいまは東京にこうやって暮らしている。東京。そのひとが暮らしていたかもしれない街。二人で東京の街を歩いているところを想像する。東京は遠いと思いつつ、案外簡単に行けるよ、とそのひとに言っておきたい。やけん、高校なんて辞めて一度行ってみんけん？—そのひとの瞳に、いまの東京はどのように映るのだろうか。

きみの瞳に映る東京崩れゆく音はきつとなみだおちるほどの
高須賀真之

Profile

高須賀 真之（たかすか・まさゆき）

1989（平成元）年、愛媛県生まれ。筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻修了。2017年、ふじのくにニッセイ演劇祭2017劇評コンクール最優秀賞および入選。2018年、第22回シアターアーツ賞佳作。2019年より演劇批評・山崎健太氏の呼びかけで劇評マガジン<noteach>に参加。劇評の傍ら俳句等を執筆、「小部屋句会」「走鳥堂句会」（共に佐藤文香主宰）に参加中。東京へは2015年より住みはじめ。現在三鷹市在住。

中田 森也

Shinya Nakata

「平熱」を思わせる醒めた眼差しと、それと相反するように鮮やかな情景描写。それはカメラを通して表現する中田さんだからかもしれません。感情が「解かれて」も残る「東京の果て」の風景、いつか見せてください。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

本エッセイでは、「東京でつくる」というスタディを通じて、2つの事柄の思考の変遷を残したいと思う。1つは、個人的に直面している課題、「何故映画を撮ろうとしているのか、何故映画なのか」ということについて（前提を問うということの個人的な課題）。もう1つは、このスタディのタイトルにもなっている「東京でつくる」ということについて。2つの事柄を考えることで、互いに良い影響を与え合うかもしれないし、全く無関係なまま終わるかもしれないけど、個人的な実験を含めて2つのことを追ってこうと思う。

まず1つ目の「何故映画を撮ろうとしているのか、何故映画なのか」について。色々映画を撮ろうと思ったきっかけはあるけど、全て書こうとすると、それだけでページが埋まってしまうので、さくっと割愛して「何故映画を撮ろうとしているのか」ということの現状認識だけを書くとする。

初回ディスカッションで言ったことにもなるが、自分は見知らぬ誰か（もしくは社会）と自分の中にある何かを共有したいのだと思う。しかもお金を払って見てもらうという関係で実現したいと考えていることは間違いない。衝動や感情を吐き出したいために映画を撮るのではなく、共有することが重要なことなんだろうな。もしかすると、ただ社会に認めてもらいたいただけかもしれないけど、それでも共有した上で認めてもらうことに変わりはない。元々、社会と深く関わることのなかった自分にとって、社会と何かを共有しようと全く考えたことがなかった。だからこの変化は自分の人生にとっても、とても大きな転換点、なのかな……おそらく、だけど。ただ、その媒体として「何故映画なのか」とか「何を共有しようとしているのか」とか「そもそも何故共有しようと思ったのか」、「映画って何なのか」、「そもそも撮る必要がある?」といったことは、まだ何も考えられていない。それはこれからの宿題だ。これが1つ目の現状。

さて、2つ目。スタディの本题「東京でつくる」ということについて。このスタディに参加してわかったのは、自分は明確な「東京」を今まで持ってなかった、ということだ。誰かが作った、もんやりとした「東京さん」みたいな「東京は」は存在するけど、明確な「東京」は存在していないのだ。明らかなことは、自分が生まれ育った立川は、その「東京」に含まれないということだ。行政区分上では立川は東京に所属するはずなのに、立川は「東京」ではないのだ。ある国で生まれ育ったのに、行政の手続き不

足で無国籍となってしまった感じと少し近いものがある（深刻さが違うので、同列で語るのはひどく失礼な話かもしれないが……）。じゃあ、その立川が所属できない「東京」というのは何だろうか？ うーん、何も浮かんでこない。その「東京」について考えなければ、「東京でつくる」ということはおそらく理解できない気がする。

じゃあ、その「東京」って何なのだろう？ ディスカッションで出た「東京の果てってどこだろう」というのが面白かったので、それをきっかけに考えてみる。東京の果て、か。途方もない……まずは、どこが東京からだな。普通に考えれば、23区が「東京」っぽい感じはする（東京市だし）。でも板橋はあまり「東京」感が無い気がする（板橋区民さん、ごめんなさい）。ディズニールンドは千葉よりも「東京」がしっくりくる感じもするけど、残念ながら新東京国際空港は「東京」では無い（そのせいか名称も変わってしまったし）。周辺の埼玉や神奈川に「東京」はない気がする。二十三区を少しいびつな形にしたその外縁部が、東京の果てのように思えるが、やっぱり曖昧だ。いっその事、誰もが東京だと認める、都心三区（千代田区、中央区、港区）のみを「東京」と考えてみるのはどうだろうか。でもそれだと何だか魅力的じゃない。東京っぽくない。ピラミッドのてっぺんの石を切り出して、これこそピラミッドだって言っている感じがする。切り出してしまえば、それはただの石になってしまって、ピラミッドじゃないのだ。じゃあ、ピラミッドってあの三角形の石の集まりがピラミッドなのかと言うと、違う気がする。砂漠もワンセットで入っていないければ、ピラミッドじゃないという人もいるかもしれないし、スフィンクスが欲しいと言う人もいるかもしれない。あるいは砂漠に落ちる夕日が必要かもしれない。それぞれのピラミッドのイメージが違うから、そうなるのだろう。横道にそれてしまったけど、ピラミッドと聞いて思い描く形がそれぞれあるように、「東京」の形もそれぞれ違う。大切なのは、それぞれの「東京」を生み出しているのは、一体何なのかだけど、それがよくわからない。東京タワーとか東京都庁とか物理的な実体では無い気がするが、うーん、まとまらない。

混乱したところで、もう一度、東京の果てに考えを戻してみるけど、この形はそれぞれ違うし、たぶんあまり明確な答えは出ないだろう。けど、果てって発想が当てはまるのがやっぱり「東京」は変わっている。大阪に果ては無い気がするし、京都にも福岡にも北海道にも果ては無いと思う。おそらく各地域の境目が、行政区分上での県境で事足りるからなんだろう。それに引き換え「東京」と「行政区分上の東京」は全く別ものだから、こんなこじらせてしまうんだ。行政区分よりも小さい単位になるならば、「東

京」って奴はイメージと違って、意外にちっぽけなのかもしれない。みんなが心の中にそれぞれの「リトル東京」を抱えてる。果てがあるとすると、そこ？ もし「リトル東京」が存在するとしたなら、本物の「東京」はみんなの「リトル東京」のことをどう思うんだろう？ 誰かが作り上げた自分。いらない、邪魔だ。勝手なイメージを押し付けしないで、本当の私を見て！ やっぱり壊してほしいのかな。面白そうなので、壊して欲しいとする。じゃあ、「東京でつくる」じゃなくて、「東京をこわす」じゃないか。いっその事、それで考えてみよう。何か生まれるかもしれない。あ、なんかピーンと来た。「東京でつくる」ってことは「東京をこわす」と何か密接に関わってる気がする。でもなんか、我々の内側に眠っているこじらせた「リトル東京」を壊すことが、「東京でつくる」ことにつながる気がする。なんだかそんな気がする。きっとそう。疲れたから今回はここまで。東京の果てって果てしない・・・色々と人を悩ませて、東京ってめんどくさいやつだなあ・・・映画と東京・・・思い浮かぶのは小津ばかり。東京物語。戦後復興の最中の東京と移ろいゆく家族の情景を、小津は重ねて見たのだろうか・・・あの頃の人々が抱えた「東京」は今と共通するものがあるのかな・・・映画と東京の、つながりはまだ見えない・・・実は誰かが作り上げた矮小な東京のイメージよりも、もっとビッグなんじゃねーの？ 東京さん・・・

第二回 「日本から離れてつくる」

「思春期ふたたび」

「好きって、気持ち大切だと思ってます」とスタディ中に聞こえた言葉が響いた。ちょうど好きってことについて考えてたから。人間的な好き嫌いはい置いて、趣味趣向についての好きとか嫌いとか、そういったややもやした周辺について。最近、自分の好きなものが答えられない。どうやらここ何年かで、自分の中から「好き」って気持ちが掠れていっているみたいだ。たぶん人として鈍くなってる。

ちょっと前から、自主映画を撮る学校に通い始めている。そこで生徒や先生から、当然のように聞かれることがある。「好きな映画ってなんですか」。聞かれるたびに困ってる。はっきり答えられない。とりあえずお茶を濁して、いくつかの映画を答えるけど、おそらく若干ずれてて、自分はメロンパン程度に好きなものを答えているけど、結構大勢の人がメロンパンは好きだと思う。メロンパンを好きってこと、それは「人として好きだ」って感じで、求められてるのは「異性として好きか」って感じがある（ドーしてそうなんだって言われれば、答えづらいけど、そんな気がする）。でもその「異性として好き」って気持ちがここ数年薄れている。嫌いなものも減った。でもいろんなものに理解を示そうとしていくうちに、好きなものも減った、気がする。

そうした質問を受けたとき、好きなものがないと答えることに、どこか後ろめたさを感じる。好きなものがないのに、こんなとこ

ろに来てるの？ ってな感じで。自主映画の学校だから、来てる人の中には筋金入りの映画好きもいる。表現行為として好きだし、媒体として好きだし、観客として好きって具合に。自分にはそこまで「好き」があるかって聞かれると、考えてしまう。そこに何だか居心地の悪い感じを覚える。

ここにも1つの不安（ある種のおそれ）、があると思う。

先日のスタディで出た、いくつかの不安のパターン。将来を見通せない不安（便宜上、恐れと名称されていた）、理解できない集団への不安（オウム的、ネオナチ的な）。それとは別に自分の内側に根拠の持てない不安、おそれ、自分が認められない感覚。だいたい気にしなくなったけど、いい年を超えても、自分はそのおそれを抱えている。「好き」って明確に言えないことは、自分の中に確たる感情や価値観がない証拠にも思えてしまう。

十代や二十代前半には、その不安を打ち消すために必死に「好き」を探した気がする。実際に「好き」があったのかもしれないし、捏造したかもしれない。でも好きだった言えることがいくつかあった。と思う。最近はない。好きって気持ちを感じることがめっきり減ってしまった。昔ほどではないにしろ、何か好きなことを持っている人を前にして、後ろめたく思ってしまう自分のいる。

自分自身こうだと言える、根拠のないことの不安。オウムに詳しくはないけど、オウムに入信した人たちも自分自身の根拠に不安を感じていたのだろうか。

ある種「東京」は、自分の根拠のなさを埋めるためのもので満ち溢れている、ような気がする。街はその代表例で、どの街が好きですと言うことで、自分はどんな人間ですと代替して主張することもできる。もちろん本当にその街が好きってこともある（そっちの方が多いと思う）。けど、うまく自分の説明のために使うことができて、過去に自分はそうやって街を利用して（自分の場合は中央線沿線を使っていたと思う……）。

映画、とは言ってはいるけど、それも自分の根拠を作り上げるために言っているのかもしれない。映画が好きって言葉は出てこない。そこには強い感情や思いはない。でも、それでも何かしたいと思うし、それを見極めたいのだろうか。

何もないところから、何かを始める。好きなものや強い感情、興味を追っかけていって、何かを作るのではないとするなら、何をしたいのだろうか。

映画に関して言えば、好きなものは無い（無いと言うのは正確には嘘かも、でもちょっと違う）が、強く印象に残った映画は上げることができる。それらは好きという感情からは切り離されているけど、強く印象に残っているのだ。理由はそれぞれで、1つ、1つ、検証はしてはいるけど。強く印象に残ったもの、その理由、それを追っかけるのが、1つのテーマかもしれない。

東京に対して、好きでも嫌いでもない。これが自分の東京に対する素直な気持ちだ。「東京でつくる」ということは、自分にとっては特別な感情を抱いていないものを題材になにかを作ることかもしれない。だとしたら、どうしたらいいだろう。

感情を抱いていない東京。ここで1つの仮説を考える。それは大きな「東京」のイメージに対してなのかもしれない。であるなら、今までの東京のイメージを一旦捨ててみよう。それで新しい「東京」を作ってみよう（「東京でつくる」ではなく「東京をつくる」だ）。

じゃあ、どうやって東京をつくろう。強い印象でも手がかりにしてみようか。特別な思いを抱いていないが、何年も都内を散歩し続けて、強く印象に残った風景はいくつもある。それをかき集めて「東京をつくる」にアプローチしてみよう。

堀切菖蒲園の近くのたいやき屋、阿佐ヶ谷駅前の街灯の灯る商店街、多摩丘陵に生える団地群、そこにポッカリと浮かぶ空き部屋、東京湾周辺の巨大なコンテナ群、さみしげな埠頭、埠頭沿いの大通りと大通りに並ぶトラック、レインボーブリッジの遊歩道、八王子の山奥に捨てられた石仏と乾いた瞳、中川と荒川の間の上を通る首都高、休日の誰もいないオフィス街と乱反射するビルの光、多摩モノレールから眺めるベッドタウンの夜景、等々。

これは風景を寄せ集めただけで、街じゃない。全く東京っぽくもない。けど、こんな風景の集合体が「東京」であるなら、正直、興味深いと思ってしまった。うーん、そうか。そうなるとやっぱり興味がなくなっていたのは、作られた東京に対してなのかもしれない。当たり前っちゃ当たり前だけど、自分の興味で集めた「東京」は面白く見える。

ここで興味深いのは、この風景群を、今までのスタディで、除外していたことだ。考え足りないと言われればそれまでだけど、どちらかといえば自分の考える「東京」に含めていなかった。全く思い浮かばないのだから。なぜそうなってしまったのかと考えると、「東京」の存在の影響が大きい。

ここに大きなヒントがあるように思える。これらの風景は全て体験から出てきたもので、本当に身近な東京なはずなのに、それは外の世界から連れ込んだ、大きなイメージの「東京」に覆い隠されてしまっていた。ある意味、東京に対して盲目だったんだ。

ここで、ふと。当初の「好き」という言葉に立ち返ってみる。

もしかすると、興味が抱けないとか、感情が湧いてこないというのは、実体とは全く違ったものばかりを見ている、あるいは見させられている、言い換えれば観念的なものを恋せよ、頭で好きになろうとしているから、うまくいかないのかもしれない。経験の伴ったものに、視点を変えてみれば、少し感情の湧き方は変わってくる。頭だけではなく、体を使うのだから（自分の強い風景群も、長時間の散歩の疲れが影響している！？ かも）。新興宗教

や洗脳では体を使った経験をうまく利用する、と聞いたこともあるから、やはり体の経験は重要なかもしれない。

特に「東京」は観念的なものが強いので、体を使って感じるということが重要かもしれない。もしかすると「東京でつくる」というのは、「東京」を体の中にねじ込むことなのかもしれない。体の方から考えることは、自分の映画にとっても役に立つだろうか。映画の持つ特性から、方向性は違うけど。

でも、これは「東京」からの逃げでしかないかもしれない。本当は自分が興味を持っていない「東京」のことを、もっと考えなければいけない（興味がなくなっているスタンスも、逃げの現れかもしれない）。今度はその逃げでしまっているものの正体を考えてみたい。「興味のある東京」と「興味のない東京」の両面を捉えていければ、もう少し東京に入っていけるかもしれない。

第三回 「ここでつくる／ここではないどこかでつくる」

「飲み会の最中に、ふと素面になるとき、東京でつくる必然性についての考察」

飲み会の最中に、ふと素面になる。飲み会自体が悪いわけでもないし、出席している人に何か恨みがあるわけでもない（いや、少しはあるかも。ムカついてるかも。ウソ。でも、とりあえずここでは無いことにしよう……）。お酒も回ってきて、誰かの身の上話に笑いで返している、その最中にふと素面になる。

$\forall (\geq \nabla \leq) o \rightarrow (\cdot _ \cdot)$ 。みたいな感じに。

これが発生する原理は何だかよくわかってないけど、急に冷めてしまうのだ（原理については考察が必要）。冷める対象は話をしていた誰かやその場の雰囲気に対してではなく、飲み会に興じていた自分、自分の楽しんでいたその感情に対してだったりする。

これは飲み会だけに起こることじゃない。他にはゲームなんかもよく起こる。テトリスみたいな単純だけど熱中しやすいゲームで夢中になっているが、ふとしたタイミングで冷めてしまうことがある（ゲームは時間を浪費することへの虚しさもあると思うけど）。

これが元々それほど興味がなくて、感情が沸かないことに冷めるなら、簡単に飲み込める。当たり前のことから（興味ないんだもん、しょうがないよね）。けど問題なのは、熱中していたものの、楽しんでいたものから急に冷めるときなのだ。飲み会も元々興味の無いメンツではなく、面白いと思っていた飲み会で起きるのが問題だったりする。

今回のエッセイでは、この状態を「キューが解ける」と便宜上呼ぶことにする（演劇を専門にしている方が大勢いる中で恐縮ですが、思い浮かんだのがこの言葉なので、これでいきます。文句や指摘は次回以降聞きます）。

キューはあらゆることで解ける可能性がある。今までの軽い例だけど、これが仕事や恋人、趣味や創作活動、家族といったちょっと重いもので、キューが解けてしまうと、相当にツツイことだと思う。さらにそれが人生の間際、半世紀以上の時を過ごした後、に起きてしまうと悲惨かもしれない（その可能性を考えると実にゾッとする）。

「キューが解けた」ときに、目の前に何があるのかによって、生き方は大きく変わってくるだろうし、カルトにハマった人は、キューが解けたときに宗教と出会ったのかもしれない。

「東京でつくるといふことの必然性」と、キューが解けることの関わりを考察するのが、今回のエッセイの目的だ。

自分が初めてキューが解けたのは、15くらいのときだったと思う。高校の文化祭だか、体育祭だかの行事で、熱心にクラスを応援しているときに、ふと覚めてしまったのだ。それまでは夢中になっていたはずなのに、眼の前で起きていることが自分にはどうでも良いことだと感じてしまって、急速に自分の内側が冷めてしまった。もしかすると、面白い、熱狂していたものが、実は自己暗示のようなものをかけていて、熱中するフリをしていたのかもしれない。その前提は定かではないし、明確ではないけど、15歳の高校の行事の場、熱狂の場で、自分の内側は冷めてしまったのだ。キューが解けたのだ。

それ以来、何度も、様々なことで、キューが解けることを繰り返している。

それは飲み会や文化祭のようなライトなものもあれば、仕事や会社のように、数年間かけて自分を費やしてきたことに起きたこともある。ときには切実なことであり、考え込むようなこともあった。でも、まあ、一通り悩んだあと、そんなものだろうと、お茶を濁して、通り過ぎてたりもした（他にやりようもしらないし）。

自分にとって映画は、何も熱狂するものがない状態、このキューが解けた状態から始まっているので、ある意味、挑戦的な実験だとも言える。愛のない相手と、結婚をして、家庭を作って、老後を過ごせるかと、挑戦することにニュアンスは少し似ているかもしれない。

ここで「東京でつくる」、その必然性を考えることに戻りたいと思う。

先日ディスカッションで、自分の中に印象が残ったのは、日本ヤヴァイ、東京ヤヴァイの中で聞いた、「東京の人は、AIに近い（ある種AI化している？）」という言葉だ。

このAI化というのは、仕組みに適応させていくことだったり、頭の中を効率化すること、思考を省くことだったりと考えている。

このAI化の是非をたびたび考えているが、今のところ有効な反論を作り上げることができていない。AI化の何が悪いのだろうかと考えても、自分の感情しか反論の根拠にはならず、生物的な進化の観点から言えば、嫌悪感といった感情の方が社会維持、種の繁栄には不要なもので、AI化の方が適切な選択じゃないのか。猿から人間に変わる過程で、体毛をごそっと捨てたみたいに、人間から次の生物に進化する段階では、感情を捨てて、より仕組み的な生物になる方が妥当である！ みたいな肯定論があったとしても、自分は感情論でしか反論できない。なんかキモチワルイ程度にしか言えないのだ。

ちょっと変な方向に飛んでしまったので、少し戻してみる。

完全なAI化、とまではいなくても、毎日の満員電車に乗って、意味もなくスーツを着込み、決まって12時にお昼を取り、飲み会ではお酌をしたりと、ちょっとした嫌悪感を感じる場面でも、そんなものだと思ひ込みながら、飲み込んでいるかもしれないし、もしくはそれを問題だと捉えているのは少数派で、大多数の人は問題ですらないと思っているかもしれない。

ある大企業で派遣で働いていたときに、ファイル交換ソフトの利用有無のチェックのために、自宅のPC、しかも自分だけではなく家族のPCにまで、チェックツールを入れて、PCのファイルの中身を全て検査してこいと言われたことがあった。私用のPCの全検査だけでもおかしいのに、家族のPCの中身を全て見るのは、どう考えても度が過ぎている。しかも自分はその企業と雇用契約があるわけではないのに（特定派遣という契約で働いていたから）。でもそれに対して疑問の声を上げる人は誰もいなかった。

その時の経験もあってか、AI化は大勢の人にとっては些細なことかもしれないという考えが否定できない。感情に起因する問題がなくなるなら、それでいいのだ人類！ と肯定することすらできるだろう（それでいいのか人類！ という気持ちも当然ある）。

でも、やっぱり人間は人間であり、感情に逆らった生き方には歪みも生まれる。それはAI化のキューが解けて、途方に暮れたときもそうだ。

自分も自身がAI化することに、それでいいんじゃないかぐらいに思って、必死に適用させようとしていたことがある。だけどAI化を飲み込もう、肯定しようとしていたけど、どこかでキューが解けてしまい、AIになり損ねてしまった。

同じようにAI化が進行している人たちもキューが解ける瞬間があるのではないかと考えている。仮に「東京」がAI化を進めている大元ならば、AI化のキューが解けるのは「東京からはなれる」と言えるかもしれない。

「東京からはなれる」ということ、言い換えれば今まで信じ込もうとしていた感情、思想、方式が根底から覆され、途方に暮れたとき、「つくる」から離れたとこにいた人々が、何か「つくる」ことにアクセスできる、東京ならばできるというなら、それは「東京でつくる必然性」があると言えるかもしれない。あるいは「東京からはなれる」から「つくる」ことにつながるなら、「東京でつくる必然性」があるように思える。

次回以降は「東京」の正体をもっと深めていきたい（東京の正体って、前回も言っていたけど、全く進んでない……次回、こそは！）

第四回 「東京にふれる」

「鉄雄と鉄筋、鉄山と」

少し前に帝国陸軍に関する書籍を読んだ。永田鉄山という、陸軍統制派の創始者と呼べる人物に焦点を当て、帝国陸軍が太平洋戦争を引き起こすまでの軌跡を追った本だ。

それを読んだ影響だろうか。最近、ふと陸軍と「東京」が似ているなどと思ってしまった。

戦前、内閣ではなく陸軍が陸軍大臣を選出していた。統制派はそれを利用して、意にそぐわない政策を取る内閣に、陸軍大臣を立てないと脅しをかけ、自分たちの要求を実現した。（陸軍が大臣を立てなければ組閣できないので、内閣は陸軍の言い分を飲むしか無くなる。統制派が陸軍の実権を握ってから、政治には陸軍の言い分が強く反映されるようになった）

統制派の特徴は、ヒトラーのような中心となる人物がいたのではなく、陸軍の一派、ひとつの集団が、陸軍大臣の選出という集団の力を通じて政治的欲求を実現したところにある。

そこに、主体となる存在はいない（創始者として永田鉄山は挙げられていたが、永田自身は早い段階で亡くなり、陸軍官僚が内閣を動かすという永田の思想だけが残されたようだ）。

主体がないせいか、主張も二転三転していく。

陸軍の一番の憂慮事項だったソビエトに起因して満州事変を起こしたはずなのに、第二次世界対戦の頃には、ソビエトと不可侵条約を結ぶようになっていたり、ソビエトとの戦争には米国の支援が必要だったはずなのに、資源確保の政策を推し進めていく中で、米国と敵対関係となって、米国と戦争に突入したり、同様に中国の抗日派に対する態度も戦況によって変わり、あれよあれよという間に主張は一億総玉砕に変遷していく。状況によって政策が変わるのは当然のことだと思うが、どこにも一貫した主張や思想がないのだ。彼らは空っぽなのだ。

中心となるものがないまま、主体がないまま、「何か」に突き動かされて一直線に行動していく陸軍と、自分が抱えている「東京」に似ているものを感じた。どちらも主体なく、「何か」に突き動かされて世界を食らい、ただただ巨大になっていくのだ。

主体のなさ、ここでは行動原理が内側から来ているものではなく、外の状況や外から来た価値観の変化によって行動することを指している。統制派は、パラノイアまがいの対ソビエト政策から一億総玉砕まで、一貫した思想や主張もなく、外的要因によって主張を変化させていった。そこに主体は感じられなかった。

「東京」に感じる主体のなさは、一体どういうものだろうか。

以前、職場で若い子が、東京のイメージと言ったら「ザギンでシースーです」と答えたのを思い出す。その発言自体は微笑ましいもので、場を和ますユーモラスな発言だ。自分の中にも「ザギンでシースー」という東京のイメージはあるし、多くの方にも同様のイメージがあるだろう。しかし、このイメージがどこから来るのかと考えると、言葉が持つユーモアさとは裏腹に、ある種の空虚さを感じてしまう。

東京で画像検索すると、P Cのモニタにはきらびやかな東京の画像が表示される。東京タワーから始まり、新宿の高層ビル群、六本木ヒルズ、東京駅の赤レンガの駅舎、首都高、レインボーブリッジ、スカイツリーと。東京に存在する無数のランドマークが映し出される（簡単に検索に走ってしまうことには、別の憂慮があるが、あまりに話が飛ぶので、ここでは一旦置いておく）。

ロンドンやニューヨークといった欧米の大都市の画像検索には歴史的建造物が出てくるが、東京の画像検索にはそういったものは出てこない。20世紀に急速に発展した近代的な高層ビルが多いアジアの都市、上海やクアラルンプールの方が東京に近い情景だ。

ただ東京の画像を眺めると、他のアジアの都市にはない別のイメージ、ある種の観念的な層、このスタディが始まる前から何度も言及されているもので、「憧れ」が作り出すイメージのようなものを感じてしまう。

常に私たちは東京に晒されている。

出勤の満員電車では東京周辺の新築マンションの広告を眺め、お昼の情報番組（都心、地方問わず）には東京の街並みが映し出され、進路選択のときには都心に位置した大企業の本社や有名大学のキャンパスを睨みながら将来を考え、帰宅して東京を舞台にしたドラマを見ながら一息つく。

東京、東京、東京、と。誰が何のために作っているのかもわからぬまま、主体がないまま、毎日毎日、「東京」は量産されつづけている。

そして「量産された東京」は、そっと頭の中に入り込み、姿を変

えて現れる。ウォーターフロントという地域で現れる。タワーマンションという建築物で現れる。品川ナンバーというナンバープレートで現れる。田園都市線沿線という検索条件で現れる。住みたい街ランキングという特集記事で現れる。渋谷という現象で現れる。2020という西暦で現れる。「量産された東京」は欲求に、欲求は広告イメージに、広告イメージは東京に、と何度も何度も、姿を変えながら東京は再生産され、量産され、肥大化していく。しかし、そこに主体はないのだ。ただただ、生産性を上げ、欲求を満たすために、「東京」はくるくると回され、巨大になっていくのだ。

自分も、今でこそ千葉に住んでいるが、過去に引っ越しを検討したときには、東京以外の選択が思い浮かばなかった。自覚はなかったが、内側に入り込んだ「量産された東京」に囚われていたのかもしれない。

外から刷り込まれた内側の欲求、そこに陸軍との共通するものを感じている。

自分が働いているのは、ベンチャー気質の企業だ。新規事業開発が盛んで、大勢の二十代、三十代が、横文字の言葉を矢継ぎ早に飛ばしている。マーケティングワードだったり、スタートアップの教科書に乗っているような類の言葉だ。心の底から熱中している人もいれば、とりあえずで言葉を使っている人もいる。仕事に向き合うスタンスは人それぞれだ。離職率が高い。ハードワークに嫌気がさすのかもしれないし、自分の道を立ち止まって考え直したのかもしれない。

志があり、自己研鑽を続けている彼らと一緒にするのは失礼だと思いつつ、彼らを見ては、かつての自分を思い起こしたりもする。自分は空っぽな言葉や行動を積み重ねていたな、と。何かを得なくて、必死で行動したけど、何も得られずに、ただただ空っぽの箱ばかりが重なってしまった。主体のないまま進んでしまった。それは、ゴミひとつないオフィス街に鉄筋が折り重なり、次々とがらんどうのビルが生まれていく「東京」に似ているのかもしれない。

自分は主体のない海をずっと彷徨っている。映画を撮ろうと思ったのも、主体のなさを、もう一度どうにかしたかったのかもしれない（なぜ映像かはまだ考え抜いていないが）。

先日スタディの「さよなら東京」の映像作品には、寂しげな東京が映っていた。

かつて一斉を風靡したAKIRAという映画（漫画）には鉄雄という少年が出てくる。鉄雄はいじめられっ子で、常に自分を助ける金田（主人公）に対してコンプレックスを持っていた。ひょんなことから超能力を得て、鉄雄はコンプレックスを埋めるように力を求め続けていく。だが鉄雄の行動原理はあくまで外側の金田なのだ。力を求めていき、最終的に肥大化した力に取り込まれてグロテスクな化け物に鉄雄はなってしまう（余談だが、AKIRAの

中の東京も作品の重要な要素だ）。

鉄雄にも「東京」は似ていると思え、ふと同情を覚えてしまった。

今まで本エッセイで「東京をこわす」とか「東京をつくる」とか「東京からはなれる」とか、大きな「東京」を壊そうと躍起になっていたけど、それは誤りかもしれない。「東京」を担ぎ上げたことから目を背けて、都合のいいものばかりを受け入れようとしていたのかもしれない。

「東京」を生んだ責任はどこにある？

仮に、自分も「東京」を担いで、くるくると回していたなら、「東京」をおごなりにしてはいけなように思える。少しでも担いだなら、その責任があるように思える。グロテスクな「東京」から目を瞑り、「東京をこわす」とか言うのは、「東京」に対してすごく失礼なことだ。

「東京をつくる」を考えなければ、「東京でつくる」にはたどり着かないのかもしれない。

主体のない東京、主体のない自分、一緒に何かつくることができるのだろうか。残り二回のスタディで考えていきたい

第五回 「東京で生きる」（阿部健一さんのご自宅にて）

「東京の果てでつくる」

そこは、東京の外れに現れた、巨大な空き地だった。

10代の頃の話だ。陸の孤島と呼ばれる、東京の僻地、武蔵村山。かつてそこには日産武蔵村山工場があった。2000年中頃には、閉鎖され、跡にはただただ巨大な空き地だけが残された。夜中になるかならないかくらいの頃、誰もいない空き地で、一人立ち尽くしていた覚えがある。そこにいた理由は定かではない。どんなことを考えていたのかも覚えていない。叫び出したい衝動に突き動かされた気もするし、ただ途方に暮れていただけかもしれない。自分はここにいるのだと主張したかった気もするが、もうよく覚えていない。その時の感情が掠れていることだけは確かだ。

久しぶりにその記憶を思い返して、ふと「東京の果て」という言葉が頭によぎった。

以前、このエッセイで「東京の果て」を考えた時、明確なイメージは思い浮かばず、23区周辺とかお茶を濁して終わった気がする。今は違う。あの武蔵村山の情景こそが「東京の果て」と関係しているように思えて仕方がない。

「東京」の定義を再び考えてみる。仮に「東京」が大勢の人々が

持つ公的なイメージの集合とするならば、あの極度に私的な工場跡地の風景は間違いなく「東京」の外側だろう。公的な東京と私的な東京の境目、それは「東京の果て」と呼べるかもしれない。もしくは「東京」を自分の中にある東京のイメージの集合とするなら、あの風景こそが「東京の果て」だろう。もちろん武蔵村山の先は存在している。瑞穂町もあるし、奥多摩もあきる野もある。でも、あそこが自分の中で最果てなのだ。あの先には何の情景も続いていないのだ。「東京」は自分の中であそこで途切れている。そういった意味でまさしく「果て」だと言える。

工場跡地は、一部がショッピングモールとなり、一部は宗教法人に移譲され、一部には武蔵村山市役所が移転するらしい。東京の片隅に現れた巨大な空き地は、どこかに消えてしまう運命にある。

あの巨大な空き地が消えるよりも随分前に、自分の中からあの日、あの場所で感じた感情は消えてしまっていた。いくら強く感じた感情も、時とともに簡単に解かれてしまうのだ。

解かれる、という言葉。それを消えるという意味で使っていたのを見たのは、どこかのQAサイトだった。

正確には消えるではなく、死ぬという意味で使われていた。そのサイトに掲載された死とは何かという質問に、回答者の僧侶が「自分が解かれていくこと」と答えていた。死に対する答えを求めてたどり着いたわけではなく、偶然そのサイトを見ただけだが、妙に納得して「解かれる」という言葉が気に入ってしまった。

感情なんかは「解かれる」という言葉がしっくりと来る。様々な要素が強く結びついて生まれるからだろうか。「解かれる」という響きが良く馴染む。

感情が解かれる時間を、計測しようと試みたことがある。

少し前、ネパールに行った時、湖畔から眺める夕景をすごく美しいと感じた。銀色に輝く湖畔の上空に、淡いオレンジ色に染まった夕陽がゆらゆらと落ちていく、世界のどこにでもあるような情景だが、旅行に出かけた経緯や、道中での出来事、様々な要素に押し上げられ、その夕景に心を奪われてしまった。そして、その感情がいつまで残り続けるだろうと問いかけたのだった。でも当然のように、いつの間にかそこにあった感情は解かれてしまった。一週間くらいは残っていた気もするが、日本に帰ってきて数日で感情はなくなってしまった。一年以上経った今はもう、何も残っていない。その時の映像だけが自分の中で残り続けている。

いくら思い返しても、かつての感情が復活することはない。感情の伴わないノスタルジーがあるばかりだ。ただ自分が映像に気を向ける理由は、そこかもしれない。感情は枯れ果てるが、映像は残り続けるのだ。

東京では、1日1日と、あらゆることが解かれていく。新しくできるものに目を奪われがちだが、作られるのと同じ速度で多くの

ものが無くなっていく。他の地域に比べて、あまりに作られるのペースが速いから、消えていくものに目を向けずに済んでいるが、実際は多くのものが解かれている。建物は壊され、人は去っていき、道路は解体される。何十年かけて積み上げてきた集落が無くなる時、人は目を向け、哀愁を覚えるが、東京で同じ量のものが解かれたとしても、注意を払う人は少ない。その目撃者の数に比べて。東京では集落一つ分の人やものが消えることなど、年に何度もおきてそうなものだが。当たり前のことだ。東京では解かれることは日常でしかない。

東京での暮らしが、人を無感覚にさせるのかもしれない。

職場は渋谷にある。渋谷は大規模な再開発の只中で、毎日、再開発を眺めながら通っている。再開発を見ても、何も感じていない自分がいることに気づく。土地に馴染みが薄いということもあるのだけれど。解体される風景の裏側に何があったのか、思いを馳せることもない。元からそういったことに無感覚だったのか、無感覚になってしまったのか、どちらかはわからないが、自分の中で、受信アンテナとも呼べる感覚器官が動いていないのは確かだろう。徐々に自分自身が解かれていっているのかもしれない。

感情は掠れていく。だか不思議と、風景は残り続けるものだ。

20年以上暮らした団地の部屋を去った日のことは、明確な輪郭を保ったまま残り続けている。家財の一切を捨てられて、他人の家のように綺麗になり、空っぽになった団地の一室。畳に寝転び、窓の外、近くの公園が小学校から聞こえてくる子供の遊び声に耳を傾けて目を瞑った、あの一時。今でも自分の内側で残り続けている。どういった感情を感じたのかは、もうすでにわからなくなってしまったが。

そういえば、あの団地も東京で、それに解かれていく風景で、そして先には何も続いていない「東京の果て」だ。

今に興味がないわけではない。未来を否定しているわけでもないし、過去に囚われているわけでもない。でも自分が惹かれるのは、これから失われていく情景、解かれている風景なのだ。そこにあった過去を掘り出したいというわけではない。ただただ解かれていくこと、あるいは解かれたことに思いを寄せたいのかもしれない。

そういった情景を積み重ねていった先に、何が待っている？

過去に自分が強い感情を覚えた情景、そして今はもう感情の消え失せてしまった空箱と成り果てた風景を収集して、一列に並べたとき、何を思うだろうか？ 何も感じないかもしれない。虚しさを感じるだけかもしれない。積み重ねられた空虚さの重みに潰れそうになるかもしれない。または押しつぶされるほどの重みなんて無いことに驚愕するかもしれない。何が待つにしろ、そういったものを積み重ねた先の情景を見たいのだ。

斜に構えるわけでも、反抗するわけでも、強い主張があるわけでもない。ただ、衰退や劣化、あるいは解かれることをどう受容するのか、というのは一つの重要なテーマだと感じている。それは自分にとってもそうだが、東京にも通じているだろうし。ひいては日本にも。

もし「東京でつくる」なら、何を作る？

具体的な形は見えない。手探りの段階でしかない。頭に浮かんでくるのは、武蔵村山の工場跡地だったり、空になった団地の一室だったり、「東京」から遠く離れた「東京の果て」と言える場所だ。

あるいは、休日のオフィス街。

誰もいないオフィス街を、一人歩いている。車のエンジン音も電車音も、人の話し声もしない。コソコソと私の足音だけが響いて、私を追いかけてくる。ふと足を止める。足音は止む。振り返ると、大きな道が広がっている。誰もいない。前を向くと、大きな道が広がっている。誰もいない。右を向いても、左を向いても、誰もいない大きな道が広がるばかりだ。いるのは私だけだ。ここで心臓発作か何かで倒れたらどうなるのだろうか？ 痺れは指先から広がり、すぐに全身を駆け巡り、私は固まり、ひんやりとしたコンクリートに横たわる。誰も通らない。病院も近くにない。私の声なき叫びは、私の中で虚しく反響するだけだ。誰に届くこともない。おそらく助かることはないだろう。日本の中心に位置しているというのに、あまりにも不便で、あまりにも孤独で、あまりにも寂しい場所だ。日の光を全身に受け、銀色に体を震わせる巨大なビル群だけが私の友人だ。でも、そんな寂しい場所にて、孤独を感じながらも、なぜだか、少し落ち着いてしまって、ひとりぼっちの東京というのも悪く無いなと感じてしまった。

でも、やっぱり少し寂しい。

きっと、そういったものを自分は誰かと映像で共有したいのだ。そして自分がいつかバラバラに解かれたあとに、これだけはと切実に残したいものを見極めたいのだ。そして、あわよくば、一万年くらいあと、今の人類がいなくなった時代の超技術を使って、人類以外の何者かが発掘して、今日の映像を見たときのことを想像しながら、遠い一万年後の誰かの感想が漏れてきたら、面白いなと思いつつ。

Profile

中田森也（なかた・しんや）

昭和の終わりに、立川に生まれる。

（もしくは国分寺かもしれない。実はよくわかってない）

20頃まで立川近辺で育つ。

その辺りから神奈川とか都心で働き出す。

20代半ばに三鷹に転居。

30くらいに東京から離れて、千葉に越す、今に至る。

東京と聞いて思い浮かぶのは、東京ラブストーリー。

でも、東京ラブストーリーで思い浮かぶのは、武田鉄矢の顔。

多分いろんなものが混じっている。

前田 安紀

Aki Maeda

最初に読んだ時はびっくりして、今ではファンです。エッセイの中の前田さんはとにかく必死で、全力で、おそろしく感覚が鋭敏で。鈍麻せず（できず）生きるのは決して楽ではないと思うけど、才能だなあと思います。（石神夏希）

第一回 「東京でつくる」への戸惑い

東京でつくる、エッセイ1。

エッセイときいて、ひと安心なのが…コラムとかではなくてよかったということ。
客観性は持たなくてよくて、手紙みたいに書けばよいのか？よくわからないが、
こういう文体でしか書けないので、これで書くしかない。

言葉について第1回の対話で、「肉体を持たない言葉」というのも出てきたが、それについてはよく考える。なぜなら、自分の「肉体を持った言葉」が通用しないと思っているから…誰かと同じこと言ってるのに、その人の言い分は通るけど、自分ののは通らないみたいな。
もっと上手い例えがあったような気がするけど…肉体を持たない言葉は透明で、匿名性とも違う。あの人自身よりも、あの人の文章の方が好きということもよくあって…肉体を持った言葉よりも、透明な文章だけで判断したらいいのと思う。

9/24の懇親会に参加して、石神さんとお話する機会を得て、スタジオ01東京でつくるを選択した理由が明確になった。それは、やはり演技ということについて。

演技してるという自覚はないが、ひきこもった原因を、ひきこもってすぐの頃探したら、すぐに見つかった。親の前でいい子のふりをしてる（アダルトチルドレン）と、本当の自分が何をしたいのか解らなくなり、色んな所に障害をきたすというもの。96年当時は、衝撃的だった。アダルトチルドレンという言葉言い訳に、親に向かってまで「貴方達の前でいい子のふりをしてるから、その自分で外に出るのが嫌でひきこもっている。」なんて言っていたけど、今もその気持ちは全く変わってないかもしれない、ヤバイ。

石神さんに問いかけたのは、青年団の平田オリザさんの本にあった、『最近ひきこもりの若者と話す機会などもあるが、大抵彼らは、「いい子のふりをするのに疲れた」と言う、本気で演技をしたこともなくせに。』という文章について。ふりだって、本気の演技であることには代わりないのに…じゃあ演技って何なの？と演技に興味を持った。（演劇というのは、また別なのか？）

数年後の…今年、想田和弘監督の観察映画というジャンルのドキ

ュメンタリーを観る機会があり、過去作品の平田オリザさんを追った「演劇」を観ると同時に、「演劇vs映画」という本も読んだ。その中で、平田さんが俳優の演技について、感情移入など、その役の気持ちなる事は全く必要なく、内心は今日の夜ご飯何食べようかな？と考えていても、外側にわからなければ何を考えていてもよい、と書いていて。それが、ふりってことじゃない？いい子のふりというのは、自分はこういう風に考えてたけど、（その考え方は間違ってるとか親に注意されたから…）その考え方はやめて、親の考え方で生きているようにみせる=ふりをするというなのに。（親が演出家なら、演出家の演技指導の通りとも言える…）

石神さんは「本気で演技したこともなくせに」…というのを、平田さんがどういう文脈で言ったかわからないので、何とも言えないがと…前置きした上で、生きるために演技してるかとの違いと、見る側からの搾取があってはならない。と仰っていた。（間違ってたらご免なさい）

「生きるための演技」と「本気で演技する」ことについて、本気の演技=ふりなら、ひきこもりの人は、生きるための演技をしているということになるのだが…親の演出通り生きていたら、いつの間に関心や感情は捨て、その家で生きていくための役割を演じてるだけだった。ということと、役者は喰うために芝居をし、それで生きていく。ということに、何の違いがあるのか？（これは平田さんへの反論です）

見る側からの搾取については、非常に重要なテーマで、自分が書きたいことと重なっていたので、第5回のエッセイで触れたいと思う。

※この場合だと、ふりが見てる側の搾取により本気になったということ。

親の前で、（親の考えを入れ）いい子のふりをしたら、自分の中身がなくなり、ふりが本気（いい子のふりではなくて、いい子=親の考えだけの自分）になってしまった。みたいな、わかりにくくて、すみません。

その「演劇」の映画の中で、小学校の教諭への平田さんの講演中のシーンでも、この話題が

—平田『いい子のふりをするのに疲れた』と言う子がいて、「本当の自分で生きたい」とも言うんです、本当の自分なんて無いんです。皆社会では、ペルソナ（仮面）を被って生きてます。』と言って、先生方のWSを始めた。
「自分の好きなフルーツを言い合いながら仲間を作ること」と課

題を出された先生達は、ぶどう～、桃～とか声を出し合い、そのフルーツを好きな人毎に集めたグループで、教室の床に座っていた。(いい大人が…ほんとに滑稽に見えた。。)

—平田『こういうWSを中学生でやると、俺バナナでいいやと言って、バナナを好きでもないのにバナナの所に行っちゃう、これでは駄目なんですね。』と、『こうならないためにはどうしたら良いと思いますか?』

—先生『好きなフルーツとかではなくて、事実を答えられる誕生日とかにする』

—平田『そう、ほぼ正解。』

それを、観ていて「好きなフルーツは?」と聞かれて、本当に好きなフルーツを答えて仲間を見つけてた先生たちの状況の方が、違和感があり、『俺バナナでいいや』と言った中学生が、平田さんの言っていた演技論正しく実践してるじゃん。本当にバナナが好きかはどうでもよくて、バナナ好きに見えてればいいんでしょう。バナナ好きのふり＝本気の演技と思った。

私が日常の中の演技と言ってるのは、この程度の事なので、俳優さんがやっている演劇とはまた違うのかなと思います。その日常の中の演技で、もう1つ。シナリオライター講座体験WSを受講した時に、自己紹介はせずに、他己紹介をやったのです。〇〇さんは、何々をしていて、こういう所に住んでいて、こういう過去があってとかを、勝手にイメージし、創作して言い切ってしまうのを、順番にやってくと、不思議。その空間は、あたかもそのようであるかのように、進んでゆくような気がした。

この東京でつくるでも、自己紹介すらしなくてというか、自己紹介をすると聞き、ひきこもりの事を言うか言わないか迷った。「思考と技術と対話の学校」というくらいだから、これから自己紹介しなきゃいけないときに、ひきこもりと言うのが嫌だから、何て言えばいいのかを一緒に考えてくれる。みたいな、それくらい普段タブーとされてるような対話が出来るかと思ったが、意外と普通に始まってしまった。それって、肉体を持った言葉だからじゃないかと…他己紹介でそのままその人になりきったまま話した方が、自分の話すより、対話できるのじゃないかと思ったりした。それが演技の力なのでは?そんなことを考えた第1回でした。

第二回 「日本から離れてつくる」

東京でつくる、エッセイ2。

2回目のスタディ2018.10/26(金)が終わり電車に乗りradikoのスイッチを入れる。

AR3兄弟の川田十夢のラジオ番組j-wave INNOVATION WORLD AIがアシスタントをやっている(Tommyという名前)、漠然としたリクエストを募集しAIが選曲するコーナーで、こんなリクエストにこたえていた。「30年後の夜10:30、東京の夜に流れていたら気持ちのいい曲は?」トム・ヨーク ブラックスワン。『30年後の東京はね～、建物とかが天変地異で壊れ

たものを直してる時間がないので、壊れたまま。こわれゆくものと新しくできたものが同居してて、次の段階のスマホみたいなものができていて、運転は自動運転で空飛ぶ車も、もしかしたらある。無機的なものとか光りの明滅が混在した街。』とDJの川田十夢さんと言っていた。

川田さんは、拡張現実をベースに未来予測できる技術などを、プログラミングしてるので…説得力があり、普通の人より未来がみえてる。壊れた建物がそのままというのがリアルでSF小説の中の近未来っぽいのが、それが現実という日が来るなんて想像できない。

文章を書き始めるまでにとっても時間がかかる。導入部分が決まれば…あとは流れでなんとなく、という時もあるが、書くという行為は通過儀礼に等しいので、言えなかった事を言うための楔のようなもの。なので、今回第2回目のスタディを終え…ここで書いてしまったら、第3回目のスタディに差し障りあるだろうという防衛本能が働き、なんとなくこんなことが書きたかったという断片のメモだけして、次回に書きなおそうと思う。

偶然や現象や儀式などが、演劇とどのように関係するかに以前から興味があったので、イタコのドキュメンタリーを導入にして演劇を作る映像は、ドンピシャだった。

A:つくるとき「見えないもの」とどう関わるか

B:自分が東京、または日本を出ていく可能性

C:“おそれ”(怖れ/恐れ/畏れ)

B<A<C=ぐちゃぐちゃ。まぜる。

イタコにインタビューをしてる映像を、これを信じないと話に入り込めないなと思いながら観ていて、それは自分に起こった現象を人に話してる時でも、同じことだなと思った。

私はよく偶然に人に会うのだけれど、相手が知り合いで、向こうが気づけば確信を持って会ったと認識できるが、有名人に会った時など…その話をして、人違いなんじゃない?とか色々疑念を持たれたら、成立しなくなってくる。

演劇を観る時はフィクションなので、その物語を信じるという感情は、今まで存在しなかった感情だが、信じるも何もそういう設定だから…ドキュメンタリー映像の「存在の耐えられない暗黒」の土方の魂を降ろしてきて、演劇をつくるという設定から根底が揺らぐものに関しては、その事象を信じられるかどうかという感情が(イタコのインタビュー内容をその場で聴いていて、信じられるかは)重要ではないかと考え、「信じることは重要か?」みたいなことを井上知子さんに質問させて貰ったが…信じるとかはあまり関係ないというか?それこそインタープリッター(通訳)としてやっているから…?時間もなくて、質問したタイミングも悪かったため、詳しくは聴けなかったが、オウムというテーマで話すと決まってから、「信じる」については話してみたいテーマだった。

※ドキュメンタリー部分の映像（イタコのインタビュー）は、VTRで観ていても、胡散臭かったからこの質問をした。現場にいたら、どうだったのかという意味で…ただその、ノンフィクションが、フィクションになり、井上さんが演じていたイタコ役は、胡散臭くなくなった。

オウム、信じる、洗脳、依存、投影、儀式、現象、現実。95年。東京から離れて。

ルール違反かもしれないが、もう一度書いてみたい。

第三回 「ここで作る／ここではないどこかで作る」

「なんとなく、提案あり」

もし、石神さんのご家族の話から、この東京でつくるのスタディが始まっていたら…今と違った形の展開になっていたでしょうか？正直、そんなことを思った第3回。

やはり、第1回の自己紹介から始まったスタディは、自分の言葉で打ったジャブがずっと、ボディブローのように効いていて、その自分の言葉の衝撃で話せなくなってしまったような空間に2時間半居なさいいけないから、ほんとに辛くて…。でも誰もその言葉を破ったり、引き裂いてはくれないみたいな状況の中、井上知子さんの言葉から、石神さんが放った言葉の数々は…。ゲストのイシワタさんがわたしたちのエッセイを読み？読めなかった、情報量が多すぎ、ちゃんと自分のことを書いてない。と仰っていて、分かる。わたしも読んでないし（笑）なんとなくは、読んでいる。でも、ちゃんと読んでない。元々？最近…本や人の文章も、ざっくりとしか読めなくなってしまった。多分歳のせい、違う。重要なものに会った時に、ちゃんと気づける能力を残して置きたいから。じゃあ、自分のエッセイもちゃんと読まれてない可能性もあるってことじゃん。それならこのエッセイ、第1目は伝言板のつもりで書いてけど、第2回はスタディ01～05のアーカイブとして、ケース1元引きこもりが外へ出て、生活し始めた経緯とか書けばいいんじゃない、10月にはそれなりのこともあったし。と挑戦したが、忙しくて、集中できず書けなかった。感覚的なことを文字に落とすのには、スイッチがいる。そのスイッチが中々入らず、もはや、その感覚も消えてしまったが、仕様がなく95年のことという所から書きながら、今回は、これを提出するのかと溜め息をついてたら…エッセイ共有の期日12/14になり、皆さんの文章を読みはじめたら、なんか今までと違うと感じ、だったらまた、前の伝言板に戻して、東京でつくるスタディ01の皆さんへ向けて、書こうと、今書いてます。前置きが長くなりましたが、提案があります。

3/3（日）@新百合ヶ丘で演劇を披露する

アーツ千代田3331に通うようになったのは、TURNフェス4のサ

ポーターの説明会で、その帰りにARTS PROJECT SCHOOLという学びながらプロジェクトも実践できるという学校を見つけ、受験し落ちた直後に、アーツカウンシル東京のホームページで「東京でつくる」の文字を見つけ、これだ！と応募した。でも9/24の説明会で、実際に何か作るということはない、と森校長から言われてしまったので、納得せざるを得ず、みたいな煮え切らない感じ。ARTS PROJECT SCHOOLの方も、プロジェクトの実践は出来ないが、講義は受講できるレクチャー生として通っていて、その中の講師陣、山崎亮さんのstudio- L と田中元子さんが関わった、川崎市の2020オリパラかってにおもてなし大作戦というワークショップに個人的に参加していて、それが田中元子さんが提唱する「マイパブリック」を各々やってみようという、ゆるい企画のようなものです。

マイパブリックの3つのルール

1. 自分でやりたいことをする
2. 無料とする
3. まちの「隙間」でする

田中さんの授業で印象的だったのが、まちにベンチを置く。これだけで事業になるほど、未来の生活にベンチは重要だそうで、今回のWSの参加者にも、ベンチを置きたいという人がいて、木のベンチを作ってくれるらしいので…ただ置くのではなく「出会い直し」をテーマにした演劇と「ベンチを置く」を絡められたらと考えはじめたら、東京でつくるの皆さんのことが浮かびました。それが12/10のこと。お忙しいのを承知で、まず石神さんに提案してしまっていました…すみません。自己開示が中々出来なくて、このエッセイもうまく書けないとも相談したら、企画としてエッセイに書いてみたら…と返答をいただく前に、皆さんのエッセイ03を読み、木村さんの「このスタディに貢献したい気持ちがある。」という言葉に、ハッとし、表裏一体だった気持ちが裏返った。ARTS PROJECT SCHOOLでも、東京でつくるでも、何かを作る目的で取り組んできたのに、それが出来ないとなると、逆にやってやろうとハートに火がつく、あまのじゃくな性格で、有言実行ではなく、不言実行でやりたいタイプ。今までだったら石神さんにメールした時点で、またひとりでなんとか実行できるように考えようと、まだ悶々としてたと思うが、皆さんのエッセイを読み気持ちが軽くなった。なんとなく提案してみようという気になった。初めて、このエッセイにもタイトルが、付けられた。この気持ちの変化が自己開示への一歩なのかも。何も書けないという所から=それはブラックボックスを開けるとか、トラウマを書かなさいいけないという所からの解放？かな。でもブラックボックスも開けなさいいけないから、そういう気分で最初に書いていた文章もそのまま載せておきます。その続きは、また。

実際この東京でつくるのメンバーで何かやることは、様々な理由により難しいらしいのですが…共有できただけでも嬉しいです。

95年のこと。平成が終わるから？ではなく、何の節目なのか…最近95年から、あれから23年という報道をよく耳にする。わたしにとっても節目だった年。前回書けなかったオウムの事も含め

て書こうと思う。95年1月17日は、大学受験を控え勉強をしてたはず…高3で、と改めて振り返ると何も覚えてないが、遡ること10年前の1985年の阪神が優勝した年の小3の2学期から1年間、父の仕事の都合で兵庫県西宮市のアパートに住んでいた。すぐ裏のニテコ池のそばに、松下幸之助邸があり、桜がきれいだった。そんな思い出もあり、母が阪神淡路大震災の際に毎日新聞に1万円寄付をしたら、母の名前が新聞に載った。ことを父が盛んにはめていた。というニュアンスで良いのか？父の感情・言語表現が少し変なのを、ここで明らかにしておこう。

95年3月20日この日は春休みだったが、4月から通う短大の最寄り駅、竹橋付近の被害状況を憂いたりしただろうか？埼玉に住んでいて、通学路でもなければ、地下鉄サリン事件ほどの残忍な犯行にも、何の感情も沸かないくらい90年代は虚無感が溢れてたような気がする。大学受験に失敗し、母の通った短大の別科1年の間に仮面浪人し、翌年には別の大学に入り直すつもりがそれにも失敗。女子高だったのに短大のコンサバな女子の雰囲気についていけず=OLにはなれないということ。かなり短絡的な答えの出し方だが、18才の時点で気付いていたことに未だに躰いてるなんて…カラーコーディネーターになりたいから美大受験も…絵が描けなくて断念。努力もせず、大学生活にも馴染めず、心の支えは音楽だけ…

95年当時の二題巨頭は、SPIRAL LIFE とL⇔Rで、大阪まで友達と夜行バスで夏にライブに行ったりした。若いと昔を振り返る感覚がないのか、友達も一緒だったからか、10年前に住んでいた場所が、阪神淡路震災後にどうなっていたかなんて確かめもしなかった。

94年9月に関西国際空港が開通したのを機に、子供の頃から家族で帰省していた高知の祖父母の家からの帰りの便を関空経由にした、95年夏。これが最後の家族旅行、家族写真。

96年3月1年間の短大生活を終え、弟と2人でスカイメイトを利用し春休みに高知に帰省。

母方の曾祖母（当時93）に会うため…中学生の時に母方の祖母がほとんどのおばあちゃんでないことを知らされる。母の産みの母は、幼い母と叔母を残し病死。その後…祖父は現在の祖母と再婚し叔父を授かったが、母と経母の相性は良くなく、母は中学から県内名門女子中高へ進学〜上京し短大卒業後、高知で父とお見合い結婚し24才で私を出産。父も農家の次男で家は長男が継ぐので、中学から実家を離れ進学校へ通い、大学進学と共に上京しサラリーマンに。家族で最初に住んだ場所は井の頭線の永福町、4年後に弟が産まれ埼玉県桶川市に。

※「出会い直し」を演劇のテーマにしたのは、1回出会った人と出会う前の、初めましての関係には戻れないから、結局その人との関係性は、1つしか築けない…というのが、ずっと頭にあり。。この第3回のエッセイは、期日までに書いていたが、スマホの容量オーバー等で送れなくて…それが項を奏して？第4回のスタディは、上手くいったのですが…、これを今、加筆してる2019.1/19時点で、新百合ヶ丘のおもてなし大作戦に、自分が参加するかどうかもあやしい?!。それくらい不確実な未来予測しか、

出来ないのが現状です。

追記2/15（金）期日までに送れなかったので…2/23（土）9:00@アーツ千代田3331から始まるビルグリム。13:00からこの場所でARTS PROJECT SCHOOLのサミット（東京校&全国校）に参加する。

第四回 「東京にふれる」

「肌かさよなら東京」

言葉は暗示。もらったメールの1文字1文字だって、目に入ってしまったら、自分の人生を左右してく出来事になりかねないから、そうっと読む。人の文章や本が、ざっとしか、読めなくなってしまったのは、その反動。文字を体内に入れるタイミングは、選びたい。

早退してしまったので、その後のスタディの内容を映像で見たが、実際にスタディを受けている時より、言葉が入ってくるタイミングが、遅くでタイムラグがあって、心地よかった。

映画祭の実行委員なのだが…映画観る行為は、とても苦痛で、固定された時間を耐えなきゃいけない作業。DVDを観てる時も、常に目をやるのは、デジタル時計、早く終わらないかな。。音楽の方が好きなのは、言葉で描かれた世界は一瞬だけ聴いて（切り取っても）わかるから、第4回のremoscopeの総評で、2本目のお題「さよなら東京」で撮った映像や、感想を述べあっている行為は、まさに旬会のようなものと仰っていたこと。言葉よりも映像が雄弁に語る、という事実が示された。1本目のお題なし動画の中に投影された言葉を解く。

言葉は暗示。その言葉に縛られて動けなくなることがよくある。人の言葉が好きで、その言葉を頼りに生きてきたのは、行動できないから。だから、引きこもっていた。自分主体で動けない。引きこもってすぐの若い時から…今も、何かする時に、人に説明しないと解ってもらえないという強迫観念があり（これは暗示を解くつもりでやっているのだが…）説明しても解ってもらえず、さらに言葉に頼る傾向にあった。説明というか、人を説得させてからじゃないと何かしてはいけない。説得というか、許しを得ないと、人という部分を親に変えてもいいが…自分以外の対、誰か。何かすることに罪悪感がある。

人の行為の中に自分の感情があって、自分の行為の中に人の感情がある気がする。言葉は、その感情を認識するための道具。占いが好きなもの、言葉で縛られた言葉を、言葉で解く作用があるように感じるから…自分が今どんな気持ちでいるかを、言葉によって知り、また、はっきりさせておきたいという願望の現れ、強めの言葉が好き。

そういう一連の自分の性質が、全部集約された動画が今回の

remoさんのWSで撮れた。

1本目の動画で撮りたかったものがなかったので、観たかったものを撮ったら、ガラスに自分の姿が映ってたという(笑) 1分間、音声なし、三脚などで固定された動画を、制限時間15分…御徒町のPARCO_YA上野店まで走って行き、撮ってきた映像は、日比谷花壇×東京藝術大学のコラボレーションで、東京藝術大学の学生が描いたという絵で、クリエイティブディレクター箭内道彦さん(デザイン科映像・画像研究室)の教え子たちの作品です。箭内さんがやってるTokyo FM毎週土曜深夜2時30分〜ラジオ風とロックは、10年前くらいからのリスナー、昨年の4月に「教え子たちとでかいキャンパスに絵を描いた」と言っていた。

8/29のTARLの面接帰りに御徒町に寄り(普段は秋葉原駅を使用)発見した。四季をテーマに、年4回変わるその絵は、青色の背景で、季節は夏?それからは慌ただしく…絵を見る機会はなく12月を過ぎていた。どんな絵に変化してるか…たどり着いた先は、茶色い背景の落ちついた雰囲気のものだった。その日の深夜ラジオ風とロックのテーマは、「箭内さんのメモ」。箭内さんのひとりしゃべり、「メモって言葉かわいいよね。Memoって英語にしてもさあ、かわいいし。メモよりかわいい言葉ってないんじゃない?誰か教えて〜」、『タイトルremo 9月からアーツ千代田3331に通うことになり、12/15(土)remoのwsで箭内さんの教え子たちの作品を撮影しました。(中略)4月にラジオで話していたあの絵に、こんな形で、出会って幸せです。』※誤字つきで。。番組掲示板に投稿した。



この第4回目のエッセイは、清書として大幅に書き直してて…以下は第4.5回と題し第4回の修正と、第5回の導入部分を…と書き始めた部分だ。1本目動画に続き、2本目の動画について触れている。

場所に対する言葉がない。エッセイのタイトルが付けられない理由だ。今回のタイトルも、ほんとに無理矢理つけた。タイトルを付けられない理由をわかりやすい言葉で表してみたかったから、場所に対する言葉がない、と言ったわけではなく…これには前例がある。2015年から所属してるTAMA映画フォーラムでは、毎年映画祭のパンフレットを作成していて、巻末には実行委員の実名と一言コメントが全員分掲載されるのだが、過去4回の内、2回は何も書かなかった。初参加の1年目「映画は未来のリハーサル」は、誰かの言葉の引用。企画が実現した3年目は、その旨の感謝を。でも、それ以外の年は、何も…掲載されていない=存在していない=透明人間でもいい。とよく言っているのはこういうことなのだが…匿名性といえば、remo 12/15(土)のWS、お題「さよなら東京」の動画が、何の脈絡もなく流された時に、スタディメンバーの誰の作品かを当てるのが、とても楽しかった。1本目の自己紹介をしてから、撮った映像を観るよりも、断然。それは、順番通りではなく、ランダムに観る偶然性だったり、イメージの一致?を当てる要素が含まれているから?

その日私は、早退したので、その場所には居れなくて、さらに俯瞰して観れたからというのもあるだろうが…早退して、他の場所で切り取られた別の「東京」を観てきたからともいえる。その日16時から、トーキョーアーツアンドスペース本郷で行われた、現像「キョ・グリフィス+細淵太麻紀」というユニットのトークイベントに参加した。

PHOTOPIA/SCOTOPIA 一現像vol.4 東京の写真集めています
写真提供方法1) サイトから投稿 genzouproject.com 2) twitterで投稿#photopia(昼景)#scopepia(夜景)#genzou#genzou4の4つのハッシュタグをつけて投稿してください3) Instagramで投稿 同上のハッシュタグをつけて投稿してください 上記いずれかの方法でご投稿ください。ご提供いただいた写真については、今回の展覧会で公開編集として展示させていただくことに、ご了承いただいたものとさせていただきます。冊子に写真が採用された場合は、完成した冊子を1部進呈いたします。

会場には、A4サイズ?にプリントアウトされた写真が、紐にクリップで吊るされ、国旗のように、縦に横に斜めにたなびいていた?この時から自分のスマホは容量オーバーで、会場の写真が撮れなかった。全部で400枚くらいの応募があり…(会場展示は100枚くらい)壁面に貼ったのは、新興未開発地区とか場所に対する(カテゴリー名は…こういう名前じゃなくて、もっと面白い名前が付いてた)写真がとても少なかった。あと人物の写真も。(この日のトークはメモしなかったので、曖昧な情報)なんとなくというのが、東京でしょ、というのがわかっていて、そういう写真を撮る人がたくさんいたというのが、写真を選んだ時の実感だそう…。客席には、港千尋さんもいらして、どこからの投稿が一番多かったか?という質問をされていた。答えは、Instagramだそう。この答えは、誰でも予想がつくが、所謂インスタ映えみたいなのは、ほとんどないのが面白いと…。即席なものではなく、1度頭の中で編集された各々の東京のイメージみたいなものが、写っていたと。

<http://genzouproject.wordpress.com/blog/>

正直、ノスタルジーを連想させるような古めかしい写真が、多かった。若い人からの投稿もあったようなのに、インスタで見るようなものは…。最近の若い子の間でも、写ルンですが、流行っているというが、写ルンですと撮られた昔の写真を見本にして、今の若い人が、今の写真を撮ってたとしたら。。箭内道彦さんが、月刊「風とロック」というフリーペーパー（2005～現在は不定期）で使用しているカメラが、写ルンです。創刊当時から拘りで、ミュージシャンなどを撮影している。写ルンですは、特等席で写真が撮れると言って、ただ、2000年代は写メと違って時代で。。ピンとこなかったが、今、このブーム。私は写ルンです世代ではないけれど、HIROMIXとかは同世代で、こんな自分でも…もれなくkonica BiG miniで、セルフイーとかは、撮ってた（笑）、90年代後半の時代。。それが東京とどう絡むかというと、10代後半で家族と埼玉に住んでいたの、東京という場所は、独り暮らしをする所という憧れの場所だった。サニーデイ・サービス「東京」やくるりの「東京」は（1998年発売ジャケットは東京タワー）ほんとによく聴いたので、曲の中のイメージというのが強い。それから、私が東京で独り暮らしすることは、なく…20年あまりの時が経ち、2018年はMETAFIVEの「Luv u Tokio」をよく聴いた。やはり、そこは、架空の街で、人々のイメージが重なりあった場所としか、思えなかった。匿名性の高い場所だからこそ、東京でつくるでも、匿名性のある会話がしたかった。だから、2本目の「さよなら東京」の動画は、それに近いことが、できたと思う。ちなみに、さよなら東京以外のテーマと、迷ったのは「肌」だったらしく、それは、それで観てみたかった。

※箭内さんは、東京メトロのCMを2007年から（途中抜けあり）手掛けられていて、CM のコンセプト「Find my Tokyo」の話は、（地方出身の東京像と東京出身の東京像の複雑さを混ぜて…とか）は、ラジオでよく聴いているので、漠然と東京について考えることは、たまにあったが、あらためて東京について考えてみると、答えがないものだ。

写真については、2000年頃から全く撮っていない。ただ、2007年末多摩市に引越してきてから買った、写ルンですが1本あって、それはまだ現像していない。

写真を撮らない理由は、記憶や人生と関係していて、ドキュメンタリーに興味を持ったのは、演技が関係している。2017年ホンマタカシさんのニュードキュメンタリー作品2本、「きわめてよいふうけい」と「After10 Years」を第27回TAMA映画祭で上映した。

<http://tamaeiga.org/2017/program/C-12.php>

2017年6月TAMA映画フォーラムの特別上映会で、スタジオ04担当の小森はるか監督の「息の跡」を上映し観た時に、主人公の種屋のおじさんが、ドキュメンタリー作品なのに、すごく演技してるように見え、とても違和感があった。その後すぐに、ホンマさんが写真家中平卓馬を追った「きわめてよいふうけい」を鑑賞

し、トークでニュードキュメンタリーの概念を聴く機会があり、その場で、もし企画書が通った際には映画祭で上映したいと交渉し、実現した。映画祭当日会場には、ホンマさんの写真集「東京郊外 TOKYO SUBURBIA」

（光琳社出版）も、図書館で借り展示した。

<http://allreview.jp/review /945>

New Documentary <http://betweenthebooks.com/>

ここで僕がドキュメンタリーと言ってる、いくつかの映像は、いわゆるメッセージのはっきりしたドキュメンタリーではありません。ましてや物語のある映画とは全く異なります。

「映像の自生性」というものについてダイ・ヴォーンという人がエッセイを書いています。

彼がいうには、映画創成期リュミエールの短い映像の中には、物語性と、もう一つ、撮り手の思いを超えてカメラが写し撮ってしまった映像の自生性があり、それはもう一つの映像の可能性だと書かれています。（そしてその実現不可能性にも）僕はその映像の自生性を信じています。例えば固定カメラが偶然写してしまったもの、作者の思い通りにいかず、自然現象に人間が不可抗力的に飲み込まれてしまうといった状況に惹かれるのです。

それは今までやってきた写真でも同じことだと思います。

僕はその可能性を写真と映画の間の何処かに見出したいと思っています。

アーツ千代田3331で2/24～3/9開催の「今の時代のニュードキュメンタリー展2019」

<http://www.3331.jp/schedule/004694.html> ホンマさんの新作『TAKI AYACUCHO CHICHIBU ORQO』（「アヤクーチョの唄と秩父の山」2018 60分）劇場初上映となる。

第五回 「東京で生きる」（阿部健一さんのご自宅にて）

「ドキュメンタリーの行方」

1/19（土）小竹向原駅待ち合わせに遅れ…既に到着組の横で佇んでると、小茂根の文字が目に入った。再来週1/30（水）に行く場所の最寄り駅？！ スタディ後帰り道に、皆さんと別れたのは、小茂根福祉園（TURNフェス4サポーター関連）の場所を確認しに行ったからです。第5回東京で生きる、阿部さんのご自宅にお邪魔した。

東京村の長男坊から始まり、お祖父さまが建てた家のお話。昭和3年生まれと母方の…がループする。昨年10月に14年ぶりに高知に帰省し母方の祖父の家に寄ったら、解体工事の最中だった。昭和2年生まれの祖父が建てた家、

第6回のスタディのQ & A でエッセイを書くのは、楽しかったか？の問いがあり、Noと答えたが…第3回のエッセイで、皆さんへの伝言版としての文章と、自分の事を書く文章を2つに分け、

同時進行させたら、上手くいったので、味をしめたのか、阿部さんの話が遠のいていき、さっき駅で見つけた小茂根の文字に…逃避する。

2つの場所を同時進行させパラレルワールドを作る。何処かできいたことのような話だが、今、この文章を書いている場所が、高知だとしたら…パラレルワールドを現実体現していることとして、あの日のことが書ける。〔2019年2月18日深夜3時36分〕今日の午後から、高知県室戸市羽根町で行われる、高知林業大学短期研修過程「土佐備長炭編」を受講するため、室戸市移住体験住宅の布団の中で、眠れずにこれを書いている。20日の締め切りまでカウントダウンしながら、前回2018年10月13日まで14年もの間、なぜ両親の故郷高知を訪れられなかったのか？を書いてくことにする。

2/16高知に入る。前回来られなかった2018年7月に開館した巨大図書館オーテピアに居た夕方、阿部さんの「あなたにとって、ふるさとがありますか？」という質問メールを受信。ミシマ社のちゃぶ台移住×仕事号を手に取り…私にとってのふるさととは、高知だったはずで2018年10/13～14の「高知家×富士通移住促進動画撮影旅」に参加したと回想しながら、10/15夕暮れ時、重い荷物を背負い、帰京の際に意を決して…祖父の家へ脚を進める。3棟ある、叔母の家、叔父の家の前を通り過ぎた辺りで、何か変？壊され、てる。解体工事も終盤…最後の地ならしが重機2台で行われていた。飛行機の時間も迫り、衝撃よりも、無。写真も撮らず、その場を退去する。ここに住んでいたおばあちゃん？死んだ？

最後に高知を訪れたのは、2004年の6月この家の主=母方の祖父のお葬式も、この場所だった。心臓の検査入院中の死。こういうとやわに聞こえるかもしれないが…土佐のいごっそう。10才の時に父を亡くし、先妻には若くして先立たれ、母（曾祖母）と二人三脚で、畑を大きくした。そして、今の祖母と再婚した。この事実を知ってから、何回もなぞったストーリー。

〔2019年2月18日18時36分〕ドキュメンタリー映像ってなんで、日付を入れるのだろう。それしか事実がないから？今日の集合場所が間違っていて、自分を含めた数人と遅れて研修に参加した。今回、「炭の森生」さんの講座にどうしても参加したかったのは、動画撮影旅でインタビューした日高村に移住した小野香央里さんと、WSで雑談してる時に室戸市の羽根町での備長炭の話を知ったから… <http://www.pref.kochi.lg.jp/~chiiki/iju/prmovie>

ひきこもりの男の人が、林業やったらと…前から思っていて「ひきこもりの木こり」。前回の動画旅で、香美市（父の実家）の高知林業大学を訪れたので、その後10/27には、最後の海づくり大会を高知で開催した天皇皇后両陛下も、脚を運ばれたとのこと…。余談だが、1/9表参道ビルグリムに参加した理由は、林千晶さんが「飛弾の森でクマは踊る」で林業に参入されたという記事を読んだからというのもあり、他にも新たな林業について学びたかった。

※第38回豊かな海づくり大会のプロモーション映像を制作したのは、映画監督の安藤桃子さんだ。「0.5ミリ」の撮影を機に高知に移住した。実はこのことにも凄く影響を受けている。
http://yutakanaumi-kochi.jp/event/event_19110.html

〔2019年2月19日15時28分〕外は大雨、洪水確率90%。備長炭研修をサボってしまった。昨日の中田さんの修了式質問メールに、東京の空は青いか？or 晴れてるか？と問い。青空に象徴されるものがある？というのを認識したのは、高校生の時。自分が青空に対して、センチメンタルな感情がないのは、小さい頃から帰省し、高知の空（夏）を知ってるから？

青空のことを書いていて思い出したこと。今回の旅に雨具は持ってきたが…傘を忘れた。昨年10/15動画旅解散後に桃子さんの映画館cinema Mで（2021年春再開予定）奥田瑛二監督、緒形拳主演の「長い散歩」を観た。そのエンディングテーマが、井上陽水「傘がない」のUAバージョンだった。♪都会では自殺する若者が～、羽田空港から浜松町～京王線で人身事故があり、30分程待ちぼうけをくらった。映画の中で、都会から来た若者を演じる松田翔太が自殺してしまうのだが…映画の中のリアリティーに比べ、日常茶飯事の人身事故に、当たり前の反応を示してしまうのは。。。日常から遠く離れて…第6回のスタディで「東京との距離は変わったか？」という問いに、自分の日常生活が変わっていないので、変わらない。と答えたが…高知でスタディのML内容の受信した時の気持ち、東京にいるときと違う気がする。旅をして東京からの距離が遠くなったからなのか？どうなのか？

〔2019年2月19日21時35分〕非日常が日常を侵食する…かなり昔の話、毎年夏に帰省した際、高知には「おきやく」という酒文化があり（土佐弁で宴会の意）、皿鉢（さわち）料理が並ぶと主婦も席をたたず宴会をする。http://www.tosa_okyaku.com/mb/ 当時おきやくの席は、ひと夏に両家で各1回。一家の長は必ず出席し、せっかく東京から帰ってきたのだからと、わりと多くの親戚が集まった。そこで始まるのが、『あんだ誰ぞね？お名前は…？〇〇さん（父や母の名前）の娘さんか？まあ～こんなに大きゅうなって…頑張っ、勉強しゅう？うんと、勉強せんといかんぞね。』と何処ぞの親戚のおじさんやおばさんに声を掛けられ、困っていると、酒は強くないのに酔っ払った父がやってきて、私の顔を見ながら「まあ、あんまり勉強せんき。成績もたいしたことない。」と言われた時の、自分の娘を卑下してる…何ともいえない感。そのあと、無理して飲んだ父は、トイレに行くとかではなく、皆のいる前で吐く。というのを毎年繰り返していた、30数年前のこと。

37年前桶川市に引っ越してきて…1981年～2007年まで住んだが、よい思い出がない。小学生に上がる前で、近所の人に挨拶しろと父にすごく言われ…母にはピアノの練習が下手だとか、今でいう虐待レベルで、毎日叱られていて、なんでこんなに怒られなきゃいけないんだと、悲しくって泣いて、そのままひくひくしながら、ふとんの中で、明日は怒らませんようにと、お願いしていると、母が入ってきて、「い

い子になってほしいから」とやさしくしてくれた。だから、父の方が好きだったのだが、当時の私にしてみれば、桶川の生活が日常で、夏休みの高知が非日常だったが、どちらも、家族を披露するために演じてるような気がしていた。子供特有の無邪気さがあったわけでもなく…

1996年に曾祖母が亡くなり…いい子を演じなくてはの重荷が下りた。父が会社を早期退職し、1997年に靴の卸売り兼店舗の自営業を始める。資金はすぐ底をつき、2002年までの5年間両家の援助と、母（専業主婦）の生前贈与分を切り崩しながらの自転車創業。弟は大学生で一人暮らし、私はひきこもり。2002年4月12日弟の提案で、父が事業をやめるまで私と母は、母の実家に避難することに…事実上の別居。このやり方が…父に言わせると卑怯で、昨日まで何事もなかったように生活し、置き手紙を残し…いきなり高知なんて。お見合い結婚した両家を巻き込む騒動となった。しかし、これが上手くいかず…昔、夏休みに帰省した際もそうだったが、母には3才下の血の繋がった妹（叔母）がいて、母を慕い…私たち姉弟をととても可愛がってくれてたことと、母と祖母（経母）との関係が良くないこともあり、毎年母の実家滞在中3分の1は、祖父の家。残りは叔母の家と（近いので、行ったり来たりする）日々。2002年7月までの短期別居期間も、叔母の家で過ごした。その後何も解決しないまま、2007年まで母と私は、弟の家（東京都日野市西平山）で、父との別居を継続。弟とも別に過ごした。結局父が事業をやめたのは、2004年6月21日に母方の祖父が亡くなった時に、ようやく決心した。2003年8月25日父の実兄が56才癌で他界した際も、やめるとは言わず、次男坊だから好きなことをし、兄への感謝もなく？、伯父に対しいたたまれない気持ちになった。父母が別居し、両家の長が亡くなり、小さい頃から、毎年高知に帰省し、良い家族を演じてきた意味（任務）がなくなった時、今まで…どうしてそのようなことを続けてこなければならなかったのか？と疑問に思うことが、次々、起こった。

母方の祖父が亡くなり、母の遺産の遺留分が…祖父が、父の事業資金を援助していたという理由で貰えなかった。私たちを可愛がってくれていた叔母は、父親っ子で祖父が亡くなり意気消沈したのか…かつては母を通して疑似体験をしたかっただけなのか？私たち家族が堕ちてく様子を楽しむようになった。それは、人の不幸は蜜の味的に…本来なら相手に気付かれずにすることだと思うのだが…桶川の家を手放し借金を返済した私たちに、明らかに、心配しゆうとは違うトーンで、接するようになり、弟の家に私たちの生活を見に来たりして…（一番されたくないことをされた）、それ（2006年）以来、距離を置いている。

見てる側の搾取について、（自分がどうしたいかは置いて…）、見てる人に〇〇と思われたいように行動しろというのは、父の教えで、〔例—バカと思われたいように人前で声を出して笑うな〕とか、私みたいな中身が空っぽな人間は、（）内がないので、見てる側の意図が自分の意志と直結してしまい、相手からコントロールさせてるように感じてしまう。

自分にあるのは相手に対する拒絶反応だけで…常にコントロールが何処にあるかを探してしまふ。バイトすら出来なかったのは指

示が、命令や相手からコントロールされてるように感じてしまうから…だ。だからといって、ひきこもり、ギャンブル依存だった。母からACだったことを逆手にお金をせびり、借金をしてる父親には（10年くらいバレなかったが…）、働けとは言われたくないと逆上すると、「そういうことしていると社会へ出て〇〇になる」と必ず言われた。「社会に出れないこと前提かよ」世の中に存在するひきこもりは、その願望を叶えるために、ひきこもってるともいえるのでは…あとは、「自分の良心に従え」とも…良心を両親と勘違いして、父親に笑われたが、「良心」がないから「罪悪感」が生まれる。ギャンブルは罪悪感を消すのに、最適だった？言葉が暗示というのは、こういう所からきていて…自分の部屋へひきこもり、親の考えや感情を捨てても、居間に出てまた親に会えば、また親の考えや感情が投影される。エッセイの中でも、投影がキーワードと書いたが外の世界へ出てみて、親ではなくても、その場にいる人の感情や考えが、投影されやすいということが多々あり、親の問題ではなく、自分の問題だったと気づくことも出来た。

投影というフワツとしたものでもなく、洗脳、依存の領域まで踏み込んだのだから、第2回のスタディのテーマ宗教にまつわる諸々なんて…なんてね。家の問題も、都合のよい物語に逃げ込んでいると、片付けられない。世の中の人ひきこもりと聞き、反応に困ってる様子なんて、正にそうだ（ほんとに私は性格が悪い）。映画がこの領域を解いてくれるのでは…、偶然性が大事で、演劇性もあり、投影なんて幾重にも重ねられる。ただ、それには技術を学ばないと。

今回の高知旅でおばあちゃんが亡くなってるかとか…そういう母方のことをするのは、母に禁じられていた。おばあちゃんからは、毎年年賀状はきていて、今年はこなかったの…そういうに状況にあると想像しながらも…実際の道中は、足がなくて、それどころじゃなかった。高知に移住するかは？だが、まずは車の免許を取らなきゃ。

〔2019年02月22日（金）15時52分〕青い空、雲の上。青空と雲の半分の世界。10月の旅も今回の行きも窓際の席ではなかった。久しぶりに見た。2日間研修に没頭し、一文字も書けなかった。〔2019年2月22日21時18分〕代々木上原駅 新百合ヶ丘駅にて人身事故があり、足止めをくらう。昨年12/9開通したジェットスター高知LCC便、成田空港からバスで有楽町→東京ドイツ文化センターに行き、田中功起「可傷的な歴史（ロードムービー）」を30分遅刻して観賞した。最近どの場所にも遅刻するが、帰り道に主演女優の鄭優希（ちゃん・うひ）さんにも会えたから、よかった。これからトークを見に行くのだそう。

Profile

前田 安紀（まえだ・あき）

高知県生まれ、埼玉育ち。2007年より東京都多摩市在住。TAMA映画フォーラム実行委員。第27回映画祭にて、ホンマタカシ「ニュードキュメンタリー」企画上映。偶然性でたどりつけないところまで。東京アートポイント計画で、ひきこもり専用の美容院を開くのが目標。

おわりに

東京でつくる前に

—— 石神夏希 *Natsuki Ishigami*



ずっと、スカイツリーはきらいだった。初めて見たとき、バベルの塔みたいだと思った。傲慢だ、禍々しい、とさんざん毒を吐いた。なのに今日、両国から乗った総武線がスカイツリーのそばを通ったとき、駅でばったり友だちと会ったように懐かしい気持ちになった。毎朝毎晩、わたしの部屋のバルコニーからはスカイツリーが見える。引越した頃は気にも留めていなかったが、こうして毎日眺めながら暮らしてみると、風景も友になるのだ。だからって、好きになったわけではないけど。

—2019年2月10日 東京ステイ日記『ホームシック』*1より

「東京でつくる」ため、住む部屋を探し始めた6月頃から「東京ステイ日記」というブログを書き始めた。冒頭に掲載したのが第一回で、ここで引用した最新が第五回。スタディメンバーの皆さんよりゆっくりしたスピードだけれど、私も同じ本数の文章を書きながら「東京でつくる」をめぐる戸惑いと向き合ってきたことになる。

このエッセイ集の目的

この膨大な言葉の集積は、誰よりもまず5年後10年後の自分たちに向けて書かれたものだ。今回メンバー全員でエッセイを書くという方法をとったのは、私自身「つくる」を見失って途方に暮れた時、かつての自分が書いた（今の自分では絶対に書けない）言葉に出会って驚いたことがあるからだ。そして今ここにある「ためらい」や「戸惑い」といったものは必ず風化する。かつて震災復興支援で数年間通ったとある港町を思い出す。記録集の製作をめぐり、私は地元住民の方と小さな言い合いをした。予算がないという事情と、広く世に届けたいという理由で出版社に通しやすそうな企画テーマを提案した私に、その人は移転に関するあらゆる記録や地元住民全員の書いた文章を全て編集なしで載せるべきだと反対した。誰にで

も受け取りやすい形ではないけれど、いつか本当に必要とする誰かが現れたとき役に立つものを用意しておくべきだ、と。あのときどちらが正解なのか結論は出なかったが、今回は後者だと思った（いや、あのときも後者だったのだろう）。私の後悔の種ばかりではなく、それがTARLのような「公共」の果たす役割ではないかとも思った。

そして東京が（1964年がそうだったように）のちのち振り返られる節目の只中にいる今、複数の個人の同時並行的な思考過程の集合体をアーカイブすることは、書き手自身にとっての意義を超えて、同じように「東京」や「つくる」に戸惑う誰かに届くかもしれない。私は、私たちが死んでしまったあとの未来の誰かに届くことを夢想する。「ほら、2020年前夜の東京では、こんなことを考えていたんだね」……読み手の皆さんには、いっぺんに全部読まなくてもいいから、ふとした時にパラパラとめくってその時々自分に響く言葉と出会いながら、しばらく手元に置いていただけたら嬉しい。

東京でつくる意思確認

月一回の対話の場を通してお互いに影響を受けたことも、一緒に見つけた言葉もあったと思う。でも私は、集合知の中に個々人の違和感が溶けてしまうことはできるだけ避けたかった。同調圧力に抗う自分を養うために「書く」という孤独な作業は比較的、誰にでも有効だと思っている。メンバーからは「（集まったときに）書いたものについて話をした」という意見もあったが、私はそれを安易に触れてはいけない「聖域」だと考えていたのかもしれない。それが功を奏したようで（？）、ここに集められたエッセイたちはてんでばらばらだし、時としてあまりに生々しい。私はナビゲーターという立場上すべてに目を通したわけだが、感情を揺さぶられる、途中でドキュメントを閉じてしまうこともあった。個人的な「前提」の話をする。東京は私にと

って兄が亡くなった場所で、自分の生まれた場所だ。家族はその後まもなく東京を離れた。私にとってその出来事は家族関係、友人関係、恋愛、仕事と人生のあらゆる面に影響を及ぼしたのだが、隣県で育ったにもかかわらず「現場」には一度も足を運んでこなかった。この話をすると感情は動かないのに体が震えてしまう。スタディの中でも話したが、これが私の生まれ持った（選べなかった）東京との関係性だ。

誰しも心の中にこういう感情未然の、扱いきれない部分を抱えていると思う。これを話するときの私は作家ではない。私がつくっているのは演劇なのだから、ナイフは切れないナイフじゃなきゃいけない。舞台上で本当に死んではいけない（私にとってこの話は命がけなのだ）。ではなぜ持ち出したかといえば、今になって私を東京に呼び戻した、大きすぎて対話のできない「東京でつくる意味」に飲み込まれないように、ごく個人的で誰とも共有できない「東京でつくる意思」を確認する必要があるのだと思う。いわばこれは私の懐刀だ。果物ナイフくらいささやかな、だけれど。

私はこれまで東京以外や海外の都市で「場所と物語」という活動をしてきた。世界中どこであれ、自分と場所とのあいだに自由に関係性を紡ぎ出す技術や身体性に興味がある。その土地が語る物語（歴史、伝説、地形など）はもちろん面白いけれど、生きている人の営みといった、もっと揺らぎがあり日々書き換わっていく物語に自分も編み込まれること。活動する理由を問われると「生まれてこなければよかったと思う人がいない世界にしたいから」と答えていたが、私自身が「どこで生きてどこで死んでも面白がれる」すべを求めているのだと、東京に“戻ってきて”気がついた。

そして今エッセイを読み返して、書き手の皆が同じ旅路を歩いた仲間だったことを改めて発見する。このスタディは、それぞれ距離感に違いはあれど「東京との関係の結び直し」

だったのではないだろうか。それは「東京であれ別の場所であれ、たまたまそこに生まれてしまったがゆえに選べなかった東京との関係性をいったん引き剥がして、もう一度引き受け直す」ということ。もちろん引き受けなくてもいいし、東京を立ち去ってもいい。ただ私は誰かが生まれ育ったまちを、やばいとか終わってるとか言いっぱなしで去りたくはないのだ。批評には警鐘として意味があるが、「だから、さよなら」というのは履き違

えている。そういう態度こそが東京を、そして別のまちをもまた「終わらせる」ことに早く気がついたほうがいい。第一回で多くのメンバーが口にした「東京からの疎外感」は、まさにこのスタディを始めた動機でもあった。個人がそれ（まちに対して持っている疎外感）を埋めるには、行きつけの店を持つとか演劇を観るとかシェアハウスに住むとかいろいろあると思う。でも「書く」という行為は孤独なままでこの世界に居

場所を持つためのひとつの方法なのだと、自分を愛さない世界を愛する方法なのだと、たぶん私は伝えたかった。そして、きっと「つくる」も。

*1 <http://bashomono.com/archives/1651>

逡巡のその先で、自分の芯に触れる。

————— 嘉原 妙 Tae Yoshihara

昨年の夏、「東京でつくるということを、共に考えたり悩んだりしませんか？」と石神さんに尋ねた。私はプログラムオフィサー*として「東京ステイ」**のプロジェクトに伴走する中で、もっとプロジェクトの根幹、さらに言えば、石神さん自身がぐるぐると考え続けている「正体」に向き合う必要があるんじゃないかと感じていた。これまでとは少し違った方法で、その「何か」と真正面から組手を行うように、何度も何度も試行錯誤ができる時間と場が必要なんじゃないかと。そんな時、“東京で何かを「つくる」としたら”という問いかけのもと、新たなプログラムを立ち上げることになった。潔く「東京でつくことに戸惑っています」と言った石神さんの態度そのものを他者に開いていくこと、そして、その戸惑いを共有する術を誰かと一緒に探していくことによって「東京でつく」に迫れるのではないか。それが、東京プロジェクトスタディ1「『東京でつく』ということ— 前提を問う、ことばにする、自

分の芯に気づく—」の始まりだ。

実際に秋口からは、月に一度のディスカッションと、その後、必ず一人ひとりがエッセイを書くという時間が動き始めた。誰かと共に思考することで互いの価値観の相違に触れ、それが反射光のように再び自分自身を照らす。その光を頼りに、自分の思想を見つめ直し言葉にする。その繰り返し。

「言葉にすることは、自分の経験を思考や感情も含めて、自分自身から引き剥がしていく行為だ」という、以前、何かの本で出会った言葉を、12人のエッセイを読みながら思い出していた。それは、自分で自分を相対化することに他ならない。

ディスカッションでは何度も「いま、何かが動いた」と感じる瞬間があった。特に印象的だったのが、第3回のゲストのイシワタマリさんが、もっと皆さんのパーソナルな話を聞きたいと言った時のこと。一呼吸置いて口火

を切った石神さんが、家族の、お兄さんの話をふうっと話し始めたあの時、あの場にいた全員が、石神さんが格闘している「何か」に確かに触れた（触れてしまった、と言うべきなのかもしれない）。それは同様に、皆が自分の芯の在処に気づいた瞬間だったようにも思う。

「スタディ1は、石神道場だね」と冗談交じりに話していたけれど、こうして振り返ってみると、あの日、あの時、あの場所には「稽古場」のような時間が確かに立ち現れていた。それは、一人ひとりの中にも。ゆらぎながら、しなやかに、思考する体幹を確かめるように。

*行政とアートプロジェクトの現場をつなぐアートマネジメントの専門スタッフ

**2016年から2018年度にかけて、石神夏希が代表を務めるNPO法人場所と物語が東京都およびアーツカウンシル東京と共に「東京アートポイント計画」の一環として実施したアートプロジェクト

東京プロジェクトスタディ1

「東京でつく」ということ —前提を問う、ことばにする、自分の芯に気づく— エッセイ集

著者：石神夏希、阿部健一、五十嵐春香、石井美加、大間知賢哉、木村佳菜子、小林大悟、RuS、新堀 学、斉島 明、高須賀真之、中田森也、前田安紀、嘉原 妙

編集：和田安代

デザイン：木村奈緒子 (PORT)

印刷・製本：株式会社イーステージ

発行日：平成 31 年 3 月 22 日

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8 階

Tel：03-6256-8435 Fax：03-6256-8829 <https://www.artscouncil-tokyo.jp>

※本冊子はTokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」の一環として制作されました。

Tokyo Art Research Lab (TARL) とは

アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共につくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。 <http://tarl.jp>